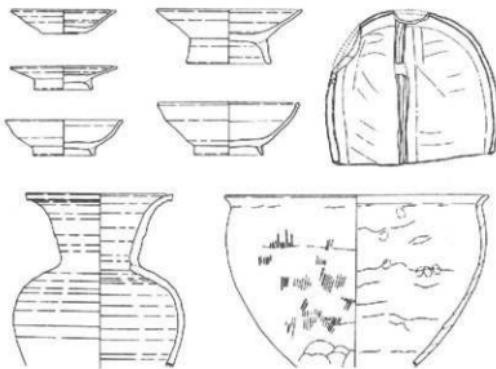


# 大屋敷C古墳群 大屋敷1号窯

平成11～14年度（国）362号道路改良（2B一般）工事に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書

## 第2分冊



静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第151集

# 大屋敷C古墳群 大屋敷1号窯

平成11～14年度（国）362号道路改良（2B一般）工事に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書

第2分冊

2004

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

## 例　　言

- 1 本書は、静岡県浜北市宮口5831-532ほかに所在する大屋敷C古墳群及び大屋敷1号窯の発掘調査報告書のうちの第二分冊である。
- 2 調査体制、調査内容等は第一分冊に記載している。

## 目 次

例言	
凡例	
日次	(1)
挿図目次	(2)
挿表目次	(3)
写真目次	(3)
図版目次	(4)
第V章 大屋敷1号窯の調査	(10)
第1節 宮口古窯跡群の概要	(10)
第2節 大屋敷1号窯	(14)
第3節 窯以外の遺構と遺物	(65)
第4節 観察表	(66)
第5節 自然科学分析	(75)
第6節 付編 大屋敷古窯跡群関連遺物	(82)
第7節 大屋敷1号窯の評価	(119)
註	(125)
引用・参考文献	(126)
第VI章 調査のまとめ	(128)
謝辞	(131)
図版	1 ~ 207

### (第1分冊)

第I章 発掘調査に至る経緯	
第II章 調査の方法と経過	
第1節 調査の方法	
第2節 調査の経過	
第3節 基本順序	
第III章 位置と環境	
第1節 地理的環境	
第2節 歴史的環境	
第3節 大屋敷古墳群・大屋敷古窯跡群の調査概要	
第IV章 大屋敷C古墳群の調査	
第1節 大屋敷C古墳群の概要	
第2節 1区の調査成果	
第3節 3区の調査成果	
第4節 観察表	
第5節 大屋敷C古墳群の評価	
参考文献	

## 挿図目次

- 320 宮口古窯跡群の分布  
321 大屋敷古窯跡群の分布  
322 窯部位名称および計測位置図  
323 大屋敷1号窯出土器種区分および計測位置図  
324 2区地形測量図  
325 大屋敷1号窯地形測量図  
326 大屋敷1号窯実測図  
327 大屋敷1号窯上層断面図  
328 大屋敷1号窯・灰原土窯址マトリックス  
329 大屋敷1号窯灰原上層堆积状況図①  
330 大屋敷1号窯灰原上層堆积状況図②  
331 大屋敷1号窯堆积川上層状況図  
332 大屋敷1号窯出土灰釉陶器碗皿類グリッド別出土数  
333 大屋敷1号窯出土灰釉陶器接合状況図①(鏡蓋類)  
334 大屋敷1号窯出土灰釉陶器接合状況図②(長頸甕・瓶)  
335 大屋敷1号窯出土灰釉陶器接合状況図③(鉢)  
336 大屋敷1号窯出土灰釉陶器輪廻出土層位別比較図  
337 大屋敷1号窯出土灰釉陶器器種別出土割合  
338 大屋敷1号窯出土陶A部分断面図  
339 大屋敷1号窯出土灰釉陶器碗皿類図  
340 大屋敷1号窯出土灰釉陶器碗・皿類  
底部・内面調整の割合  
341 大屋敷1号窯出土灰釉陶器無台輪法量図  
342 大屋敷1号窯出土灰釉陶器托法量図  
343 大屋敷1号窯出土灰釉陶器長頸甕口径別出土数  
344 大屋敷1号窯出土灰釉陶器鉢口径別出土数  
345 大屋敷1号窯内床面直上出土灰釉陶器実測図  
346 大屋敷1号窯内覆土上出土灰釉陶器実測図①  
347 大屋敷1号窯内覆土上出土灰釉陶器尖頭甕②  
348 大屋敷1号窯内覆土上出土灰釉陶器尖頭甕③  
349 大屋敷1号窯灰原出土灰釉陶器実測図①  
350 大屋敷1号窯灰原出土灰釉陶器実測図②  
351 大屋敷1号窯灰原出土灰釉陶器尖頭甕③  
352 大屋敷1号窯灰原出土灰釉陶器実測図④  
353 大屋敷1号窯灰原出土灰釉陶器尖頭甕⑤  
354 大屋敷1号窯灰原出土灰釉陶器実測図⑥  
355 大屋敷1号窯灰原出土灰釉陶器尖頭甕⑦  
356 大屋敷1号窯灰原出土灰釉陶器尖頭甕⑧  
357 大屋敷1号窯灰原出土灰釉陶器尖頭甕⑨  
358 大屋敷1号窯灰原出土灰釉陶器実測図⑩  
359 大屋敷1号窯出土輪折引①  
360 大屋敷1号窯出土輪拓引②  
361 大屋敷1号窯出土輪拓引③  
362 大屋敷1号窯灰原出土灰釉陶器実測図⑪  
363 大屋敷1号窯灰原出土灰釉陶器実測図⑫  
364 大屋敷1号窯灰原出土灰釉陶器実測図⑬  
365 大屋敷1号窯灰原出土灰釉陶器実測図⑭  
366 大屋敷1号窯灰原出土灰釉陶器実測図⑮  
367 大屋敷1号窯灰原出土灰釉陶器実測図⑯  
368 大屋敷1号窯灰原出土灰釉陶器実測図⑰  
369 大屋敷1号窯灰原出土灰釉陶器実測図⑱  
370 大屋敷1号窯灰原出土灰釉陶器実測図⑲  
371 大屋敷1号窯灰原出土灰釉陶器実測図⑳  
372 上坑(SF06)遺構平面図  
373 十坑(SF06)出土灰釉陶器実測図  
374 大屋敷6号窯出土輪法量図  
375 大屋敷6号窯表面探査遺物実測図①  
376 大屋敷6号窯表面探査遺物実測図②  
377 大屋敷6号窯表面探査遺物実測図③  
378 大屋敷5号窯出土輪法量図  
379 大屋敷5号窯出土遺物実測図①  
(浜北市教委1989より)  
380 大屋敷5号窯出土遺物実測図②  
381 大屋敷5号窯出土遺物実測図③  
382 大屋敷5号窯出土遺物実測図④  
383 大屋敷5号窯出土遺物実測図⑤  
384 大屋敷5号窯出土遺物実測図⑥  
385 大屋敷5号窯出土遺物実測図⑦  
(浜北市教委1989より)  
386 大屋敷古窯跡群(佐野中学校内探集はか)  
出土遺物実測図①  
387 大屋敷古窯跡群(佐野中学校西探集はか)  
出土遺物実測図②  
(1501~1503回 浜北市教委1989より)  
388 古名5号窯出土輪法量図  
389 古名5号窯出土遺物実測図①  
(浜北市教委1989より)  
390 古名5号窯出土遺物実測図②  
(浜北市教委1989より)  
391 古名5号窯出土遺物実測図③  
(浜北市教委1989より)  
392 古名5号窯出土遺物実測図④および  
古名6号窯出土遺物実測図①  
393 古名6号窯出土輪法量図  
394 古名6号窯出土遺物実測図②  
(浜北市教委1989より)  
395 古名6号窯出土遺物実測図③  
396 古名6号窯出土遺物実測図④  
(浜北市教委1989より)  
397 古名1・2号窯出土遺物実測図  
(浜北市教委1989より)および輪法量図  
398 古名1号窯出土輪法量図  
399 古名1号窯出土灰釉陶器実測図(静岡県1992より)  
400 謙栄古窯跡群出土輪法量図  
401 上牧古窯跡群出土輪法量図  
402 鮎田古窯跡群出土輪法量図

- |   |                                    |
|---|------------------------------------|
| 403 西ノ谷古窯跡出土碗法量図                            | 408 宮口古窯跡群出土無台碗法量割合図               |
| 404 嵌栄古窯跡群・土取古窯跡群ほか出土遺物実測図<br>(浜北市教委1989より) | 409 宮口古窯跡群窯変遷図                     |
| 405 宮口古窯跡群窯構造比較図                            | 410 大屋敷遺跡出土遺物実測図①<br>(浜北市教委1988より) |
| 406 宮口古窯跡群生産器種構成図                           | 411 大屋敷遺跡出土遺物実測図②                  |
| 407 宮口古窯跡群出土碗法量割合図                          |                                    |

## 挿表目次

- |                            |  |
|----------------------------|--|
| 54 大屋敷1号窯室内・灰原接合関係①(鏡面版)   | 59 大屋敷1号窯出土炭化材の放射性炭素年代測定および<br>年代校正の結果 |
| 55 大屋敷1号窯室内・灰原接合関係②(長縫型・復) | 60 大屋敷1号窯出土炭化材樹種同定結果                   |
| 56 大屋敷1号窯室内・灰原接合関係③(鉢)     | 61 宮口古窯跡群出土灰釉陶器・山茶碗観察表                 |
| 57 大屋敷1号窯出土灰釉陶器器種別出土数      |  |
| 58 大屋敷1号窯出土灰釉陶器觀察表         |  |

## 写真目次

- |                           |                           |
|---------------------------|---------------------------|
| 21 大屋敷1号窯出土炭化材の走査電子顕微鏡写真① | 22 大屋敷1号窯出土炭化材の走査電子顕微鏡写真② |
|---------------------------|---------------------------|

## 図版目次

表紙 大屋敷C 5号墳の現状

- 1 大屋敷C古墳群・大屋敷1号窓の位置
- 2 大屋敷C古墳群・大屋敷1号窓遺景(北西より)
- 3 大屋敷C古墳群・大屋敷1号窓全景(俯瞰)
- 4 大屋敷C古墳群全景(俯瞰)
- 5 1 大屋敷C古墳群全景(南より)
- 2 大屋敷C 2・3号墳全景(南より)
- 6 1 大屋敷C 2号墳全景(南より)
- 2 大屋敷C 2号墳玄室の状況(南より)
- 3 大屋敷C 2号墳遺物出土状況(南より)
- 7 1 大屋敷C 3号墳全景(南より)
- 2 大屋敷C 3号墳石室の状況(南より)
- 3 大屋敷C 3号墳敷石の状況(北より)
- 8 1 大屋敷C 3号墳玄室遺物出土状況(北より)
- 2 大屋敷C 3号墳墓道遺物出土状況(北より)
- 3 大屋敷C 3号墳閉塞石の状況(南より)
- 4 大屋敷C 3号墳墓道完掘状況(南より)
- 9 1 土坑(SF01)完掘状況(東より)
- 2 上坑(SF05)完掘状況(南より)
- 3 土坑(SF02)完掘状況(西より)
- 4 上坑(SF02)完掘状況(北東)
- 5 土坑(SF03)完掘状況(東より)
- 6 上坑(SF04)検出状況(南東より)
- 7 土坑(SF04)完掘状況(南より)
- 10 1 3区調査前の状況(西より)
- 2 3区完掘状況(平成12年度)(南西より)
- 11 1 3区完掘状況(平成13年度)(東より)
- 2 3区西側完掘状況(平成12年度)(俯瞰)
- 12 1 3区東側完掘状況(平成12年度)(南より)
- 2 3区西側完掘状況(平成13年度)(俯瞰)
- 13 1 3区東側完掘状況(平成14年度)(俯瞰)
- 2 3区東側完掘状況(平成14年度)(南西より)
- 14 1 大屋敷C 6号墳石材検出状況(南より)
- 2 大屋敷C 7号墳石材検出状況(南より)
- 3 大屋敷C 13号墳石材検出状況(南より)
- 4 大屋敷C 15号墳石材検出状況(南より)
- 15 1 大屋敷C 10号墳全景(南より)
- 2 大屋敷C 10号墳横穴式石室検出状況(南より)
- 3 大屋敷C 10号墳横穴式石室奥壁の状況(南より)
- 16 1 大屋敷C 10号墳右側壁の状況(南東より)
- 2 大屋敷C 10号墳左側壁の状況(南西より)
- 3 大屋敷C 10号墳底石の状況(南より)
- 4 大屋敷C 10号墳奥壁の状況(南より)
- 17 1 大屋敷C 14号墳全景(南より)
- 2 大屋敷C 14号墳横穴式石室検出状況(南より)
- 3 大屋敷C 14号墳横穴式石室完掘状況(南より)

- 18 1 大屋敷C 14号墳右側壁の状況(南東より)
- 2 大屋敷C 14号墳左側壁の状況(南西より)
- 3 大屋敷C 14号墳奥壁の状況(南より)
- 4 大屋敷C 14号墳立柱石の状況(北より)
- 19 1 大屋敷C 14号墳基底石の状況(南より)
- 2 大屋敷C 14号墳墓壠の状況(南より)
- 3 大屋敷C 17号墳全景(南より)
- 20 1 大屋敷C 17号墳横穴式石室検出状況(南より)
- 2 大屋敷C 17号墳横穴式石室完掘状況(南より)
- 3 大屋敷C 17号墳右側壁の状況(南東より)
- 4 大屋敷C 17号墳立柱石の状況(北より)
- 5 大屋敷C 17号墳左側壁の状況(南西より)
- 6 大屋敷C 17号墳奥壁の状況(南より)
- 21 1 大屋敷C 17号墳遺物出土状況(南より)
- 2 大屋敷C 17号墳遺物出土状況(南より)
- 3 大屋敷C 17号墳基底石の状況(南より)
- 4 大屋敷C 18号墳調査前の状況(南より)
- 22 1 大屋敷C 18号墳周溝遺物出土状況(北より)
- 2 大屋敷C 18号墳全景(南より)
- 23 1 大屋敷C 18号墳横穴式石室検出状況(南より)
- 2 大屋敷C 18号墳横穴式石室完掘状況(南より)
- 3 大屋敷C 18号墳右側壁の状況(南東より)
- 4 大屋敷C 18号墳左側壁の状況(南西より)
- 5 大屋敷C 18号墳横穴式石室完掘状況(北より)
- 24 1 大屋敷C 18号墳奥壁の状況(南より)
- 2 大屋敷C 18号墳立柱石の状況(北より)
- 3 大屋敷C 18号墳基底石の状況(南より)
- 4 大屋敷C 18号墳奥壁の状況(南より)
- 25 1 大屋敷C 19号墳調査前の状況(南より)
- 2 大屋敷C 19号墳全景(南より)
- 26 1 大屋敷C 19号墳全景(南より)
- 2 大屋敷C 19号墳奥壁の状況(南より)
- 27 1 大屋敷C 19号墳横穴式石室検出状況(南より)
- 2 大屋敷C 19号墳横穴式石室完掘状況(北より)
- 3 大屋敷C 19号墳横穴式石室完掘状況(南より)
- 4 大屋敷C 19号墳横穴式石室完掘状況(北より)
- 28 1 大屋敷C 19号墳横穴式石室用塞石の状況(南より)
- 2 大屋敷C 19号墳立柱石の状況(南より)
- 3 大屋敷C 19号墳奥壁の状況(南より)
- 4 大屋敷C 19号墳立柱石の状況(北より)
- 29 1 大屋敷C 19号墳玄室右側壁の状況(東より)
- 2 大屋敷C 19号墳奥壁直側壁の状況(東より)
- 3 大屋敷C 19号墳玄室左側壁の状況(西より)
- 4 大屋敷C 19号墳奥壁左側壁の状況(西より)
- 5 大屋敷C 19号墳基底石の状況(南より)
- 6 大屋敷C 19号墳基底石の状況(北より)

30	1 大屋敷C19号埴横穴式石室裏込めの状況(南より) 2 大屋敷C19号埴透丘底土裏側の状況(南より) 3 大屋敷C19号埴透丘底土側の状況(南より)	43	1 大屋敷C23号埴全景(南より) 2 大屋敷C23号埴横穴式石室完掘状況(南より) 3 大屋敷C24号埴横穴式石室検出状況(南より)
31	1 大屋敷C19号埴幕張の状況(南より) 2 大屋敷C19号埴V柱石下部の状況(南東より) 3 大屋敷C19号埴立柱石下部の状況(北東より) 4 大屋敷C19号埴周溝遺物出土状況(東より) 5 大屋敷C19号埴周溝遺物出土状況(北より) 6 大屋敷C19号埴閉塞部遺物出土状況(西より)	44	1 大屋敷C24号埴全景(南より) 2 大屋敷C24号埴横穴式石室完掘状況(南より) 3 大屋敷C24号埴奥壁の状況(南より)
		45	1 大屋敷C24号埴透道遺物出土状況(南より) 2 大屋敷C24号埴横穴式石室遺物出土状況(南西より) 3 大屋敷C24号埴基底石の状況(南より) 4 大屋敷C24号埴空塙の状況(南より)
32	1 大屋敷C20号埴全景(南より) 2 大屋敷C20号埴横穴式石室検出状況(南より) 3 大屋敷C20号埴横穴式石室完掘状況(南より)	46	1 大屋敷C25号埴横穴式石室検出状況(南より) 2 大屋敷C25号埴横穴式石室完掘状況(南より) 3 大屋敷C25号埴基底石の状況(南より) 4 大屋敷C25号埴幕張の状況(南より)
33	1 大屋敷C20号埴周溝遺物出土状況(南より) 2 大屋敷C20号埴横穴式石室遺物出土状況(南西より) 3 大屋敷C20号埴横穴式石室出土状況(南より) 4 大屋敷C20号埴右側壁の状況(南東より) 5 大屋敷C20号埴左側壁の状況(南西より)	47	1 大屋敷C26号埴横穴式石室検出状況(南より) 2 大屋敷C26号埴全景(南より) 3 大屋敷C26号埴横穴式石室完掘状況(南より) 4 大屋敷C26号埴透道遺物出土状況(南より)
34	1 大屋敷C20号埴基底石の状況(南より) 2 大屋敷C20号埴底塗の状況(南より) 3 大屋敷C20号埴横穴式石室裏込めの状況(南より)	48	1 大屋敷C26号埴奥壁の状況(南より) 2 大屋敷C26号埴右側壁の状況(東より) 3 大屋敷C26号埴左側壁の状況(西より) 4 大屋敷C26号埴基底石の状況(南より) 5 大屋敷C26号埴底塗の状況(南より)
35	1 大屋敷C21号埴調査前の状況(南より) 2 大屋敷C21号埴全景(南より)	49	1 大屋敷C27号埴全景(南より) 2 大屋敷C27号埴横穴式石室検出状況(南より) 3 大屋敷C27号埴横穴式石室完掘状況(南より)
36	1 大屋敷C21号埴外護列石の状況(南西より) 2 大屋敷C21号埴横穴式石室検出状況(北より) 3 大屋敷C21号埴透石(上部)の状況(南より) 4 大屋敷C21号埴敷石(下部)の状況(南より)	50	1 大屋敷C27号埴敷石(下部)の状況(南より) 2 大屋敷C27号埴基底石の状況(南より) 3 大屋敷C27号埴幕張の状況(南より)
37	1 大屋敷C21号埴右側壁の状況(南東より) 2 大屋敷C21号埴左側壁の状況(南西より) 3 大屋敷C21号埴奥壁の状況(南より) 4 大屋敷C21号埴立柱石の状況(北より)	51	1 大屋敷C28号埴調査前の状況(南より) 2 大屋敷C28号埴全景(南西より)
38	1 大屋敷C21号埴基底石の状況(南より) 2 大屋敷C21号埴底塗の状況(南より) 3 大屋敷C21号埴前庭遺物出土状況(南より) 4 大屋敷C21号埴周溝遺物出土状況(南西より)	52	1 大屋敷C28号埴丘山側斜上の状況(南東より) 2 大屋敷C28号埴横穴式石室完掘状況(南より) 3 大屋敷C29号埴全景(南より)
	5 大屋敷C21号埴空塙遺物出土状況(南東より)	53	1 大屋敷C29号埴横穴式石室検出状況(南より) 2 大屋敷C29号埴横穴式石室完掘状況①(南より) 3 大屋敷C29号埴横穴式石室完掘状況②(南より) 4 大屋敷C29号埴奥壁の状況(南より)
39	1 大屋敷C22号埴周溝の状況(南より) 2 大屋敷C22号埴全景(南より)	54	1 大屋敷C29号埴右側壁の状況(東より) 2 大屋敷C29号埴左側壁の状況(西より) 3 大屋敷C29号埴幕張の状況(南より)
40	1 大屋敷C22号埴横穴式石室検出状況(南より) 2 大屋敷C22号埴横穴式石室完掘状況(北より) 3 大屋敷C22号埴奥壁の状況(南より) 4 大屋敷C22号埴立柱石の状況(北より)	55	1 大屋敷C30号埴全景(南より) 2 大屋敷C30号埴横穴式石室後出状況(南より) 3 大屋敷C30号埴横穴式石室完掘状況(南より)
41	1 大屋敷C22号埴右側壁の状況(北東より) 2 大屋敷C22号埴左側壁の状況(北西より)	56	1 大屋敷C30号埴石室遺物出土状況①(東より) 2 大屋敷C30号埴幕張遺物出土状況(南より) 3 大屋敷C30号埴石室遺物出土状況②(西より) 4 大屋敷C30号埴奥壁の状況(南より) 5 大屋敷C30号埴立柱石の状況(北より)
42	1 大屋敷C22号埴空塙遺物出土状況(北東より) 2 大屋敷C22号埴底塗遺物出土状況(南より) 3 大屋敷C22号埴周溝遺物出土状況(南東より) 4 大屋敷C22号埴基底石の状況(南より) 5 大屋敷C22号埴幕張の状況(南より)		

57	1 大屋敷C30号埴右側壁の状況(南東より)	71	1 大屋敷C38号埴調査前の状況(北より)
	2 大屋敷C30号埴左側壁の状況(西より)	2 大屋敷C38号埴全景(北より)	
3	大屋敷C30号埴基底石の状況(南より)	72	1 大屋敷C38号埴底土の状況①(北より)
58	1 大屋敷C31号埴全景(南より)	2 大屋敷C38号埴盛土の状況②(北西より)	
2	大屋敷C31号埴横穴式石室完掘状況(南より)	3 大屋敷C38号埴完掘状況(北東より)	
3	大屋敷C31号埴横穴式石室完掘状況(南より)	73	1 大屋敷C39号埴調査前の状況(南より)
59	1 大屋敷C31号埴周溝遺物出土状況①(南より)	2 大屋敷C39号埴全景(南より)	
2	大屋敷C31号埴周溝遺物出土状況②(北西より)	74	1 大屋敷C39号埴横穴式石室完掘状況(南東より)
3	大屋敷C31号埴石室遺物出土状況(南東より)	2 大屋敷C39号埴横穴式石室完掘状況(南西より)	
4	大屋敷C31号埴基底石の状況(南より)	3 大屋敷C39号埴石室遺物出土状況(北西より)	
5	大屋敷C31号埴左側壁の状況(南西より)	4 大屋敷C39号埴周溝遺物出土状況(南西より)	
6	大屋敷C31号埴右側壁の状況(南東より)	75	1 大屋敷C40・C41号埴全景(南より)
60	1 大屋敷C32号埴全景(東より)	2 大屋敷C40号埴横穴式石室完掘状況(南より)	
2	大屋敷C32号埴横穴式石室完掘状況(東より)	3 大屋敷C40号埴横穴式石室完掘状況(南より)	
3	大屋敷C32号埴右側壁の状況(北東より)	76	1 大屋敷C40号埴左側壁の状況(南西より)
61	1 大屋敷C33号埴全景(南より)	2 大屋敷C40号埴基底石の状況(南より)	
2	大屋敷C33号埴横穴式石室完掘状況(南より)	3 大屋敷C41号埴横穴式石室完掘状況(南より)	
3	大屋敷C33号埴横穴式石室完掘状況(南より)	4 大屋敷C41号埴横穴式石室完掘状況(南より)	
62	1 大屋敷C33号埴左側壁の状況(北より)	77	1 大屋敷C41号埴奥壁の状況(南より)
2	大屋敷C33号埴右側壁の状況(東より)	2 大屋敷C41号埴左側壁の状況(南西より)	
3	大屋敷C33号埴左側壁の状況(西より)	3 大屋敷C41号埴右側壁の状況(南東より)	
63	1 大屋敷C33号埴敷石の状況(北より)	4 大屋敷C41号埴基底石の状況(南より)	
2	大屋敷C33号埴敷壁の状況(南より)	78	1 大屋敷C41号埴遺物出土状況(南より)
3	大屋敷C35号埴基底石の状況(南より)	2 大屋敷C41号埴遺物出土状況(南東より)	
4	大屋敷C33号埴周溝遺物出土状況(西より)	3 大屋敷C42号埴調査前の状況(南より)	
5	大屋敷C33号埴周溝遺物出土状況(南より)	79	1 大屋敷C42号埴全景(南より)
64	1 大屋敷C34号埴全景(南より)	2 大屋敷C42号埴横穴式石室完掘状況(南より)	
2	大屋敷C34号埴基底石の状況(南より)	3 大屋敷C42号埴基底の状況(南より)	
3	大屋敷C34号埴右側壁の状況(南より)	80	1 大屋敷C42号埴右側壁裏込めの状況(南東より)
4	大屋敷C34号埴左側壁の状況(西より)	2 大屋敷C42号埴左側壁裏込めの状況(南西より)	
65	1 大屋敷C35号埴全景(南より)	3 大屋敷C42号埴周溝上の状況①(南西より)	
2	大屋敷C35号埴横穴式石室完掘状況(南より)	4 大屋敷C42号埴周溝上の状況②(南東より)	
3	大屋敷C35号埴横穴式石室完掘状況(南より)	81	1 大屋敷C42号埴奥壁の状況(南より)
66	1 大屋敷C35号埴右側壁の状況(東より)	2 大屋敷C42号埴奥壁下部の状況(南西より)	
2	大屋敷C35号埴左側壁の状況(西より)	3 大屋敷C42号埴石室遺物出土状況(北東より)	
3	大屋敷C35号埴基底石の状況(南より)	4 大屋敷C42号埴周溝遺物出土状況(北東より)	
67	1 大屋敷C36号埴全景(南より)	82	1 大屋敷C43・C44号埴全景(南東より)
2	大屋敷C36号埴横穴式石室完掘状況(南より)	2 大屋敷C43号埴全景(南より)	
3	大屋敷C36号埴横穴式石室完掘状況(南より)	83	1 大屋敷C43号埴横穴式石室完掘状況(南より)
68	1 大屋敷C36号埴右側壁の状況(南東より)	2 大屋敷C43号埴横穴式石室完掘状況(南より)	
2	大屋敷C36号埴左側壁の状況(南西より)	3 大屋敷C43号埴奥壁の状況(南より)	
3	大屋敷C36号埴石室遺物出土状況(北東より)	4 大屋敷C43号埴柱石の状況(北より)	
69	1 大屋敷C36号埴立柱石の状況(北より)	84	1 大屋敷C43号埴右側壁の状況(南東より)
2	大屋敷C36号埴奥壁の状況(南より)	2 大屋敷C43号埴左側壁の状況(南西より)	
3	大屋敷C36号埴基底石の状況(南より)	3 大屋敷C43号埴奥壁込めの状況(南西より)	
4	大屋敷C36号埴墓壙の状況(南より)	85	1 大屋敷C43号埴右側壁遺物出土状況①(南東より)
70	1 大屋敷C37号埴調査前の状況(南より)	2 大屋敷C43号埴右側壁遺物出土状況②(北東より)	
2	大屋敷C37号埴全景(南より)	3 大屋敷C43号埴周溝遺物出土状況(東より)	
		4 大屋敷C43号埴周溝遺物出土状況(北東より)	

86	1 大屋敷C43号埴込込みの状況(南西より)	100	1 大屋敷C50号埴込全景①(南より)
	2 大屋敷C43号埴込込みの状況(東より)		2 大屋敷C50号埴込全景②(南より)
3	3 大屋敷C43号埴基底石の状況(南より)	101	1 大屋敷C50号埴込全景③(南より)
4	4 大屋敷C43号埴幕壁の状況(南より)		2 大屋敷C50号埴横穴式石室完掘状況(南より)
87	1 大屋敷C43・C44号埴の状況(南より)	102	3 大屋敷C50号埴横穴式石室完掘状況(北より)
	2 大屋敷C44号埴検出状況(南より)		1 大屋敷C50号埴右側壁の状況(北東より)
3	3 大屋敷C44号埴横穴式石室完掘状況(南より)		2 大屋敷C50号埴左側壁の状況(北西より)
88	1 大屋敷C45号埴全景(南より)		3 大屋敷C50号埴奥壁の状況(南より)
	2 大屋敷C45号埴横穴式石室検出状況(南より)		4 大屋敷C50号埴立柱石の状況(北より)
3	3 大屋敷C45号埴横穴式石室完掘状況(南より)	103	1 大屋敷C50号埴基底石の状況(南より)
89	1 大屋敷C45号埴左側壁の状況(南西より)		2 大屋敷C50号埴幕壁の状況(東より)
	2 大屋敷C45号埴右側壁の状況(南東より)		3 大屋敷C50号埴玄室遺物出土状況(北東より)
3	3 大屋敷C45号埴奥壁の状況(南より)		4 大屋敷C50号埴廻遊物出土状況(南東より)
90	1 大屋敷C45号埴閉塞石の状況(南より)	104	1 大屋敷C50号埴石室表込めの状況(北西より)
	2 大屋敷C45号埴基底石の状況(南より)		2 大屋敷C50号埴盛土の状況(南より)
3	3 大屋敷C45号埴全景(南より)		1 大屋敷C51号埴全景(北より)
91	1 大屋敷C46号埴横穴式石室検出状況(北より)		2 大屋敷C51号埴横穴式石室検出状況(北より)
	2 大屋敷C46号埴横穴式石室完掘状況(南より)		3 大屋敷C51号埴横穴式石室完掘状況(北より)
3	3 大屋敷C46号埴奥壁の状況(南より)	106	1 大屋敷C51号埴奥壁の状況(南より)
	4 大屋敷C46号埴立柱石の状況(北より)		2 大屋敷C51号埴立柱石の状況(北より)
92	1 大屋敷C46号埴玄室左側壁の状況(南東より)		3 大屋敷C51号埴左側壁の状況(北西より)
	2 大屋敷C46号埴玄室左側壁の状況(南西より)		4 大屋敷C51号埴右側壁の状況(北東より)
3	3 大屋敷C46号埴廻遊物出土状況(南東より)	107	1 大屋敷C51号埴周溝遺物出土状況(西より)
	4 大屋敷C46号埴石室遺物出土状況(東より)		2 大屋敷C51号埴石室遺物出土状況①(北京より)
93	1 大屋敷C46号埴基底石の状況(南より)		3 大屋敷C51号埴石室遺物出土状況②(南西より)
	2 大屋敷C46号埴幕壁の状況(南より)		4 大屋敷C51号埴閉塞石の状況(南より)
3	3 大屋敷C46号埴表込めの状況(南東より)	108	1 大屋敷C51号埴基底石の状況(北より)
	4 大屋敷C46号埴幕壁の状況(南東より)		2 大屋敷C51号埴幕壁の状況(北より)
94	1 大屋敷C47号埴全景(南西より)		3 大屋敷C52号埴全景(南より)
	2 大屋敷C47号埴石室完掘状況(南より)		4 大屋敷C52号埴基底石の状況(南より)
3	3 大屋敷C47号埴廻遊物出土状況(北西より)	109	1 大屋敷C53号埴全景(南より)
95	1 大屋敷C48号埴調査前の状況(南より)		2 大屋敷C53号埴横穴式石室検出状況(南より)
	2 大屋敷C48号埴全景(南より)		3 大屋敷C53号埴横穴式石室完掘状況(南より)
96	1 大屋敷C48号埴横穴式石室検出状況(南より)	110	1 大屋敷C53号埴立柱石の状況(北より)
	2 大屋敷C48号埴横穴式石室完掘状況(南より)		2 大屋敷C53号埴左側壁の状況(南西より)
3	3 大屋敷C48号埴右側壁の状況(南西より)		3 大屋敷C53号埴右側壁の状況(南東より)
	4 大屋敷C48号埴右側壁の状況(南東より)	111	1 大屋敷C53号埴遺物出土状況(南東より)
97	1 大屋敷C48号埴遺物出土状況(東より)		2 大屋敷C53号埴遺物出土状況(北東より)
	2 大屋敷C48号埴周溝清掃遺物出土状況(南西より)		3 大屋敷C53号埴基底石の状況(南西より)
3	3 大屋敷C48号埴全景(南西より)		4 大屋敷C53号埴幕壁の状況(北西より)
98	1 大屋敷C49号埴横穴式石室検出状況(南西より)	112	1 大屋敷C54号埴全景(北より)
	2 大屋敷C49号埴横穴式石室完掘状況(南西より)		2 大屋敷C54号埴横穴式石室検出状況(北より)
3	3 大屋敷C49号埴右側壁の状況(南西より)		3 大屋敷C54号埴横穴式石室完掘状況(北より)
	4 大屋敷C49号埴左側壁の状況(南西より)	113	1 大屋敷C54号埴奥壁の状況(南より)
5	5 大屋敷C49号埴奥壁の状況(南西より)		2 大屋敷C54号埴立柱石の状況(北より)
6	6 大屋敷C49号埴横穴式石室閉塞石の状況(南より)		3 大屋敷C54号埴右側壁の状況(南東より)
99	1 大屋敷C49号埴石室遺物出土状況(北より)		4 大屋敷C54号埴左側壁の状況(南西より)
	2 大屋敷C49号埴基底石の状況(南西より)	114	1 大屋敷C54号埴基底石の状況(北より)
3	3 大屋敷C50号埴調査前の状況(南より)		2 大屋敷C54号埴幕壁の状況(北より)

- 4 陥し穴(SF08)充掘状況(東より)
- 115 1 陥し穴(SF09)充掘状況(東より)
- 2 陥し穴(SF10)充掘状況(東より)
- 3 陥し穴(SF11)充掘状況(南より)
- 4 土坑(SF12)充掘状況(南より)
- 116 1 大屋敷C 2号埴横穴式石室出土遺物
- 2 大屋敷C 3号埴横穴式石室出土遺物
- 117 大屋敷C 2・3号埴出土遺物
- 118 大屋敷C 3・C 6・C 7号埴出土遺物
- 119 大屋敷C 8~14・17号埴出土遺物
- 120 大屋敷C 17・18号埴出土遺物
- 121 大屋敷C 19号埴周溝出土遺物一括
- 122 大屋敷C 19号埴周溝出土遺物
- 123 大屋敷C 19号埴横穴式石室出土遺物
- 124 1 大屋敷C 19号埴横穴式石室出土遺物一括
- 2 大屋敷C 20号埴横穴式石室出土遺物・括
- 125 大屋敷C 20・21号埴出土遺物
- 126 大屋敷C 21号埴出土遺物
- 127 大屋敷C 21号埴出土遺物
- 128 大屋敷C 22号埴出土遺物
- 129 大屋敷C 22号埴出土遺物
- 130 大屋敷C 22号埴出土遺物
- 131 大屋敷C 22号埴出土遺物
- 132 大屋敷C 24~27号埴出土遺物
- 133 大屋敷C 24~C 27号埴出土遺物
- 134 大屋敷C 28号埴出土遺物
- 135 大屋敷C 28・30号埴出土遺物
- 136 大屋敷C 30号埴出土遺物
- 137 大屋敷C 31号埴出土遺物
- 138 大屋敷C 33・36号埴出土遺物
- 139 大屋敷C 36・37号埴出土遺物
- 140 大屋敷C 37号埴出土遺物
- 141 大屋敷C 37号埴出土遺物
- 142 大屋敷C 37・38号埴出土遺物
- 143 大屋敷C 39号埴出土遺物
- 144 大屋敷C 39号埴出土遺物
- 145 大屋敷C 40・41号埴出土遺物
- 146 大屋敷C 42号埴出土遺物
- 147 大屋敷C 42号埴出土遺物
- 148 大屋敷C 42号埴出土遺物
- 149 大屋敷C 43号埴横穴式石室出土遺物
- 150 大屋敷C 43号埴出土遺物
- 151 大屋敷C 43号埴横穴式石室出土遺物
- 152 大屋敷C 43号埴横穴式石室出土遺物
- 153 大屋敷C 46号埴横穴式石室出土遺物
- 154 大屋敷C 46号埴横穴式石室出土遺物
- 155 大屋敷C 46号埴横穴式石室出土遺物
- 156 大屋敷C 46号埴横穴式石室出土遺物
- 157 大屋敷C 46号埴横穴式石室出土遺物
- 158 大屋敷C 46~48号埴出土遺物
- 159 大屋敷C 48・49号埴出土遺物
- 160 大屋敷C 50号埴周溝出土遺物
- 161 大屋敷C 50号埴周溝出土遺物
- 162 大屋敷C 50号埴周溝出土遺物
- 163 大屋敷C 50号埴周溝出土遺物
- 164 大屋敷C 50号埴周溝出土遺物
- 165 大屋敷C 50・51号埴出土遺物
- 166 大屋敷C 51・53号埴出土遺物
- 167 大屋敷C 53・54号埴出土遺物
- 168 3・4区遺構外出土須恵器
- 169 3区SR06出土遺物
- 170 1 3・4区遺構外出土灰陶輪器
- 2 3・4区遺構外出土山茶碗
- 171 3・4区遺構外山茶碗はか
- 172 1 3区遺構外出土瓦(四面)
- 2 3区遺構外出土瓦(凸面)
- 173 1・3・4区遺構外出土山茶碗
- 174 1 3区遺構外出土石磚
- 2 3区遺構外出土石磚
- 3 3区遺構外出土銅錢
- 4 3区遺構外出土燈管
- 175 1 大屋敷1号窯焼出状況造景(西より)
- 2 大屋敷1号窯焼出状況近景(西より)
- 3 大屋敷1号窯灰原の状況(西より)
- 176 1 大屋敷1号窯遺物出土状況(西より)
- 2 大屋敷1号窯遺物出土状況近景(西より)
- 177 1 大屋敷1号窯・灰原完掘状況遠景①(西より)
- 2 大屋敷1号窯・灰原完掘状況遠景②(西より)
- 178 1 大屋敷1号窯発掘状況近景(内より)
- 2 大屋敷1号窯土層堆積状況(南より)
- 179 1 大屋敷1号窯北壁の状況(南より)
- 2 大屋敷1号窯南壁の状況(北西より)
- 180 1 大屋敷1号窯灰原遺物出土状況①(西より)
- 2 大屋敷1号窯灰原遺物出土状況②(西より)
- 3 大屋敷1号窯灰原遺物出土状況③(西より)
- 181 1 大屋敷1号窯灰原土層堆積状況(Aライン)(南より)
- 2 大屋敷1号窯灰原土層堆積状況(Bライン)(南より)
- 3 大屋敷1号窯灰原土層堆積状況(Cライン)(南より)
- 182 1 大屋敷1号窯断ち割り状況(西より)
- 2 SF06遺物出土状況(西より)
- 183 大屋敷1号窯出土灰陶輪器集合
- 184 大屋敷1号窯出土灰陶輪器(碗集合)
- 185 大屋敷1号窯出土灰陶輪器(碗高台)
- 186 大屋敷1号窯出土灰陶輪器(無台碗・皿)
- 187 大屋敷1号窯出土灰陶輪器(皿・托・無台碗)
- 188 大屋敷1号窯出土灰陶輪器(碗①)
- 189 大屋敷1号窯出土灰陶輪器(碗②)
- 190 大屋敷1号窯出土灰陶輪器(碗③)
- 191 大屋敷1号窯出土灰陶輪器(碗④)
- 192 大屋敷1号窯出土灰陶輪器(碗⑤)

- 193 大屋敷 1 号窯出土灰釉陶器(鏡内面・外面)
- 194 大屋敷 1 号窯出土灰釉陶器(袖着陶器)
- 195 大屋敷 1 号窯出土灰釉陶器(焼台付着陶器)
- 196 大屋敷 1 号窯出土灰釉陶器(長頸壺・鉢)
- 197 大屋敷 1 分窯出土灰釉陶器(長頸壺)
- 198 大屋敷 1 号窯出土灰釉陶器(長頸壺)
- 199 大屋敷 1 号窯出土灰釉陶器(鉢)
- 200 大屋敷 1 号窯出土灰釉陶器(壺)
- 201 大屋敷 1 号窯出土灰釉陶器(燒台)
- 202 大屋敷 1 号窯出土灰釉陶器(瓶字鏡)
- 203 大屋敷 1 号窯出土楕字鏡・審道具
- 204 大屋敷 1 号窯灰釉陶器・窯道具はか
- 205 大屋敷 6 号窯表面採集遺物(瓦瓦・焼台)
- 206 大屋敷 6 号窯周辺遺物
- 207 大屋敷 6 号窯周辺遺物

# 第V章 大屋敷1号窯の調査

## 第1節 宮口古窯跡群の概要

### 1 概要

#### (1) 宮口古窯跡群の分布(第320図)

宮口古窯跡群は、第Ⅲ章にて記述したように、浜北市西部の丘陵斜面に焼成された灰釉陶器、山茶碗を焼成した窯跡群であり、東から西ノ谷古窯跡(群)、大屋敷古窯跡群、吉名古窯跡群、譲宋古窯跡群、新池古窯跡群、範池古窯跡群、土取古窯跡群に区分されている。

さらに、西ノ谷古窯の東には8世紀の瓦や須恵器を生産した東ノ谷古窯が所在しており、また、浜北市呂地区の浜北段丘の斜面には須恵器や瓦を焼成した篠場瓦窯跡群が操業されている。

#### (2) 宮口古窯跡群における既往の調査と研究状況

既往の調査 静岡大学教育学部浜松分校歴史研究部が1959(昭和34)年に吉名1・2号窯の調査を実施し、簡単な報告がなされている(静岡大学1959)。その後しばらく発掘は行われず、1987・88(昭和62・63)年に浜北市営明神池運動公園(浜北球場)の造成にあたり、吉名5・6号窯、大屋敷5号窯の3基が調査され、1988年に概要報告(浜北市教委1988)がなされ、1989年に正式報告書が刊行されている(浜北市教委1989)。また、「静岡県史」の編纂にあたり、吉名1号窯、大屋敷5号窯が取り上げられ、「宮口古窯跡群」として紹介されている(静岡県1992、平野1992)。

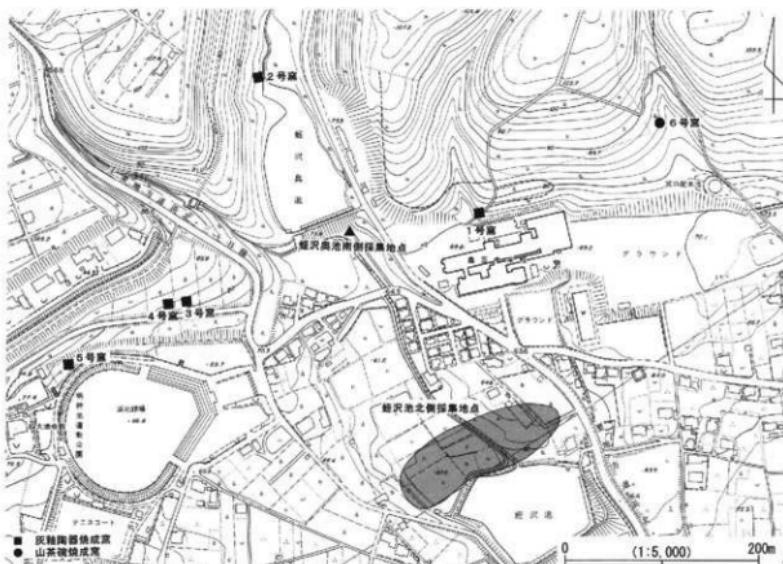
この後、10年間は地道な採集による研究が行われていたが、2000(平成12)年に静岡県埋蔵文化財調査研究所が、今回報告する大屋敷1号窯の調査を実施した。

研究状況 宮口古窯跡群の研究状況に関してみておきたい。

古くから灰釉陶器や山茶碗が表面採集されており、窯跡として認知されていた。上述した静岡大学の調査により、様相の一端が明らかにされた。この調査以降、しばらく進展は見られないが、1980年代中



第320図 宮口古窯跡群の分布



第321図 大屋敷古窯跡群の分布

頃以降、松井一明氏により表面採集資料を基礎にした研究が進められた。氏は1985年の資料紹介を契機に吉名5・6号窯、大屋敷5号窯の発掘調査資料を採集資料で補い、窯投古窯跡群の編年を基準にした宮口古窯跡群の灰釉陶器・山茶碗の変遷をまとめ、またその流通に関してても述べ、当窯跡群の出現の契機や変遷過程、流通範囲等、さまざまな問題に触れ、大きな成果を挙げている(松井1985・89a・89b・2004ほか)。

また、静岡県史にも取り上げられるなど、全国的に著名な窯跡群となった。

その後、賛元洋氏が『静岡県考古学研究』29号の中で「古代遠江の食膳具」を検討する中で宮口古窯跡群について触れ、宮口窯は愛知県猿投窯からの直接伝播ではなく、愛知県二川窯などからの二次的な伝播により生産を開始し、開始後は独自の変遷を遂げたと評価している(賛1997)。

### (3) 大屋敷古窯跡群の分布(第321図)

大屋敷古窯跡群は、浜北市営明神池運動公園北側の北麓丘陵から蛭沢奥池を挟んで龜上中学校北側の丘陵斜面に位置する古窯跡群で、現在までに東西800m、南北300mの範囲に灰釉陶器焼成窯5基(1～5号窯)、山茶碗焼成窯1基(6号窯)、総数6基が確認されている。大屋敷3～5号窯が、蛭沢奥池西側の南側を向く丘陵斜面に築窯され、大屋敷2号窯は、蛭沢奥池の北側の斜面に築窯されている。一方、大屋敷1号窯は蛭沢奥池から尾根を一本挟んだ谷部の東側斜面に築窯されており、6号窯は1号窯からさらに200mほど東側の谷の西側斜面に築窯される。この谷から200mほど東に行くと、西ノ谷古窯の所在する西ノ谷池がある。

## 2 窯の部位名称と灰釉陶器の器種名称

### (1) 窯構造(第322図)

第322図に窯の模式図と名称、計測位置を示した。

**焚口** 燃焼室に火を焚くための燃料

(薪)を入れ、還元焰焼成する時に閉塞される部分。

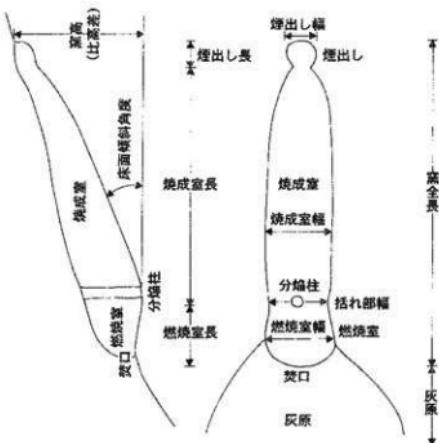
**燃焼室** 燃料(薪)が燃やされる部分。

**焼成室** 灰釉陶器を焼成する部分。

**煙出し** 煙を出す部分。

**分煙柱** 燃焼室と焼成室を区画し、熱効率を上げるために設置された円柱状の施設。

**灰原** 窯の下側に広がる灰や炭化物、焼成に失敗した灰釉陶器を焼棄する場所。

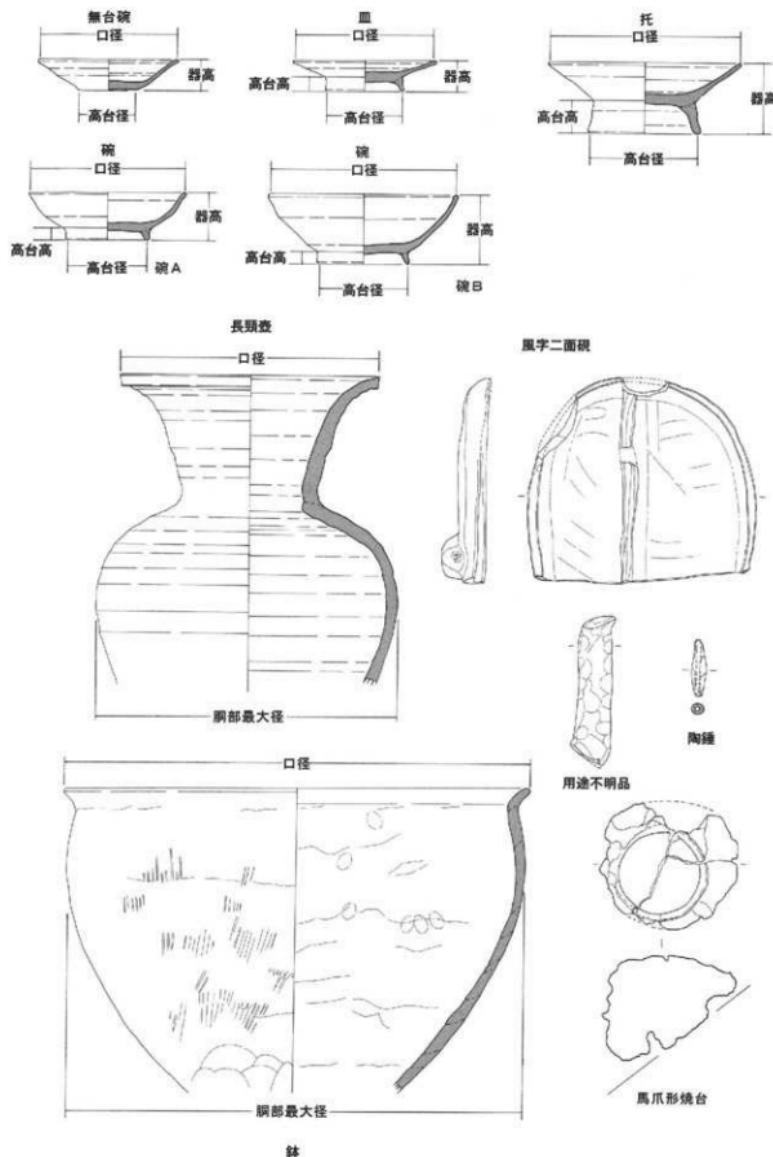


第322図 窯部位名称および計測位置図

### (2) 器種分類(第323図)

第323図のように碗、無台碗、皿、托、長頸壺、鉢、陶錘、窯道具の馬爪形焼台、窯道具と推測する棒状土製品に分類した。この他、輪花碗、瓶が出土している。

また、碗、皿、托、長頸壺、鉢に関して観察表に掲載する計測部位を図示した。



第323図 大星敷1号室出土器種区分および計測位置図

## 第2節 大屋敷1号窯

### 1 大屋敷1号窯の構造

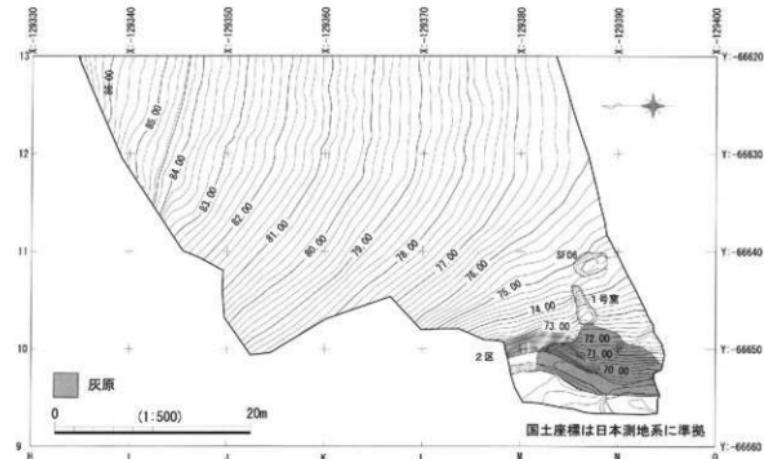
#### (1)立地(第320・321, 324・325図, 図版177)

大屋敷1号窯は、浜北市立竜玉中学校体育館の北側の谷部に位置している。1区の尾根が、大屋敷C5号墳が所在する竜玉中学校の校門付近まで延びていたとするならば、谷を50mほど入った場所に築造されていたことになる。また、1区は標高80m、3区は標高77m前後で、谷底は標高69m前後であり、谷底と1区との比高差は約10m、3区との比高差は約8mをはかる。大屋敷1号窯は約30度の傾斜をもつ斜面の中腹、標高72.5~74.5mに築造されており、地山①・②(第V層1・2, 第I分冊第II章参照)を現地表面より約1m掘り込んで構築されている。

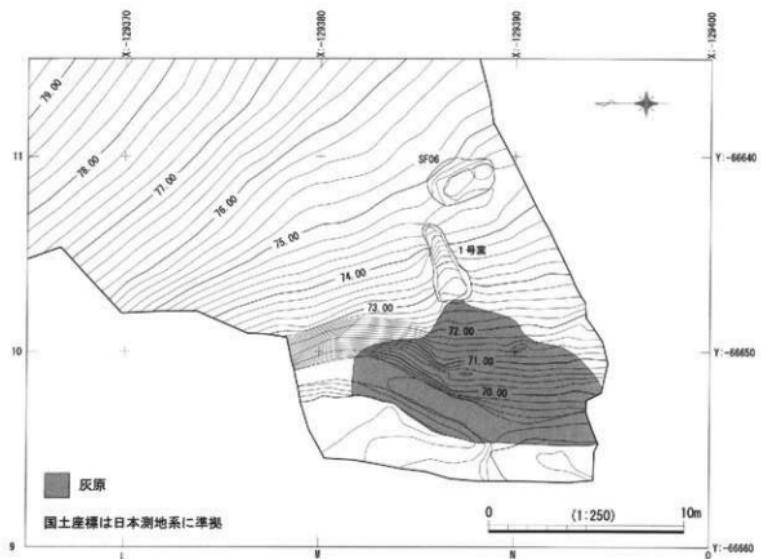
大屋敷1号窯は谷の東側(3区の西側)斜面に築造された窯である。谷の西側尾根が削られてしまっているため不明であるが、谷の西側斜面より東側斜面のほうを窯を築く、あるいは操業にあたり好都合であった可能性が高い。

また、大雨が降ると鉄砲水が流れるため、この谷の水量は豊富であったと想定でき、谷口部分を堰き止めれば、ある程度の水量を確保することができ、製品の運び出しなどに小舟が使用できた可能性もある。

自然環境をみておくと、古墳時代終末期に群集墳が築造された後は、今回の調査区内には人為的な痕跡(遺構・遺物)が出土していないため、大屋敷1号窯の操業段階まで人為が及ばず、古墳築造が終焉し、窯が築造されるまでの約300年間に樹木が繁茂していた可能性が高い。したがって、燃料材を得るために好都合な自然条件になっていた可能性が高い(第5節2 樹種同定参照)。



第324図 2区地形測量図



第325図 大屋敷1号窯地形測量図

## (2) 窯体の構造(第326・327図、図版175・178・179・182)

大屋敷1号窯は、焚口の標高72.6m、最上部の標高約74.6mであり、谷底との比高差は約3mをはかる。煙出しは、既に失われており確認することはできない。

**構造** 大屋敷1号窯は半地下式の無段階無階式窯窯である。主軸は東西を向き、等高線にはほぼ直交する。

平面形は燃焼室の幅が広く、焼成室部分で急激に狭まった後はほぼ同じ幅で伸びる無花果形を呈する。床面は焚口から燃焼室に向かって一旦(約0.2m)下がった後、約20度で緩やかに立ち上がって、焼成室へと続く。焼成室は約20度で傾斜し、焚口から約2mの位置で約35度に変化し、やや急斜面となる。

大屋敷1号窯は残存長4.3m、燃焼室長1.3m、幅1.35m、深さ0.3m、焼成室残存長3.0m、焼成室の燃焼室側(床面)幅1.1m、燃焼室側深さ0.6m、先端(煙出し側)幅0.75m、深さ0.15mをはかる。

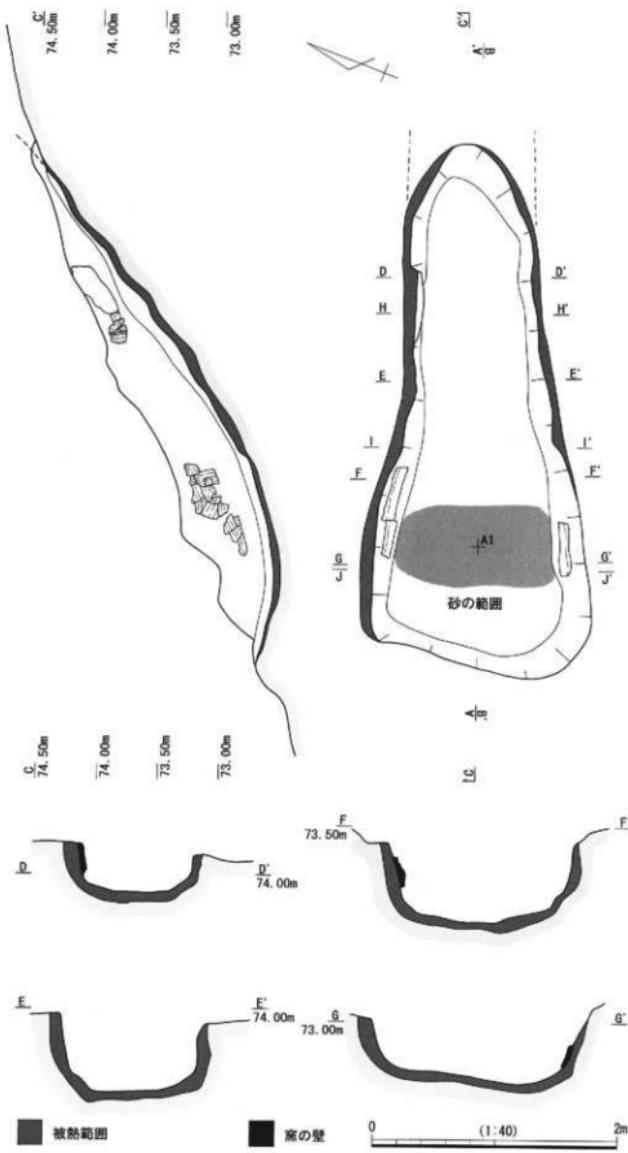
床面は地山をそのまま床面としており、貼床などの造作は確認できない。側壁はスサを多く含む粘土を指で強く撫で付けることにより貼り付けている。残存部位で、1枚、厚さ5cm前後をはかり、残存する部分では継ぎ足しなどは確認できない。

なお、分焰柱は確認できなかった。

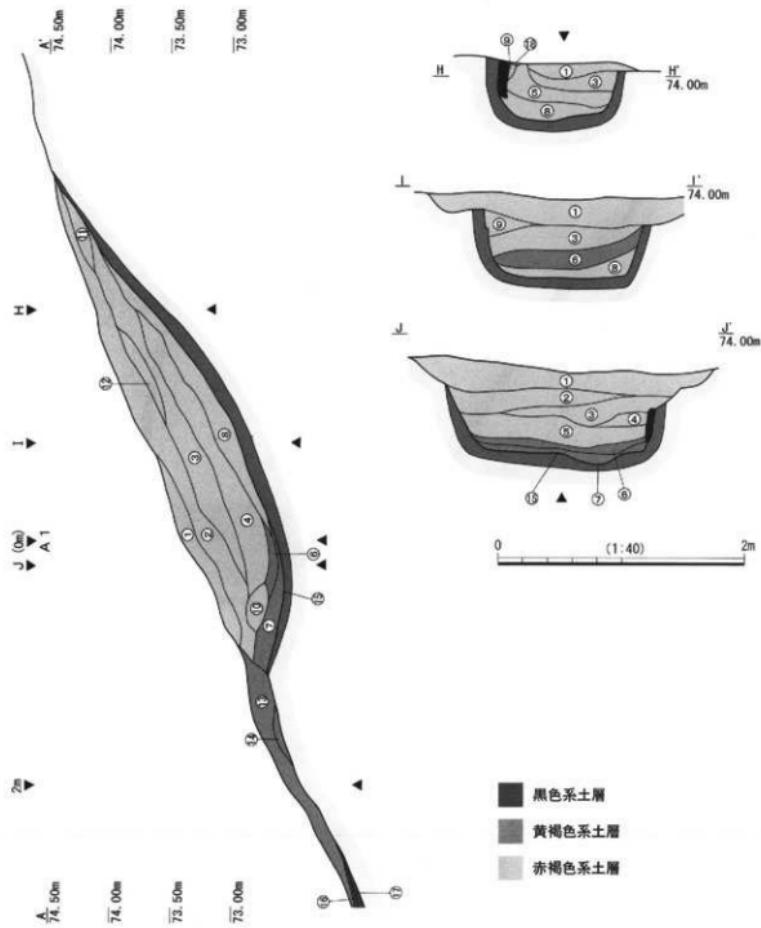
**覆土** 大屋敷1号窯内の土層は、天井が一度に崩落したような状況を想定することは困難であり、煙出方向から徐々に流れ込んだような状況を示している。

各土層には、灰釉陶器が含まれており、窯周辺に廃棄されていた灰釉陶器が流れ込んだような状況を示している。

なお、燃焼室の床面直上には薄らと厚さ5mm以下の砂層が確認でき、焼成にあたり、窯道具が床面と釉着しないような工夫がなされていた可能性がある。



第326図 大屋敷1号窯実測図



第327図 大屋敷1号窓土層断面図

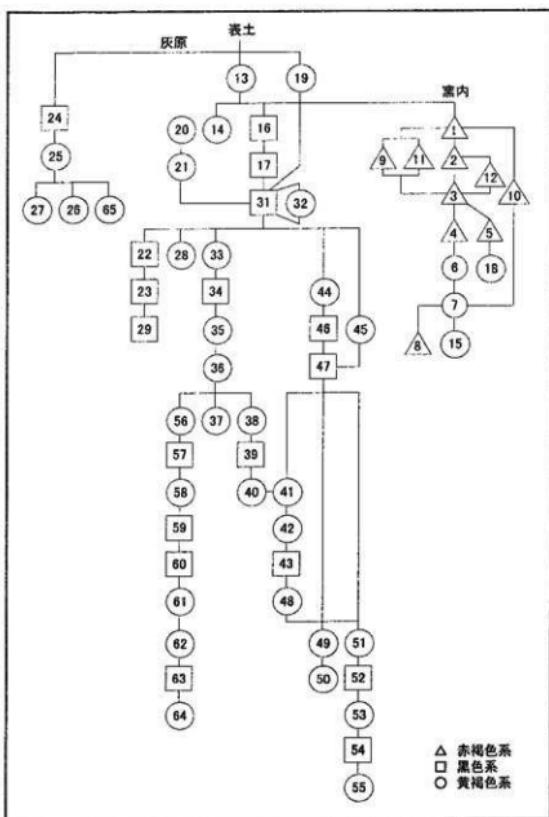
## 大屋敷1号窯・灰原土層注記(第327~330図)

## 窯内

- 1 棕褐色シルト 7.5YR4-4(灰釉陶器片を多く含む。窯壁片をやや多く含む。)
- 2 棕褐色シルト 7.5YR4-4(灰釉陶器片を多く含む。油鐵片をやや多く含む。)
- 3 棕褐色シルト 7.5YR4-4/灰釉陶器片・炭化物をやや多く含む。中型の窯壁片を多く含む。)
- 4 棕褐色シルト 7.5YR4-4/窯壁片をやや多く含む。)
- 5 棕褐色シルト 7.5YR4-4/大型の窯壁片を多く含む。炭化物をやや多く含む。)
- 6 にぶい黄褐色シルト 7.5YR4-3/窯壁片を多く含む。小窓をやや多く含む。)
- 7 灰褐色シルト 2.5Y5-2(灰・炭化物を多量に含む。窯壁片をやや多く含む。灰釉陶器片若干含む。)
- 8 棕褐色~にぶい水褐色シルト 7.5YR4-6~5YR4-4(窯壁片・灰釉陶器片若干含む。)
- 9 棕褐色~にぶい赤褐色シルト 7.5YR4-6~5YR4-4(窯壁片・灰釉陶器片やや多く含む。)
- 10 棕褐色窯壁 7.5YR4-4……窯壁の崩落
- 11 棕褐色シルト 7.5YR4-6(小窓の窯壁片をやや多く含む。)
- 12 棕褐色シルト 7.5YR4-4(小型の窯壁片・灰釉陶器片を若干含む。)
- 13 灰色砂 10YR6-1(砂層)
- 14 にぶい黄褐色砂砾 7.5YR4-3(灰釉陶器片を若干含む。)……SR01

## 灰原

- 15 棕褐色シルト 10YR4-4(小窓を多量に含む。灰釉陶器片を若干含む。)
- 16 にぶい黄褐色シルト 10YR4-3(炭化物を多量に含む。)
- 17 黑褐色シルト 10YR2-2(小型の窯壁片を若干、灰釉陶器片を若干含む。)
- 18 黑褐色シルト 10YR2-2(小窓の窯壁片を若干、灰釉陶器片を若干含む。)
- 19 にぶい黄褐色砂砾 7.5YR4-3(灰釉陶器片を若干含む。)……SR01上の自然流路
- 20 にぶい黄褐色シルト 7.5YR4-3……混乱
- 21 にぶい黄褐色シルト 7.5YR4-3……混亂
- 22 灰褐色シルト 10YR17-1~2.5YR2-1(灰釉陶器・窯壁をやや多く含む。)
- 23 黑色シルト 10YR17-1~2.5YR2-1(灰釉陶器・窯壁をやや多く含む。)
- 24 黑褐色シルト 10YR2-2(炭化物を多量に含む。灰釉陶器片をやや多く含む。)
- 25 にぶい黄褐色シルト 7.5YR4-3(灰釉陶器片・窯壁片をやや多く含む。)
- 26 にぶい黄褐色シルト 7.5YR4-3(灰釉陶器片若干含む。)……地山の流れ込み
- 27 黄褐色砂砾 10YR5-6(灰釉陶器片・窯壁片をやや多く含む。炭化物若干含む。)
- 28 黄褐色砂砾 10YR5-6(灰釉陶器片若干含む。)
- 29 黑褐色シルト 10YR2-2(灰釉陶器片・窯壁片・灰釉陶器片をやや多く含む。)
- 30 黑色シルト 10YR7-1~2.5YR2-1(灰釉陶器片を多く含む。窯壁片をやや多く含む。)
- 31 にぶい黄褐色砂砾 10YR4-3(灰釉陶器片・窯壁片を若干含む。)
- 32 にぶい黄褐色シルト 10YR4-3(灰釉陶器片・窯壁片を若干含む。)
- 33 にぶい黄褐色シルト 10YR17-1~2.5YR2-1(炭化物を多く含む。灰釉陶器片をやや多く含む。窯壁片若干含む。)
- 34 黑色シルト 10YR5-6(窯壁片をやや多く含む。灰釉陶器片をやや多く含む。窯壁片若干含む。)
- 35 黄褐色砂砾 10YR5-6(窯壁片をやや多く含む。灰釉陶器片・炭化物を若干含む。)
- 36 暗褐色シルト 10YR3-4(窯壁片をやや多く含む。灰釉陶器片・炭化物を若干含む。)
- 37 黄褐色シルト 10YR5-6(灰釉陶器片・窯壁片・炭化物を若干含む。)
- 38 黄褐色シルト 10YR5-6(窯壁片をやや多く含む。灰釉陶器片・炭化物を若干含む。)
- 39 黑褐色シルト 10YR17-1~2.5YR2-1(炭化物を多く含む。灰釉陶器片・窯壁片をやや多く含む。)
- 40 黄褐色砂砾 10YR5-6(灰釉陶器片・窯壁片を若干含む。)
- 41 暗褐色シルト 10YR3-4(窯壁片をやや多く含む。灰釉陶器片若干含む。)
- 42 黄褐色シルト 10YR5-6(窯壁片を多く含む。灰釉陶器片若干含む。)
- 43 黑色シルト 10YR17-1~2.5YR2-1(炭化物を多く含む。灰釉陶器片・窯壁片をやや多く含む。)
- 44 にぶい黄褐色砂砾 10YR4-3(灰釉陶器片・窯壁片を若干含む。)
- 45 にぶい黄褐色砂砾 10YR4-3(灰釉陶器片を若干含む。)……旧地表の流れ込み。
- 46 黑褐色シルト 10YR2-2(炭化物・灰釉陶器片・窯壁片をやや多く含む。)
- 47 黑褐色シルト 10YR2-2(炭化物・灰釉陶器片・窯壁片を多く含む。)
- 48 暗褐色シルト 7.5YR4-6(窯壁片を多く含む。灰釉陶器片を若干含む。)
- 49 にぶい黄褐色シルト 10YR4-3(灰釉陶器片・窯壁片・炭化物粒を多く含む。)
- 50 暗褐色シルト 10YR3-3(窯壁片多量に含む。灰釉陶器片・炭化物を多く含む。)
- 51 黄褐色シルト 10YR5-6(窯壁片を多く含む。灰釉陶器片若干含む。)
- 52 黑褐色シルト 10YR17-1~2.5YR2-1(炭化物を多く含む。灰釉陶器片・窯壁片をやや多く含む。)
- 53 黄褐色シルト 10YR5-6(窯壁片をやや多く含む。灰釉陶器片若干含む。)
- 54 黑色シルト 10YR17-1~2.5YR2-1(灰釉陶器片をやや多く含む。)
- 55 黄褐色シルト 10YR5-6(窯壁片をやや多く含む。灰釉陶器片若干含む。)
- 56 暗褐色シルト 10YR3-4(大型の窯壁をやや多く含む。灰釉陶器片若干含む。)
- 57 黑褐色シルト 10YR17-1~2.5YR2-1(炭化物を多く含む。窯壁片をやや多く含む。灰釉陶器片若干含む。)
- 58 暗褐色シルト 10YR3-4(大型の窯壁片・炭化物を多く含む。灰釉陶器片をやや多く含む。)
- 59 黑褐色シルト 10YR2-2(窯壁片・炭化物を多く含む。灰釉陶器片若干含む。)
- 60 黑褐色シルト 10YR17-1~2.5YR2-1(炭化物・窯壁片・灰釉陶器片を多く含む。)
- 61 にぶい黄褐色~褐褐色砂砾混じりシルト 10YR4-3~7.5YR4-3(灰釉陶器片・窯壁若干含む。)
- 62 暗褐色シルト 10YR3-4(大型の窯壁片・炭化物を多く含む。灰釉陶器片やや多く含む。)
- 63 黑褐色シルト 10YR7-1~2.5YR2-1(炭化物・窯壁片・灰釉陶器片若干含む。)
- 64 にぶい黄褐色砂砾 10YR4-3(大型の窯壁片を多く含む。灰釉陶器片やや多く含む。)
- 65 にぶい黄褐色シルト 10YR5-4(炭化物・窯壁片を若干含む。)



第328図 大屋敷1号窯・灰原土層序マトリックス

ことが判明する。

したがって、最低4回以上の大きな操業単位があったと推測することができる。

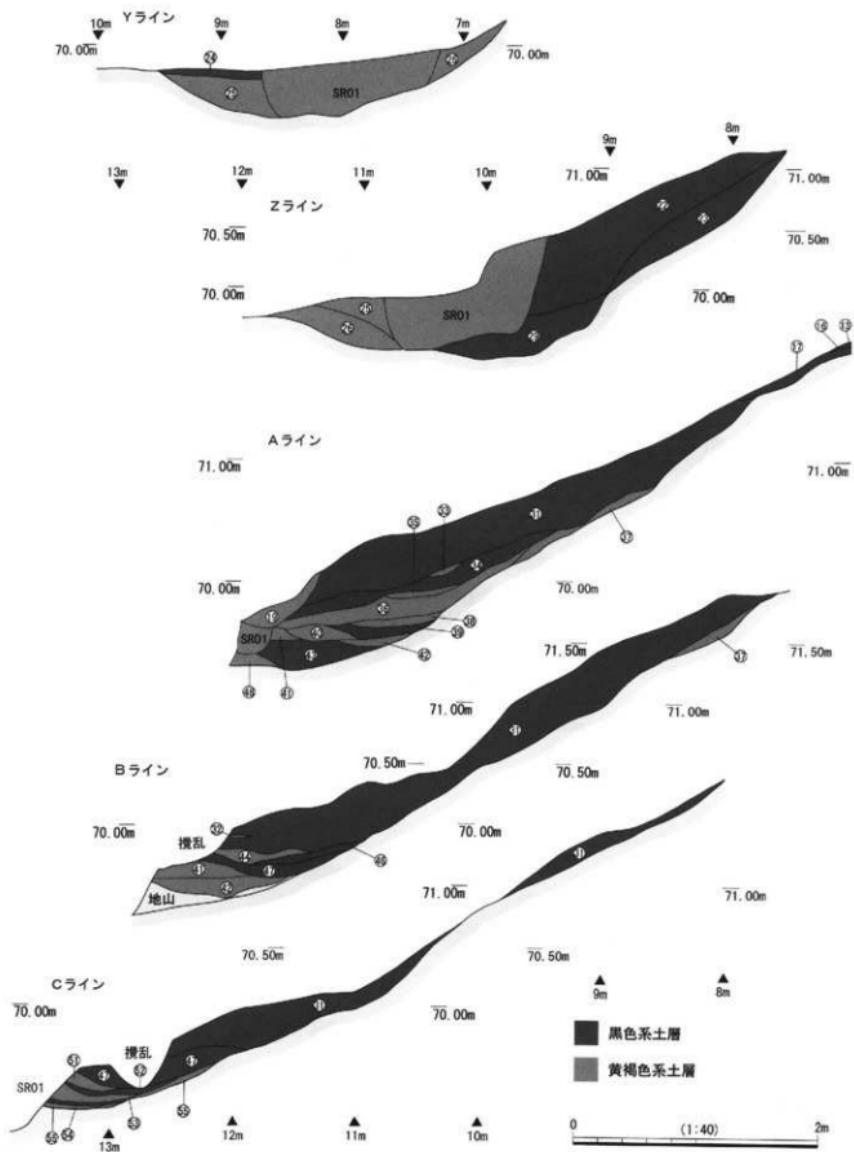
また、灰原上層の31層は、厚い黒色土の堆積であるが、中に黄褐色土の堆積(32層)を確認することができ、31層の堆積途中でなんらかの中斷があったと推測する。また、31層には窯壁も含まれるが、下層のように窯壁の破片で構成されるほどではないため、大量に窯壁が廃棄されることはない想定する。したがって、大屋敷1号窯の最終段階は、窯の大きな改修・修復は行わずに操業していた可能性が高い。

### (3) 灰原の構造(第328~330図、図版181)

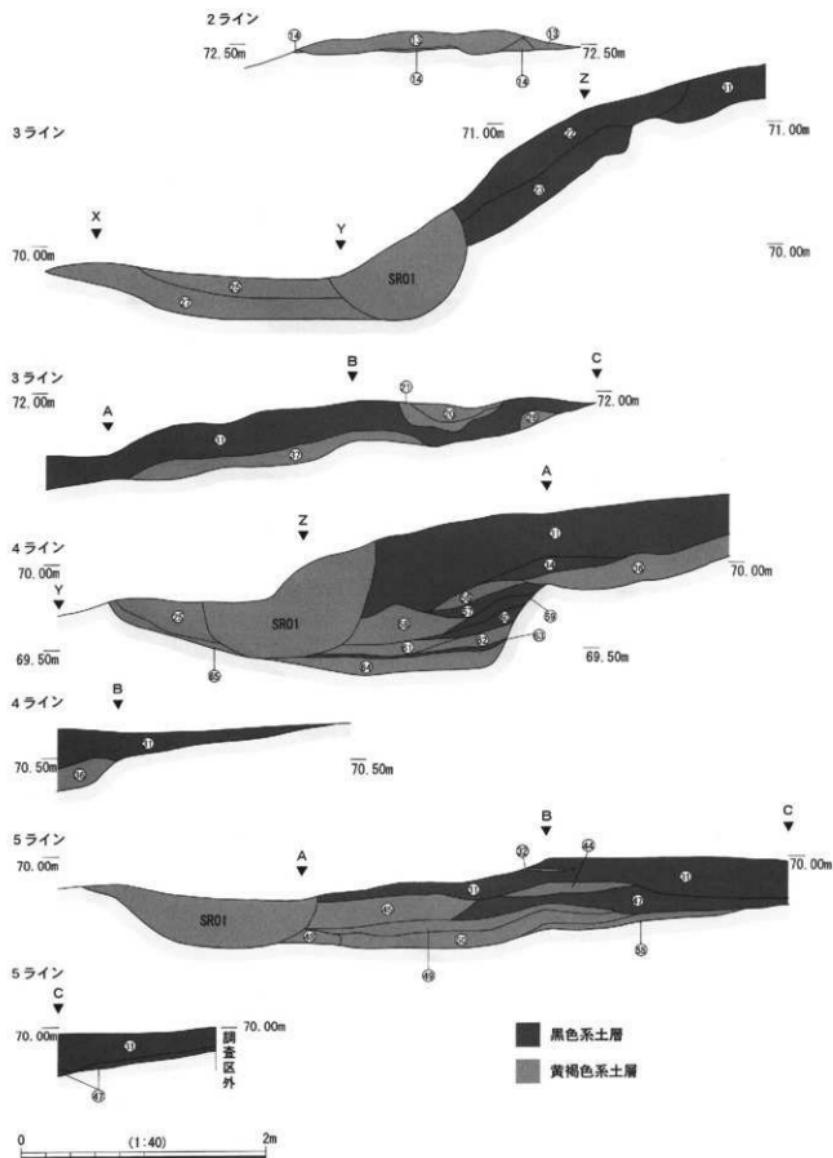
**範囲** 1号窯の斜面下部から谷底に広がる。灰原(物原)部分に現代の焼却炉やそのごみを棄てる土坑が掘削されていたため、灰原西側が破壊され、また灰原上部は擾乱されていたが、灰原は南北12m、東西6m、最深部で1.2mが残存していた。谷底に当たる部分は自然流路SR01によって灰や土砂が流れ、灰釉陶器と上流の土砂が堆積していた。

**堆積状況** 上層の堆積状況は、斜面下部に向かって徐々に厚くなり、大きな擾乱や層位の乱れは確認できない。下層は窯壁を多く含み、灰釉陶器の少ない層(黄褐色土)と、炭化物や灰釉陶器を多く含む層(黒色土・黒褐色土)が、交互に堆積するような状況を示しており、上層は黒色土層(31・22層)が堆積している。

**操業回数** 黄褐色土には多量の窯壁の破片が含まれ、その間に黒色(黒褐色)土が堆積することから、最低4~5回は窯の部分的な修復が行われた



第329図 大屋敷1号窯灰原土層堆積状況図①



第330回 大屋敷1号窯灰原土層堆積状況図②

## 2 遺物出土狀況

(1) 窩(第331図、図版176)

窯の床面直上で出土した灰釉陶器の出土状況を第331図に示した。焼台などは確認できず、また口縁部が上を向くものがあれば、下を向くものもあり、重ね焼きの状況で出土するものがないなど焼成時の原位置を保持して出土したものではなく、煙出しそり流れ込んだような状況を示している。

また、床面直上から出土した灰釉陶器(第345図723~739、第346図745)は焼台として転用されたものが多く(第58表灰釉陶器観察表参照)、操業の最終段階に焼成された灰釉陶器ではない可能性が高い。

また、窓内の覆土より出土した灰釉陶器を第346～348図に図示した。これらは覆土に多量に含まれており、上層から下層まで量の多寡は確認できなかった。これらの灰釉陶器も焼台として転用されたものが多く確認できる。



第331図 大屋敷1号室遺物出土状況図

## (2) 灰原(第332~335図、図版180)

## ①灰釉陶器の出土点数と出土位置(第332図)

大屋敷1号窯灰原から出土した壺・鉢類は、転用のため複数の箇所から出土しており、出土層位も安定していない。

一方、碗皿類は、焚口下部の谷底付近に多く出土しており、そこから離れることにより少なくなる傾向にある。

碗・皿の出土数は、黒色土層に多く、黄褐色土層に少ない。また、上層に多く、下層に少ない傾向がある。

## ②灰釉陶器の接合状況(第333~335図、第54~56表)

複数のグリッドおよび複数の層位から出土した破片が接合した灰釉陶器を第54~56表に示し、その接合関係を第333~335図に示した。

複数の層位、複数のグリッドから出土している灰釉陶器は、碗皿類には少なく、壺・鉢類が多い。これは、碗皿類が2000個体以上出土しており、接合が難しかったことに起因する可能性が高い。

特徴的な接合状況は長頸壺(遺物番号788)であり、灰原北側のX 2・Y 3区から南側のB 3・5区にわたって接合し、層位も窯内、灰原上層(22・31層)、灰原下層(50・53層)で出土したものが接合している。

また、長頸壺(1126)もY 2・3区からA 3グリッドにわたり接合し、層位も灰原上層(22・31層)と灰原下層(65層)から出土したものが接合している。このような複数のグリッド、上層・下層から出土した破片が接合する状況は碗(792・877・940・1061)、壺(1134・1135)、鉢(1158・1178・1198)などでも確認することができる。

しかし、複数のグリッド・層位から出土する要因は、土層の堆積が攪乱等により乱れているわけではなく、後述するように多数の灰釉陶器が完形あるいは破片で窯道具(焼台)へ転用されていることに起因しているからである。

碗	X	Y	Z	A	B	C
2	14	3	1	6		
3	19	61	118	76	16	
4		26	119	198	117	21
5				25	82	150

1052

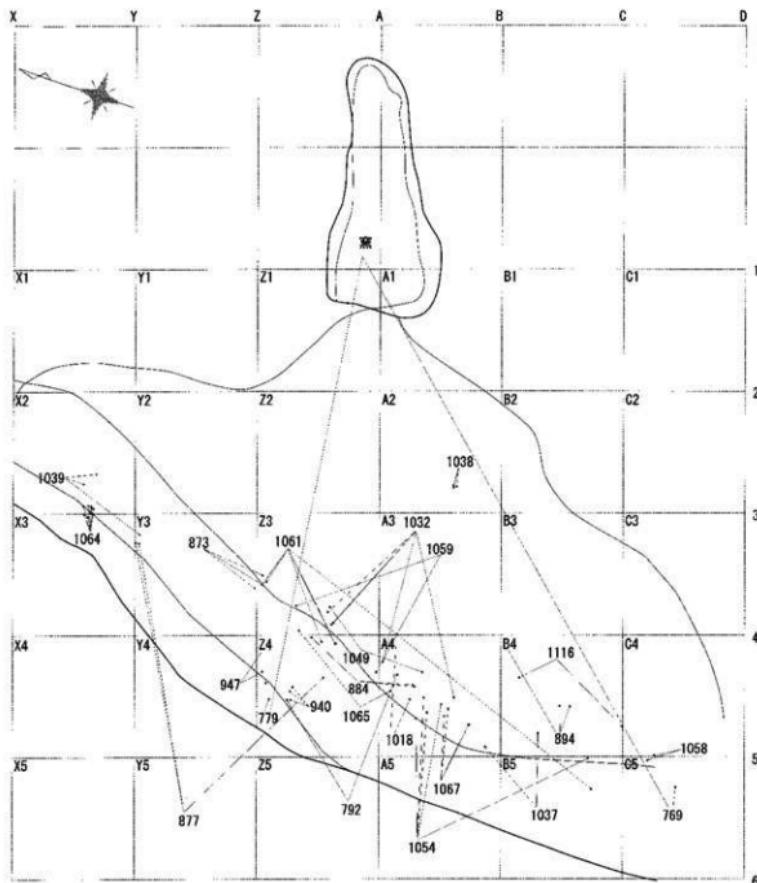
無台跡	X	Y	Z	A	B	C
2	1	0	0	1		
3	3	7	9	14		
4		1	13	27	10	0
5				6	12	12

118

托	X	Y	Z	A	B	C
2	1	0	0	0		
3	0	1	0	1	0	
4		1	0	1	1	2
5				0	1	2

11

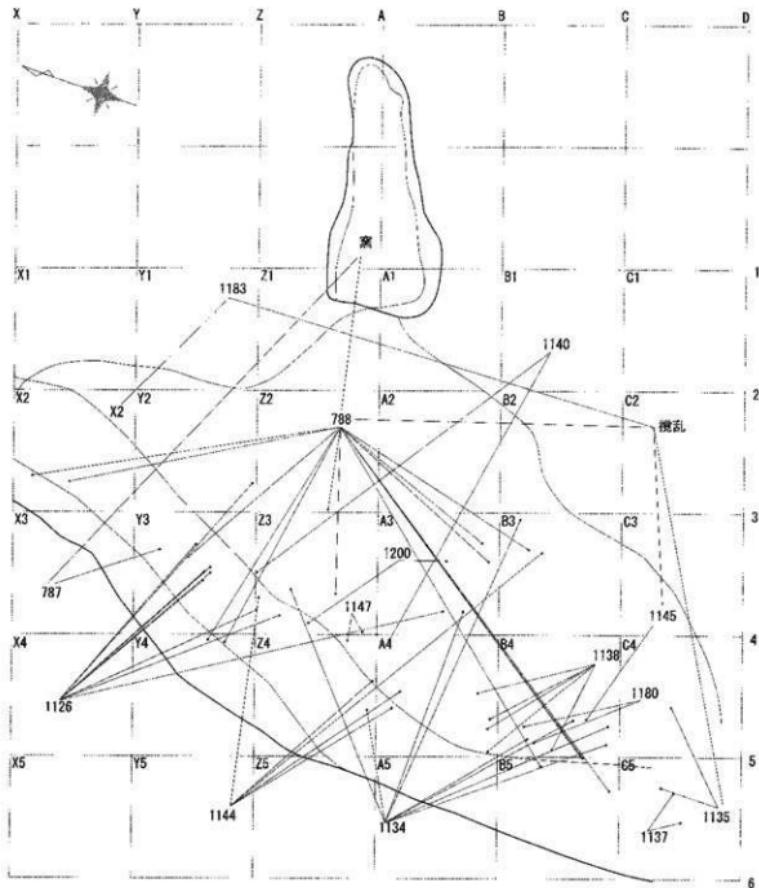
第332図 大屋敷1号窯出土灰釉陶器碗皿類グリッド別出土数



第333図 大屋敷1号窯窯内・灰原接合関係①(鏡皿類)

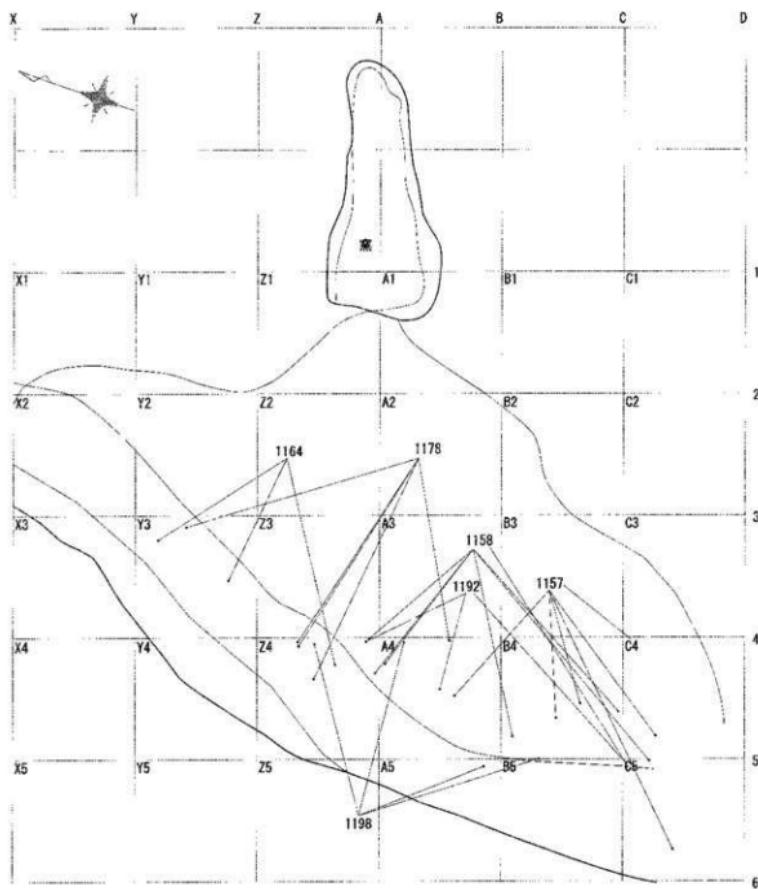
第54表 大屋敷1号窯窯内・灰原接合関係①(鏡皿類)

遺物番号	出土位置	出土層位	遺物番号	出土位置	出土層位	遺物番号	出土位置	出土層位	遺物番号	出土位置	出土層位
769	窯内 C5	床面上・覆土 31	884	A4	36	1038	A2	19・31	1064	Z3	61・65
			894	B4	26	1039	Y3	25	1061	Z4	50
779	窯内 Z4	覆土 22	940	Z4	25・26・62	1049	A4	36	1062	A4	45
			947	Z4	61・62・64	1018	Z3	31	1063	B5	26・62
792	Z4 A4	25 42	1018	A4	31・42	1054	A4	19・31	1065	Z4	26
				A4	42	1054	B5	47	1066	A4	42
873	X3 Y3	65	1032	Z4	26・43	1058	C5	31・52	1067	A4	31・36
				Z3	31	1059	Z3	31	1116	B4	49
877	Z4	26	1037	A5	31	1058	C5	31		C4	31
				B4	44						



第334図 大屋敷1号窯出土灰釉陶器接合状況図②(長頸甌・甌)

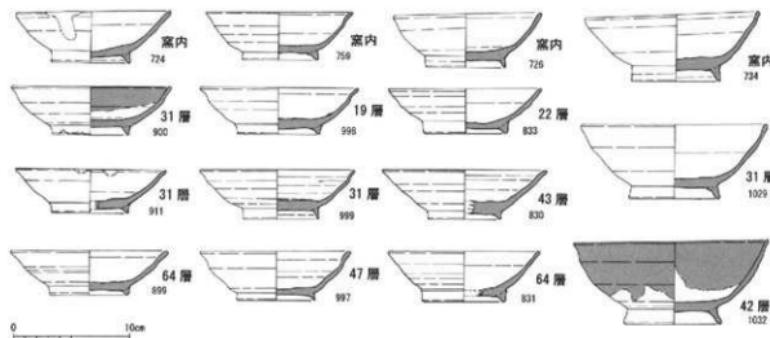
第55表 大型敷1号窯窓内・灰原接合関係②(長頸壺・碗)



第335図 大屋敷1号室出土灰鉢焼器接合状況図③(鉢)

第56表 大屋敷1号室窓内・灰原接合関係③(鉢)

遺物番号	出土位置	出土層位	遺物番号	出土位置	出土層位
1157	A4	31・49	1178	Y3	26
	B4	31		Z4	26・43・62
	C4	31		A5	50
1158	Z4	22・43	1192	Z4	34
	A4	42		A4	31
	B4	31・44		C5	南壁
	C5	51		Z4	26
1164	Y3	26	1198	A4	31
	Z4	26		A5	50
				B5	50



第336図 大屋敷1号窯出土灰釉陶器碗類出土層位別比較図

## 3 出土遺物(第336~371図、巻頭図版7・8、図版183~204、第58表)

ここでは、まず窯内、灰原から出土した灰釉陶器碗類に関して比較した後、碗皿類の出土位置別の法量等を比較し、器形や法量に出土位置で変化が確認できるかを検討する。つづいて、碗から出土位置を分けず、器種ごとに報告を行う。

## (1) 大屋敷1号窯出土灰釉陶器の層位別比較(第336・339図)

第336図には、窯内、灰原上層、灰原下層から出土した灰釉陶器碗を同様の形態で並べて図示したものである。後述するように碗においても窯道具への転用が頻繁に行われており、上層で出土したからといって新しい段階の灰釉陶器と断定できないが、窯内、灰原上層、灰原下層から出土した碗は形態的(第336図)には区別することが難しい。

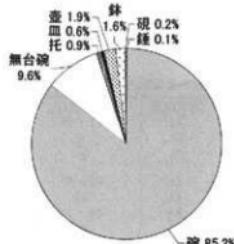
また、比較的新しい段階に出現するとされるいわゆる「玉縁」を有する碗が数点(第357図1061~1068)出土しているが、これらも比較的下層の42層から上層の31層まで出土している。したがって、形式組成の差異も確認することができず、上層から下層、窯内ともに同様の組成、型式が出土している。

また、法量に関してみておくと、窯内床面直上、窯内覆土、灰原出土の碗の口径、高台径ともに同様の分布を示すことが判明することから(第339図)、型式差は見出すことはできない。

したがって、出土状況や型式・法量、組成変化から大屋敷1号窯の灰釉陶器を区分することは難しい。以下では、大屋敷1号窯窯内、灰原から出土した遺物を一括して報告する。

## (2) 大屋敷1号窯出土灰釉陶器(第345~371図、巻頭図版7・8、図版183~204、第58表)

大屋敷1号窯内、灰原からは、灰釉陶器碗、輪花瓶、無台碗、皿、托、長頸壺、風字二面鏡、鉢、瓶、陶錘のほか、窯道具として棒状土製品と馬爪形焼台、小型焼台が出土し



第337図 大屋敷1号窯出土灰釉陶器器種別出土割合

ている。耳皿、段皿、短頸壺等は出土していない。

出土数は残存率を調整した後の比率で、碗が約85%、無台碗約10%、壺・鉢がそれぞれ約2%、それ以外の製品は1%以下であり、碗が圧倒的多数を占めている。第57表に示したように碗は高台数(高台の残存率調整)で約1060個、無台碗は約120個である。

①碗(第338~340, 345~361図、巻頭図版7・8、図版183~185, 188~194)

碗は、法量、高台の有無、高台の形状・高さにより、通常の碗(碗A)と、深碗あるいは大碗(碗B、註1、註2は125頁)、無台碗、輪花碗に区分することができる。

碗における比率は、碗Aが80%、碗Bが20%である。

i 碗A(第338~340, 345~361図、図版183~185, 188~191, 193・194)

碗Aは、口縁部の形状により6類に区分することができる。

高台は、断面が三角形の三角高台(高さ1.0cm以下)と接合部分から高台の先端まで厚さがほぼ均一な爪形高台(高さ1cm以下)がある。また、三角高台、爪形高台とともに直線的なものと、ハズ字形に開くものが確認できる。口縁部の形状の各分類(a~f類)と厳密には対応せず、高台の形状はそれぞれが各分類に確認できる。

分類(第338図)

a類 見込みから緩やかに立ち上がるもので、口縁端部まで直線的に伸びるもの(窓内床面728~729、窓内覆土741~742、762~764、灰原830~834、841~843、852~856、862~893)。

b類 見込みから緩やかに立ち上がるもので、口縁部直下を強く撫で、口縁端部を屈曲させるもの(窓内727、730、灰原835~840、844~851、857~861、894、895~930)。

c類 見込みから水平に伸びた後、急激に屈曲して箱形に立ち上がるもので、口縁端部まで直線的に伸びるもの(窓内床面723~726、窓内覆土743~746、750~755、763、765、灰原964~996)。

d類 見込みから水平に伸びた後、急激に屈曲して立ち上がるもので、口縁部直下を強く撫で、やや口縁端部を屈曲させるもの(窓内覆土747~748、756~757、766、灰原931~963)。

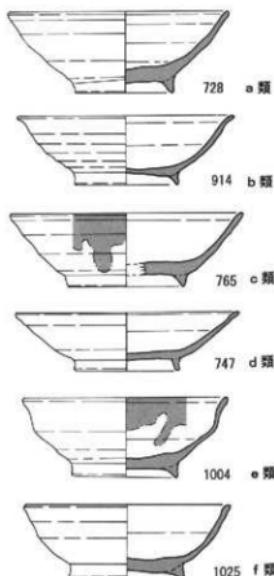
e類 口縁部を強くナデ、明瞭な段を有するもの(窓内覆土757~759、767~768、灰原997~1020)

f類 ゆったりとした碗で、いわゆる深碗に近い形態のもの(灰原1021~1026)。

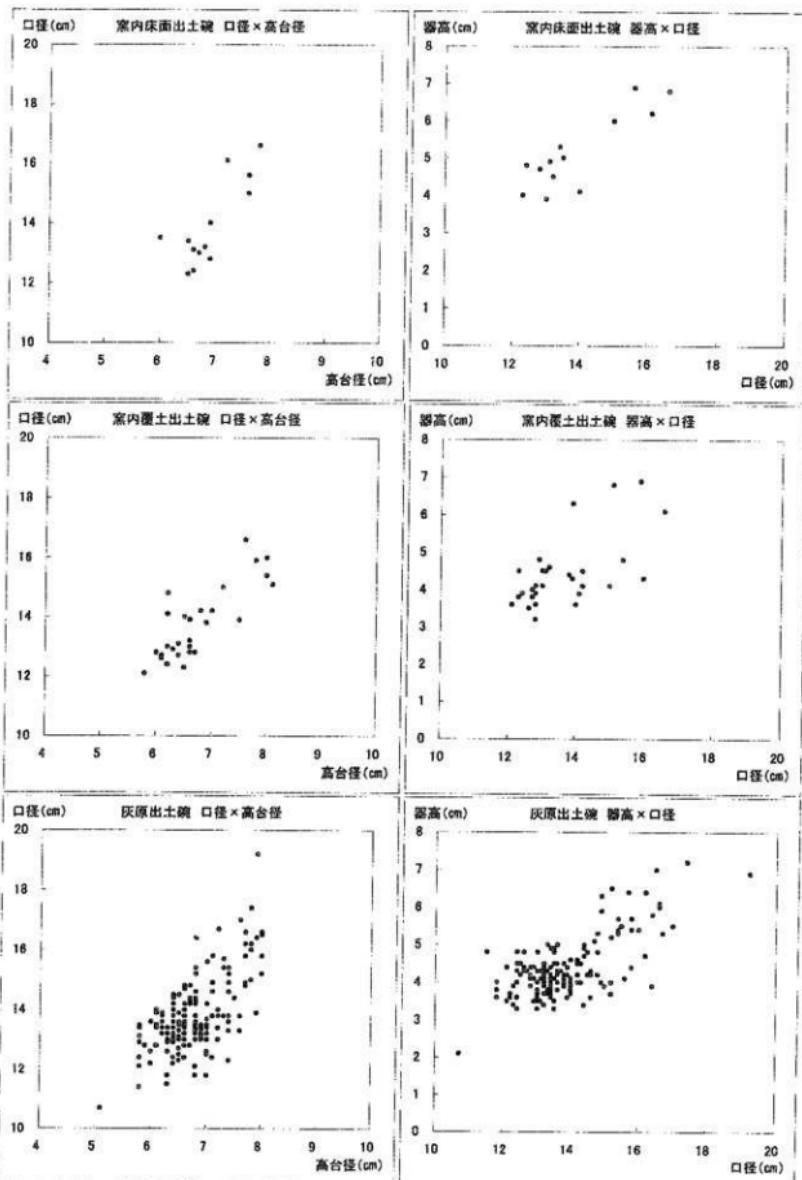
ただし、以上のようにおよそ6つに形態区分することができるが、a~d・fと、口縁部に明瞭な段がつくe類は区分されていた可能性が高いものの、中間的な形態が多く、a~d・f類は形式として

第57表 大屋敷1号窯出土灰釉陶器種別出土地

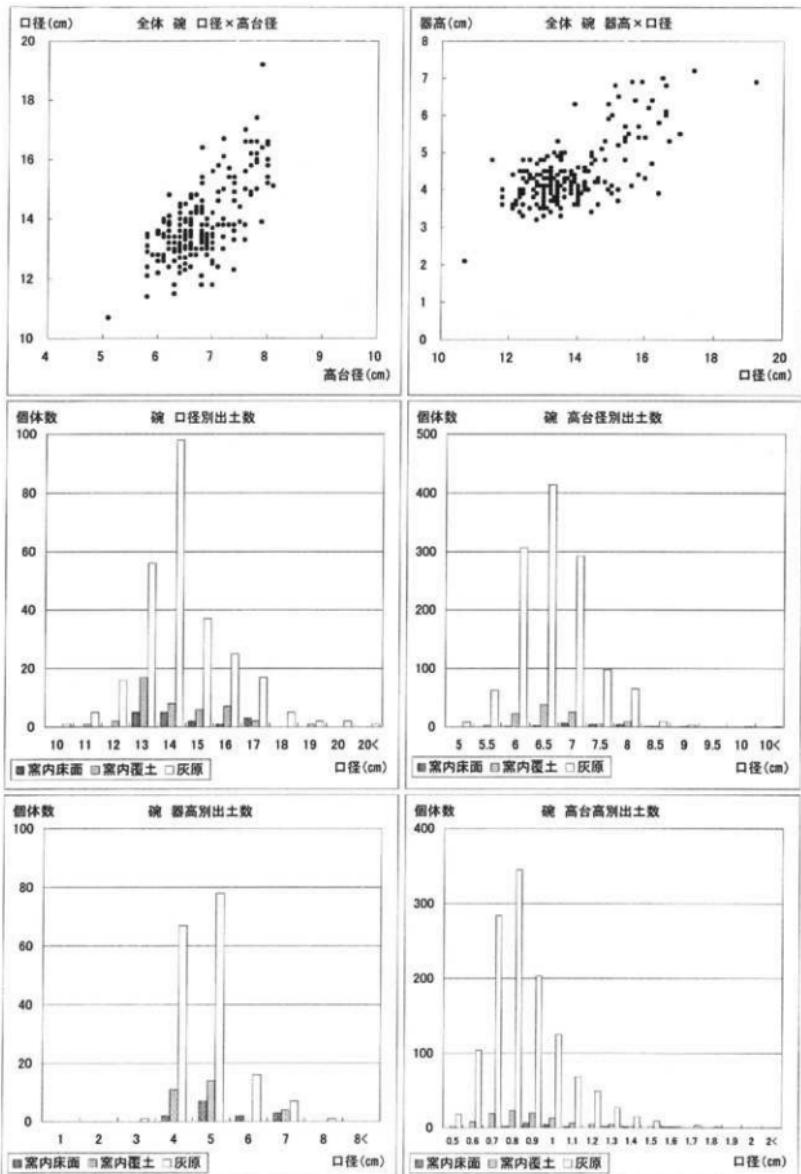
器種	個体数	割合
碗	1052	85.2%
無台碗	118	9.6%
托	11	0.9%
皿	7	0.6%
壺	24	1.9%
鉢	20	1.6%
鏡	2	0.2%
鍾	1	0.1%



第338図 大屋敷1号窯出土碗A分類図



第339図1 大河原1号窯出土灰粒陶器統計量図①



第339図2 大屋敷1号窯出土灰釉陶器碗法量図②

安定したものではない。また、a～f類は法量において区別することは難しい。

なお、b・d類における口縁端部直下を強く撫でる行為は、吉名5・6号窯製品にみられる口縁部の引き出しの簡略化(名残り)と考えてよいだろう。

また、第357図1074は、口縁端部直下に円孔が空たれている。この円孔の用途や機能は不明である。

**法量** 瓢Aは、口縁部数を調整した後の状況で、口径は13.0～14.0cmが最も多く、約40%を占める。これを頂点に正規分布を示す。高台径は6.0～6.5cmを頂点に、正規分布を示し、5.5～7.5cmの2cmの間に集中する。高台高は0.8cmが最も多く、0.6～1.2cmまでに集中する。

グラフには瓢Bを含めていたため、それを除いたものを示すと、口径12.0～15.0cm、器高4.0～5.0cm、高台径5.5～7.5cmの範囲にほぼ収まる。

## ii 瓢B(深碗あるいは大碗)(第345、347、356～358図、図版191・192)

**分類** 瓢Bは、爪形の高い高台であり、およそ高台高1cm(1.1cm以上を瓢Bとした)を境に瓢Aと区分した(窯内底面第345図731～734、窯内覆土第347図773～783、灰原第356～358図1027～1069、1083～1090、1104～1109)。瓢Bは、底部から直線的に立ち上がり、口縁端部を丸く仕上げるもの(1027～1060)と、口縁部をL線状に仕上げるもの二者に区分することができる(1061～1068)。前者は、瓢Aのように口縁直下を強く撫で、明瞭な段を有するもの(1042・1044など)と、直線的なもの(1028・1029など)がある。

**法量** 瓢Bは、口径14.0～18.0cm、高台径7.0～9.0cm、器高5.0～7.0cmの範囲に収まる。口径16.0cm、器高6.0cm、高台径7.0～8.0cmを頂点に正規分布を示す。瓢Aと比較して、口径で3cm以上、器高2cm以上、底部径で1cm以上大型である。

## iii 瓢・皿における粘土の充填(第345・346、349、351図ほか、図版191・192・204)

一部の碗皿類口縁部付近に粘土を充填する個体を少数であるが確認することができる(724・733・767・809・862・876ほか、図版204)。全体を復元できるものがないため複数箇所に及んで充填が行われていたかは判然としないが、内面だけに充填するものの、口縁部にまで及ばないもの、明らかにひび割れを補修するために充填する個体が確認できる。したがって、本報告では特に分類せず、観察表では「補修痕」という表記に留めている。

これは、乾燥段階でひび割れしたものに粘土を充填して塞いだといえる。したがって、灰釉陶器の最終段階において、製作自体が粗製になっていた証拠である。

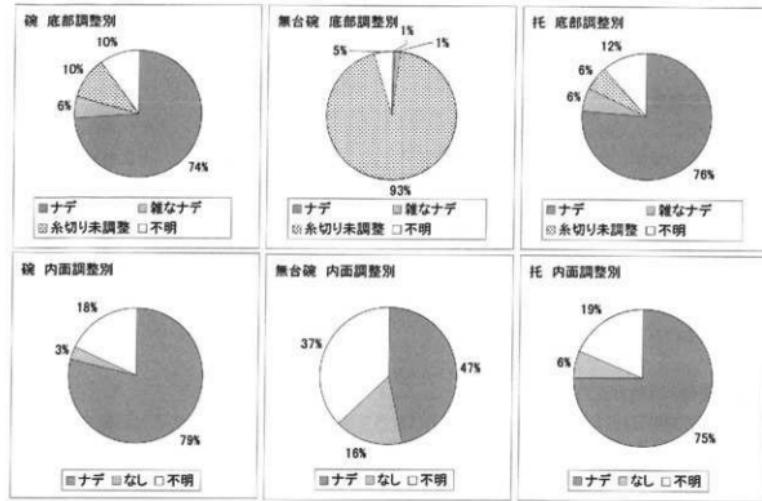
しかし、補修痕のある瓢・皿が商品として流通していたかどうかは、実際に消費地で出土したものを確認するまでは断定できない。大原敷1号窯では、不良品の転用が顕著であるため、乾燥段階でひび割れしてしまったものに補修を加え、窯道具として転用していた可能性もあり、現状では補修痕がある瓢・皿があるという指摘するに留めておきたい。

また、碗のうち補修されるものは瓢Aに限られており、高台の接合などが丁寧に行われる傾向にある瓢Bでは補修痕は確認することができない。

## iv 瓢・皿類における底部・内面調整技法(第340図、図版193)

大原敷1号窯から出土した灰釉陶器碗・皿類の成形・整形段階における調整の特徴についてみておく。第340図に碗皿類における内面底部の調整と外側底部の調整について記した。

**底部調整** 瓢・皿類は、底部は糸切り後高台を接着した後の技法に3種類あり、X 高台接着のためのナデが及ばなかった高台の内側全体を丁寧に撫でて糸切り(離し)痕を完全に消すもの、Y 底部は撫で



第340図 大原数1号窯出土灰釉陶器碗・皿類底部・内面調整の割合

られるものの、雑に(弱く、簡単に撫でたため)糸切り痕が確認できるもの、Z 撫で調整を行わない糸切り未調整のものが確認できる。

これらの割合は、第340図に示したように碗ではXが約75%、Yが6%、Zが10%で、糸切り痕を消そうとする意識のあるものが8割を占める。托も同様であり、ナデ消すものが8割を占める。したがって、碗と托の底部調整は丁寧に行われていたことが判明する。

一方、無台碗では、逆に糸切りを残すもの(Z)が約95%で、なんらかの調整を加えているものは2%と非常に少なく、無台碗の底部調整は行わないという考えがあったことが判明する。

**内面調整** 底部内面(見込み)部分には、一定方向の指ナデ(静止ナデ)を施すもの、あるいは回転ナデを施すもの(「ナデ」と表記)と、水挽きのままのもの(「なし」と表記)、の二者が確認できる。

第340図に示したように、碗では前者が約80%、後者は約5%であり、内面を調整するものが多い。托も碗と同様の傾向を示す。

一方、無台碗は前者が約45%で、後者が15%と、碗・托と比較すると無調整のものが増加しており、底部調整同様、簡略化が確認できる。

なお、一定方向のナデを施すものは1~2条のものが多いが、中には3~5条施すものも確認できる。また、窯内覆土から出土した772(第346図、図版193)は見込み(内面底部)に指頭圧痕が複数確認できる。

#### v 碗における高台の接合

碗の高台は、糸切り離し底部の体部側に取り付けられるものもあるが割合は少なく、底部の最外部に取り付けるものが大部分である。

底部と高台の接合は、高台を接着するときのナデのみで終えるものが多く、接合痕が目立つ。中には体部まで粘土がはみ出するものも確認することができ、接合部を丁寧に撫でて、接合の痕跡を見えなくしている個体は少ない。

接合の痕跡を丁寧に消すものは碗B類に多く、また碗Bは底部の糸切り痕をナデ消すものが多いことを重ね合わせると、碗Aよりも碗Bの整形・調整の方が丁寧であったことが判明する。

#### vi 碗の高台底部

碗の高台には、ソダ痕(木枝痕?)が残存する個体を確認することができる。一方でソダ痕、初痕が全く確認できない個体も多く、ソダ痕が残るもの約20%、初痕が残るもの約1%、ソダ痕や初痕が確認できないもの79%であり、乾燥の方法を推測する上で重要な資料となる。

ソダ痕は植物の枝葉を敷物として、乾燥時にその上に置いた痕跡と想定できる。直接枝葉の上に置いた個体にソダ痕が残り、その上に重ねて置いた碗類にはソダの痕跡が残らないと想定でき、乾燥時にすでに重ねられていた可能性がある。

なお、無台碗の底部にはソダ痕、初穀痕はほとんど確認できず、僅かにソダ痕が確認できるものが約1%存在するのみである。

#### vii 碗・皿類の施釉方法

碗・皿類の施釉方法は、それが判明するものはすべて漬け掛けであり、一部に灰釉が施されないもの(無釉)のもののが存在する可能性がある。刷毛塗りは確認することができないが、一部存在する可能性がある。

漬け掛けの回数は、残存状況が良好なもので碗Bでは5~6回に分けて釉薬に漬けていることがわかる。碗Aでは、4~6回漬けているものが確認できる。灰釉陶器に後出する初現的な山茶碗は3回(3箇所)とされており、山茶碗段階よりは丁寧に灰釉を掛けていることが判明した。

#### viii 窯内における積載方法(第349・358図)

1号窯窓内、灰原より釉着した状態で出土した灰釉陶器碗・皿が出土している。これらはすべて製品を直接重ねた重ね焼きで、三叉トチや輪ドチなどの縦材(窯道具)は利用されていない。碗・皿類に転用が多いため複数回の転用で次々と釉着し、2~5段分が重なった可能性もあるが、他の個体の観察においても、多くの碗に高台の痕跡が確認できることから、重ね焼きであることは疑いない。

また、釉着した状態で出土したものには、碗と皿が釉着した状態のもの(第349図815、第358図1094)があり、焼成時に転用で碗と皿が重ねられた可能性が高い。

#### ②無台碗(第341・346・349図、図版183・186・187・194)

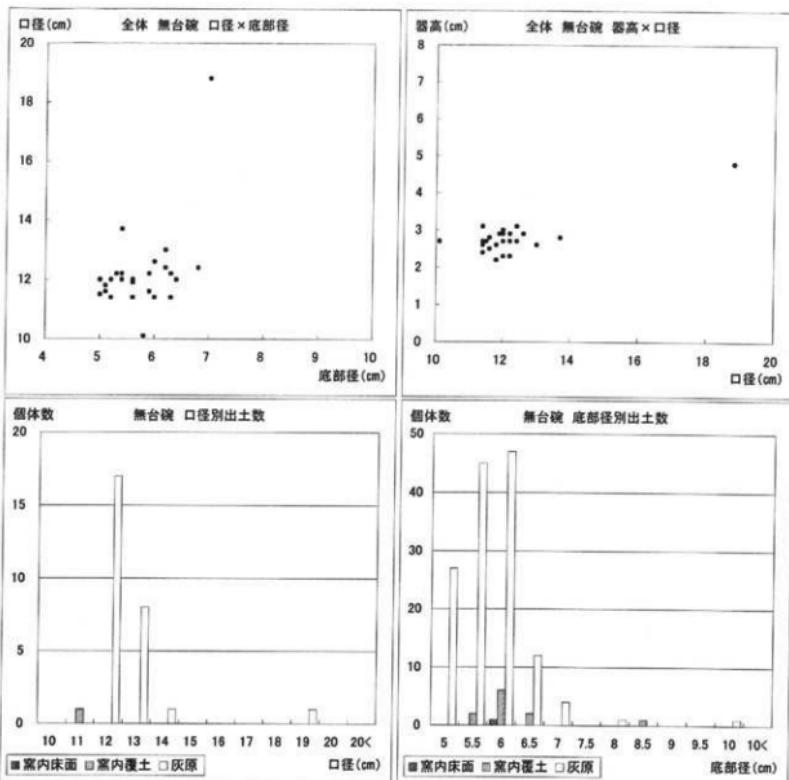
**分類** 高台が付かないものを総称する(窯内覆1:740、灰原789~820)。口径が12cm前後のものと、それ以上の大型のものに区分できる。口径12cm前後のものは、口縁の形状は碗A同様6種類がある。

**法量** 口径12cm前後のものは、底径は5.5~6.0cmが最も多く、これを頂点に4.5~6.0cmの間に集中する。口径は11.0~12.0cmが最も多く、11.0~13.0cmにはば収まる。器高は2.0~3.0cmである。碗Aと比べると口径は一回り小さく、器高も一回り低い。碗と無台碗は明らかに口径による作り分けがなされており、無台碗に高台をつけて碗としたものではないことが判明する。

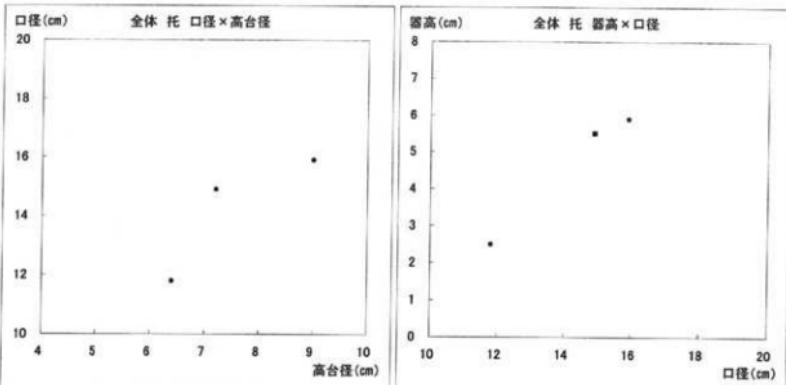
大型の無台碗は底部径8.0~9.0cmであり、口径は18.0~19.0cm、器高5.0cmであり、法量は碗Bに近い。

#### ③輪花碗(第357図、図版192・204)

輪花碗(1070~1073、1763)は、完形に復元できるものなく全体の形状は不明であるが、破片から復元できる法量は、碗Bに近く、碗Aの法量のものに輪花が施されるものはないといえる。



第341図 大屋数1号窯出土灰釉陶器無台脚法量図



第342図 大屋数1号窯出土灰釉陶器托法量図

輪花は、3箇所(復元)に施された可能性が高く、外側から内側に向かってヘラ状工具で押し込んで形成している。

**法量** 口径が判明するのは2点であり、口径15.0cm、器高は4.2cm以上である。

#### ④皿(第349図、図版183・186・187)

皿は器高が低く、体部が浅く開くものを分類した。高台は三角高台で、1cm以下である。破片の場合、碗との区別は難しく、認定できた個体数は少ない。7点を図示した(灰原821~826、1760)。

**分類** 823・1760のように非常に浅いものと、821・822、824~826のようにやや深い、碗Aの形態に近いものがある。しかし、碗Aと比較すると、口径が小さく、やや浅いことから、皿とした。

**法量** 法量は口径11.0~17.5cm、器高2.5~3.5cm、高台径6.0~7.0cmをはかる。法量は無台碗と類似している。

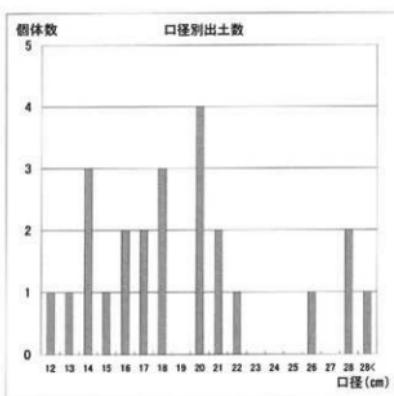
#### ⑤托(第342、346・347・349・358図、図版183・186・187)

**分類** 高台が高く、太い爪形を呈し、底部から直線的あるいはハ字形に開くもので、10点図示した。体部は底部から低く開くものである(窓内覆土:第346図760・第347図782、灰原:第349図827~829、第358図1115~1119)。

**法量** 高台径は6.0~10.0cmまで確認でき、8.5~9.0cmが4点と最も多いが、極端に集中するような状況は確認できない。高台高は、1.0~3.0cmまで確認できるが、高台径同様極端に集中するような状況は確認できない。口径は11.0~16.0cmまで確認でき、器高は2.0~6.0cmまで確認できる。口径約15.0~16.0cmで、器高が6.0cm前後と、口径12.0cm前後で、器高3.0cm前後に分かれる可能性が高い。

#### ⑥長頸壺(第343、348、362~364、367~369図、図版183、196~198、200)

**分類** 長頸壺は肩が張るもの丸みを帯びており、口縁部は頸部からやや外反気味に立ち上がった後、口縁端部でより強く外反する形状を呈する(灰原1120~1142、1762)。斜め外上方へ引き出し外面に段をつけるもの(灰原1120~1135)、口縁部の形状は逆ハ字形に開いた後口縁端部を垂直に引き出すもの(灰原1136~1140)、口縁部を外下方に折り返し外面に段をつけるもの(灰原1141~1142)の3種類に区分することができる。



第343図 大原敷1号窯出土灰釉陶器長頸壺口径別出土数

**法量** 第343図に示したように、口径により大きく4つのまとまりが確認でき、小型(口径14.0cm前後)、中型(18.0cm前後)、大型(20.0cm前後)、特大型(28.0cm前後)の4つの大きさが作り分けされていた蓋然性が高い。胴部最大径は、肩部にあり、小型(15.0cm前後)、中型(20.0cm前後)、大型(25.0~30.0cm前後)、特大型(30.0cm以上)をはかる。

底部まで残存するものがないため明瞭ではないが、平底のものと、ハ字形に開く三角高台がつくもの、角高台がつくものの三者がある可能性が高い。

**成形** 脇部の成形は幅2.0~3.0cm程度の粘土紐巻上げにより形作られた後、叩きにより成形されて

いる。中型から特大型の長頸壺は頸部へ口縁端部までも同様に粘土紐巻上げにより形作られる。小型の長頸壺の頸部には粘土紐の痕跡が確認できず、一部が水挽により成形された可能性がある。

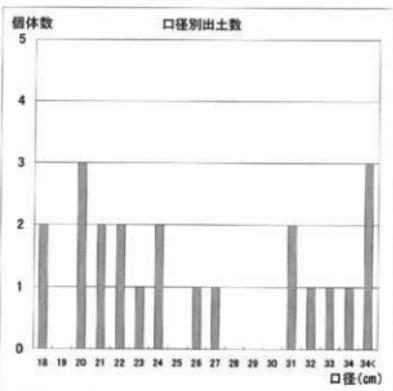
**施釉** 一部に灰釉ではなく黄土を刷毛塗りし、黒色に発色しているものを確認することができる(1133・1135・1138・1139・1146など、卷頭図版7)。黄土を塗布する範囲は、頸部まで及んでいる。中型以上のものに黄土刷毛塗りが施されるものが多い。

一方、通常の灰釉を施すものも確認することができる(1126・1143・1144)。小型～中型のものに多い。

なお、灰釉・黄土を塗布する範囲は胴部下半から口縁部まで及んでいる。

この他、壺あるいは鉢の底部と推測する個体が出土している(第367・368図)。平底のもの(1180～1186)と八字形に開く三角高台(1170～1179)、四角高台(1169)がつくものがある。

また、壺あるいは鉢の破片のうち大きめのものを図示した(第369図)。



第344図 大原数1号室出土灰釉陶器鉢口径別出土数

#### ⑦鉢(第344, 364～368図, 図版183, 199・200)

**分類** 鉢(1148～1167, 1761)は口縁の形状から2形式に区分することができる。一方は、口縁部を外側に折り曲げるものの(1761, 1148～1158)で、胴部は半球形に近いものである。もう一方は、体部から直線的に立ち上がるものであり、胴部は円錐形に近いものである(1159～1167)。底部まで残存する個体がないことから明確ではないが平底のものと、八字形に開く三角高台付のものがあった可能性が高い。

**法量** 大きさから小型(口径20cm前後)、中型(24cm前後)、大型(27cm前後)、特大型(30cm以上)に区分することができる。今回鉢と報告したものの中には、後述する瓶の破片が混在している可能性が高い。

口縁部の形態に関係なく、小型から大型まで確認できる。

**成形** 鉢は、壺同様2.0～3.0cmの粘土紐を巻き上げた後、叩き、あるいは指押さえにより成形されている。粘土紐の痕跡が明瞭に残るものが多い。

**施釉** 長頸壺同様、灰釉ではなく、黄土を刷毛塗りし、黒色に発色しているものが確認できる(1148, 1156～1160, 1761など)。鉢の大部分に黄土が塗布されている。

しかし、長頸壺同様灰釉を塗布するものもある(1161・1162など)。通常の灰釉を施すものは長頸壺同様小型のものが多い。

なお、灰釉・黄土を塗布する範囲は、胴部下半から口縁部付近まで及んでいる。

#### ⑧瓶(第367図)

瓶と推測できる把手1点(1168)が出土している。しかし、愛知県豊橋市二川窯(豊橋市教委2000)などでは把手の付く鉢も出土しており、断定はできない。胴上部にやや斜め上方に向かって取り付けられた、幅広の把手である。

なお、1168には黄土が塗布されている。

#### ⑨風字二面鏡(第370図, 図版183, 202・203)

2点出土している(1200・1201)。1点は完形に近いが、もう1点は観側縁部分の破片である。

1200は手捏ね成形である。半円形であり、側縁はなめ上方に向かって立ち上がっており、上面は面取りされ、平坦面に仕上げられている。また、内側にはやや左に偏って中央の仕切りが取り付けられている。左の面積と右の面積は4:6前後である。窓口の底面部分には左右にそれぞれ脚が取り付けられており、そのほぼ中央に窓の側縁に直交するように外側から内側に向かって約5mmの孔がそれぞれ1孔穿孔されている。長さ17.0cm、幅18.5cm、高さ4.0cm、側縁高さ1.2cm、脚高さ1.5cmをはかる。

上面下面ともにナデ調整が施されている。

1201も手捏ね成形である。1200同様半円形である可能性が高い。側縁は斜め上方に向かって立ち上がっており、上面は面取りされ半滑に仕上げられている。残存長12.0cm、高さ2.8cmをはかる。

#### ⑨陶錘(第370図、図版183、204)

1点出土している(1204)。細長い棗形の陶錘であり、中央に直径4mmの円孔が穿たれている。全長4.7cm、直徑1.2cm、重量5gをはかる。

#### ⑩窯道具(第351、353・354、356、370・371図ほか、図版183、194・195、201、203・204)

窯道具には、棒状土製品、大型の馬爪形焼台、粘土を丸めた小さな焼台がある。

焼台の一種と考える棒状土製品が2点(1202・1203)出土している。両側が爪状に突出し、細長い乙形に整形されている。ともに焼成不良であり、どのような場所に使用されていたか判然としない。

馬爪形焼台を8点図示した(第354図974、第371図1208~1211、1213~1215)。焼成室の傾斜に合わせて焼台の底部は傾斜している。比較的大型の破片1214が約560g、1215が約450gをはかることから、本来は800~1000g程度であった可能性が高い。

また、粘土を丸めた小さな焼台を7点図示した(第351図892、第353図946、第356図1037、第371図1205~1207、1212)。表面は平滑に仕上げられている。大きさは2.0~10.0cmまで存在している。平坦あるいは円形に仕上げられている。胎土には、5mm前後の小石や砂が多く含まれている。

#### ⑪窯道具としての灰釉陶器(第371図ほか、図版194・195、201ほか)

窓内・灰原・SF06から出土した灰釉陶器のうち、ある程度の大きさを保持する破片を中心に剖測とともに観察を実施した。この結果、焼成状況が良好ではない軟質のものは転用されたか明瞭ではないが、観察した約3000点(破片数)のうち、約80%が窯道具(土器台)として転用されていることが判明した。

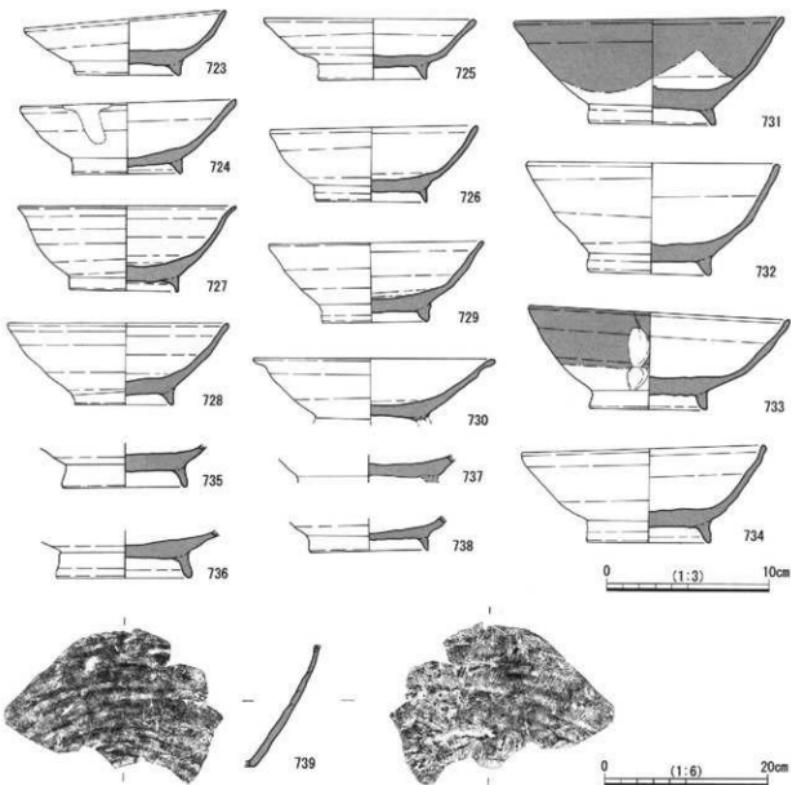
碗・皿類は完形に近い状況で転用されるものもあれば、破断面に自然釉が付着しているものも多々確認することができ、さらには小片で転用されているものがある。転用時に打ち欠いた、あるいは割れたものを転用したもの(破断面に自然釉が付着している個体)は200個出土している。一方、壺・鉢類は完形に近い状況で転用されたものはほとんどなく、大部分が20cm以下の破片で転用されている。

また、転用に当たっては、直接灰釉陶器を土器台として使用するものもあれば、大型の焼台と組み合わせて使用するもの(1208~1211)、粘土を小さく丸めて灰釉陶器の下に入れ、水平になるような工夫をして転用するもの(1205~1207、1212)が確認できる。

### (3)燃料

大屋敷1号窯の燃焼室および灰原から出土した炭化材の樹種分析を実施したところ、針葉樹のマツ属、落葉広葉樹のコナラ節、クスギ節、クリ、アワブキが利用されていたことが判明した(第5節2参照)。

これらの樹種は現在の大屋敷1号窯周辺の植生に含まれるものであり(浜北市史編さん委1989)、大屋



第345図 大屋敷1号窯窓内床面直上出土灰釉陶器実測図

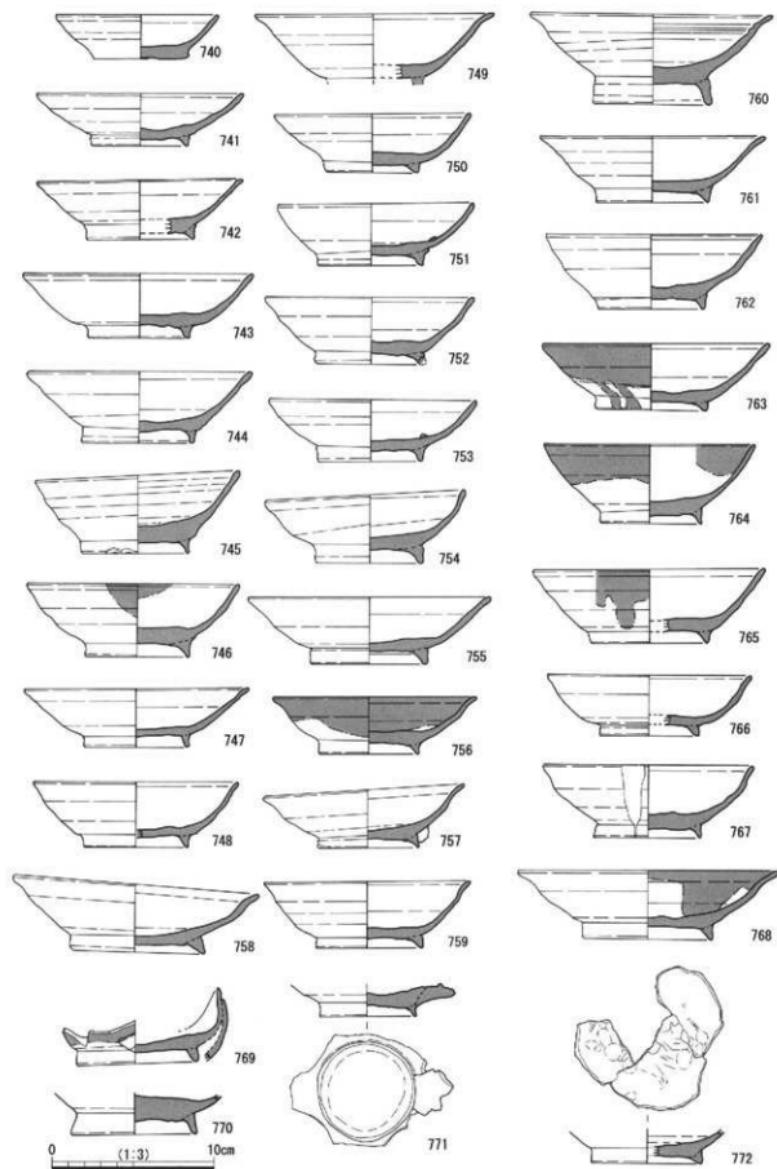
敷C古墳群の造営停止後、1号窯周辺に繁茂した木材(二次林)を切り倒し、燃料材として利用した可能性が高い。

#### (4) 灰釉陶器以外の遺物（第368図、図版204）

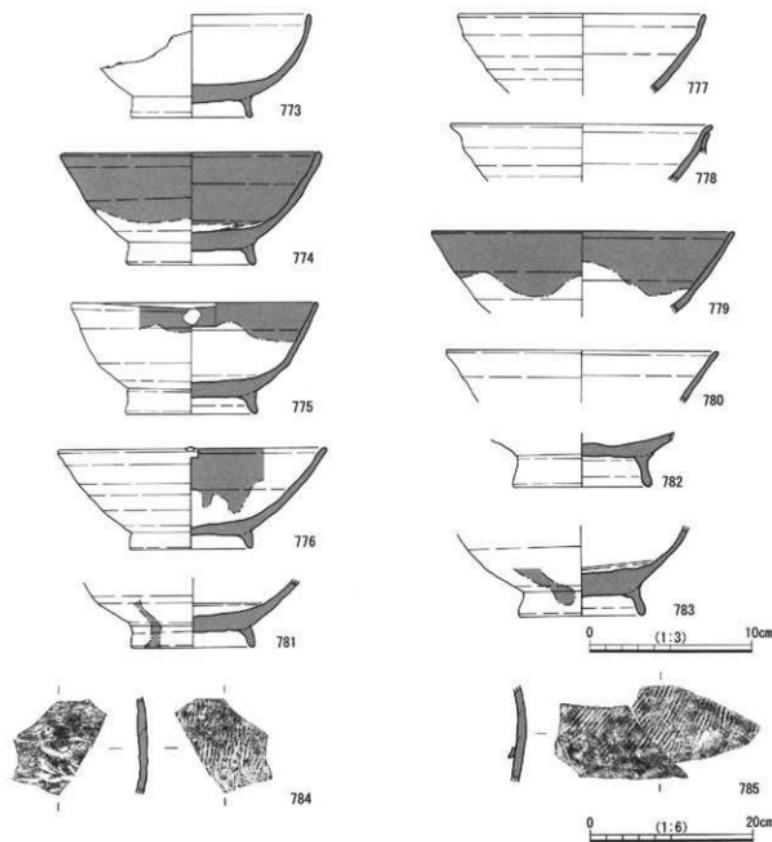
大屋敷1号窯灰原からは灰釉陶器のほか清郷甕と須恵器台付長頸壺が出土した。

**清郷甕** 清郷甕は1点(1187)がSR01より出土した。口縁部は逆L字形に折り曲げられており、山形を呈する。胴部は丸みを帯びる。口径29.0cmをはかる。

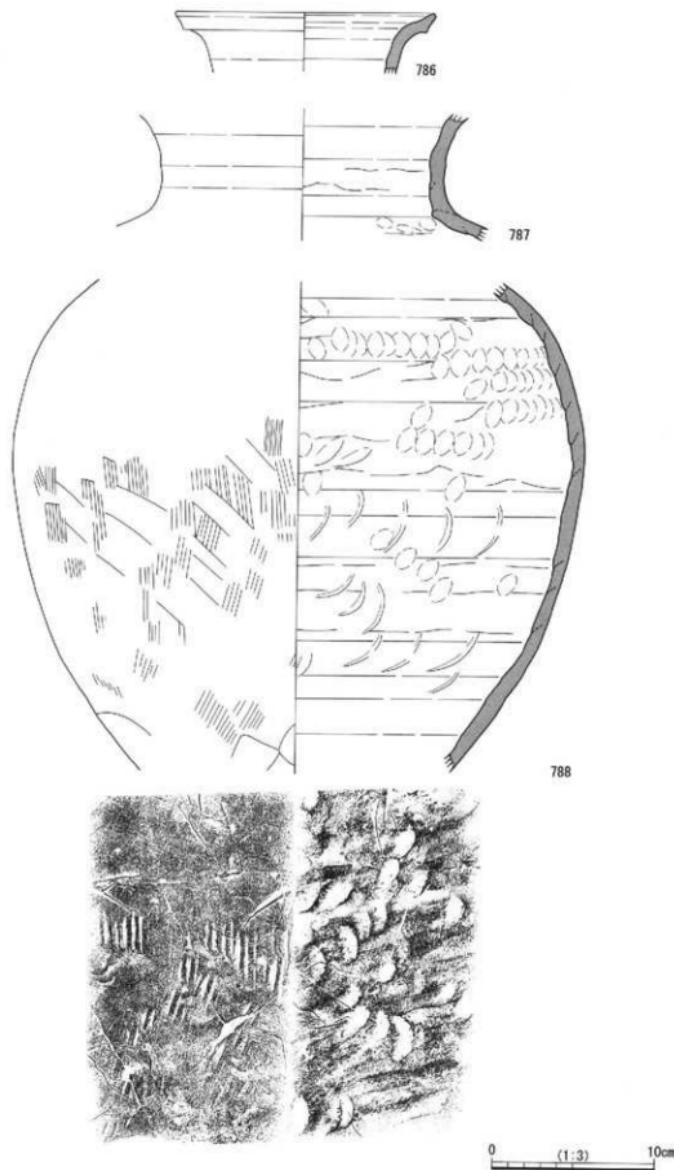
**須恵器** 台付長頸壺の底部片1点(1188)が灰原擾乱土から出土した。大屋敷C古墳群より流れ込んだ可能性が高い。高台は方形であり、高台径は7.6cmをはかる。



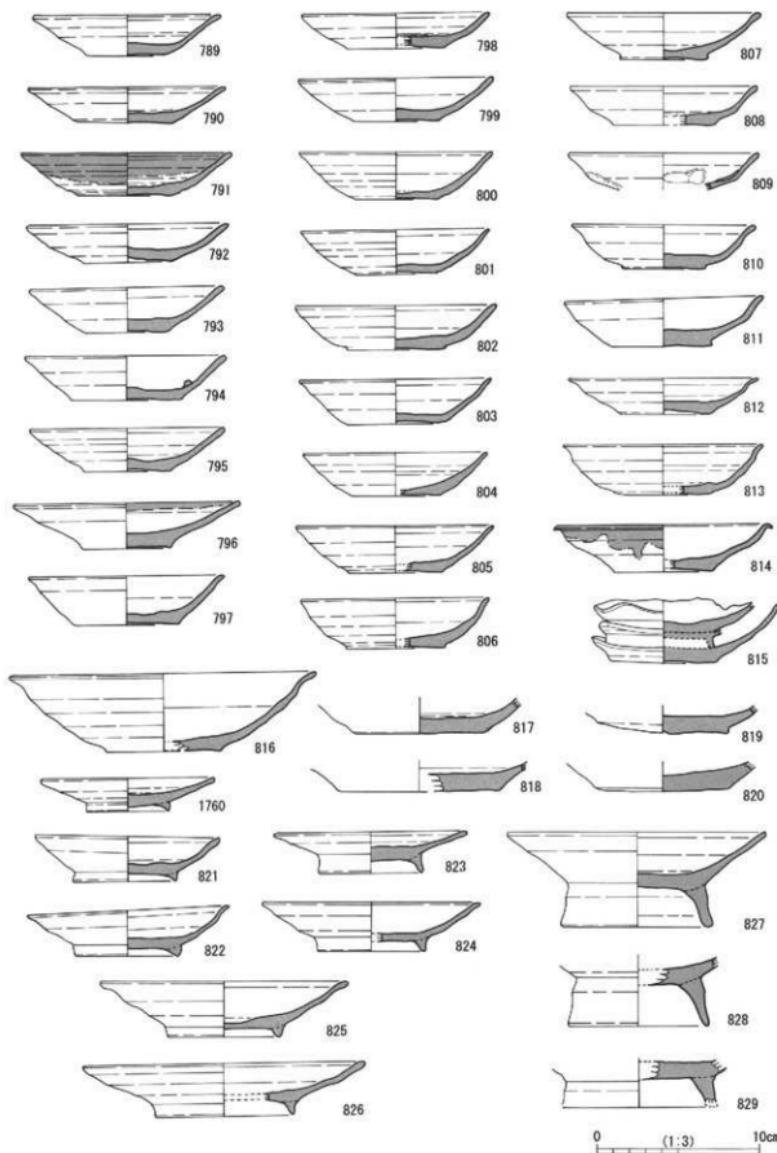
第346図 大屋敷1号窯内出土灰釉陶器実測図①(745のみ窓内床面直上出土)



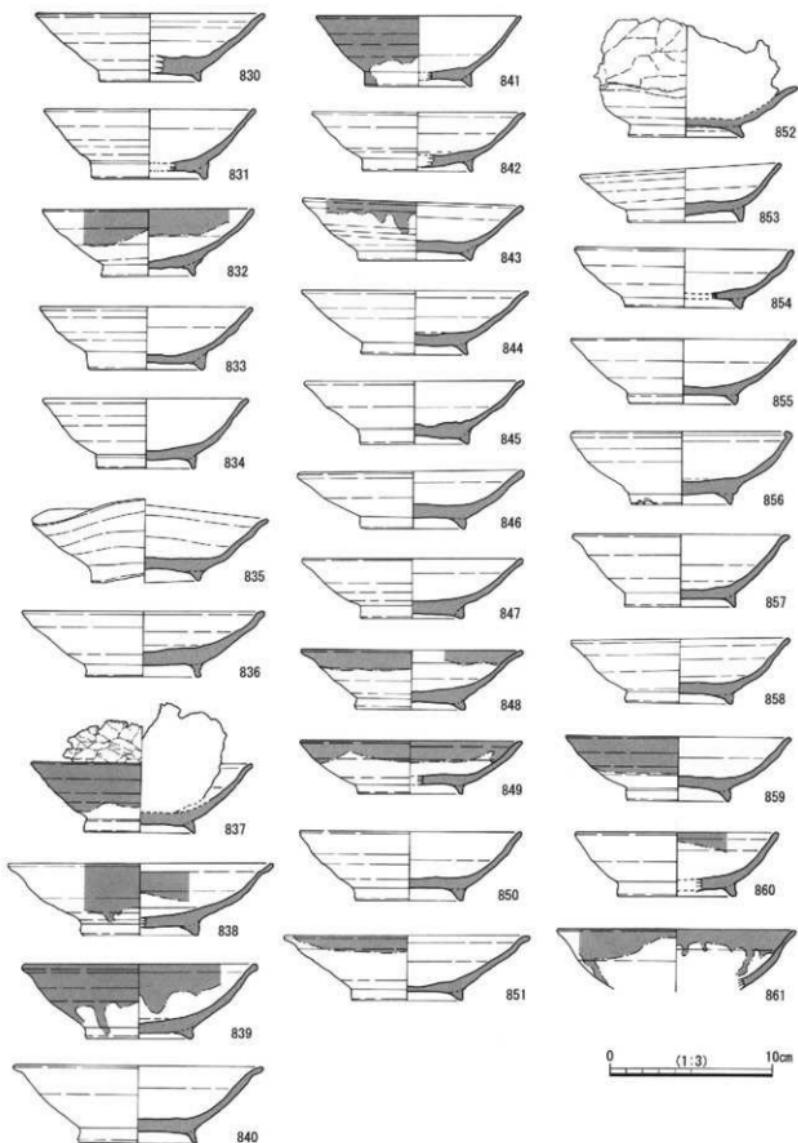
第347図 大屋数1号窯窓内覆土出土灰釉陶器実測図②



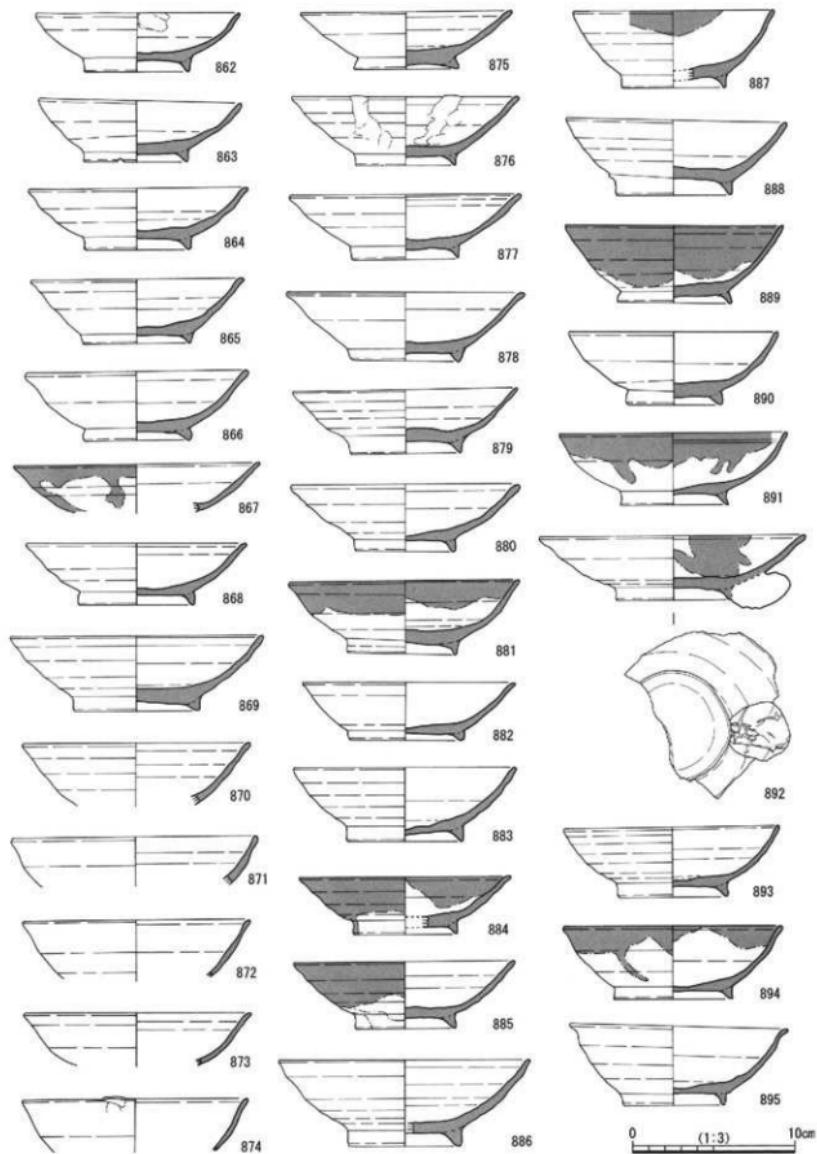
第348図 大屋敷1号窯内覆土出土灰釉陶器実測図③



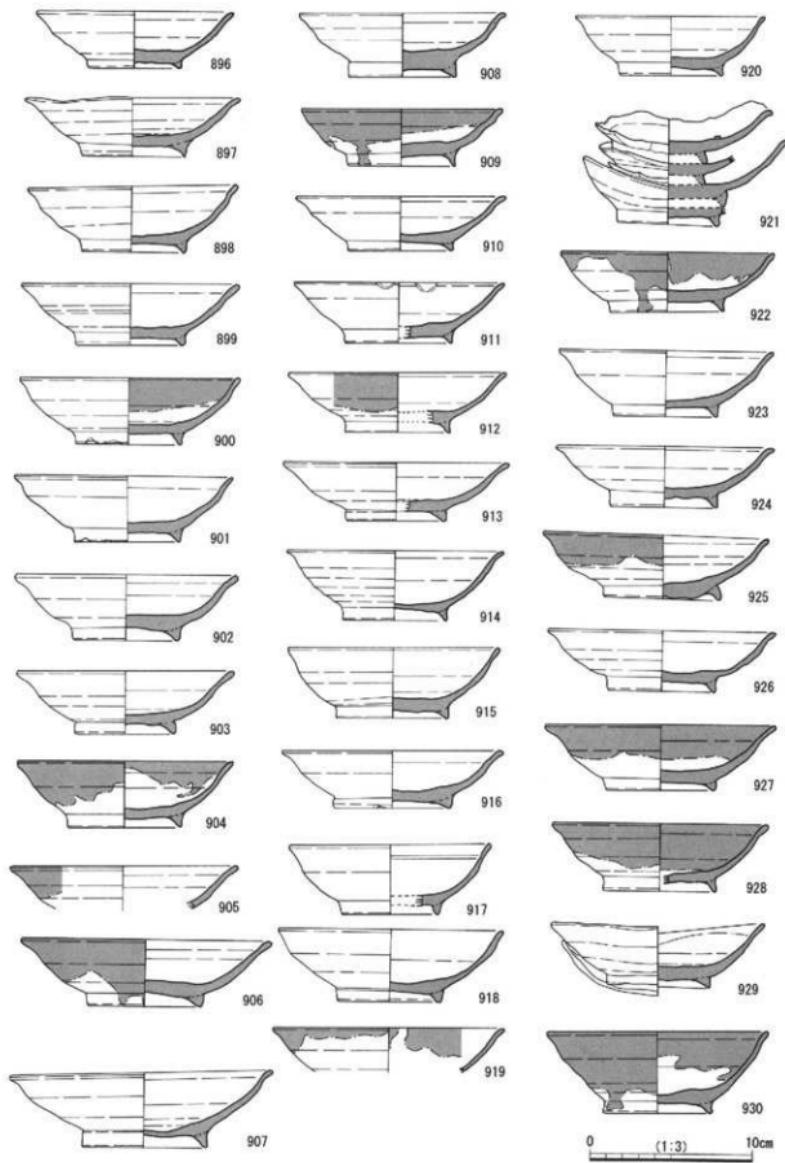
第349図 大屋敷1号室灰陶器実測図①



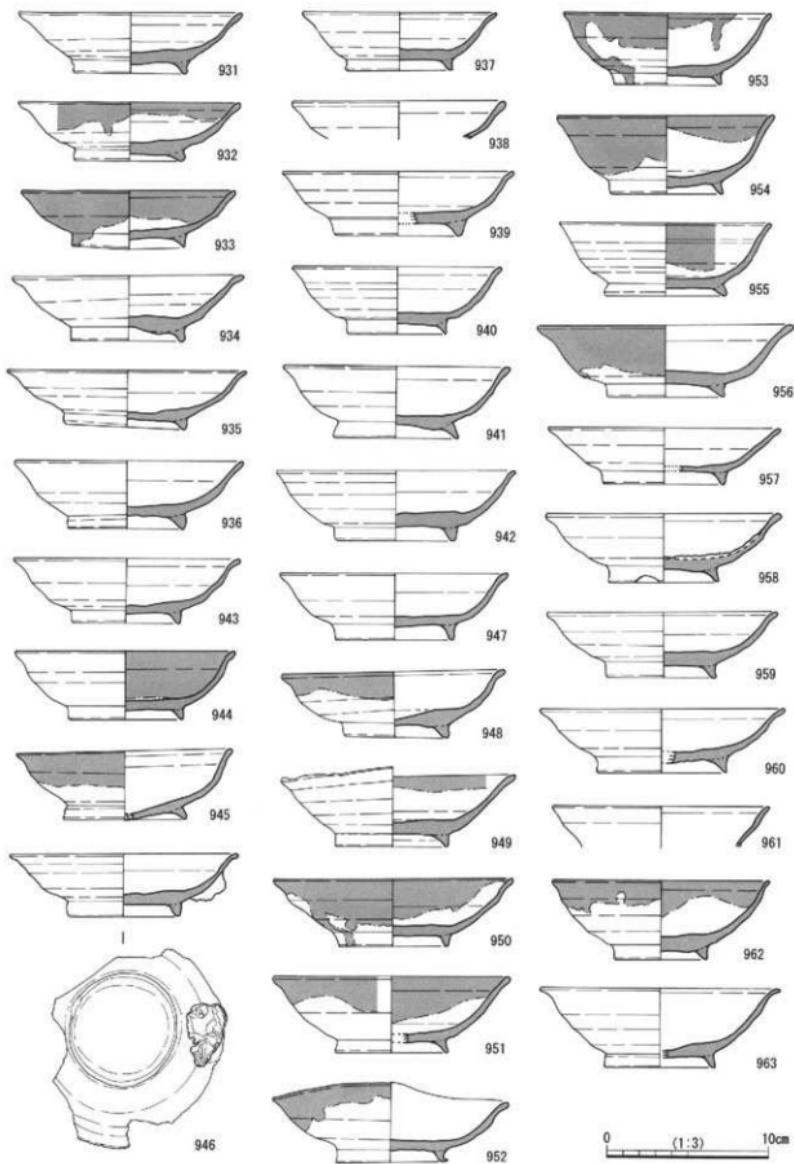
第350図 大屋敷1号窯灰原出土灰鉢陶器実測図②



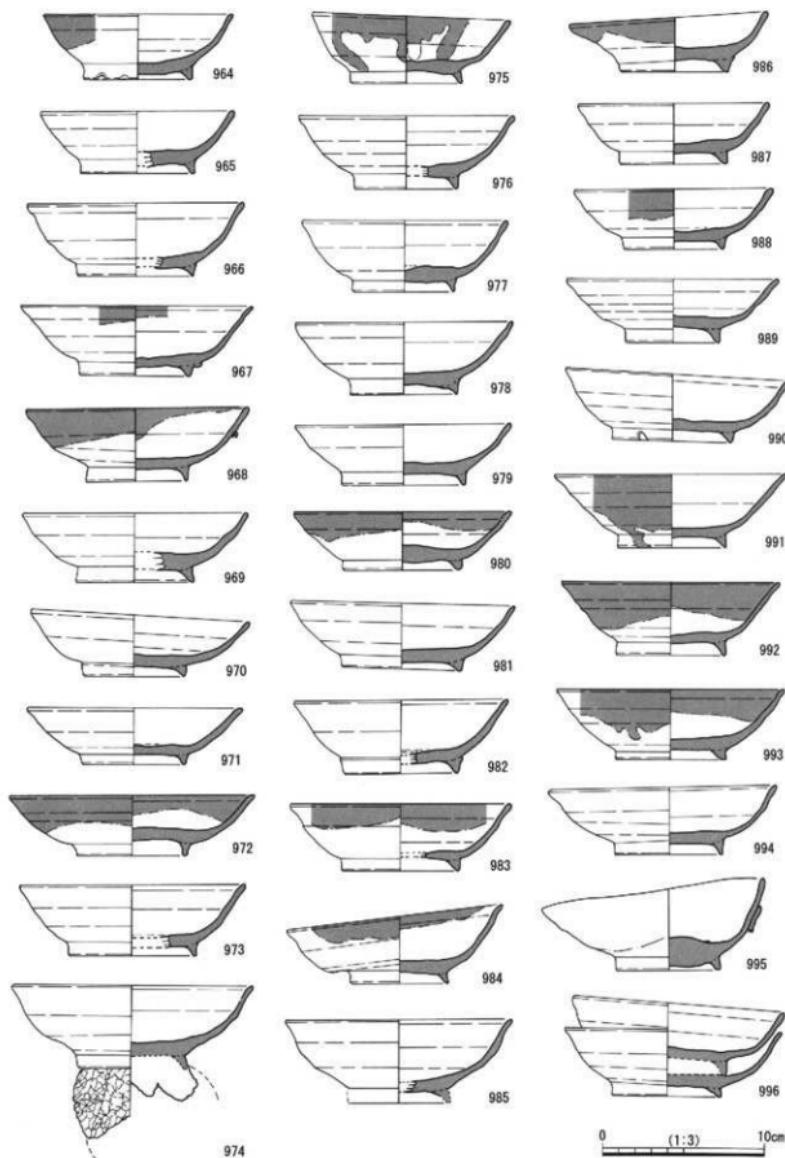
第351図 大屋敷1号窯灰原出土灰釉陶器実測図③



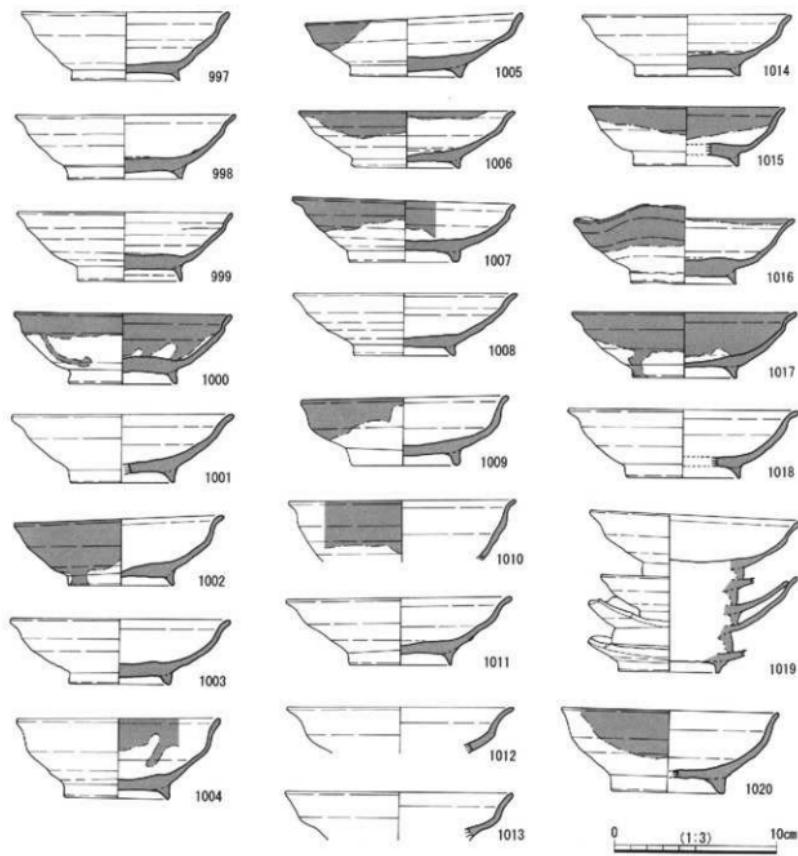
第352図 大屋敷1号窯灰原出土灰釉陶器実測図4



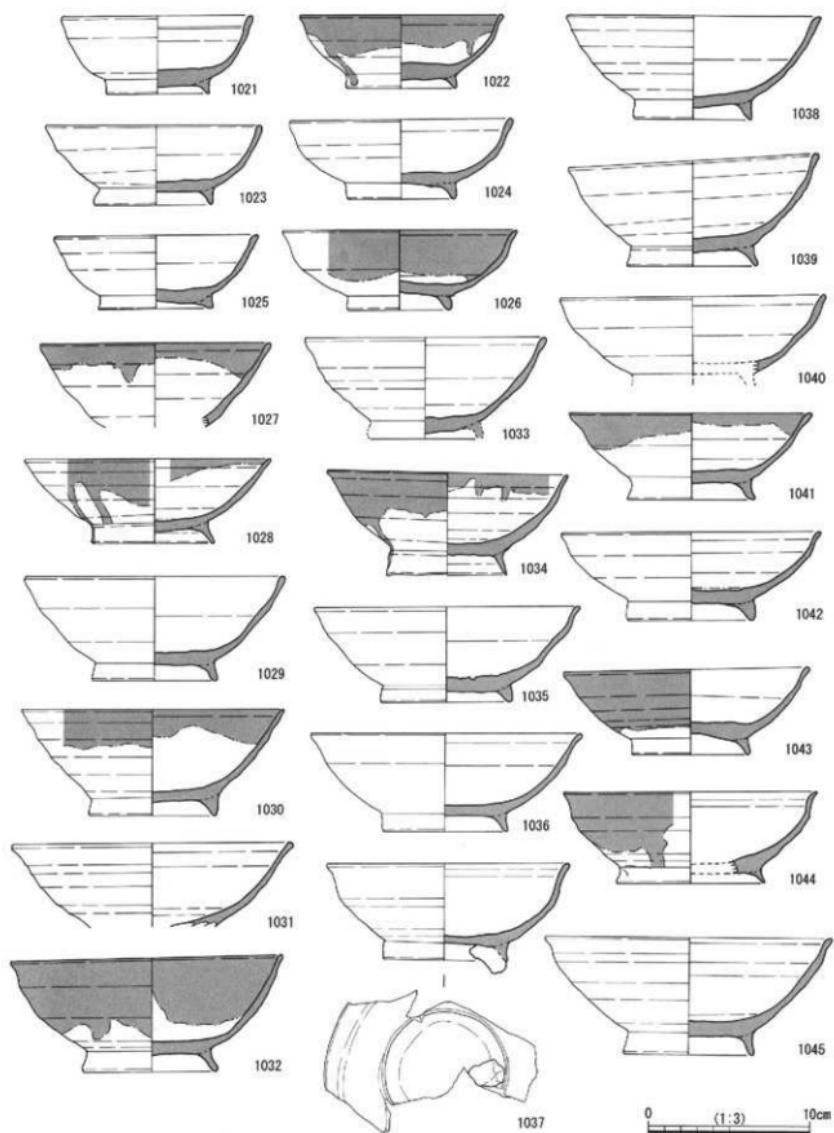
第353図 大屋敷1号窯灰原出土灰釉陶器実測図5



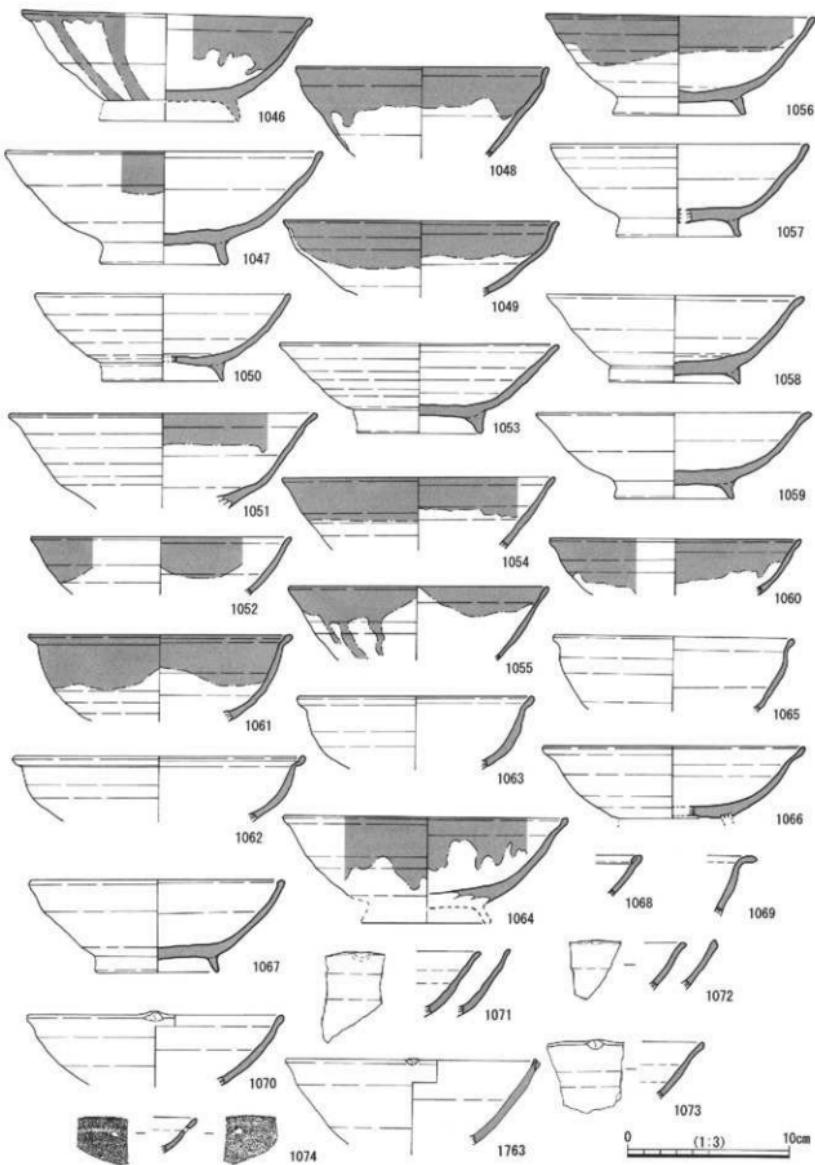
第354図 大屋敷 1 号窯灰原出土灰釉陶器実測図⑥



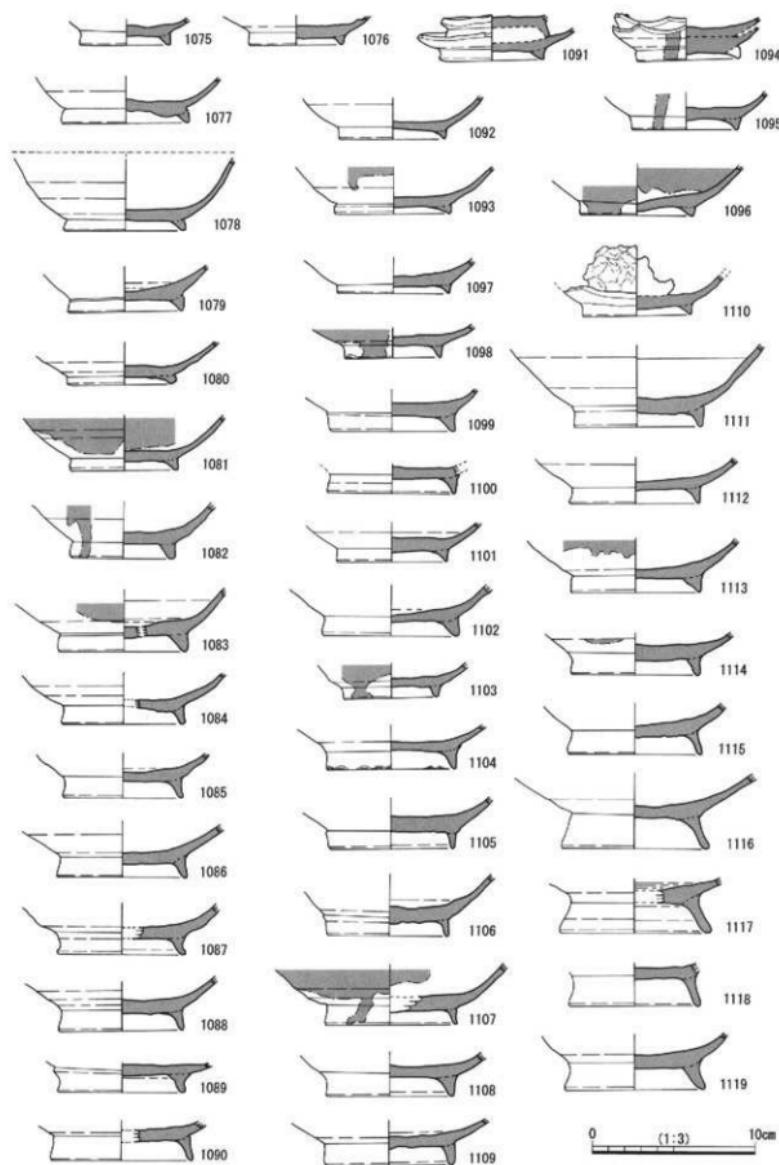
第355図 大屋数1号窯灰原出土灰釉陶器実測図⑦



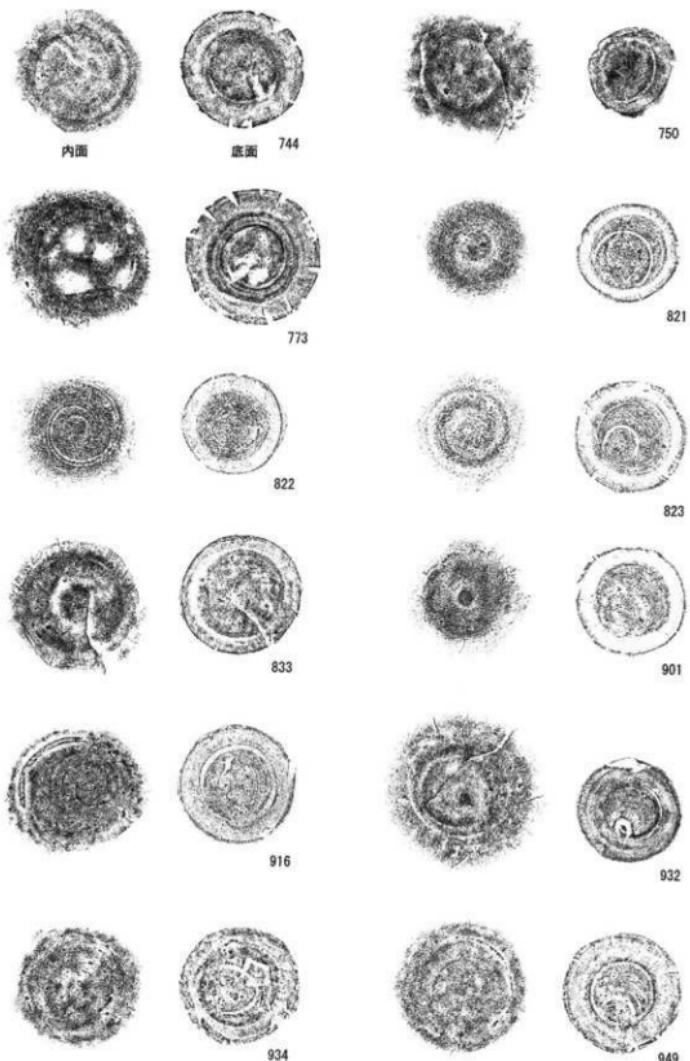
第356図 大屋敷1号窯灰原出土灰釉陶器実測図⑧



第357図 大屋敷1号室灰陶器実測図⑨

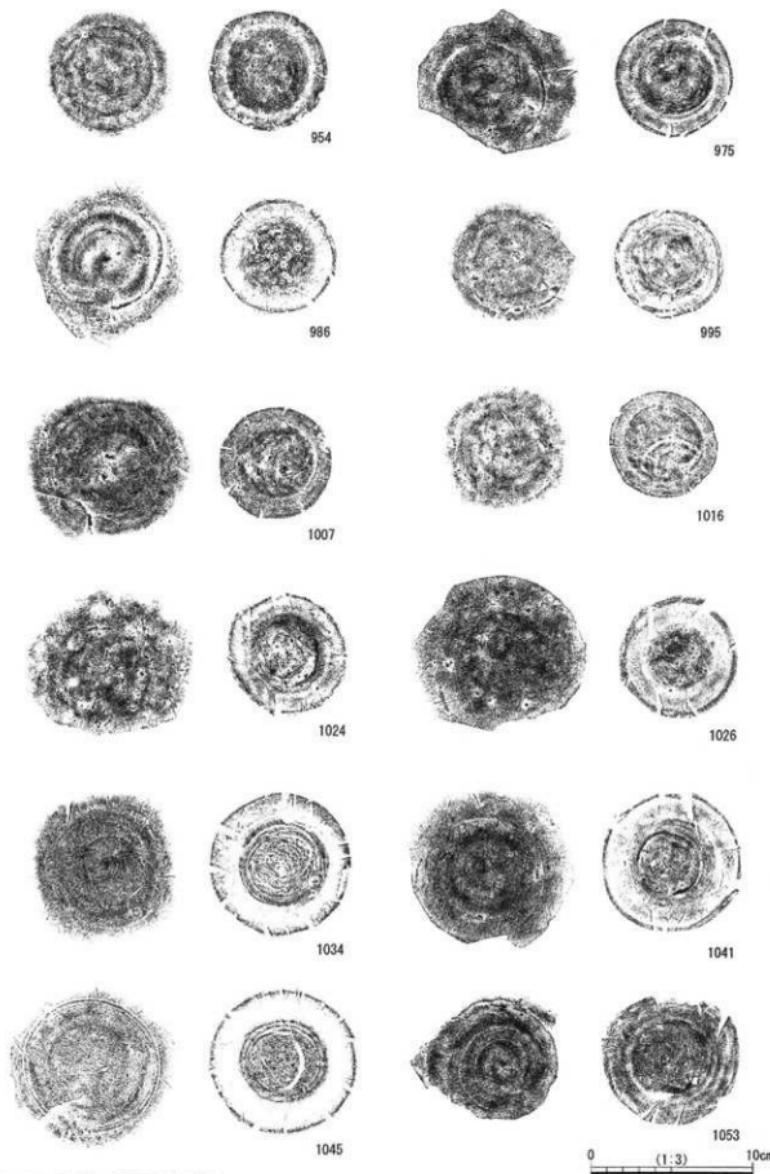


第358図 大屋敷1号窯灰原出土灰釉陶器実測図⑩

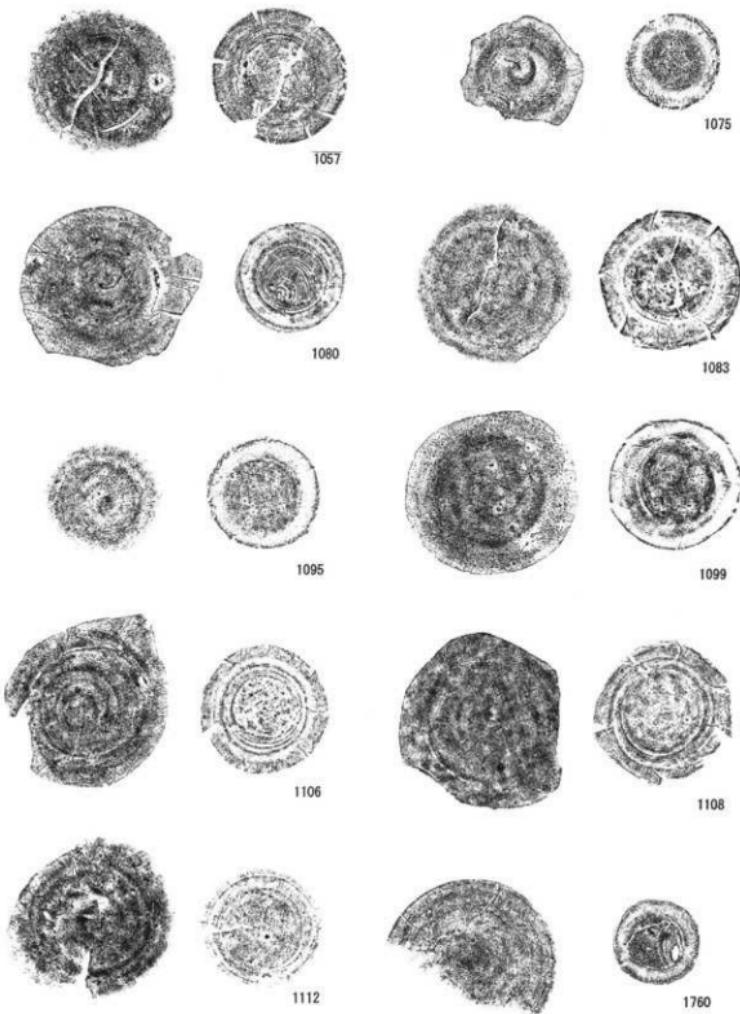


0 (1:3) 10cm

第359図 大屋敷 1 号室出土碗拓影①

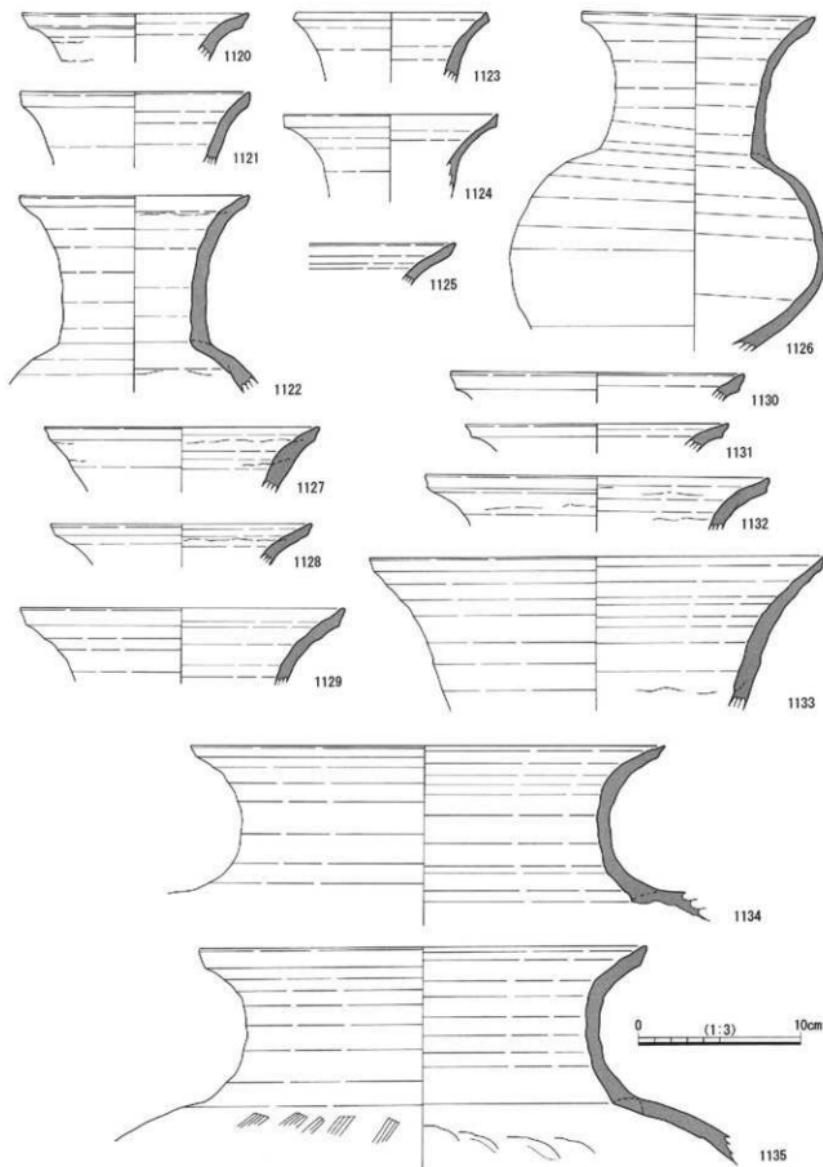


第360図 大原敷 1号室出土碗拓影②

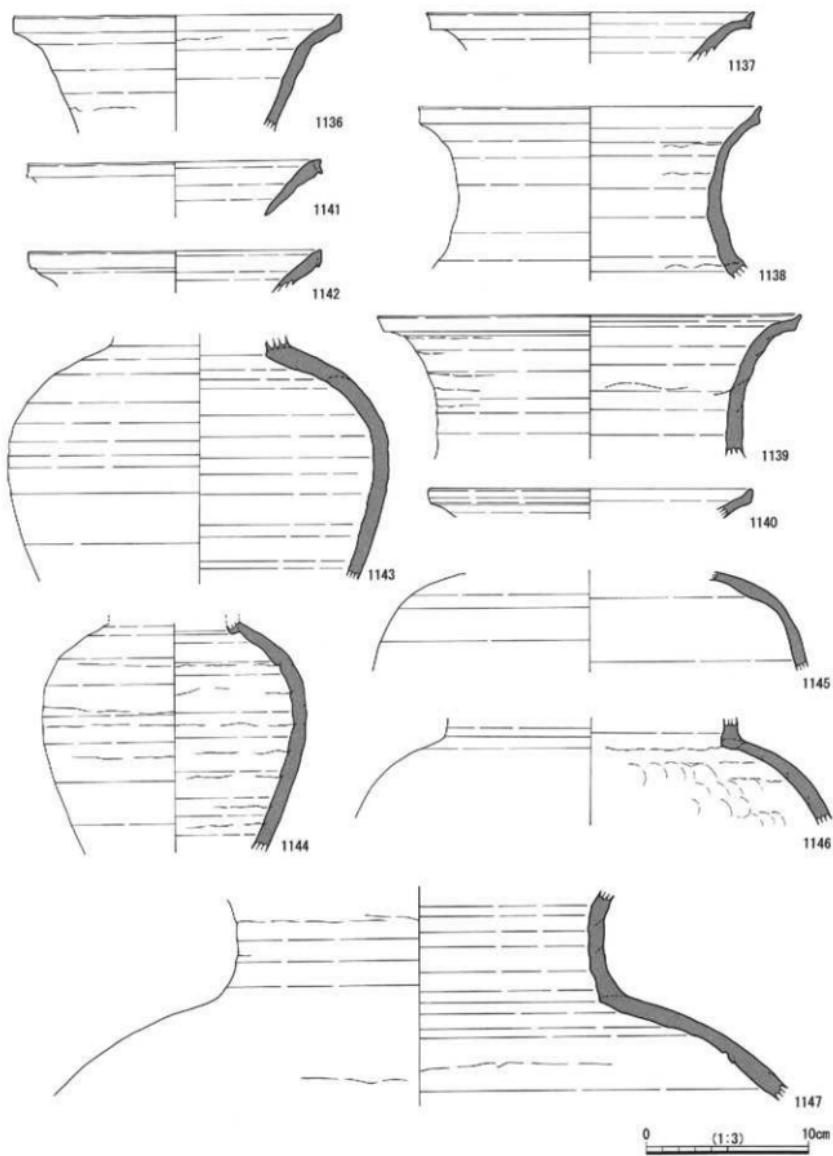


0 (1:3) 10cm

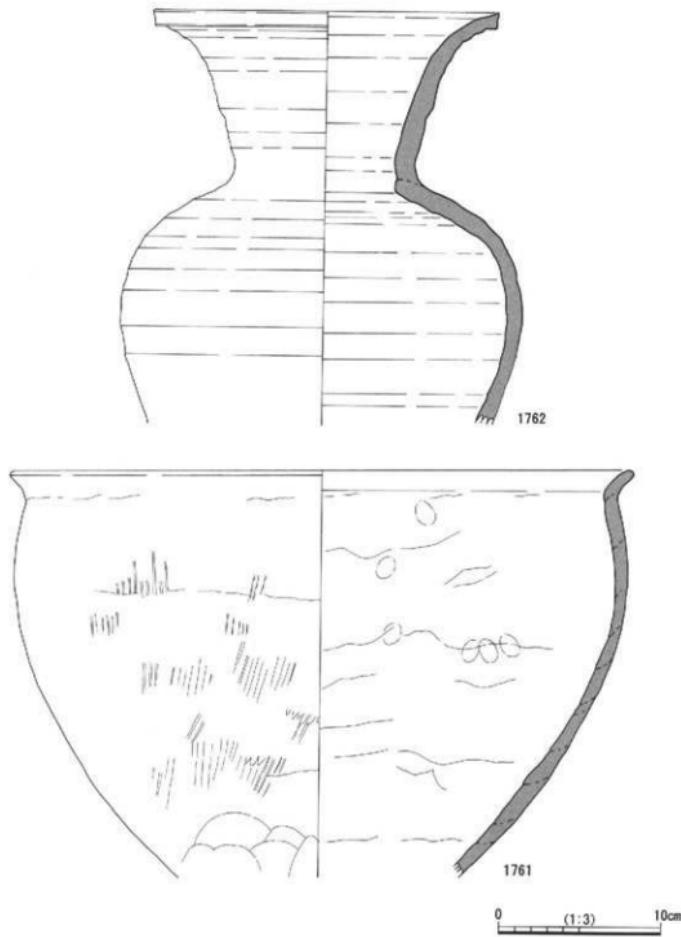
第361図 大屋敷1号窯出土碗拓影③



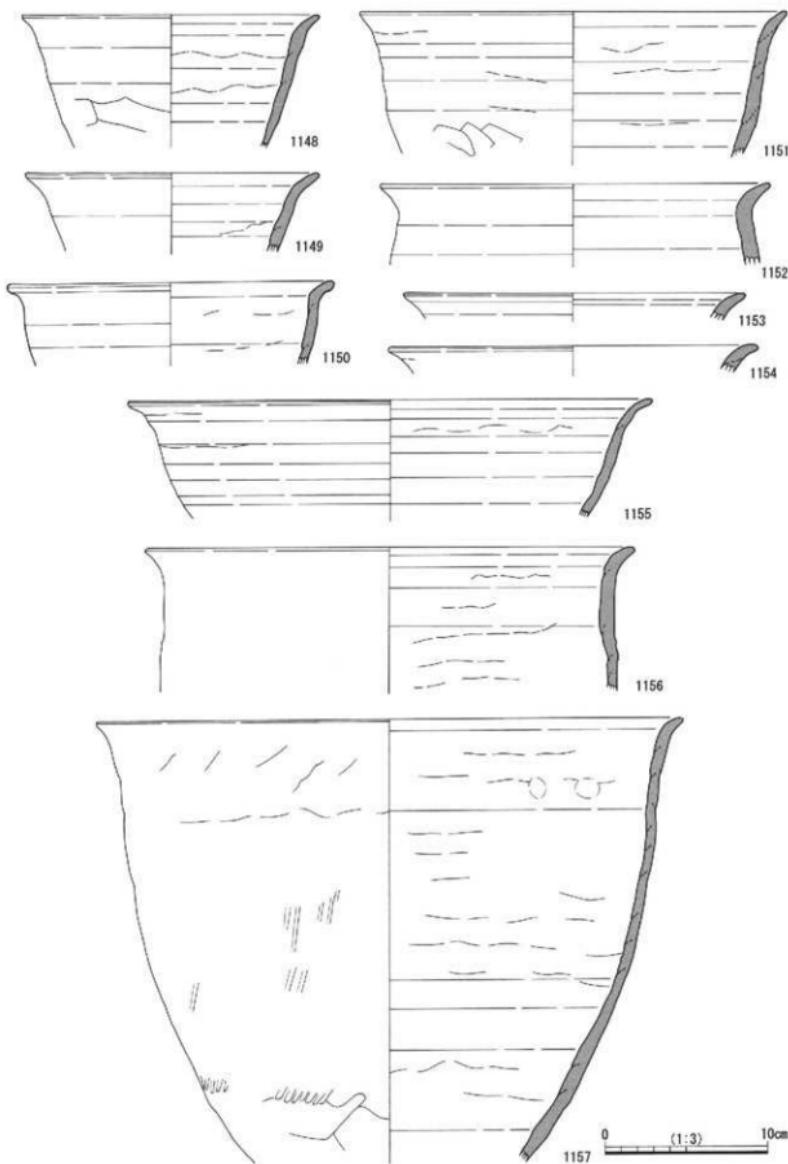
第362図 大屋敷1号窯灰原出土灰釉陶器実測図①



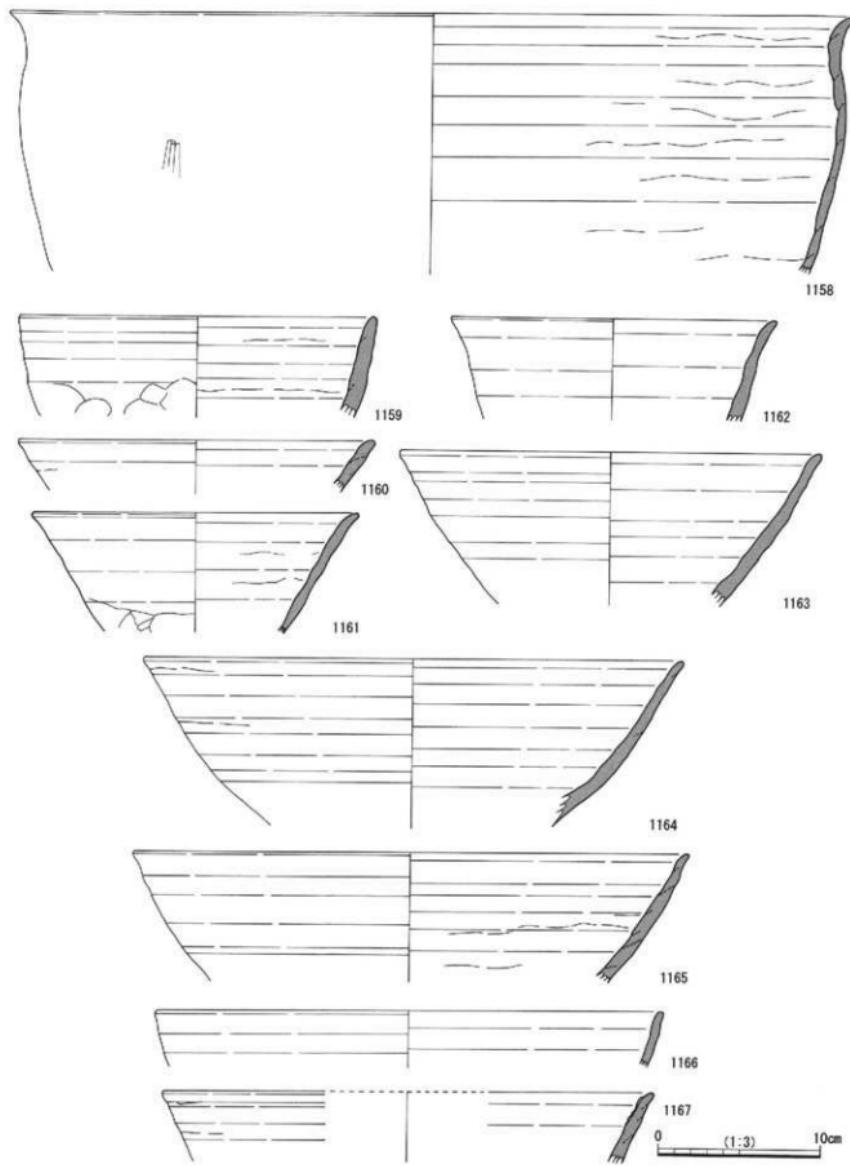
第363図 大屋敷1号室灰原出土灰釉陶器実測図②



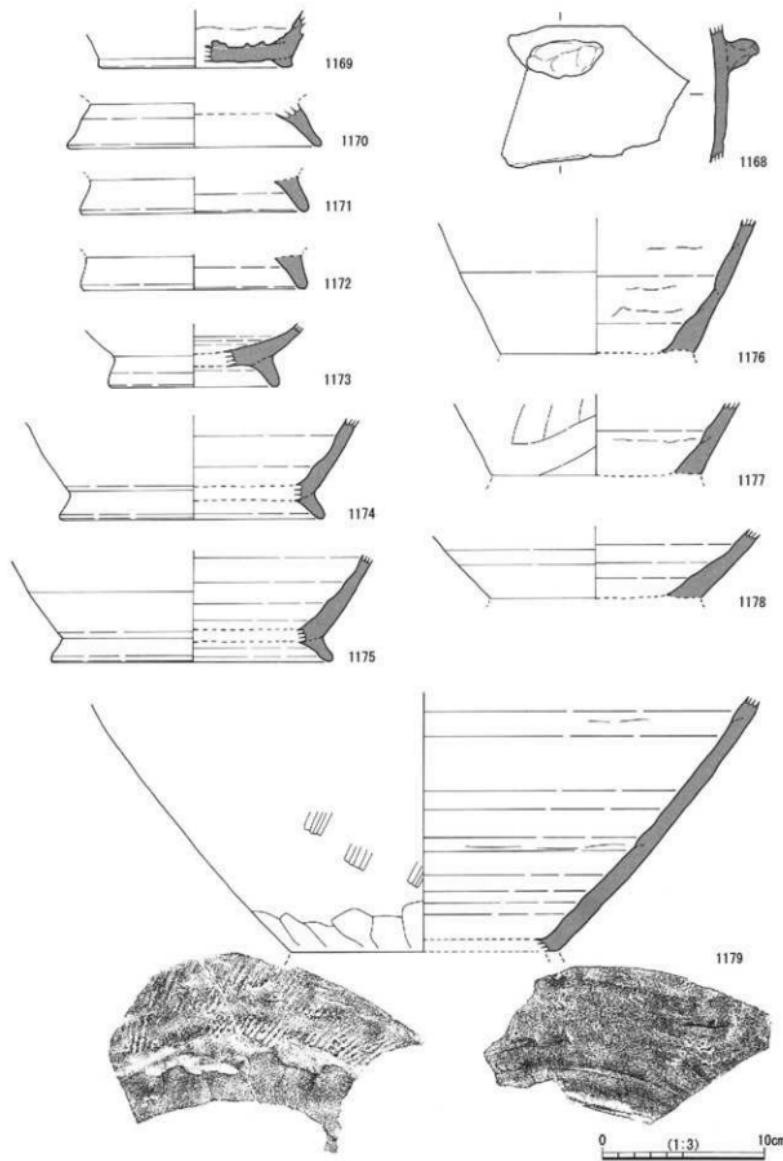
第364図 大屋敷1号窯灰原出土灰釉陶器実測図①



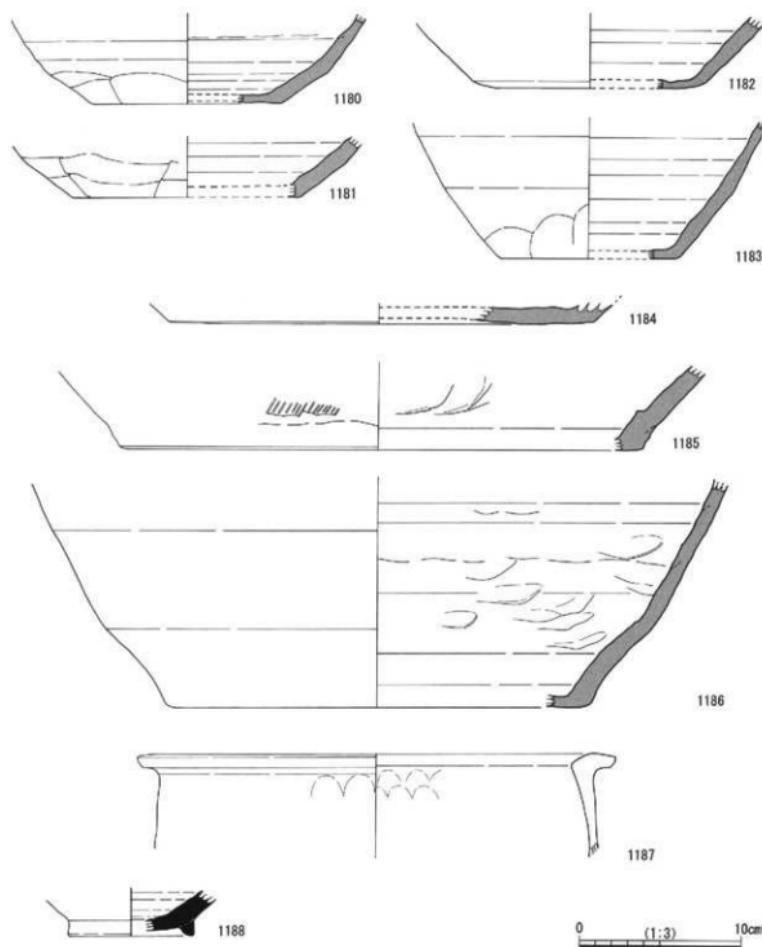
第365図 大屋敷1号窯灰原出土灰釉陶器実測図14



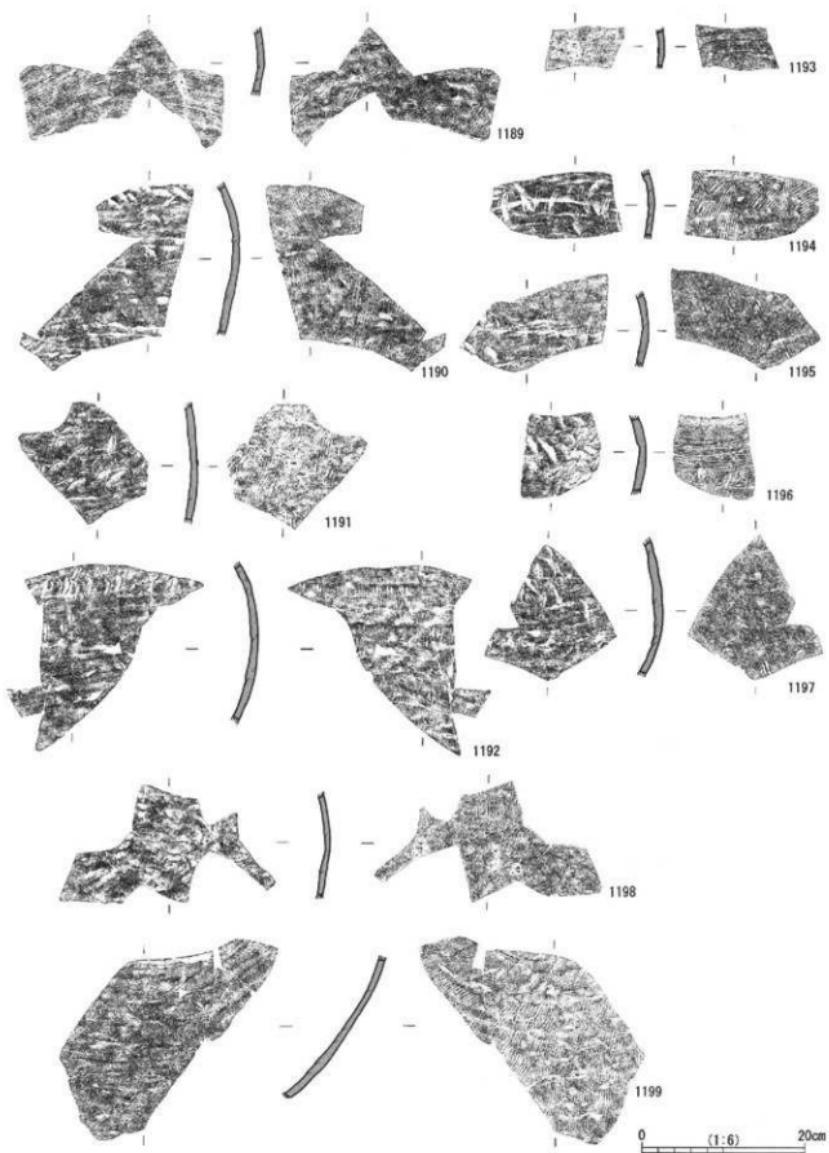
第366図 大屋敷1号窯灰原出土灰釉陶器実測図⑮



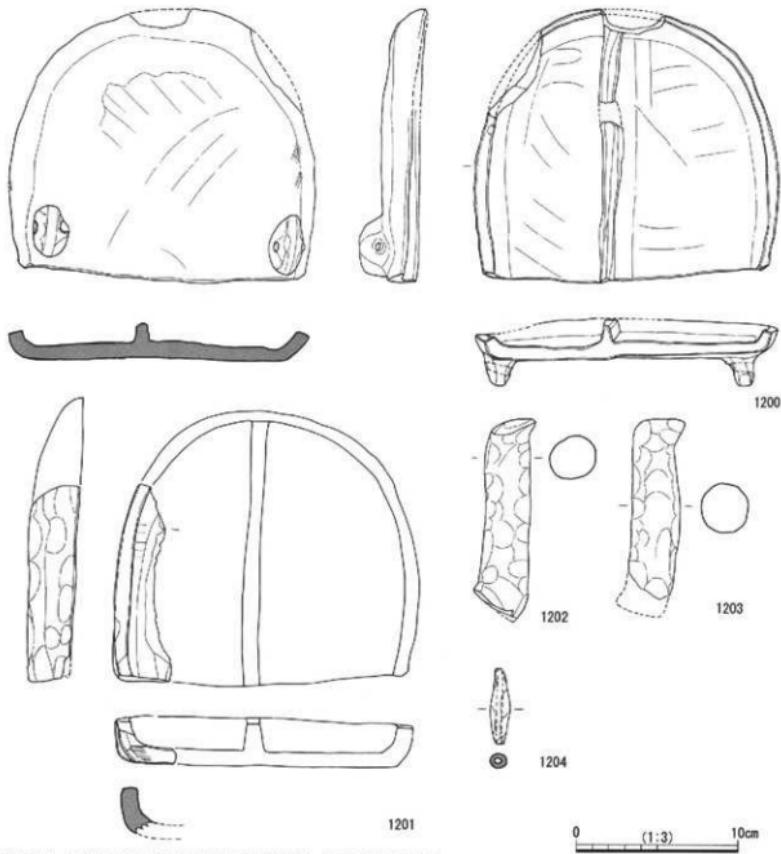
第367図 大屋敷1号窯灰原出土灰釉陶器実測図③



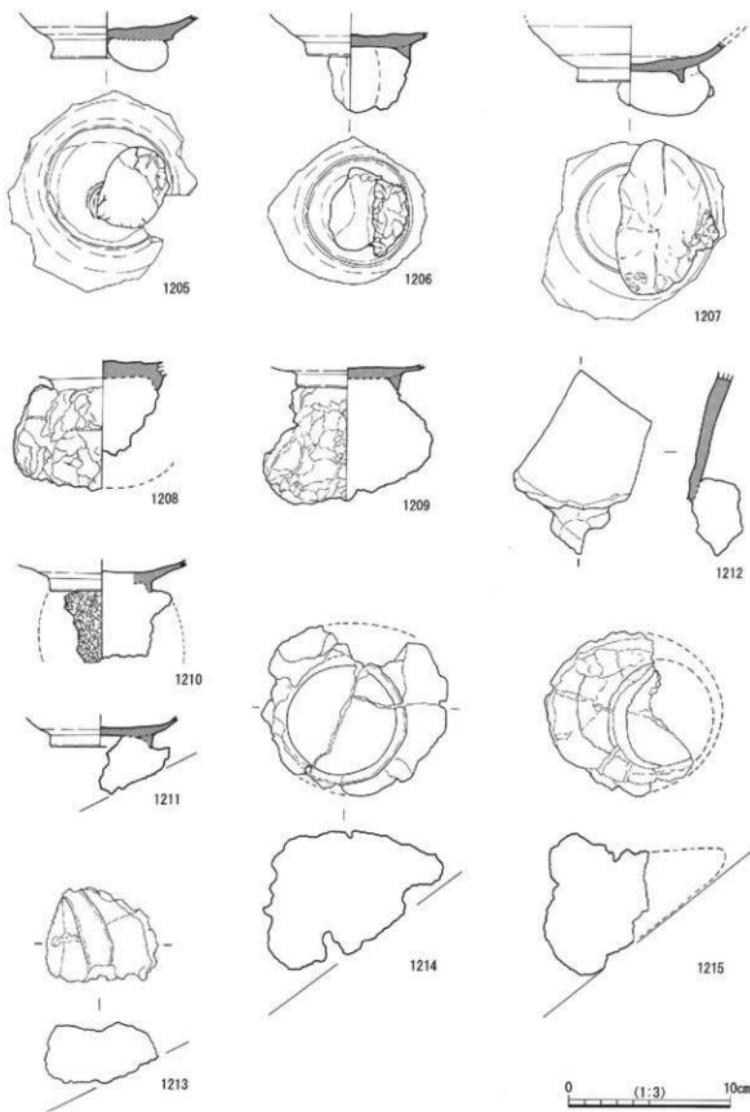
第368図 大屋敷1号窯灰原出土灰釉陶器実測図①



第369図 大屋敷1号窯灰原出土灰釉陶器実測図③



第370図 大屋敷1号窯灰原出土灰釉陶器実測図①および窯道具実測図①



第371図 大屋敷1号窯灰原出土窯道具実測図②

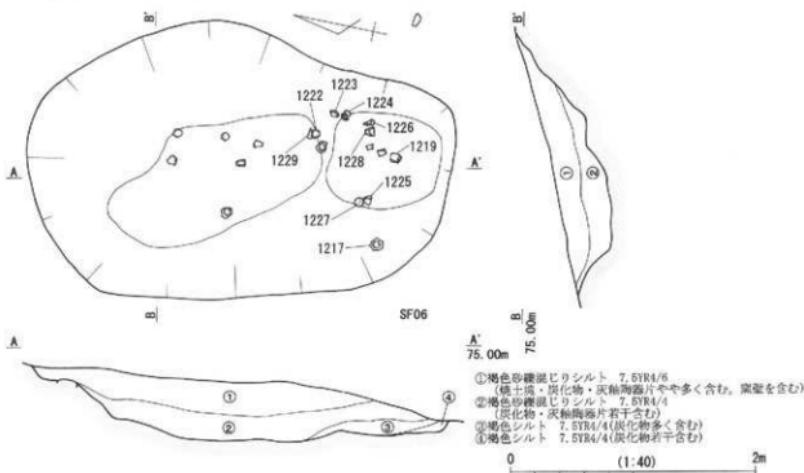
### 第3節 窯以外の遺構と遺物

#### 1 SF06(第372・373図、図版182・191)

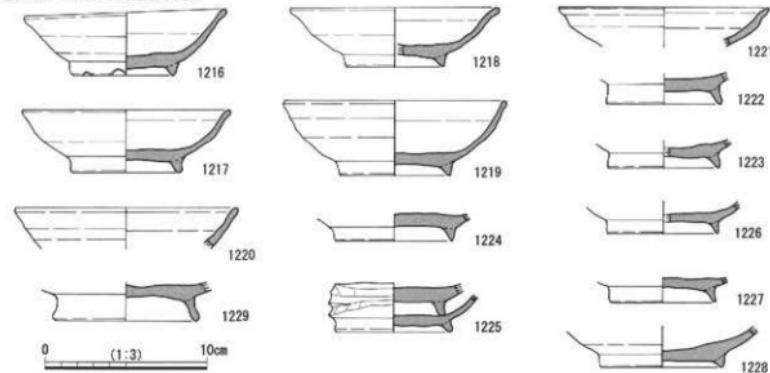
**遺構** SF06は1号窯の南東約1mで確認された不整形な楕円形の土坑である。長軸3.5m、短軸2.3m、深さ0.5mをはかる(第372図、図版182)。①・②層に焼上塊が多量に含まれており、出土した灰釉陶器は1号窯と同様の特徴を有していることから総合して、1号窯と同時期に存在した窯操業に関係する作業場などの機能を有していたと想定する。

**出土遺物** 灰釉陶器碗(1216～1220、1222～1228)、皿か(1221)、托か(1229)が出土している(第373図)。

器形、高台の形、法量、底部の調整技法の特徴は1号窯・灰原出土の灰釉陶器と同様であり、1号窯の生産品であることが判明する。



第372図 土坑(SF06)遺構平面図



第373図 土坑(SF06)出土灰釉陶器実測図

## 第4節 観察表

### 観察表 凡例

#### ①法量(口径等)

単位は cm。

括弧なし = 完存する数値。

括弧あり = 残存する数値。

#### ②焼成

良好 = 焼成良好。

不良 = 焼成不良(生焼け)。

やや不良 = 焼成やや不良。

過度 = 過度の焼成(焼け歪み)。

#### ③底部調整

本調整 = 糸切り後本調整。

ナデ = 糸切り後ナデ調整。

鋭なナデ = 糸切り後ナデ調整を施すが、糸切り痕が完全に消されていないもの。

不明 = 序減や結果あるいは欠損のため調整が不明のもの。

#### ④内面調整(水挽きによる成形後に行われた二次調整)

ナデ = 静止ナデ(なお、破片の場合はナデのみ。ナデの回数が判明するものには条数を記載した。ナデ1条 = 静止ナデ1回、ナデ2条 = 静止ナデ2回、……)

回転ナデ = 回転ナデ

指頭 = 指頭圧痕。

未測定 = 調整なし(成形による水挽きのみ)

#### ⑤残存部位と残存率

記載なし = 残存率は全体に対する残存する割合(%)

記載あり = 残存率は残存部位の残存する割合(%)、例：底部 50% = 底部の残存が底辺全体の50%であることを示す。

#### ⑥高台(接地面)

ソダ痕 = 植物に乗せた痕跡(伸状)が確認できるもの。

初期 = 粗粒の痕跡が確認できるもの。

砂目 = 砂の痕跡が確認できるもの。

#### ⑦転用(自然軸の付着状況や重ね焼きの痕跡(重ね焼きされた底部の接着)などを総合的に判断した。)

有 = 転用されたもの

回数 = 転用された最低回数が判明するもの(例：2回 = 2回以上)

無 = 転用されていないもの

不明 = 転用の有無が不明であるもの。

#### ⑧施釉方法

液掛 = 灰釉液掛け

黄土 = 黄土刷毛塗り

#### ⑨備考

破片で転用 = 破断面に自然軸や煤、焼台が付着するもの。

補修痕 = 瓶・皿などの口縁部に粘土を充填するもの。

第58表 大屋敷1号室出土灰釉陶器観察表

遺物番号	部類	組合番号	測定位置	アーチ号	部位	施墨	寸幅	高さ	高さ(%)	幅	形状	色調	幅幅	方向	底部	内面	底面調査	保存率(%)	高さ	施墨	使用	備考
722	345	室内	床面直上	範	(2.7)	4.0	6.5	0.9	100	良好	灰黄	右	ナダ	ナダ	ナダ	ナダ	33	1回	—	—		
724	345	188	室内	床面直上	範	13.2	4.5	6.8	1.0	やや不良	灰黄	右	ナダ	ナダ	ナダ	ナダ	66	無	補修既	—		
725	345	室内	床面直上	範	12.9	3.9	6.7	1.0	やや過度	灰黄	右	水刷毛	ナダ	ナダ	ナダ	ナダ	66	有	—	—		
726	345	室内	床面直上	範	12.8	4.7	6.9	0.9	相不良	灰黄	右	ナダ	ナダ	ナダ	ナダ	50	有	—	—			
727	345	182	室内	床面直上	範	13.2	5.3	6.6	0.9	良好	灰黄	右	ナダ	ナダ	ナダ	ナダ	20	無	—	—		
728	345	182	室内	床面直上	範	13.2	5.0	6.6	0.9	良好	灰黄	右	ナダ	ナダ	ナダ	ナダ	23	不明	—	—		
729	345	182	室内	床面直上	範	13.1	5.9	6.6	1.1	相不良	灰黄	左	ナダ	ナダ	ナダ	ナダ	23	無	—	—		
730	345	室内	床面直上	範	14.0	(3.6)	—	—	—	過度	灰	右	ナダ	ナダ	ナダ	ナダ	80	3回	—	—		
731	345	191	室内	床面直上	範	16.6	6.8	7.8	1.0	相良好	灰黄	右	ナダ	ナダ	ナダ	ナダ	33	ソグ痕	崩落	無		
732	345	192	室内	床面直上	範	15.5	6.9	7.6	1.0	相良好	灰白	右	水刷毛	ナダ	ナダ	ナダ	ナダ	95	有	青む	—	
733	345	192	室内	床面直上	範	15.1	6.2	7.2	0.9	相良好	灰白	右	ナダ	ナダ	ナダ	ナダ	33	ソグ痕	崩落	無	崩落既	
734	345	192	室内	床面直上	範	15.0	6.0	7.6	1.0	相良好	灰白	右	ナダ	ナダ	ナダ	ナダ	50	ソグ痕	有	—		
735	345	室内	床面直上	範	(2.0)	—	7.4	1.3	相良好	灰黄	右	ナダ	ナダ	ナダ	ナダ	100	有	—	—			
736	345	室内	床面直上	範	(2.0)	—	8.1	1.6	相良好	灰黄	左	ナダ	ナダ	ナダ	ナダ	100	有	—	—			
737	345	室内	床面直上	範	(1.2)	—	7.2	0.8	相不良	灰白	右	ナダ	ナダ	ナダ	ナダ	10	有	碎片で利用	底部			
738	345	室内	床面直上	範	(2.1)	—	7.2	0.8	相不良	灰白	右	ナダ	ナダ	ナダ	ナダ	35	ソグ痕	—	—			
739	345	室内	床面直上	抹小壺	(14.7)	—	相良好	灰黄	右	ナダ	ナダ	ナダ	ナダ	ナダ	ナダ	ナダ	20	黄土	有	—		
740	346	室内	壁土	壁口範	10.1	2.7	5.8	—	相良好	白	右	水刷毛	ナダ	ナダ	ナダ	ナダ	33	有	乾む付着	—		
741	346	室内	壁土	範	12.8	3.2	6.0	0.7	相不良	灰白	右	ナダ	ナダ	ナダ	ナダ	25	ソグ痕	無	—			
742	346	室内	壁土	範	12.8	3.6	6.7	0.9	相良好	灰黄	左	ナダ	ナダ	ナダ	ナダ	33	有	乾ね焼きの一 例上の可能性 有り	—			
743	346	室内	壁土	範	14.1	3.9	6.2	0.7	相良好	灰黄	右	ナダ	ナダ	ナダ	ナダ	25	ソグ痕	有	—			
744	346	室内	壁土	範	13.9	4.4	6.9	0.9	相不良	灰黄	右	ナダ	ナダ	ナダ	ナダ	33	不明	—	—			
745	346	191	室内	床面直上	範	14.2	4.8	6.6	0.9	相不良	灰黄	右	ナダ	ナダ	ナダ	ナダ	90	ソグ痕	不明	—		
746	346	191	室内	壁土	範	12.9	4.0	6.4	0.9	相良好	灰黄	左	ナダ	ナダ	ナダ	ナダ	33	有	歪む	—		
747	346	191	室内	壁土	範	14.0	3.8	6.5	0.9	相良好	灰白	左	木刷毛	ナダ	ナダ	ナダ	ナダ	25	—	—	—	
748	346	191	室内	壁土	範	17.1	4.0	6.4	0.8	相良好	灰白	左	ナダ	ナダ	ナダ	ナダ	19	有	剥離	有り		
749	346	室内	壁土	範	14.8	(3.9)	6.2	—	相良好	灰黄	右	ナダ	ナダ	ナダ	ナダ	25	不明	—	—			
750	346	室内	壁土	範	12.9	3.6	5.8	0.6	相不良	灰白	右	ナダ	ナダ	ナダ	ナダ	25	ソグ痕	不明	—			
751	346	190	室内	壁土	範	12.3	3.8	6.5	0.6	相良好	灰白	右	ナダ	ナダ	ナダ	ナダ	66	3回	歪む	—		
752	346	室内	壁土	範	15.0	4.1	6.2	0.6	相良好	灰白	右	ナダ	ナダ	ナダ	ナダ	25	ソグ痕	有	—			
753	346	室内	壁土	範	12.8	3.9	6.6	0.6	相良好	灰白	右	木刷毛	ナダ	ナダ	ナダ	ナダ	50	3回	歪む	—		
754	346	191	室内	壁土	範	12.3	4.5	6.5	1.0	相良好	灰白	右	木刷毛	ナダ	ナダ	ナダ	ナダ	50	ソグ痕	1回	—	
755	346	191	室内	壁土	範	16.0	4.1	7.2	0.6	相不良	灰白	右	木刷毛	ナダ	ナダ	ナダ	ナダ	25	不明	補修既	—	
756	346	191	室内	壁土	範	12.4	3.9	6.2	0.6	相良好	灰白	右	木刷毛	ナダ	ナダ	ナダ	ナダ	33	ソグ痕	1回	壁付土管	
757	346	191	室内	壁土	範	16.6	3.5	6.1	0.7	相良好	灰白	右	木刷毛	ナダ	ナダ	ナダ	ナダ	33	ソグ痕	有	壁付土管	
758	346	191	室内	壁土	範	15.4	4.8	6.0	1.1	相不良	灰黄	右	ナダ	ナダ	ナダ	ナダ	50	ソグ痕	有	壁付		
759	346	室内	壁土	範	12.9	4.1	6.6	0.8	相良好	灰白	右	木刷毛	ナダ	ナダ	ナダ	ナダ	6	有	—	—		
760	346	187	室内	壁土	範	14.9	5.5	7.2	1.6	相不良	灰白	右	ナダ	ナダ	ナダ	ナダ	33	—	—	—		
761	346	室内	壁土	範	14.0	4.1	6.9	0.9	相良好	灰白	右	ナダ	ナダ	ナダ	ナダ	25	—	—	—			
762	346	室内	壁土	範	13.2	4.6	6.6	0.9	相不良	灰白	右	ナダ	ナダ	ナダ	ナダ	33	有	—	—			
763	346	室内	壁土	範	14.2	4.1	6.8	0.8	相良好	灰黄	右	木刷毛	ナダ	ナダ	ナダ	ナダ	30	有	—	—		
764	346	室内	壁土	範	12.9	4.8	6.3	0.8	相良好	灰白	左	ナダ	ナダ	ナダ	ナダ	25	ソグ痕	2回	歪む			
765	346	室内	壁土	範	14.2	4.5	7.0	0.7	相良好	灰白	左	ナダ	ナダ	ナダ	ナダ	15	有	—	—			
766	346	室内	壁土	範	12.7	3.8	6.1	0.8	相良好	灰白	左	ナダ	ナダ	ナダ	ナダ	25	無	—	—			
767	346	室内	壁土	範	15.0	4.5	6.6	0.9	相良好	灰白	左	ナダ	ナダ	ナダ	ナダ	12	ソグ痕	有	補修既			
768	346	室内	壁土	範	16.0	4.3	6.0	0.8	相不良	灰黄	右	ナダ	ナダ	ナダ	ナダ	33	有	—	—			
769	346	194	室内	壁土	範	4.3	—	7.1	0.9	相過度	灰黄	右	ナダ	ナダ	ナダ	ナダ	50	沾染	有	歪む		
770	346	室内	壁土	範	(2.3)	—	7.6	1.3	相良好	灰白	右	ナダ	ナダ	ナダ	ナダ	100	2回	—	—			
771	346	室内	壁土	範	(2.0)	—	5.9	0.7	相良好	灰白	右	不明	ナダ	ナダ	ナダ	ナダ	100	有	補修既	—		
772	346	193	室内	壁土	(2.1)	—	6.8	0.9	相良好	灰白	右	ナダ	ナダ	ナダ	ナダ	60	無	—	—			
773	346	191	室内	壁土	範	12.9	6.3	7.5	1.3	相良好	灰白	右	ナダ	ナダ	ナダ	ナダ	20	ソグ痕	3回	歪む		
774	347	191	室内	壁土	範	15.9	6.9	7.8	1.1	相良好	灰白	右	ナダ	ナダ	ナダ	ナダ	67	ソグ痕	有	—		
775	347	193	室内	壁土	範	12.1	6.8	8.1	1.4	相良好	灰白	右	ナダ	ナダ	ナダ	ナダ	33	沾染	29-1	補修既		
776	347	室内	壁土	範	16.6	6.3	—	7.6	1.0	相良好	灰白	右	ナダ	ナダ	ナダ	ナダ	30	沾染	有	—		
777	347	室内	壁土	範	15.1	(4.0)	—	—	—	相良好	灰白	右	ナダ	ナダ	ナダ	ナダ	15	無?	—	—		
778	347	室内	壁土	範	15.9	(3.5)	—	—	—	相良好	灰白	右	ナダ	ナダ	ナダ	ナダ	25	有	—	—		
779	347	室内	壁土	範	24	16.6	(5.0)	—	—	相良好	灰白	右	ナダ	ナダ	ナダ	ナダ	35	沾染	—	—		
780	347	室内	壁土	範	16.6	(3.7)	—	—	—	相良好	灰白	右	ナダ	ナダ	ナダ	ナダ	35	有	藍色	—		
781	347	室内	壁土	範	(4.1)	—	7.3	1.3	相良好	灰白	右	ナダ	ナダ	ナダ	ナダ	80	沾染	有	—			
782	347	室内	壁土	範	(3.3)	—	8.4	2.1	相不良	灰白	右	小明	ナダ	ナダ	ナダ	ナダ	75	無	—	—		
783	347	室内	壁土	範	(5.3)	—	7.6	1.5	相良好	灰白	右	ナダ	ナダ	ナダ	ナダ	100	有	歪む	—			
784	347	室内	壁土	範	(11.6)	—	—	—	—	相良好	灰白	右	ナダ	ナダ	ナダ	ナダ	10	有	—	—		
785	347	室内	壁土	範	(11.3)	—	—	—	—	相良好	灰白	右	ナダ	ナダ	ナダ	ナダ	10	黃土	有	—		
786	348	室内	壁土	長粘土	15.9	(3.7)	—	—	—	相良好	灰白	左	ナダ	ナダ	ナダ	ナダ	10	黃土	不明	—		

植物番号	学名	固有名	出土地点	標高	地形	最高水位	高台	樹木	土壤	植被	風向	風速	地帶	内面	根存部位	根存率(%)	高台	樹木	利用	備考		
787	318	原木 枯木	樹上 樹内	V3 12 13 T4 23 A3 31 33 34 20-53	樹上 樹上 樹上 樹上 長距離 A3 21 31 34	26-65 24-25 26 25 25 25 25 25-53	(7.7)	良好 良好 良好 良好 良好 良好 良好 良好 良好 良好	灰 灰 灰 灰 灰 灰 灰 灰 灰 灰	右 右 右 右 右 右 右 右 右 右	根部	50	有	有	有	有	有	有	有	有	有	
788	318	原木 枯木	樹上 樹内	V3 12 13 T4 23 A3 31 33 34 20-53	樹上 樹上 樹上 樹上 長距離 A3 21 31 34	(29.9)	35.0	良好 良好 良好 良好 良好 良好 良好 良好 良好 良好	灰 灰 灰 灰 灰 灰 灰 灰 灰 灰	右 右 右 右 右 右 右 右 右 右	根部	25	有	城下で利用	有	有	有	有	有	有	有	
789	349	原木	V3	31	黒岩桐	11.6	2.5	5.1	樹皮	灰白	石	未調査	不明	60	無	無	無	無	無	無	無	
790	349	原木	V3	31	黒岩桐	12.0	2.3	5.6	樹皮	灰白	石	未調査	不明	60	無	無	無	無	無	無	無	
791	349	原木	V3	50	黒岩桐	13.0	2.6	6.2	樹皮	灰白	石	未調査	ナメラ柔	25	無	無	無	無	無	無	無	
792	349	原木	V3	25	猪台柏	12.2	2.3	5.3	樹皮	良好	灰	石	風化ナダ	ナメラ	30	有	有	有	有	有	有	
793	349	原木	V3	65	黒岩桐	12.0	2.7	5.2	樹皮	灰白	石	未調査	不明	60	無	無	無	無	無	無	無	
794	349	原木	V3	46	黒岩桐	12.4	2.7	6.8	樹皮	良好	灰黃	石	未調査	ナメラ	30	有	有	有	有	有	有	
795	349	原木	V3	50	黒岩桐	12.2	2.7	5.4	樹皮	良好	灰白	石	未調査	不明	50	無	無	無	無	無	無	
796	349	原木	V3	25	猪台柏	13.5	2.8	6.7	樹皮	良好	灰白	石	未調査	ナメラ	30	無	無	無	無	無	無	
797	349	原木	V3	41	猪台柏	11.7	2.7	5.4	樹皮	良好	灰白	石	未調査	不明	10	無	無	無	無	無	無	
798	349	原木	V3	300	黒岩桐	11.5	2.6	6.0	樹皮	良好	灰白	石	未調査	ナメラ	15	無	無	無	無	無	無	
799	349	原木	V3	22	猪台柏	11.8	2.6	5.1	樹皮	良好	灰白	石	未調査	ナメラ	30	有	有	有	有	有	有	
800	349	原木	V3	56	猪台柏	12.2	2.9	5.0	樹皮	良好	灰白	石	未調査	ナメラ	38	有	有	有	有	有	有	
801	349	原木	V3	31	猪台柏	11.5	2.7	5.0	樹皮	良好	灰白	石	未調査	ナメラ	32	有	有	有	有	有	有	
802	349	原木	V3	42	猪台柏	12.2	2.7	5.9	樹皮	良好	灰白	石	未調査	ナメラ	60	無	無	無	無	無	無	
803	349	原木	V3	41	猪台柏	11.6	2.8	5.9	樹皮	良好	灰白	石	未調査	ナメラ柔	66	無	無	無	無	無	無	
804	349	原木	V3	500	黒岩桐	11.4	2.6	5.6	樹皮	良好	灰白	石	未調査	ナメラ	33	不明	不明	不明	不明	不明	不明	
805	349	原木	V3	50	黒岩桐	11.9	2.9	5.8	樹皮	良好	灰白	石	未調査	ナメラ	25	有	有	有	有	有	有	
806	349	原木	V3	42	猪台柏	11.4	3.1	6.0	樹皮	良好	灰白	石	未調査	不明	33	無	無	無	無	無	無	
807	349	原木	V3	31	猪台柏	12.0	2.9	5.4	樹皮	良好	灰白	石	未調査	ナメラ	75	ソメ柔	不明	不明	不明	不明	不明	
808	349	原木	V3	56	猪台柏	11.5	2.4	6.3	樹皮	良好	灰白	石	未調査	ナメラ	25	有	有	有	有	有	有	
809	349	原木	V3	31	猪台柏	11.7	(2.2)		樹皮	良好	灰白	石	口縫跡～ 全体	不明	20	無	無	無	無	無	無	
810	349	原木	V3	26	猪台柏	11.4	2.7	5.2	樹皮	良好	灰白	石	未調査	ナメラ	50	有	有	有	有	有	有	
811	349	原木	V3	28	猪台柏	11.2	2.9	6.3	樹皮	良好	灰白	石	未調査	ナメラ	20	有	有	有	有	有	有	
812	349	原木	V3	31	猪台柏	11.8	2.2	6.2	樹皮	良好	灰白	石	未調査	ナメラ	20	有	有	有	有	有	有	
813	349	原木	V3	31	猪台柏	12.0	3.1	6.2	樹皮	良好	灰白	石	未調査	不明	25	無	無	無	無	無	無	
814	349	原木	V3	65	猪台柏	12.0	2.9	5.6	樹皮	良好	灰白	石	未調査	ナメラ	30	無	無	無	無	無	無	
815	349	原木	V3	65	猪台柏	(1.8)			樹皮	良好	灰白	石	ナメラ	ナメラ	30	無	無	無	無	無	無	
816	349	原木	V3	65	猪台柏	(1.1)			樹皮	良好	灰白	石	未調査	ナメラ	40	無	無	無	無	無	無	
817	349	原木	V3	65	猪台柏	(3.6)			樹皮	良好	灰白	石	未調査	ナメラ	25	有	有	有	有	有	有	
818	349	原木	V3	44	猪台柏	18.6	4.8	7.0	樹皮	良好	灰白	石	未調査	ナメラ	25	不明	不明	不明	不明	不明	不明	
819	349	原木	V3	56	猪台柏	(5.1)			樹皮	良好	灰白	石	未調査	ナメラ	25	無	無	無	無	無	無	
820	349	原木	V3	56	猪台柏	(1.8)			樹皮	良好	灰白	石	未調査	ナメラ	100	無	無	無	無	無	無	
821	349	原木	V3	24	温	11.2	2.7	6.3	樹皮	良好	灰白	右	ナメラ	ナメラ	67	無	無	無	無	無	無	
822	349	原木	V3	24	温	12.1	2.9	6.0	樹皮	良好	灰白	右	ナメラ	ナメラ	80	ソメ柔	有	有	有	有	有	
823	349	原木	V3	25	温	11.8	2.8	6.4	樹皮	良好	灰白	右	ナメラ	ナメラ	92	不明	不明	不明	不明	不明	不明	
824	349	原木	V3	23	温	13.2	3.0	6.5	樹皮	良好	灰白	右	ナメラ	ナメラ	33	有	有	有	有	有	有	
825	349	原木	V3	44	温	14.8	3.4	6.9	樹皮	良好	灰白	右	ナメラ	ナメラ	25	ソメ柔	有	有	有	有	有	
826	349	原木	V3	23	温	17.4	3.2	6.8	樹皮	良好	灰白	右	ナメラ	ナメラ	30	ソメ柔	有	有	有	有	有	
827	349	原木	V3	31	温	15.9	5.9	9.0	樹皮	良好	灰白	右	ナメラ	ナメラ	18	有	有	有	有	有	有	
828	349	原木	V3	50	猪台柏	(4.3)			樹皮	良好	灰白	右	ナメラ	ナメラ	35	不明	不明	不明	不明	不明	不明	
829	349	原木	V3	50	猪台柏	(2.6)			樹皮	良好	灰白	右	ナメラ	ナメラ	20	無	無	無	無	無	無	
830	349	原木	V3	24	温	12.9	4.2	7.2	樹皮	良好	灰白	右	ナメラ	ナメラ	45	無	無	無	無	無	無	
831	349	原木	V3	64	温	13.0	4.1	7.2	樹皮	良好	灰白	右	ナメラ	ナメラ	45	ソメ柔	有	有	有	有	有	
832	349	原木	V3	74	温	12.1	4.1	5.6	樹皮	良好	灰白	右	ナメラ	ナメラ	25	ソメ柔	有	有	有	有	有	
833	349	原木	V3	31	温	13.0	3.8	7.0	樹皮	良好	灰白	右	ナメラ	ナメラ	60	ソメ柔	有	有	有	有	有	
834	349	原木	V3	24	温	13.0	4.3	6.0	樹皮	良好	灰白	右	ナメラ	ナメラ	50	ソメ柔	有	有	有	有	有	
835	349	原木	V3	22	温	14.5	4.8	6.5	樹皮	良好	灰白	右	ナメラ	ナメラ	70	ソメ柔	有	有	有	有	有	
836	349	原木	V3	23	温	14.9	4.0	7.1	樹皮	良好	灰白	右	ナメラ	ナメラ	50	ソメ柔	有	有	有	有	有	
837	349	原木	V3	24	温	16.1	4.3	6.8	樹皮	良好	灰白	右	ナメラ	ナメラ	25	宿根	不明	不明	不明	不明	不明	
838	349	原木	V3	300	温	16.4	4.4	7.0	樹皮	良好	灰白	右	ナメラ	ナメラ	25	宿根	不明	不明	不明	不明	不明	
839	349	原木	V3	24	温	14.2	4.6	6.4	樹皮	良好	灰白	右	ナメラ	ナメラ	20	宿根	有	有	有	有	有	
840	349	原木	V3	500	温	15.4	4.7	7.2	樹皮	良好	灰白	右	ナメラ	ナメラ	40	宿根	有	有	有	有	有	
841	350	原木	V3	23	61	温	12.7	4.3	6.5	樹皮	良好	灰白	右	ナメラ	ナメラ	30	ソメ柔	不明	不明	不明	不明	不明
842	350	原木	V3	23	57	温	12.0	3.6	6.6	樹皮	良好	灰白	右	ナメラ	ナメラ	15	有	有	有	有	有	有
843	350	原木	V3	24	57	温	12.5	3.5	6.8	樹皮	良好	灰白	右	ナメラ	ナメラ	35	宿根	不明	不明	不明	不明	不明
844	350	原木	V3	13	66	温	14.0	3.9	6.6	樹皮	良好	灰白	右	ナメラ	ナメラ	30	宿根	不明	不明	不明	不明	不明
845	350	原木	V3	58	温	13.6	3.8	6.6	樹皮	良好	灰白	右	ナメラ	ナメラ	60	四輪	無	無	無	無	無	
846	350	原木	V3	13	60	温	14.0	3.8	6.4	樹皮	良好	灰白	右	ナメラ	ナメラ	70	ソメ柔	有	有	有	有	有
847	350	原木	V3	13	65	温	13.5	3.7	6.4	樹皮	良好	灰白	右	ナメラ	ナメラ	60	宿根	有	有	有	有	有
848	350	原木	V3	500	温	13.8	3.6	6.8	樹皮	良好	灰白	右	ナメラ	ナメラ	25	宿根	有	有	有	有	有	
849	350	原木	V3	24	61	温	13.5	3.3	6.5	樹皮	良好	灰白	右	ナメラ	ナメラ	45	宿根	有	有	有	有	有
850	350	原木	V3	73	31	温	15.6	4.2	6.4	樹皮	良好	灰白	右	ナメラ	ナメラ	35	宿根	有	有	有	有	有
851	350	原木	V3	24	31	温	15.2</															

植物 番号	種名 学名	固有 番号	出上 位置	高さ (")	葉位	葉種	口徑	基部 基盤	高さ (cm)	地上 部	根上 部	成形	色調	被輪 方	底盤 調査	内面 底盤	残存部	残存 (%)	高さ (cm)	底盤 高さ	底盤 幅	軸用	備考
859 350	灰原草	Y3	65	高	13.8	3.9	6.2	0.8	6.2	良好	灰黃	石	ナダ	ナダ	50	ソダ系	底盤	有					
860 350	灰原草	63	高	12.3	3.9	7.4	0.9	6.6	良好	灰黃	石	ナダ	ナダ1条	25	ソダ系	底盤	不明						
861 350	灰原草	24	22	高	14.8	(3.6)	—	—	—	良好	灰	右	—	—	20	ソダ系	底盤	有					
862 351	灰原草	24	22	高	12.4	3.6	6.4	0.9	6.4	良好	灰黃	右	本調査	本調査	50	ソダ系	底盤	有	外向のみス 付着・被輪化				
863 351 189	灰原草	23	22	高	12.4	4.0	6.4	0.8	6.4	良好	灰黃	右	ナダ	ナダ	80	ソダ系	底盤	有					
864 351	灰原草	Y3	55	高	13.3	3.8	6.5	0.8	6.5	良好	灰黃	右	ナダ	ナダ	35	ソダ系	底盤	有					
865 351	灰原草	C8	47	高	13.2	3.9	6.6	0.6	6.6	不良	灰白	右	ナダ	不消	60	ソダ系	底盤	無					
866 351	灰原草	34	31	高	13.8	4.2	6.6	0.8	6.6	不良	灰白	右	本調査	トトロナダ	50	ソダ系	底盤	無					
867 351	灰原草	23	65	高	15.2	(2.9)	—	—	—	良好	灰	右	—	—	100	ソダ系	底盤	有					
868 351	灰原草	23	61	高	13.4	3.8	6.8	0.8	6.8	良好	灰黃	右	ナダ	ナダ	35	ソダ系	底盤	有					
869 351	灰原草	3301	65	高	13.5	4.6	7.6	0.9	7.6	良好	灰黃	右	ナダ	ナダ2条	60	ソダ系	底盤	不明					
870 351	灰原草	44	43	高	14.6	(3.8)	—	—	—	良好	灰黃	右	—	—	30	ソダ系	底盤	有					
871 351	灰原草	—	—	高	14.9	(3.0)	—	—	—	良好	灰白	右	—	—	25	ソダ系	底盤	有					
872 351	灰原草	A3	31	高	14.0	(3.3)	—	—	—	良好	灰	右	—	—	25	ソダ系	底盤	有					
873 351	灰原草	X3	65	高	14.0	(3.2)	—	—	—	良好	灰黃	右	—	—	25	ソダ系	底盤	不明					
874 351	灰原草	24	43	高	13.8	(3.2)	—	—	—	良好	灰白	右	—	—	50	ソダ系	底盤	有					
876 351	灰原草	A4	31	高	13.0	3.5	6.4	0.7	6.4	不良	灰白	右	ナダ	不消	40	ソダ系	底盤	有					
876 351, 191	灰原草	Y3	65	高	13.9	4.2	6.1	0.7	6.1	良好	灰黃	右	ナダ	ナダ	50	ソダ系	底盤	有	スス付着				
877 351	灰原草	Y3	26-55	高	14.2	4.0	6.6	0.8	6.6	良好	灰黃	右	ナダ	ナダ	50	ソダ系	底盤	有					
878 351	灰原草	C5	51	高	14.5	4.2	6.4	0.8	6.4	良好	灰白	右	ナダ	ナダ	60	ソダ系	底盤	有	3回 液滴で転用 或古拾子付着				
879 351	灰原草	65	高	13.8	3.9	6.8	1.0	6.8	良好	灰黃	右	ナダ	ナダ	40	ソダ系	底盤	有						
880 351	灰原草	23	65	高	14.0	4.1	6.1	0.7	6.1	良好	灰黃	右	ナダ	不消	15	ソダ系	底盤	有	4回				
881 351, 188	灰原草	34	54	高	14.0	4.6	6.4	0.8	6.4	良好	灰黃	右	ナダ	ナダ	70	ソダ系	底盤	不明					
882 351	灰原草	35	54	高	13.0	3.5	6.9	0.7	6.9	良好	灰白	右	ナダ	ナダ	90	ソダ系	底盤	無					
883 351	灰原草	84	31	高	13.8	4.5	7.2	1.0	7.2	良好	灰白	左	ナダ	ナダ数条	50	ソダ系	底盤	無					
884 351	灰原草	A4	26	高	12.9	3.6	6.3	0.9	6.3	良好	灰白	右	—	—	30	ソダ系	底盤	有					
885 351	灰原草	Y3	65	高	13.4	4.1	6.1	0.9	6.1	良好	灰黃	右	ナダ	不消	25	ソダ系	底盤	有					
886 351	灰原草	33	25	高	15.1	5.3	6.8	1.0	6.8	良好	灰白	右	ナダ	ナダ	10	ソダ系	底盤	有					
887 351	灰原草	23	22	高	12.4	4.8	6.4	0.8	6.4	良好	灰黃	右	ナダ	不消	35	ソダ系	底盤	有?					
888 351	灰原草	31	39	高	13.5	4.8	7.0	0.8	7.0	良好	灰白	右	ナダ	ナダ	60	ソダ系	底盤	不消					
889 351	灰原草	3801	36	13.6	4.7	7.1	0.7	7.1	良好	灰白	右	ナダ	ナダ	50	ソダ系	底盤	有	1回					
890 351	灰原草	23	31	高	12.9	4.4	5.8	0.7	5.8	良好	灰黃	右	ナダ	ナダ	70	ソダ系	底盤	有					
891 351	灰原草	24	81	高	13.6	4.6	6.5	0.8	6.5	良好	灰白	右	ナダ	ナダ	60	ソダ系	底盤	有					
892 351	灰原草	23	56	高	13.6	4.3	6.8	0.8	6.8	良好	灰白	右	ナダ	ナダ	50	ソダ系	底盤	有	凹面付着				
893 351	灰原草	19	43	高	12.5	4.3	6.3	0.9	6.3	良好	灰白	右	ナダ	ナダ	50	ソダ系	底盤	有					
894 351	灰原草	94	31-47	高	13.6	4.5	6.1	0.7	6.1	良好	灰白	右	ナダ	ナダ	50	ソダ系	底盤	有					
895 351	灰原草	73	22	高	13.4	4.9	6.1	0.7	6.1	良好	灰白	右	ナダ	ナダ1条	60	ソダ系	底盤	有					
896 351	灰原草	AIW97	42	高	12.1	3.5	6.8	0.8	6.8	良好	灰白	右	ナダ	ナダ	15	ソダ系	底盤	有					
897 351, 189	灰原草	A4	42	高	13.2	3.7	6.3	0.7	6.3	良好	灰白	右	ナダ	ナダ	60	ソダ系	底盤	有	茎葉付着				
898 351	灰原草	31	39	高	12.0	4.0	6.4	0.8	6.4	良好	灰白	右	ナダ	ナダ	40	ソダ系	底盤	有	2回				
899 352	灰原草	23	64	高	12.4	3.8	6.8	0.8	6.8	良好	灰白	右	ナダ	ナダ1条	63	ソダ系	底盤	有	底面付着				
900 352	灰原草	44	31	高	13.4	4.3	6.8	0.8	6.8	良好	灰白	右	ナダ	ナダ	75	ソダ系	底盤	有					
901 352	灰原草	23	22	高	13.5	4.3	6.6	0.8	6.6	良好	灰白	右	ナダ	ナダ	60	ソダ系	底盤	有					
902 352	灰原草	14	25	高	13.6	4.0	6.5	0.8	6.5	良好	灰白	右	ナダ	ナダ	50	ソダ系	底盤	有					
903 352	灰原草	X2	24	高	13.4	3.9	6.2	0.7	6.2	良好	灰黃	右	ナダ	ナダ	38	ソダ系	底盤	有					
904 352	灰原草	A4	42	高	13.1	4.1	6.9	0.8	6.9	良好	灰黃	右	ナダ	ナダ	25	ソダ系	底盤	有					
905 352	灰原草	C5	51	高	13.9	(2.7)	—	—	—	良好	灰白	右	ナダ	ナダ	50	ソダ系	底盤	有					
906 352	灰原草	73	26	高	15.6	4.1	7.0	0.8	7.0	良好	灰黃	右	ナダ	水調査	50	ソダ系	底盤	有					
907 352	灰原草	高生区 水調査	16	2.4	4.7	—	—	—	—	—	良好	灰白	右	本調査	ナダ	60	ソダ系	底盤	有				
908 352	灰原草	14	50	高	12.8	3.9	6.6	0.9	6.6	良好	灰黃	右	ナダ	不消	50	ソダ系	底盤	有					
909 352, 189	灰原草	3801	12	12.4	3.5	6.5	0.8	6.5	6.5	良好	灰白	右	ナダ	ナダ1条	80	ソダ系	底盤	有	1回 液滴付着				
910 352	灰原草	A5	43	高	13.0	3.3	6.6	0.8	6.6	やや不良	灰白	右	ナダ	水調査	50	ソダ系	底盤	有					
911 352	灰原草	85	31	高	12.0	3.7	6.6	0.9	6.6	良好	灰黃	右	ナダ	ナダ	25	ソダ系	底盤	有	補修版				
912 352	灰原草	—	5801	13	14.4	3.6	6.6	0.6	6.6	良好	灰白	右	ナダ	不消	20	ソダ系	底盤	有					
913 352	灰原草	32	24	高	13.9	3.6	6.1	0.7	6.1	良好	灰白	右	ナダ	不消	40	ソダ系	底盤	有					
914 352	灰原草	23	23	高	13.4	4.2	6.1	0.8	6.1	良好	灰白	右	ナダ	ナダ	60	ソダ系	底盤	有					
915 352	灰原草	S801	13	12.2	4.3	7.0	0.8	7.0	良好	灰白	右	ナダ	ナダ	30	ソダ系	底盤	有						
916 352	灰原草	Y1	25	高	14.2	(2.7)	—	—	—	良好	灰白	右	ナダ	ナダ	50	ソダ系	底盤	有					
917 352	灰原草	74	43	高	12.4	4.3	5.8	0.9	5.8	良好	灰白	右	ナダ	不消	35	ソダ系	底盤	有					
918 352	灰原草	24	31	高	13.8	4.5	6.2	0.8	6.2	良好	灰白	右	ナダ	ナダ	55	ソダ系	底盤	有					
919 352	灰原草	Y1	25	高	14.2	(2.7)	—	—	—	良好	灰白	右	ナダ	ナダ	30	ソダ系	底盤	有					
920 352	灰原草	CS	54	高	11.8	3.6	6.3	0.8	6.3	良好	灰白	右	ナダ	ナダ1条	40	ソダ系	底盤	不消					
921 352, 194	灰原草	C5	55	高	—	(7.3)	6.0	0.7	6.0	良好	灰白	右	—	—	40	ソダ系	底盤	有					
921 352, 194	灰原草	C5	55	高	—	(7.3)	6.1	0.7	6.1	良好	灰白	右	—	—	40	ソダ系	底盤	有	4個体接着				
921 352, 194	灰原草	C5	55	高	—	(7.3)	6.1	0.7	6.1	良好	灰白	右	—	—	50	ソダ系	底盤	有	3回				
922 352	灰原草	Z3	31	高	13.2	3.7	7.0	0.8	7.0	良好	灰白	右	ナダ	ナダ	30	ソダ系	底盤	有	2回				
923 352	灰原草	A3	17	高	13.4	4.0	6.4	0.7	6.4	良好	灰白	右	ナダ	ナダ	25	ソダ系	底盤	有					
924 352	灰原草	高生区 水調査	13	高	13.4	3.7	6.3	0.8	6.3	良好	灰白	右	ナダ	ナダ	40	ソダ系	底盤	有	有				
925 352	灰原草	AIW97	14	40	高	14.0	3.7	6.6	0.9	6.6	良好	灰白	右	ナダ	ナダ	50	ソダ系	底盤	有				
926 352	灰原草	B4	47	高	14.0	3.7	6.6	0.9	6.6	良好	灰白	右	ナダ	ナダ	50	ソダ系	底盤	有					
927 352	灰原草	M	31	高	14.3	4.0	6.5	0.8	6.5	良好	灰白	右	ナダ	ナダ	60	ソダ系	底盤	有					

物種名	種別	固有種	地理分布	形態	花被	果被	内部構造	保存率(%)	高台	地帶	細目	備考	
929-332	灰岩	S801	南	13.4 4.1	6.9 0.8	真葉	石ナデ	60	山原	有	山原		
929-332	灰岩	S801	南	13.0 4.0	5.1 0.6	真葉	石ナデ	ナデ	ナデ	有	山原	山原	
930-332	灰岩	S801	南	13.6 5.0	6.6 0.7	真葉	石ナデ	ナデ	ナデ	有	山原	山原	
931-351	灰岩	S801	南	13.8 3.2	6.8 0.6	真葉	石ナデ	ナデ	ナデ	有	山原	山原	
932-351	灰岩	S801	南	13.6 3.6	6.4 0.7	真葉	石ナデ	ナデ	ナデ	有	山原	山原	
933-351	灰岩	S801	南	13.1 3.5	6.4 0.8	真葉	石ナデ	ナデ	ナデ	有	山原	山原	
934-351	灰岩	A3	南	14.2 4.0	7.0 0.9	真葉	石ナデ	ナデ	ナデ	有	山原	山原	
935-351	灰岩	A3	南	14.6 3.8	7.4 0.7	真葉	石ナデ	ナデ	ナデ	有	山原	山原	
936-351	灰岩	S801	南	14.0 4.1	7.1 1.0	不育	石ナデ	ナデ	ナデ	有	山原	山原	
937-351	灰岩	S801	南	12.0 3.6	6.5 0.8	真葉	石ナデ	ナデ	ナデ	有	山原	山原	
938-351	灰岩	Y3	南	13.0 (2.3)	7.0 0.8	真葉	石ナデ	ナデ	ナデ	有	山原	山原	
939-351	灰岩	S801	南	14.0 4.0	6.1 0.9	真葉	石ナデ	ナデ	ナデ	有	山原	山原	
940-351	灰岩	Z4	25-29-62	12.8 4.1	7.1 0.8	真葉	石ナデ	ナデ	ナデ	有	山原	山原	
941-351	灰岩	X3	21	12.8 4.5	7.6 1.0	真葉	石ナデ	ナデ	ナデ	有	山原	山原	
942-351	灰岩	G5	51	14.6 4.3	7.1 0.8	真葉	石ナデ	ナデ	ナデ	有	山原	山原	
943-351	灰岩	Z3	58	13.8 4.0	6.1 0.8	真葉	石ナデ	ナデ	ナデ	有	山原	山原	
944-351	灰岩	H4	50	13.4 4.2	6.9 0.8	真葉	石ナデ	ナデ	ナデ	有	山原	山原	
945-351	灰岩	A3	36	13.3 4.3	7.6 0.7	真葉	石ナデ	ナデ	ナデ	有	山原	山原	
946-351	灰岩	Y3	25	14.0 3.8	6.6 0.8	真葉	石ナデ	ナデ	ナデ	有	山原	山原	
947-351	灰岩	Z4	61-62-44	13.8 4.1	7.1 1.0	真葉	石ナデ	ナデ	ナデ	有	山原	山原	
948-351	灰岩	A3	31	13.6 4.0	6.4 0.8	真葉	石ナデ	ナデ	ナデ	有	山原	山原	
949-351	灰岩	A3	36	14.3 4.5	6.7 0.8	真葉	石ナデ	ナデ	ナデ	有	山原	山原	
950-351	灰岩	Z3	22	14.8 4.2	6.7 0.7	真葉	石ナデ	ナデ	ナデ	有	山原	山原	
951-351	灰岩	B5	49	14.4 4.7	6.7 0.7	真葉	石ナデ	ナデ	ナデ	有	山原	山原	
952-351	灰岩	V2	22	14.5 5.0	6.8 0.7	真葉	石ナデ	ナデ	ナデ	有	山原	山原	
953-351	灰岩	Z3	61	12.5 4.4	6.7 0.7	真葉	石ナデ	ナデ	ナデ	有	山原	山原	
954-351	灰岩	A5	49	15.5 4.9	7.4 0.7	真葉	石ナデ	ナデ	ナデ	有	山原	山原	
955-351	灰岩	S801	南	15.0 5.0	7.4 0.7	真葉	石ナデ	ナデ	ナデ	有	山原	山原	
956-351	灰岩	Y4	25	15.8 4.6	7.1 0.8	真葉	石ナデ	ナデ	ナデ	有	山原	山原	
957-351	灰岩	A4	31	14.4 3.4	7.5 0.8	真葉	石ナデ	ナデ	ナデ	有	山原	山原	
958-351	灰岩	A5	45	14.6 4.2	6.9 0.9	真葉	石ナデ	ナデ	ナデ	有	山原	山原	
959-351	灰岩	A5	59	14.2 4.0	6.7 0.9	真葉	石ナデ	ナデ	ナデ	有	山原	山原	
960-351	灰岩	Z3	58	16.0 3.9	7.8 1.0	真葉	石ナデ	ナデ	ナデ	有	山原	山原	
961-351	灰岩	S801	南	15.3 (2.5)	7.1 0.8	真葉	石ナデ	ナデ	ナデ	有	山原	山原	
962-351	灰岩	B5	50	13.5 4.9	6.8 0.9	真葉	石ナデ	ナデ	ナデ	有	山原	山原	
963-351	灰岩	A4	44	14.5 4.8	6.6 0.8	真葉	石ナデ	ナデ	ナデ	有	山原	山原	
964-351	灰岩	A3	21	11.8 4.0	6.8 1.0	真葉	石ナデ	ナデ	ナデ	有	山原	山原	
965-351	灰岩	Z5	25	11.5 3.8	7.0 0.9	真葉	石ナデ	ナデ	ナデ	有	山原	山原	
966-351	灰岩	Z3	35	12.5 4.4	7.0 0.7	真葉	石ナデ	ナデ	ナデ	有	山原	山原	
967-351	灰岩	S801	南	14.4 4.2	6.9 0.7	真葉	石ナデ	ナデ	ナデ	有	山原	山原	
968-351	灰岩	Y4	25	13.6 4.5	6.6 0.8	真葉	石ナデ	ナデ	ナデ	有	山原	山原	
969-351	灰岩	Z3	31	13.2 4.3	7.0 1.0	真葉	石ナデ	ナデ	ナデ	有	山原	山原	
970-351	灰岩	S801	南	13.5 4.1	6.2 0.7	真葉	石ナデ	ナデ	ナデ	有	山原	山原	
971-351	灰岩	Z3	31	13.2 3.4	6.2 0.6	真葉	石ナデ	ナデ	ナデ	有	山原	山原	
972-351	灰岩	Z3	65	16.2 3.7	6.8 0.7	真葉	石ナデ	ナデ	ナデ	有	山原	山原	
973-351	灰岩	A4	19	13.9 4.4	7.9 0.9	真葉	石ナデ	ナデ	ナデ	有	山原	山原	
974-351	灰岩	V3	25	14.7 5.1	6.6 0.8	真葉	石ナデ	ナデ	ナデ	有	山原	山原	
975-351	灰岩	固有種	固有種	12.1 4.4	6.8 0.8	否	良好	石ナデ	ナデ	ナデ	有	山原	山原
976-351	灰岩	Z3	58	13.2 4.5	6.2 0.9	否	良好	石ナデ	ナデ	ナデ	有	山原	山原
977-351	灰岩	固有種	固有種	12.6 4.4	6.3 0.8	否	良好	石ナデ	ナデ	ナデ	有	山原	山原
978-351	灰岩	C4	31	13.4 4.4	6.1 1.0	否	良好	石ナデ	ナデ	ナデ	有	山原	山原
979-351	灰岩	V3	26	13.2 3.7	7.4 0.8	否	良好	石ナデ	ナデ	ナデ	有	山原	山原
980-351	灰岩	A4	31	13.0 3.6	7.2 0.8	否	良好	石ナデ	ナデ	ナデ	有	山原	山原
981-351	灰岩	Z4	31	13.8 4.1	7.3 0.8	否	良好	石ナデ	ナデ	ナデ	有	山原	山原
982-351	灰岩	A4	31	13.2 4.5	6.9 1.0	否	良好	石ナデ	ナデ	ナデ	有	山原	山原
983-351	灰岩	B1	47	13.2 4.1	7.0 0.7	否	良好	石ナデ	ナデ	ナデ	有	山原	山原
984-351	灰岩	Z3	24	13.4 6.2	5.6 0.8	否	良好	石ナデ	ナデ	ナデ	有	山原	山原
985-351	灰岩	A1	50	13.8 (4.2)	6.6 0.8	否	良好	石ナデ	ナデ	ナデ	有	山原	山原
986-351	灰岩	B4	31	12.9 3.4	6.6 0.8	否	良好	石ナデ	ナデ	ナデ	有	山原	山原
987-351	灰岩	S801	南	11.6 3.7	6.6 0.8	否	良好	石ナデ	ナデ	ナデ	有	山原	山原
988-351	灰岩	B4	31	12.2 3.7	6.6 0.8	否	良好	石ナデ	ナデ	ナデ	有	山原	山原
989-351	灰岩	S801	南	13.0 3.9	5.7 0.8	否	良好	石ナデ	ナデ	ナデ	有	山原	山原
990-351	灰岩	M4	19	13.8 4.2	7.4 0.8	否	良好	石ナデ	ナデ	ナデ	有	山原	山原
991-351	灰岩	T2	65	14.2 4.5	6.6 0.8	否	良好	石ナデ	ナデ	ナデ	有	山原	山原
992-351	灰岩	S801	南	13.5 4.5	6.6 0.8	否	良好	石ナデ	ナデ	ナデ	有	山原	山原
993-351	灰岩	100-351	100-351	14.9 4.3	6.6 0.7	否	良好	石ナデ	ナデ	ナデ	有	山原	山原
994-351	灰岩	S801	南	14.6 4.0	6.6 0.7	否	良好	石ナデ	ナデ	ナデ	有	山原	山原
995-351	灰岩	CS	56	6.3 0.7	良好	石	ナデ	ナデ	ナデ	有	山原	山原	
996-351	灰岩	V3	26	13.2 4.6	6.4 0.5	否	良好	石ナデ	ナデ	ナデ	有	山原	山原
997-351	灰岩	C5	47	12.8 4.5	6.7 0.7	否	良好	石ナデ	ナデ	ナデ	有	山原	山原
998-351	灰岩	A4	19	15.4 4.0	7.0 0.9	否	良好	石ナデ	ナデ	ナデ	有	山原	山原
999-351	灰岩	Z3	31	13.2 4.2	6.3 0.9	否	良好	石	ナデ	ナデ	有	山原	山原
1000-351	灰岩	Z3	31	13.1 4.1	6.5 0.7	否	良好	石ナデ	ナデ	ナデ	有	山原	山原
1001-351	灰岩	B4	44	13.5 4.1	6.5 0.8	否	良好	石ナデ	ナデ	ナデ	有	山原	山原
1002-351	灰岩	K3	45	12.9 4.1	6.5 0.8	否	良好	石ナデ	ナデ	ナデ	有	山原	山原
1003-351	灰岩	C5	55	15.6 4.0	6.5 0.8	否	良好	石ナデ	ナデ	ナデ	有	山原	山原
1004-351	灰岩	N3	36	13.2 3.8	6.6 0.7	否	良好	石ナデ	ナデ	ナデ	有	山原	山原
1005-351	灰岩	A4	36	13.3 3.8	6.8 0.7	否	良好	石ナデ	ナデ	ナデ	有	山原	山原
1006-351	灰岩	S801	南	13.2 3.5	6.6 0.8	否	良好	石ナデ	ナデ	ナデ	有	山原	山原

遺物番号	神奈川県	横浜市	町名	丁目番	階高	最大高	高台	高台 傾斜	地上	地盤	色調	傾斜 方向	既述 類型	由来 既述	現存率 (%)	高台	地盤	軒用	備考		
1007_355_190	戸塚区	戸塚	S301	編	13	6.3	3.7		6.0	0.7	無	良好	灰白	石	木製構	90	戸塚	無			
1008_355_190	戸塚区	戸塚	33	編	13	6.3	3.8		6.0	0.6	無	良好	灰白	石	ナダ	15	戸塚	瓦片で軒用			
1009_355_190	戸塚区	戸塚	A3	編	13	6.5	4.2		6.5	0.8	無	良好	灰白	石	木製構	68	戸塚	瓦片			
1010_355_190	戸塚区	戸塚	10m442	編	14.0	(3.7)						良好	灰白	石	木製構	8	戸塚	瓦片			
1011_355_190	戸塚区	戸塚	Y3	編	24				6.2	1.1	無	良好	灰白	石	ナダ	ナダ	50	戸塚	瓦片		
1012_355_190	戸塚区	戸塚	Y3	編	31				14.0	0.2	無	良好	灰白	石	木製構	15	戸塚	瓦片			
1013_355_190	戸塚区	戸塚	23	編	31				14.0	0.2	無	良好	灰白	石	木製構	7	戸塚	瓦片			
1014_355_190	戸塚区	戸塚	23	編	31				14.0	0.2	無	良好	灰白	石	ナダ	ナダ	65	戸塚	瓦片		
1015_355_190	戸塚区	戸塚	44	編	12.2	3.6			6.4	0.8	無	良好	灰白	石	ナダ	ナダ	33	戸塚	瓦片		
1016_355_190	戸塚区	戸塚	23	編	34				13.6	4.3		良好	灰白	石	ナダ	ナダ	70	戸塚	瓦片 不明		
1017_355_190	戸塚区	戸塚	84	編	14.0	4.0			6.4	0.7	無	良好	灰白	石	ナダ	ナダ	50	戸塚	瓦片		
1018_355_190	戸塚区	戸塚	A4	編	14.2	4.2			6.8	0.8	無	良好	灰白	石	ナダ	ナダ	13	戸塚	瓦片		
1019_355_190	戸塚区	戸塚	出町原	編	12.8	(3.8)			5.9	0.8	無	良好	灰白	右	ナダ	ナダ	40	戸塚	瓦片 体用		
1020_355_190	戸塚区	戸塚	新町原	編	(L.7)											20	戸塚	瓦片			
1021_355_190	戸塚区	戸塚	新町原	編	11.4	(2.7)			5.8	0.9	無	良好	灰白	右		90	戸塚	瓦片 体用			
1022_355_190	戸塚区	戸塚	新町原	編	(4.6)				7.1	1.3	無	良好	灰白	右		10	戸塚	瓦片			
1023_355_190	戸塚区	戸塚	新町原	編	(2.0)				6.0	0.8	無	良好	灰白	右	木製構	30	戸塚	瓦片			
1024_355_190	戸塚区	戸塚	新町原	編	13.3	5.0			6.9	1.0	無	良好	灰白	右	木製構	25	戸塚	瓦片			
1025_356_191	戸塚区	戸塚	Y1	編	12.6	4.5			6.6	0.9	無	良好	灰白	右	木製構	60	戸塚	瓦片			
1026_356_191	戸塚区	戸塚	A4	編	14.4	4.9			5.5	0.9	無	良好	灰白	右	木製構	33	戸塚	瓦片			
1027_356_191	戸塚区	戸塚	A1	編	14.2	(5.1)			6.7	1.0	無	良好	灰白	右	木製構	15	戸塚	瓦片 不明			
1028_356_191	戸塚区	戸塚	22	編	15.2	5.2			7.4	1.4	無	良好	灰白	右	ナダ	ナダ	20	戸塚	瓦片		
1029_356_191	戸塚区	戸塚	Y1	編	15.2	6.4			7.8	1.0	無	良好	灰白	右	ナダ	ナダ	33	戸塚	瓦片		
1030_356_191	戸塚区	戸塚	S301	編	15.1	6.5			7.8	1.1	無	良好	灰白	右	ナダ	ナダ	25	戸塚	瓦片 無		
1031_356_191	戸塚区	戸塚	A3	編	17.0	(5.1)			6.7	1.0	無	良好	灰白	右	木製構	25	戸塚	瓦片			
1032_356_191	戸塚区	戸塚	24	28-43	編	16.5	7.0		8.0	1.4	無	良好	灰白	右	木製構	100	戸塚	瓦片 有			
1033_356_191	戸塚区	戸塚	S301	編	14.3	(5.9)			6.7	1.0	無	良好	灰白	右	木製構	15	戸塚	瓦片			
1034_356_192	戸塚区	戸塚	A4	編	15.9	6.3			7.4	1.4	無	良好	灰白	右	木製構	70	戸塚	瓦片 有やむけ			
1035_356_192	戸塚区	戸塚	23	編	16.1	5.8			7.9	1.1	無	良好	灰白	右	ナダ	ナダ	60	戸塚	瓦片		
1036_356_192	戸塚区	戸塚	Y4	編	16.6	6.0			7.7	1.2	無	良好	灰白	右	ナダ	ナダ	50	戸塚	瓦片		
1037_356_192	戸塚区	戸塚	A5	編	14.9	5.9			7.7	1.1	無	良好	灰白	右	木製構	35	戸塚	瓦片			
1038_356_191	戸塚区	戸塚	A2	編	15.7	6.1			7.3	1.2	無	良好	灰白	右	ナダ	ナダ	50	戸塚	瓦片 有		
1039_356_191	戸塚区	戸塚	22	編	15.2	6.5			8.0	1.2	無	良好	灰白	右	ナダ	ナダ	65	戸塚	瓦片 有		
1040_356_191	戸塚区	戸塚	22	編	16.1	(4.9)			6.7	1.0	無	良好	灰白	右	木製構	15	戸塚	瓦片 有			
1041_356_191	戸塚区	戸塚	Y2	編	14.8	5.3			7.7	1.4	無	良好	灰白	右	木製構	50	戸塚	瓦片			
1042_356_191	戸塚区	戸塚	A4	編	16.0	6.1			7.8	1.2	無	良好	灰白	右	ナダ	ナダ	25	戸塚	瓦片		
1043_356_191	戸塚区	戸塚	S301	編	15.1	5.4			7.5	1.1	無	良好	灰白	右	木製構	80	戸塚	瓦片			
1044_356_191	戸塚区	戸塚	A1	編	15.4	5.5			7.7	1.2	無	良好	灰白	右	木製構	10	戸塚	瓦片 有 内面付			
1045_356_191	戸塚区	戸塚	24	28-43	編	17.1	7.2		7.8	1.2	無	良好	灰白	右	木製構	25	戸塚	瓦片 有			
1046_357_287	戸塚区	戸塚	24	編	17.9	(5.1)			6.7	1.0	無	良好	灰白	右	木製構	35	戸塚	瓦片 不明			
1047_357_287	戸塚区	戸塚	C6	編	19.2	6.9			7.9	1.3	無	良好	灰白	右	木製構	40	戸塚	瓦片 2nd 瓦片付			
1048_357_287	戸塚区	戸塚	A4	42	編	15.4	(6.5)			6.7	1.0	無	良好	灰白	右	木製構	50	戸塚	瓦片 有		
1049_357_287	戸塚区	戸塚	A4	31	編	17.0	(4.6)			6.7	1.0	無	良好	灰白	右	木製構	25	戸塚	瓦片 地		
1050_357_287	戸塚区	戸塚	Y3	編	15.4	5.4			7.4	1.1	無	良好	灰白	右	木製構	15	戸塚	瓦片			
1051_357_287	戸塚区	戸塚	Y3	編	19.0	(5.8)			7.7	1.1	無	良好	灰白	右	木製構	25	戸塚	瓦片 不明			
1052_357_287	戸塚区	戸塚	C5	25	編	18.9	(3.0)			7.7	1.1	無	良好	灰白	右	木製構	50	戸塚	瓦片 不明		
1053_357_287	戸塚区	戸塚	C5	24	編	17.0	5.5			7.6	1.4	無	良好	灰白	右	ナダ	ナダ	60	戸塚	瓦片 不明	
1054_357_287	戸塚区	戸塚	A4	19-31	編	16.8	(4.4)			7.6	1.4	無	良好	灰白	右	木製構	50	戸塚	瓦片 不明		
1055_357_287	戸塚区	戸塚	Y5	47	編	16.0	(4.5)			6.7	1.0	無	良好	灰白	右	木製構	30	戸塚	瓦片 不明		
1056_357_287	戸塚区	戸塚	Y5	54	編	18.6	6.1			8.0	1.1	無	良好	灰白	右	木製構	60	戸塚	瓦片 有		
1057_357_287	戸塚区	戸塚	C5	51	編	18.8	5.7			7.7	1.1	無	良好	灰白	右	ナダ	ナダ	70	戸塚	瓦片 不明	
1058_357_287	戸塚区	戸塚	C5	31-52	編	15.8	5.4			8.0	1.0	無	良好	灰白	右	ナダ	ナダ	50	戸塚	瓦片 不明	
1059_357_287	戸塚区	戸塚	Z4	43	編	16.7	5.3			7.2	1.1	無	良好	灰白	右	ナダ	ナダ	50	戸塚	瓦片 不明	
1060_357_287	戸塚区	戸塚	Z4	22	編	15.4	(3.4)			6.7	1.0	無	良好	灰白	右	木製構	50	戸塚	瓦片 有		
1061_357_192	戸塚区	戸塚	Z4	24	編	16.4	(5.3)			6.7	1.0	無	良好	灰白	右	木製構	75	戸塚	瓦片 不明		
1062_357_192	戸塚区	戸塚	Z4	45	編	16.4	(5.3)			6.7	1.0	無	良好	灰白	右	木製構	75	戸塚	瓦片 不明		
1063_357_192	戸塚区	戸塚	Z4	25	編	16.4	(5.3)			6.7	1.0	無	良好	灰白	右	木製構	75	戸塚	瓦片 不明		
1064_357_192	戸塚区	戸塚	Z4	23	編	16.1	(5.3)			6.7	1.0	無	良好	灰白	右	木製構	75	戸塚	瓦片 不明		
1065_357_192	戸塚区	戸塚	Z4	24	編	16.1	(5.3)			6.7	1.0	無	良好	灰白	右	木製構	75	戸塚	瓦片 不明		
1066_357_192	戸塚区	戸塚	Z4	25	編	16.1	(5.3)			6.7	1.0	無	良好	灰白	右	木製構	75	戸塚	瓦片 不明		
1067_357_192	戸塚区	戸塚	Z4	26	編	16.1	(5.3)			6.7	1.0	無	良好	灰白	右	木製構	75	戸塚	瓦片 不明		
1068_357_192	戸塚区	戸塚	Z4	27	編	16.1	(5.3)			6.7	1.0	無	良好	灰白	右	木製構	75	戸塚	瓦片 不明		
1069_357_192	戸塚区	戸塚	Z4	28	編	16.1	(5.3)			6.7	1.0	無	良好	灰白	右	木製構	75	戸塚	瓦片 不明		
1070_357_192	戸塚区	戸塚	Z4	29	編	16.1	(5.3)			6.7	1.0	無	良好	灰白	右	木製構	75	戸塚	瓦片 不明		
1071_357_192	戸塚区	戸塚	Z4	30	編	16.1	(5.3)			6.7	1.0	無	良好	灰白	右	木製構	75	戸塚	瓦片 不明		
1072_357_192	戸塚区	戸塚	Z4	31	編	16.1	(5.3)			6.7	1.0	無	良好	灰白	右	木製構	75	戸塚	瓦片 不明		
1073_357_192	戸塚区	戸塚	Z4	32	編	16.1	(5.3)			6.7	1.0	無	良好	灰白	右	木製構	75	戸塚	瓦片 不明		
1074_357_192	戸塚区	戸塚	Z4	33	編	16.1	(5.3)			6.7	1.0	無	良好	灰白	右	木製構	75	戸塚	瓦片 不明		
1075_357_192	戸塚区	戸塚	Z4	34	編	16.1	(5.3)			6.7	1.0	無	良好	灰白	右	木製構	75	戸塚	瓦片 不明		
1076_357_192	戸塚区	戸塚	Z4	35	編	16.1	(5.3)			6.7	1.0	無	良好	灰白	右	木製構	75	戸塚	瓦片 不明		
1077_357_192	戸塚区	戸塚	Z4	36	編	16.1	(5.3)			6.7	1.0	無	良好	灰白	右	木製構	75	戸塚	瓦片 不明		
1078_357_192	戸塚区	戸塚	Z4	37	編	16.1	(5.3)			6.7	1.0	無	良好	灰白	右	木製構	75	戸塚	瓦片 不明		
1079_357_192	戸塚区	戸塚	Z4	38	編	16.1	(5.3)			6.7	1.0	無	良好	灰白	右	木製構	75	戸塚	瓦片 不明		
1080_357_192	戸塚区	戸塚	Z4	39	編	16.1	(5.3)			6.7	1.0	無	良好	灰白	右	木製構	75	戸塚	瓦片 不明		
1081_357_192	戸																				

番号	種別	固形物	位置	アキラ	部位	性状	認高	輪大径	高台(底) 移	荷重 高	筋	皮膚	筋膜	筋膜 方向	筋膜 調節	内因 筋膜調整	既存筋膜	既存筋膜		備考	
																		高台 (%)	底部 (%)		
1062	357	灰原	44	42	輪	17.9	(4.0)				筋	良好	灰黄	右				白筋膜～ 体部	17	有	
1063	357	灰原	44	42	輪	14.6	(4.9)				筋	良好	灰黄	右				白筋膜～ 体部	15	有	筋む
1064	357	灰原	33	24-25	輪	17.2	(5.2)				筋	良好	灰黄	右				白筋膜～ 体部	90	筋強	不明
1065	357	灰原	24	26	輪	14.5	(4.6)				筋	良好	灰	右				白筋膜～ 体部	15	有	筋む
1066	357	灰原	32	24	輪	16.2	(4.5)				筋	やや 不良	灰灰	右	不明	不明			30	有	
1067	357	灰原	44	31-36	輪	15.4	5.7		7.3	6.9	筋	過度	灰白	右	難なナダ	ナダ			40	有	
1068	357	灰原	43	13	輪		(2.5)				筋	良好	灰白	右				白筋膜	5	有	
1069	357	灰原	24	64	輪		(3.7)				筋	良好	灰白	右				白筋膜	5	有	不明
1070	357	灰原	44	48	輪花輪	18.8	(4.6)				筋	良好	灰黄	右				白筋膜～ 体部	25	有	
1071	357	259	灰原	44	45	輪花輪		(4.1)			筋	良好	灰白	右				白筋膜	5	有	
1072	357	259	灰原	44	21	輪花輪		(4.0)			筋	良好	灰黃	右				白筋膜	8	有	
1073	357	259	灰原	44	53	輪		(3.8)			筋	良好	灰黃	右				白筋膜	8	有	
1074	357	259	灰原	45	53	輪		(2.7)			筋	良好	灰白	右				白筋膜	5	有	
1075	358	灰原	A45	44	輪		(1.7)			8.6	筋	良好	灰黄	丸	ナダ	未調節	底部	100	不明		
1076	358	灰原	43	13	輪		(1.8)			5.7	筋	良好	灰白	右	ナダ	ナダ	底部	100	有	繊片で軽用	
1077	358	灰原	24	22	輪		(2.9)			7.9	筋	過度	灰黄	右	難なナダ	不明	体部下半 ～底部	75	38d	繊片で軽用	
1078	358	灰原	32	24	輪		(4.6)			7.6	筋	良好	灰黃	右	ナダ	回転ナダ	底部	45	有		
1079	358	灰原	5801	44	22	輪		(2.8)		7.1	1.1	筋	良好	灰白	右	ナダ	ナダ	底部	100	有	
1080	358	灰原	24	22	輪		(2.5)			6.7	0.6	筋	良好	灰黃	右	ナダ	回転ナダ	底部	100	不明	
1081	358	灰原	24	43	輪		(3.4)			6.6	0.7	筋	良好	灰黃	右	ナダ	ナダ	底部	75	ソダ灰	有
1082	358	灰原	44	36	輪		(3.4)			6.5	1.0	筋	良好	灰白	右	未調整	回転ナダ	底部	80	ソダ灰	有
1083	358	灰原	45	51	輪		(3.9)			7.7	1.1	筋	良好	灰黃	右	ナダ	ナダ	底部	100	ソダ灰	有
1084	358	灰原	73	85	輪		(3.2)			7.7	1.0	筋	良好	灰	不明	難なナダ	ナダ	底部	35	有	
1085	358	灰原	45	31	輪		(2.8)			7.4	1.3	筋	良好	灰黃	右	ナダ	ナダ	底部	40	有	
1086	358	灰原	24	43	輪		(3.3)			7.9	1.2	筋	不良	灰白	右	ナダ	ナダ	底部	75	有	
1087	358	灰原	24	43	輪		(3.2)			7.9	1.0	筋	良好	灰白	右	ナダ	不明	底部	45	28d	
1088	358	灰原	32	24	輪		(3.3)			7.6	1.3	筋	不良	灰白	右	ナダ	ナダ	底部	75	有	
1089	358	灰原	32	24	輪		(1.8)			7.6	1.2	筋	良好	灰白	右	ナダ	ナダ	底部	100	有	筋む
1090	358	灰原	24	22	輪		(2.5)			7.6	1.0	筋	良好	灰白	右	難なナダ	ナダ	底部	40	有	
1091	358	灰原	45	50	輪		(1.9)			6.5	0.6	筋	良好	灰白	右	ナダ	ナダ	底部	20	28d	2個体軽着
1091	358	灰原	45	50	輪		(1.4)			7.0	0.9	筋	良好	灰白	丸	ナダ	ナダ	底部	20	28d	
1092	358	灰原	24	22	輪		(2.5)			6.4	0.7	筋	良好	灰白	右	ナダ	回転ナダ	底部	75	有	繊片で軽用
1093	358	灰原	24	22	輪		(2.9)			6.9	0.6	筋	良好	灰白	右	ナダ	回転ナダ	底部	75	有	繊片で軽用
1094	358	184	灰原	44	42	輪		(3.0)		6.4	0.7	筋	良好	灰白	右	ナダ	ナダ	底部	36	有	
1095	358	灰原	23	22	輪		(2.1)			6.5	0.7	筋	良好	灰白	右	ナダ	ナダ	底部	100	ソダ灰	有
1096	358	灰原	5801	44	22	輪		(3.2)		6.8	0.6	筋	良好	灰黃	右	ナダ	ナダ	底部	75	ソダ灰	有
1097	358	灰原	A45	44	輪		(2.2)			6.9	0.7	筋	過度	灰黄	右	ナダ	ナダ	底部	100	有	繊片で軽用
1098	358	灰原	24	22	輪		(2.0)			5.9	0.8	筋	良好	灰白	右	ナダ	ナダ	底部	50	ソダ灰	有
1099	358	灰原	B4	31	輪		(2.5)			7.8	1.1	筋	良好	灰白	右	ナダ	ナダ	底部	100	有	
1100	358	灰原	A45	44	輪		(1.8)			7.7	1.2	筋	不良	灰白	右	難なナダ	ナダ	底部	100	不明	
1101	358	灰原	V3	25	輪		(2.4)			6.9	0.8	筋	良好	灰黃	右	ナダ	ナダ	底部	100	有	
1102	358	灰原	A3	31	輪		(3.2)			8.4	1.2	筋	良好	灰黃	右	ナダ	ナダ	底部	50	有	
1103	358	灰原	23	22	輪		(2.1)			6.8	0.7	筋	良好	灰白	右	ナダ	ナダ	底部	80	筋強	有
1104	358	灰原	Y4	25	輪		(2.7)			8.0	1.1	筋	良好	灰黃	右	難なナダ	ナダ	底部	50	ソダ灰	有
1105	358	灰原	A45	44	輪		(2.9)			7.6	0.9	筋	良好	灰白	右	ナダ	ナダ	底部	100	有	
1106	358	灰原	Y4	25	輪		(3.8)			7.3	1.0	筋	良好	灰白	右	ナダ	ナダ	底部	100	有	
1107	358	灰原	44	19	輪		(3.7)			7.9	1.0	筋	良好	灰白	右	難なナダ	ナダ	底部	75	筋強	有
1108	358	灰原	33	24	輪		(2.6)			7.8	1.3	筋	良好	灰白	右	ナダ	ナダ	底部	100	不明	
1109	358	灰原	73	3801	輪		(2.7)			7.8	1.1	筋	不良	灰白	右	ナダ	ナダ	底部	20	ソダ灰	無
1110	358	灰原	69	69	輪		(2.5)			6.7	0.6	筋	良好	灰白	右	難なナダ	ナダ	底部	75	筋強	有
1111	358	灰原	23	22	輪		(5.0)			7.7	1.1	筋	良好	灰白	右	ナダ	ナダ	底部	75	有	
1112	358	灰原	23	85	輪		(2.5)			8.1	1.0	筋	不良	灰白	右	回転	ナダ	底部	100	有	
1113	358	灰原	5801	44	輪		(3.3)			7.9	1.1	筋	良好	灰白	右	難なナダ	ナダ	底部	90	筋強	繊片で軽用 スヌヌ
1114	358	灰原	74	22	輪		(2.6)			7.8	1.2	筋	良好	灰白	右	難なナダ	ナダ	底部	100	筋強	有
1115	358	灰原	45	25	托		(3.1)			8.2	1.5	筋	不良	灰白	右	難なナダ	ナダ	底部	100	有	
1116	358	灰原	84	31	托		(4.6)			9.1	2.0	筋	良好	灰白	右	ナダ	ナダ	底部	100	3回	筋強
1117	358	灰原	44	42	托		(3.4)			9.0	2.5	筋	良好	灰白	右	木調節	底部	25	筋強		
1118	358	灰原	73	26	托		(2.6)			7.8	1.9	筋	不良	灰白	右	不明	ナダ	底部	25	不明	
1119	358	灰原	A3	31	托		(3.4)			8.6	1.7	筋	良好	灰白	右	ナダ	ナダ	底部	50	有	
1120	358	260	灰原	23	24	托				12.9	2.9	筋	良好	灰白	右	既往	ナダ	底部	25	薄上	
1121	358	灰原	44	14	托		(4.4)			14.0	4.4	筋	良好	灰白	右	既往	ナダ	底部	4	有	

植物名	種類	固有数	出上	年	調査区	調査期	標高	最大径	形態	高さ	地質	色調	被覆	底泥	内面	底泥解説	保存率	高さ	施種	乾用	備考
1122	362	196	原原	81	調査区	長距離	11.0	(1.0)	複数	最高	灰白	右	被覆	底泥	内面	底泥解説	35	有			
1123	362	200	原原	81	調査区	長距離	11.5	(1.0)	複数	最高	灰白	右	被覆	底泥	内面	底泥解説	25	有			
1124	362	196	BON	85	調査区	長距離	13.0	(6.1)	複数	最高	灰白	右	被覆	底泥	内面	底泥解説	20	有			
1125	362	200	原原	73	調査区	長距離	13.0	(6.1)	複数	最高	灰白	右	被覆	底泥	内面	底泥解説	7	有			
1126	362	196	原原	72	調査区	長距離	14.4	(20.7)	19.5	複数	最高	灰白	右	被覆	底泥	内面	底泥解説	80	有		
1126	362	196	原原	73	調査区	長距離	25-26		31-36	複数	最高	灰白	右	被覆	底泥	内面	底泥解説	80	有		
1127	362	200	原原	31	調査区	長距離	28.0	(4.0)	複数	最高	灰白	右	被覆	底泥	内面	底泥解説	20	有			
1128	362	200	原原	23	調査区	長距離	28.1	(2.0)	複数	最高	灰白	右	被覆	底泥	内面	底泥解説	5	有			
1129	362	200	原原	30	調査区	長距離	28.0	(5.7)	複数	最高	灰黄	右	被覆	底泥	内面	底泥解説	10	有			
1130	362	200	原原	21	調査区	長距離	28.0	(1.7)	複数	最高	灰黄	右	被覆	底泥	内面	底泥解説	8	有			
1131	362	200	原原	31	調査区	長距離	28.0	(1.7)	複数	最高	灰黄	左	被覆	底泥	内面	底泥解説	13	有			
1132	362	200	原原	18	調査区	長距離	28.0	(3.3)	複数	最高	灰白	右	被覆	底泥	内面	底泥解説	10	有			
1133	362	200	原原	23	調査区	長距離	28.0	(9.4)	複数	最高	灰白	右	被覆	底泥	内面	底泥解説	25	有			
1134	362	196	原原	24	調査区	長距離	28.0	(10.7)	複数	最高	灰黄	左	被覆	底泥	内面	底泥解説	25	有			
1134	362	196	原原	23	調査区	長距離	28.0	(1.0)	複数	最高	灰白	右	被覆	底泥	内面	底泥解説	10	有			
1134	362	196	原原	31	調査区	長距離	28.0	(5.4)	複数	最高	灰白	右	被覆	底泥	内面	底泥解説	22	有			
1134	362	196	原原	31	調査区	長距離	28.0	(5.4)	複数	最高	灰白	右	被覆	底泥	内面	底泥解説	60	有			
1135	362	196	原原	44	調査区	長距離	27.4	(13.4)	複数	最高	灰黄	右	被覆	底泥	内面	底泥解説	10	有			
1135	362	196	原原	23	調査区	長距離	28.0	(1.0)	複数	最高	灰白	右	被覆	底泥	内面	底泥解説	10	有			
1136	363	200	原原	24	調査区	長距離	28.0	(7.1)	複数	最高	灰白	右	被覆	底泥	内面	底泥解説	22	有			
1137	363	197	原原	25	調査区	長距離	28.0	(0.0)	複数	最高	灰黄	右	被覆	底泥	内面	底泥解説	10	有			
1138	363	196	原原	44-45	調査区	長距離	28.0	(10.5)	複数	最高	灰白	右	被覆	底泥	内面	底泥解説	60	有			
1139	363	196	原原	23	調査区	長距離	28.0	(8.7)	複数	最高	灰白	右	被覆	底泥	内面	底泥解説	6	有			
1140	363	196	原原	23	調査区	長距離	28.0	(1.8)	複数	最高	灰白	右	被覆	底泥	内面	底泥解説	5	有			
1141	363	196	原原	24	調査区	長距離	28.0	(5.4)	複数	最高	灰白	右	被覆	底泥	内面	底泥解説	10	有			
1142	363	196	原原	45	調査区	長距離	28.0	(2.6)	複数	最高	灰黄	右	被覆	底泥	内面	底泥解説	29	有			
1143	363	196	原原	22	調査区	長距離	28.0	(23.3)	複数	最高	灰黄	左	被覆	底泥	内面	底泥解説	50	有			
1144	363	196	原原	24	調査区	長距離	28.0	(14.0)	複数	最高	灰黄	右	被覆	底泥	内面	底泥解説	25	有			
1145	363	196	原原	31	調査区	長距離	28.0	(6.1)	複数	最高	灰黄	右	被覆	底泥	内面	底泥解説	15	有			
1146	363	196	原原	31	調査区	長距離	28.0	(6.5)	複数	最高	灰黄	左	被覆	底泥	内面	底泥解説	20	有			
1147	363	196	原原	24	調査区	長距離	28.0	(12.1)	複数	最高	灰黄	右	被覆	底泥	内面	底泥解説	25	有			
1148	365	196	原原	24	調査区	長距離	28.0	(8.1)	複数	最高	灰黄	右	被覆	底泥	内面	底泥解説	15	有			
1149	365	196	原原	31	調査区	長距離	28.0	(4.0)	複数	最高	灰白	右	被覆	底泥	内面	底泥解説	8	有			
1150	365	196	原原	31	調査区	長距離	28.0	(5.0)	複数	最高	灰白	右	被覆	底泥	内面	底泥解説	10	有			
1151	365	196	原原	26	調査区	長距離	28.0	(6.9)	複数	最高	灰白	右	被覆	底泥	内面	底泥解説	15	有			
1152	365	196	原原	26	調査区	長距離	28.0	(5.0)	複数	最高	灰白	右	被覆	底泥	内面	底泥解説	10	有			
1153	365	196	原原	45	調査区	長距離	28.0	(1.0)	複数	最高	灰白	右	被覆	底泥	内面	底泥解説	10	有			
1154	365	196	原原	24	調査区	長距離	28.0	(1.7)	複数	最高	灰白	右	被覆	底泥	内面	底泥解説	9	有			
1155	365	196	原原	47	調査区	長距離	28.0	(7.2)	複数	最高	灰黄	右	被覆	底泥	内面	底泥解説	20	有			
1156	365	196	原原	23	調査区	長距離	28.0	(8.8)	複数	最高	灰白	右	被覆	底泥	内面	底泥解説	12	有			
1157	365	196	原原	44	調査区	長距離	28.0	(27.1)	複数	最高	灰白	右	被覆	底泥	内面	底泥解説	15	有			
1158	366	196	原原	24	調査区	長距離	28.0	(15.8)	複数	最高	灰白	右	被覆	底泥	内面	底泥解説	40	有			
1159	366	196	原原	24	調査区	長距離	28.0	(1.0)	複数	最高	灰白	右	被覆	底泥	内面	底泥解説	15	有			
1160	366	196	原原	31	調査区	長距離	28.0	(3.1)	複数	最高	灰白	右	被覆	底泥	内面	底泥解説	10	有			
1161	366	196	原原	24	調査区	長距離	28.0	(7.2)	複数	最高	灰白	右	被覆	底泥	内面	底泥解説	15	有			
1162	366	196	原原	24	調査区	長距離	28.0	(6.2)	複数	最高	灰白	右	被覆	底泥	内面	底泥解説	10	有			
1163	366	196	原原	31	調査区	長距離	28.0	(9.4)	複数	最高	灰白	右	被覆	底泥	内面	底泥解説	10	有			
1164	366	196	原原	24	調査区	長距離	28.0	(10.2)	複数	最高	灰白	左	被覆	底泥	内面	底泥解説	20	有			
1165	366	196	原原	44	調査区	長距離	28.0	(7.0)	複数	最高	灰白	右	被覆	底泥	内面	底泥解説	5	有			
1166	366	196	原原	31	調査区	長距離	28.0	(3.6)	複数	最高	灰白	右	被覆	底泥	内面	底泥解説	5	有			
1167	366	196	原原	24	調査区	長距離	28.0	(4.4)	複数	最高	灰白	左	被覆	底泥	内面	底泥解説	5	有			
1168	366	196	原原	24	調査区	長距離	28.0	(4.4)	複数	最高	灰白	右	被覆	底泥	内面	底泥解説	5	有			
1169	367	200	原原	31	調査区	長距離	28.0	(3.4)	複数	最高	灰白	右	被覆	底泥	内面	底泥解説	20	有			
1170	367	200	原原	44	調査区	長距離	28.0	(2.7)	複数	最高	灰白	右	被覆	底泥	内面	底泥解説	17	有			
1171	367	200	原原	24	調査区	長距離	28.0	(3.8)	複数	最高	灰白	左	被覆	底泥	内面	底泥解説	35	有			
1172	367	200	原原	25	調査区	長距離	28.0	(2.0)	複数	最高	灰白	右	被覆	底泥	内面	底泥解説	20	有			
1173	367	200	原原	73	調査区	長距離	28.0	(3.8)	複数	最高	灰白	左	被覆	底泥	内面	底泥解説	35	有			

植物 学名	固有 名	出子 数	代数	部位	沿標	日標	露面	最大 植高	高台 高	地成 高	色調	輪輪 方向	武部 状況	内面 状況	現存部段	保存率 (%)	高台	瓶標	粘用	備考
																	高台下半	高台上半	瓶標下半	瓶標上半
1174 367	灰原	B4	31	跡小造		16.1)	16.1)	1.8	高	良好	灰黄	左			休部下半	15		右?		
1175 367	灰原	A3	31	跡小造			6.5	17.1	1.4	高	良好	灰白	左			休部下半	12	高土	右	
1176 367	灰原	A4	21	跡小造			(6.0)			高	良好	灰白	左			休部下半	15		右	
1177 367	灰原		25	跡小造			(4.0)			高	良好	灰黄	右			休部下半	15		右	
1178 367 200	灰原	A5	50	跡小造			(4.2)			高	良好	灰黄	左			休部下半	30		右?	
1179 367 200	灰原	C5	31	跡小造		(15.5)		16.6		高	良好	灰黄	左			休部下半	25	黄土	右	
1180 368 200	灰原	B4	31	跡小造		(5.0)		11.6		高	良好	灰黄	右	黒り?		休部下半	25			
1181 368	灰原	B4	66	跡小造		(3.7)		15.0		高	良好	灰黄	左			休部下半	13		右	
1182 368	灰原	A3	31	跡小造		(4.0)		14.4		高	良好	灰黄	左			休部下半	20		右?	
1183 368	灰原	E2	21	跡小造		(0.4)		11.1		高	不良	灰	不明	黒?		休部下半	20		黒?	
1184 368	灰原	Z3	22	跡小造		(1.2)		26.0		高	良好	灰黄	右	黒り?		休部下半	5	黄土	右	
1185 368	灰原	A157	跡小造		(3.2)		32.1			高	良好	灰黄	右	黒?		休部下半	20		黒?	
1186 368 200	灰原	黒丸	跡小造		(14.0)			26.0		高	不良	灰白	右			休部下半	8			
1187 368 201	灰原	S801	赤野鹿 虫忠麿 哉		29.4	(6.3)				高	不良	虫忠麿 哉	左	黒?		休部下半	8			
1188 368	灰原	黒丸			(2.7)		7.6	0.5		高	良好	灰	左	黒?	ナデ	底部	10			
1189 369	灰原	C5	跡小造 山田作		(8.4)					高	良好	灰黄	右			休部下半	10	黄土	有	
1190 369	灰原	Z3	跡小造		(18.6)					高	良好	灰黄	右			休部下半	10	黄土	有	
1191 369	灰原	Z4	跡小造		(14.0)					高	良好	灰黄	右			休部下半	5	黄土	有	
1192 369	灰原	A4	跡小造		(19.9)					高	良好	灰黄	右			休部下半	10	黄土	有	
1193 369	灰原	C5	跡小造		(4.0)					高	良好	灰黄	右			休部下半	8	有		
1194 369	灰原	C5	跡小造		(6.5)					高	良好	灰黄	右			休部下半	8	黄土	有	
1195 369	灰原	Z3	跡小造		(9.2)					高	良好	灰黄	右			休部下半	8	黄土	有	
1196 369	灰原	A4	跡小造		(0.7)					高	良好	灰黄	右			休部下半	5	黄土	有	
1197 369	灰原	A157	跡小造		(17.0)					高	良好	灰黄	右			休部下半	5	黄土	有	
1198 369	灰原	Z4	28							高	良好	灰黄	右			休部下半	10	黄土	有	
1199 369	灰原	A4	31	跡小造		(13.0)				高	良好	灰黄	右			休部下半	10	黄土	有	
1200 370 183	灰原	A3	13	規						高	良好	灰白	左			休部下半	10	黄土	有	
1201 370	灰原	Z3	26	規						高	やや不良	灰黄	右			休部下半	10	黑		
1202 370 183	灰原		黒造具							高	やや不良	灰白	左			休部下半	8			
1203 370 183	灰原		黒造具							高	やや不良	灰白	右			休部下半	8			
1204 370 204	灰原		規							高	やや不良	灰白	左			休部下半	100	黒		
1205 371 195	灰原	T3	25	國		(3.8)	6.6	1.2	高	良好	灰白	右	ナデ	ナデ	底部	60			地台付着	
1206 371 195	灰原	Z3	26	國		(2.7)	6.4	0.7	高	良好	灰白	右	ナデ	ナデ	底部	100			立体付着	
1207 371 195	灰原	C5	83	國		(2.5)	6.6		高	良好	灰白	右	ナデ	ナデ	底部	30			地台付着	
1208 371 195	灰原	C5	83	國						高	良好	灰白	右			休部下半	100	有		
1209 371 195	灰原	S801	國		(1.0)		6.0			高	良好	灰白	右			休部下半	100	有		
1209 371 195	灰原	C5	84	國		(5.0)	6.3	1.1	高	良好	灰白	右	ナデ	ナデ	底部	100	有		地台付着	
1210 371 195	灰原	A5	85	國		(2.0)	6.0	0.9	高	良好	灰白	右	ナデ	ナデ	底部	100	有		地台付着	
1211 371 195	灰原	T3	26	國		(1.9)	6.3		高	良好	灰白	右	ナデ	ナデ	底部	100	有		地台付着	
1212 371 195	灰原	A5	86	跡小造		(8.0)			高	良好	灰白	右	ナデ	ナデ	底部	5	黄土	有	地台付着	
1213 371 195	灰原	A5	86	成合						高	良好	灰白	右			休部下半	30			
1214 371 204	灰原		成合							高	良好	灰白	右			休部下半	30			
1215 371 204	灰原		成合							高	良好	灰白	右			休部下半	70			
1216 373 191	SF96	櫛七	綱		12.6	3.9	6.1	0.8	高	良好	灰白	右	ナデ	ナデ	底部	50			シダ類	
1217 373 191	SF96	櫛七	綱		12.9	3.9	6.9	1.0	高	良好	灰白	右	ナデ	ナデ	底部	50			シダ類	
1218 373 191	SF96	櫛七	綱		12.1	3.6	5.5	0.7	高	良好	灰白	右	ナデ	ナデ	底部	50			シダ類	
1219 373	SF96	櫛七	綱		13.8	4.6	6.9	0.9	高	不良	灰黄	右	ナデ	ナデ	底部	50			シダ類	
1220 373	SF96	櫛七	綱		13.8	(2.5)			高	良好	灰黄	右			休部下半	8	黄土	有		
1221 373	SF96	櫛七	綱		13.0	(2.3)			高	良好	灰黄	右			休部下半	13			シダ類	
1222 373	SF96	櫛七	綱		(1.9)	7.1	1.3		高	良好	灰黄	右	ナデ	ナデ	底部	100	シダ類		シダ類	
1223 373	SF96	櫛七	綱		(1.9)	7.2	1.0		高	良好	灰白	右	ナデ	ナデ	底部	50			シダ類	
1224 373	SF96	櫛七	綱		(1.7)	7.2	0.9		高	良好	灰白	右	ナデ	ナデ	底部	60			シダ類	
1225 373	SF96	櫛七	綱		(2.2)	7.0	0.8		高	良好	灰白	右	ナデ	ナデ	底部	100			シダ類	
1226 373	SF96	櫛七	綱		(1.9)	6.0	0.8		高	良好	灰白	右	ナデ	ナデ	底部	100			シダ類	
1227 373	SF96	櫛七	綱		(2.0)	6.8	0.8		高	良好	灰白	右	ナデ	ナデ	底部	60			シダ類	
1228 373	SF96	櫛七	綱		(1.7)	6.8	0.8		高	良好	灰白	右	ナデ	ナデ	底部	60			シダ類	
1229 373	SF96	櫛七	綱		(2.0)	6.0	0.8		高	良好	灰白	右	ナデ	ナデ	底部	60			シダ類	
1230 373	SF96	櫛七	綱		(2.0)	6.0	0.8		高	良好	灰白	右	ナデ	ナデ	底部	60			シダ類	
1231 373	SF96	櫛七	綱		10.7	2.1	5.1	0.6	高	不良	灰白	右	ナデ	ナデ	底部	70			シダ類	
1232 374 196	灰原	林	138.2	(25.0)	37.7				高	良好										
1233 374 196	灰原	林	21.2	(25.5)	24.6				高	良好										
1234 374 197	灰原	林	19.7						高	良好										
1235 373 192	灰原	櫛七	綱花崗		15.6	(5.2)			高	良好										

## 第5節 自然科学分析

### 1 放射性炭素14分析

山形 秀樹(パレオ・ラボ)

#### (1)はじめに

大屋敷1号窯より検出された炭化材の加速器質量分析法(AMS法)による放射性炭素年代測定を実施した。

#### (2)試料と方法

試料は、灰原A4区45層より採取した炭化材(マツ属複葉管束亞属)1点、1号窯燃焼室より採取した炭化材(アワブキ)1点、灰原最下層の43層より採取した炭化材(コナラ節)1点の併せて3点である。なお、測定試料には、これら試料の最外年輪部分を用いた。

これら試料は、酸・アルカリ・酸洗浄を施して不純物を除去し、石墨(グラファイト)に調整した後、加速器質量分析計(AMS)にて測定した。測定した<sup>14</sup>C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、補正した<sup>14</sup>C濃度を用いて<sup>14</sup>C年代を算出した。

#### (3)結果(第59表)

第59表に、各試料の同位体分別効果の補正値(基準値-25.0%)、同位体分別効果による測定誤差を補正した<sup>14</sup>C年代、<sup>14</sup>C年代を曆年代に較正した年代を示す。

<sup>14</sup>C年代値(yrBP)の算出は、<sup>14</sup>Cの半減期としてLibbyの半減期5,568年を使用した。また、付記した<sup>14</sup>C年代誤差( $\pm 1\sigma$ )は、計数値の標準偏差 $\sigma$ に基づいて算出し、標準偏差(One sigma)に相当する年代である。これは、試料の<sup>14</sup>C年代が、その<sup>14</sup>C年代誤差範囲内に入る確率が68%であることを意味する。

なお、曆年代較正の詳細は、以下の通りである。

#### 曆年代較正

曆年代較正とは、大気中の<sup>14</sup>C濃度が一定で半減期が5,568年として算出された<sup>14</sup>C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の<sup>14</sup>C濃度の変動、および半減期の違い(<sup>14</sup>Cの半減期5,730±40年)を較正し、より正確な年代を求めるために、<sup>14</sup>C年代を曆年代に変換することである。具体的には、年代既知の樹木年輪の詳細な測定値を用い、さらに珊瑚のU-Th年代と<sup>14</sup>C年代の比較、および海成堆積物中の織状の堆積構造を用いて<sup>14</sup>C年代と曆年代の関係を調べたデータにより、較正曲線を作成し、これを用いて<sup>14</sup>C年代を曆年代に較正した年代を算出する。

<sup>14</sup>C年代を曆年代に較正した年代の算出にCALIB4.3(CALIB 3.0のバージョンアップ版)を使用した。なお、曆年代較正値は<sup>14</sup>C年代値に対応する較正曲線上の曆年代値であり、 $1\sigma$ 曆年代範囲はプログラム中の確率法を使用して算出された<sup>14</sup>C年代誤差に相当する曆年代範囲である。カッコ内の百分率の値はその $1\sigma$ 曆年代範囲の確からしさを示す確率であり、10%未満についてはその表示を省略した。 $1\sigma$ 曆年代範囲のうち、その確からしさの確率が最も高い年代範囲については、第59表中に下線で示した。

#### (4)考察

各試料について同位体分別効果の補正および曆年代較正を行った。曆年代較正した $1\sigma$ 曆年代範囲のうち、確率が最も高い年代範囲に注目すると、それぞれより確率の高い年代値の範囲が示された。

第59表 大塚数1号窯出土炭化材の放射性炭素年代測定および碳年代較正の結果

資料番号	測定番号 (熱式法)	日本標準			年齢	$\delta^{13}\text{C}_{\text{PDB}}$ (‰) by NIP (1 s)	~6千年前までに較正した年代		
		年齢	アーチ	測定			対年代較正法	1 ± 95%範囲	
1	PL-2254 (640)	200	A8	45	炭化材 (マツ葉枯れ茎葉茎)	-35.8	1,120 ± 20	cal AD 900 cal AD 920 cal AD 960	cal 10,000 ± 900 (34.1%) cal 10,900 ± 925 (34.0%) cal 10,930 ± 975 (34.0%)
2	PLD-2232 (1083)	200	供給地		炭化材 (アワダチ)	-29.0	1,085 ± 20	cal AD 960	cal 10,900 ± 920 (34.0%) cal 10,950 ± 965 (34.7%)
3	ND-2235 (640)	100	A8	43	炭化材 (コナラ木)	-35.1	1,115 ± 30	cal AD 900 cal AD 920 cal AD 940 cal AD 950	cal 10,000 ± 900 (34.0%) cal 10,915 ± 915 (34.1%)

## 引用文献

- 中村俊夫 2000「放射性炭素年代測定法の基礎」「日本先史時代の<sup>14</sup>C 年代」 3 - 20頁
- Stuiver, M. and Reimer, P. J. 1993 'Extended <sup>14</sup>C Database and Revised CALIB3.0 <sup>14</sup>C Age Calibration Program', "Radiocarbon", 35, p215-230.
- Stuiver, M., Reimer, P.J., Bard, E., Beck, J.W., Burr, G.S., Hughen, K.A., Kromer, B., McCormac, F.G., v.d. Plicht, J., and Spurk, M. 1998 'INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration, 24,000-0 cal BP', "Radiocarbon", 40, p1041-1083.

## 2 樹種分析

植田 弥生(パレオ・ラボ)

### (1)はじめに

大屋敷1号窯が所在する浜北市宮口地区は、奈良時代から鎌倉時代の窯が点在する宮口古窯跡群として周知される窯業生産地である。窯業生産には燃料材が不可欠であり、どのような樹種を選択的に利用していたのか記録することは、燃料材を伐採した森林の景観や森林維持・管理など、窯業生産と森林利用との関り方を理解してゆくための基礎的資料の蓄積につながる。ここでは、大屋敷1号窯の窯内と灰原から出土した木材4試料について樹種同定結果を報告する。

なお、4試料中のNo.1~3については、放射性炭素年代測定を実施している。

### (2)試料と方法

試料No.3とNo.4は、灰原の堆積土中に小破片の炭化材が散在している状態であったため、炭化材は水洗して取り上げた。試料中に複数破片がある場合は、形状や大きさの異なる炭化材を選び、樹種同定試料とした。

同定はまず炭化材の横断面(木口)を手で割り実体顕微鏡で予察し、次に片歯の剃刀で彈くように接線断面と放射断面を削って作成し、この3方向の断面を走査電子顕微鏡で拡大し材組織を観察した。走査電子顕微鏡用の試料は、3断面を5mm角以下の大きさに整え、直径1cmの真鍮製試料台に両面テープで固定し、試料を充分乾燥させた後、金蒸着を施し、走査電子顕微鏡(日本電子株式会社製JSM-T100型)で観察と写真撮影を行った。

なお、同定した炭化材の残り破片は、静岡県教育委員会により保管されている。

### (3)結果(第60表、写真21・22)

同定結果の一覧を、第60表に示した。検出された分類群は、針葉樹のマツ属複維管束亜属、落葉広葉樹のコナラ節・クヌギ節・クリ・アワブキであった。

マツ属複維管束亜属は3試料から、コナラ節・クヌギ節・クリは1~2試料から検出され、これらはすべて灰原から検出されている。このような状況から、マツ属複維管束亜属・コナラ節・クヌギ節・クリの4分類群が主要な燃料材であったことが想定でき、少なくとも焼成の最終段階で多く利用されていた樹種といえる。

第60表 大屋敷1号窯出土炭化材樹種同定結果

試料番号	出土箇所	樹種	備考	年代測定番号
1	灰原	M4	マツ属複維管束亜属 推定直径4cmの一部破片	PLD-2251
2	窯内	燃焼窓	アワブキ 推定直径2.5cmの一部破片	PLD-2252
3	灰原	A5	マツ属複維管束亜属 小破片複数	
			コナラ節 小枝材の破片 ほかに小破片複数	
			クヌギ節 小破片少數	
			クリ 小破片複数	PLD-2253
4	灰原	73	マツ属複維管束亜属 小破片多數	
			クヌギ節 小破片1	
			クリ 小破片複数	

1号窯燃焼室から出土した推定直径2.5cmほどの細い枝材は、アワブキであった。前述の4分類群とともにアワブキも燃料材樹種としての利用が周知されているが、窯跡からの調査事例では現在までほとんど検出されていない。

以下に、同定した樹

種の材組織を記載する。

マツ属複維管束亞属 *Pinus* subgen. *Diploxyylon* マツ科 写真21 1a - 1c(灰原A 4区45層)  
2(灰原43層)

垂直と水平の樹脂道がある針葉樹材。早材から晩材への移行はゆるやかである。仮道管と放射組織が交差する部分である分野壁孔は窓状である。放射組織の上下端には有縁壁孔を持つ放射仮道管がありその内壁には鋸歯状肥厚がある。このような特徴から、アカマツとクロマツを含むマツ属複維管束亞属と同定される。

放射仮道管内壁の肥厚の形状により、アカマツは鋭利な鋸歯状をなすことで、クロマツは比較的ゆるやかな鋸歯状をなすことで区別されるが、炭化材では内腔に張り出た部分が欠落しており詳細な形状は不明なため、2種を特定できない。

コナラ属コナラ亜属コナラ節 *Quercus* subgen. *Quercus* sect. *Prinus* ブナ科 写真21 3a - 3b  
(灰原43層)

年輪の始めに中型の管孔が配列し徐々に径を減じ、晩材部では薄壁・角形で小型の管孔が火炎状・放射方向に配列する環孔材である。道管の壁孔は交互状、穿孔は單一、内腔にチロースがある。放射組織は単列のものと広放射組織・複合状のものがある。

コナラ節は暖帯から温帯に生育する落葉高木でカシワ・ミズナラ・コナラ・ナラガシワがある。この材は加工がやさしく乾燥すると柔軟や狂いが出やすい欠点があるが、人里近くに普通の樹種で入手しやすいこともあり利用頻度が高く、遺跡からは加工木や炭化材としてもよく出土する樹種である。堅果は食用となる。

コナラ属コナラ亜属クヌギ節 *Q.* subgen. *Q.* sect. *Cerris* ブナ科 写真21 4a - 4b(灰原43層)

年輪の始めに大型の管孔が1層配列し、その後は小型・厚壁で孔口は円形の管孔が単独で放射状に配列し広放射組織をもち、接線状・網状の柔組織が顕著な環孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は单穿孔である。放射組織は同性、単列のものと集合状のものがあり、道管との壁孔は横状である。

クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. ブナ科 写真21 5(灰原43層)

写真22 6a - 6c(灰原Z 3区31層)

年輪の始めに中型～大型の管孔が1層配列し、その後は非常に小型の管孔が火炎状に配列し、柔組織が接線状に配列する環孔材。道管の壁孔は小形で交互状、穿孔は单穿孔である。放射組織は単列同性、道管との壁孔は孔口が大きく交互状である。

灰原Z 3区31層から検出された炭化材の中には、年輪始めの管孔がやや小型の部分や管孔配列がまばらであるなど不規則な年輪界が多く(写真22-6a～6c)見られたが、恐らく節部に近い部分か根張りに近い部分であるためと推測され、それ以外の材組織はクリと同様な特徴であったのでクリと同定した。

アワブキ *Meliosma myriantha* Sieb. et Zucc. アワブキ科 写真22 7a - 7d(燃焼室覆土)

小型でやや厚壁の管孔が単独または柔細胞を介して放射方向に2個複合し、やや疎らに分布する散孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は单穿孔と階段数が5本ほどの階段穿孔である。放射組織は異性、1～4細胞幅、細胞高は非常に高く、放射柔細胞は薄壁で大きく接線断面において放射柔細胞の構成は粗雑な印象をうける。周囲状柔組織が顕著である。

#### (4)まとめ

大屋敷1号窯の炭化材からは、マツ属複維管束亞属・コナラ節・クヌギ節・クリ・アワブキが検出された。

アワブキは燃焼室から出土した。アワブキは、本州島以南の暖帯の山地に普通の落葉高木で、枝は燃

やすと切口から泡を吹き出すことから、「泡吹き：アワブキ」と名付けられている樹種で、薪炭材としての利用が知られている。実際にアワブキの材が窯業跡から検出された事例は知らないが、利用されていた可能性は充分にあり、今回の調査で燃焼室から検出されたことは興味深い。

燃料材の残渣が投棄された灰原の3試料(試料番号1・3・4)からは、マツ属複維管束亜属・コナラ節・クスギ節・クリが検出された。これらは、主要な窯業燃料材として多く利用されている樹種であり、当窯でも同様な樹種選択がなされていたことが判明した。

岐阜県や愛知県では、須恵器窯や平安時代の灰釉陶器窯跡から出土する炭化材の多くは、コナラ節またはクスギ節で、マツ属複維管束亜属の検出量は少ない(忠那市教委1983、岐阜県文化財保護センター2003、日進町教委1984、愛知県埋蔵文化センター1999、三好町教委2000・2001など)。今回の調査では炭化材を量的に検討することができなかったので、岐阜県や愛知県の同時期の灰釉陶器窯と同様に、静岡県内においても落葉広葉樹のコナラ節とクスギ節の方がマツ属複維管束亜属より多く利用されていたかどうかは不明であり、今後の課題といえる。

いずれにせよ、大屋敷1号窯では二次林要素の樹種が燃料材として多く利用されていたことが判明した。当地域一帯には古墳時代後期から終末期の古墳群が多く、当窯も7~8世紀に築造された古墳が点在する地区にあることから、周辺の森林は古墳時代に大規模な伐採・開発・利用が行われたと推測する。また、当地域では9世紀後半に灰釉陶器の生産が開始されており(松井1989)、当窯の操業時期である平安時代後半にはかなり二次林化が進行し、二次林の面積も拡大していたと想定できる。この二次林の木材を利用して灰釉陶器窯が操業されていたと推測する。

なお、静岡県西部、浜名湖西岸に立地する古墳時代から中世の湖西窯跡群でも、ニ葉松類(マツ属複維管束亜属とはほぼ同義)が多く利用されていたことが明らかにされている(山口・千野1990)。この調査においても各時期・各窯跡の分析点数が少ないものの、古墳時代~奈良時代の窯からも常緑広葉樹のカシ類や落葉広葉樹のクスギ類・ナラ類とともにニ葉松類が利用されていたことが判明している。したがって、他県における同時期の窯跡の燃料材に比べ、当地域一帯では比較的初期の段階からマツが燃料材に利用されていたようである。当地域一帯にはマツ材が利用可能な植生がすでに広がっていたとも想定でき、その過程や要因は今後も資料を蓄積して解明してゆく課題といえる。

## 引用文献

- 忠那市教育委員会 1983 「正家1号窯発掘調査報告書」
- 岐阜県文化財保護センター 2003 「深橋前遺跡」
- 日進町教育委員会 1984 「愛知県日進町筑山地区埋蔵文化財発掘調査報告書」
- 愛知県埋蔵文化財センター 1999 「細川1号窯・油ノ巣古窯・高針原1号窯」
- 松井・朝 1989 「宮山古窯跡群と清ヶ谷古窯跡群における須恵器・陶器生産についての一考察」『静岡県の窯業遺跡』
- 静岡県教育委員会
- 三好町教育委員会 2000 「北部畠能南工区幕塚地内 墓藏文化財発掘調査報告書(K-47・K-110)」
- 三好町教育委員会 2001 「三好根瀬特定土地区画整理事業地内 墓藏文化財発掘調査報告書(K-3・K-4・K-G-21)」
- 山口慶一・野裕道 1990 「マツ林の形成および窯業へのマツ材の導入について」『東京都埋蔵文化財センター 研究論集』Ⅷ 85-114頁・図版1-10

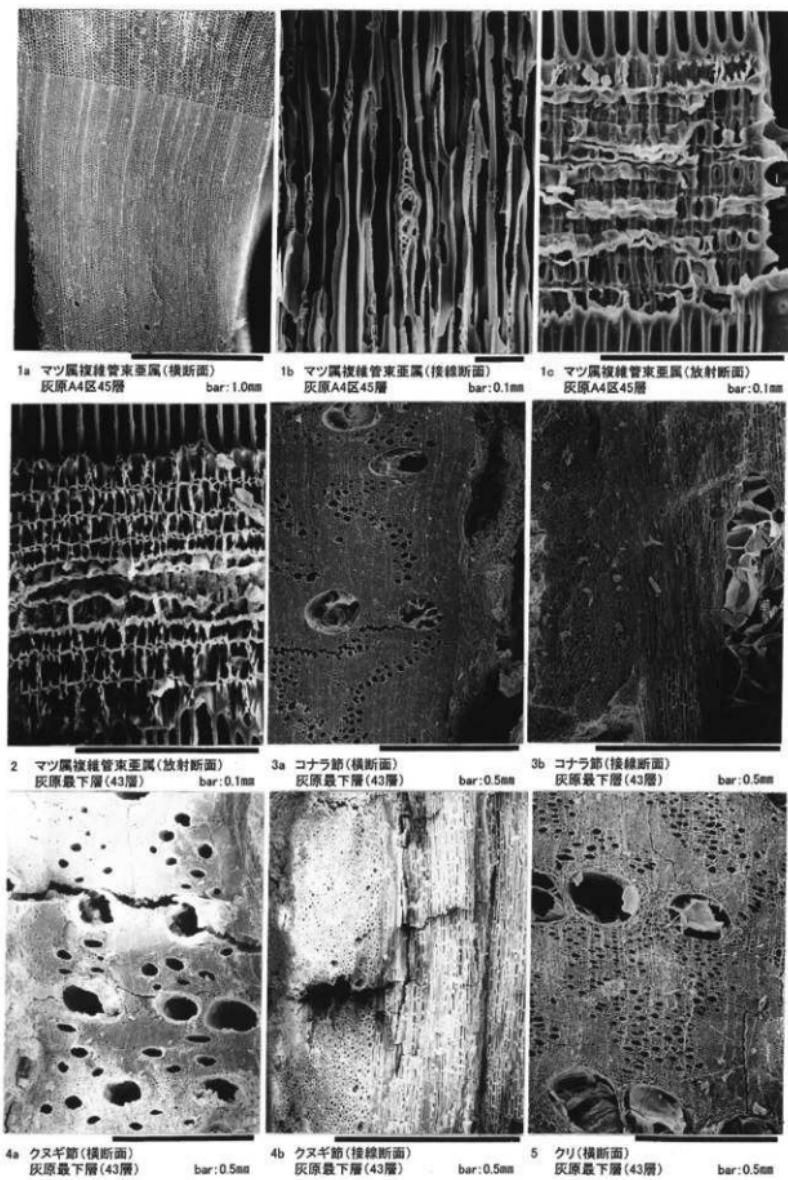


写真21 大屋敷1号窓出土炭化材の走査電子顕微鏡写真①

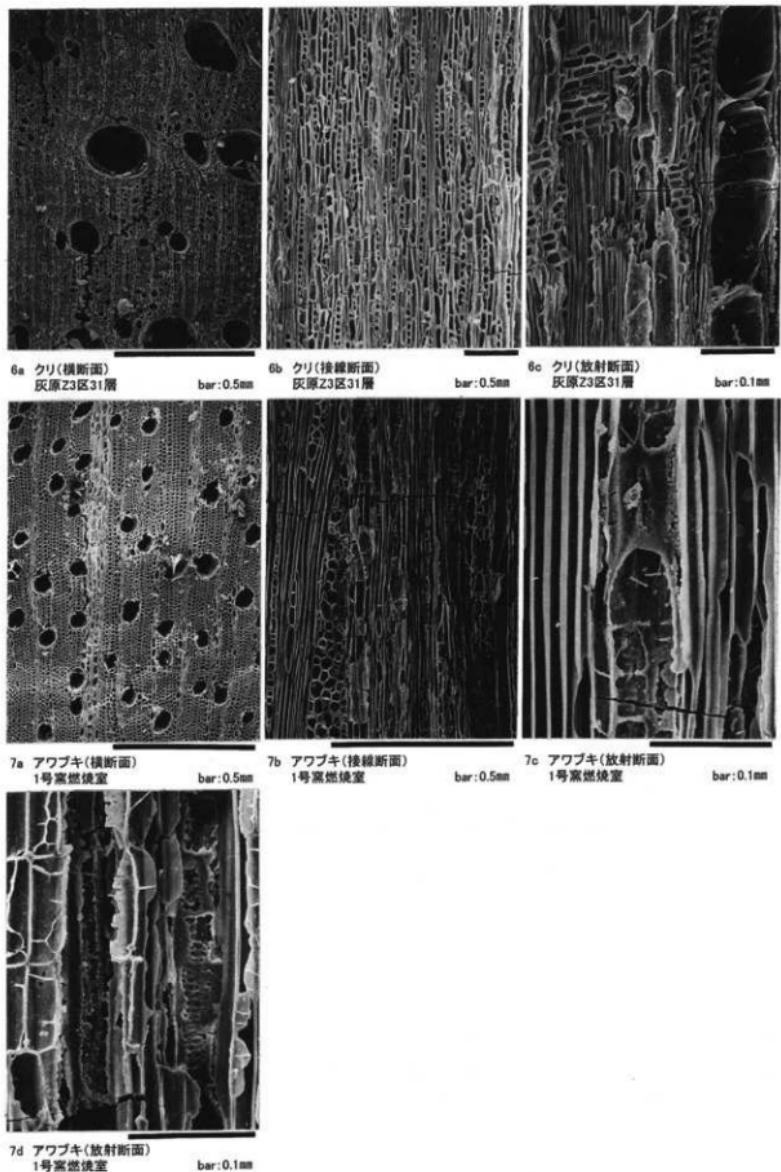


写真21 大屋敷1号窯出土炭化材の走査電子顕微鏡写真②

## 第6節 付編 大屋敷古窯跡群関連遺物

大屋敷1号窯の評価を行うにあたり、宮口古窯跡群で出土している資料が重要であることから、ここでは、浜北市教育委員会より提供を受けた古名5・6号窯、大屋敷5号窯、大屋敷地区採集遺物を中心掲載する。

宮口古窯跡群は、本章第1節にて記述したように浜北市西部の丘陵斜面に築造された灰釉陶器、山茶碗を焼成した窯跡群であり、東から西ノ谷古窯跡群、大屋敷古窯跡群、吉名古窯跡群、諏訪古窯跡群、土取古窯跡群、梶池古窯跡群、新池古窯跡群に区分されている。以下に大屋敷古窯跡群から順に概要を述べ、第7節において大屋敷1号窯との比較を行いたい。

### 1 大屋敷古窯跡群

#### (1) 大屋敷6号窯(第374~377図、第61表、図版205~207)

大屋敷6号窯は、大屋敷C古墳群の発掘調査中に発見した未知の窯で、大屋敷C古墳群と大屋敷A古墳群の間にある谷部の西側斜面に築造されていると推測する。窯周辺で山茶碗、瓦、窯道具を表面採集した。また、今回の調査区内(3・4区内)から、釉着した山茶碗や、窯道具として転用され釉薬が表面に厚く付着した山茶碗や、瓦片が出土している。今回の調査区内から出土した遺物に関しては、第IV章にて報告した。ここでは表面採集した山茶碗、瓦、窯道具に関して報告する。

##### ①鬼瓦(第375図、図版205・207)

後述する平瓦と同様の胎土を有する鬼瓦(1230)である。手捏成形であり、立体的に表現されている。成形には手とヘラを使用している。大部分が欠損しているが、鼻と上顎が残存している。残存する高さ21.4cm、幅13.8cm、厚さは肩潤の突出部分で8.0cm、上唇で6.5cm、上歯部分で4.4cmをはかる。

鬼面は、鼻は欠損しており、その形状のみ知ることができる。鼻は幅12.7cm以上、高さ10.0cmをはかる。現存する寺院や他遺跡で確認される鬼瓦と同様、上唇は逆へ字形で、口を大きく開いた状態を表現しており、歯の左右の欠損部分には牙が表現されていた蓋然性が高い。唇の中央に鼻梁が表現されている。上唇の下には歯が表現されている。歯は方形で、現状で3本が確認できるが本来は両側の牙を含めて前歯4本、牙2本の計6本であった可能性が高い。上歯の下部は平端に仕上げられている。

裏面は平坦であり、掘り込みは確認できない。

##### ②平瓦(第376図、図版207)

3区で出土した瓦と同様の整形手法を用いる平瓦(1239)が採集されている。1枚作りである可能性が高い。凹面にはコピキ板と布目、凸面には粗い繩目叩きが施されている。側縁と凹面の端部付近はヘラにより面取りされている。

##### ③山茶碗(第374・376図、図版206・207)

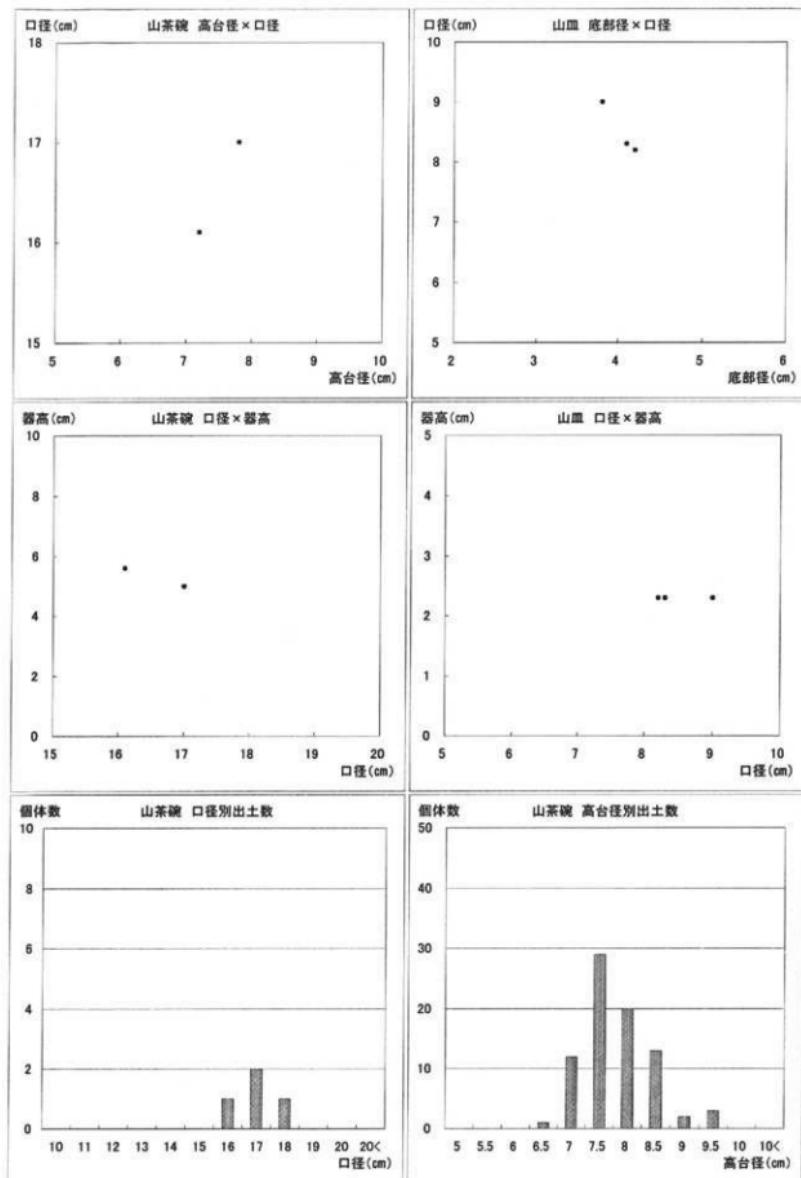
山茶碗、山皿を採集した(1231~1237)。第IV章SR06、遺構外出土遺物で報告したように、形態的な特徴は、3・4区で出土した山茶碗、山皿の特徴と同一である。したがって、3・4区遺構外で出土した山茶碗は6号窯の生産品である可能性が高い。

山茶碗 山茶碗(1231~1235)は、高台が低い、潰れた三角形である。高台径6.0~9.0cmをはかる。高台には、初段痕が確認でき、底部は糸切り(離し)後未調整のものとナデ調整が施されるものがある。

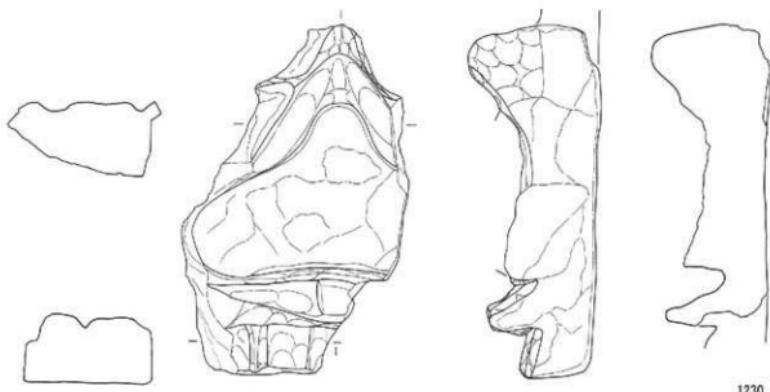
山皿 山皿(1236・1237)は、底部から逆ハ字形に直線的に聞くもので、口径8.0cm前後、底部径約4.0cmをはかる。底部は糸切り(離し)後未調整である。

なお、第374図には3・4区で出土した山茶碗の法量を含めている。

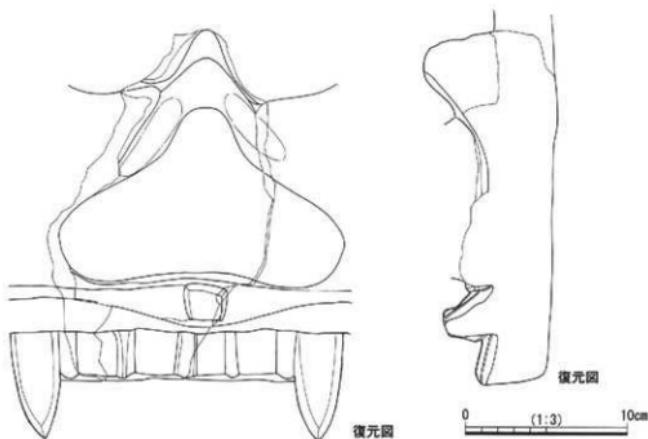
6号窯に関連する山茶碗は、口径約18.0cm、高台径6.0~9.0cmをはかる。ここで自然流路SR06や古



第374図 大屋敷6号窯出土碗法量図



1230



復元図

0 (1:3) 10cm

第375図 大屋敷6号窯表面採集遺物実測図①

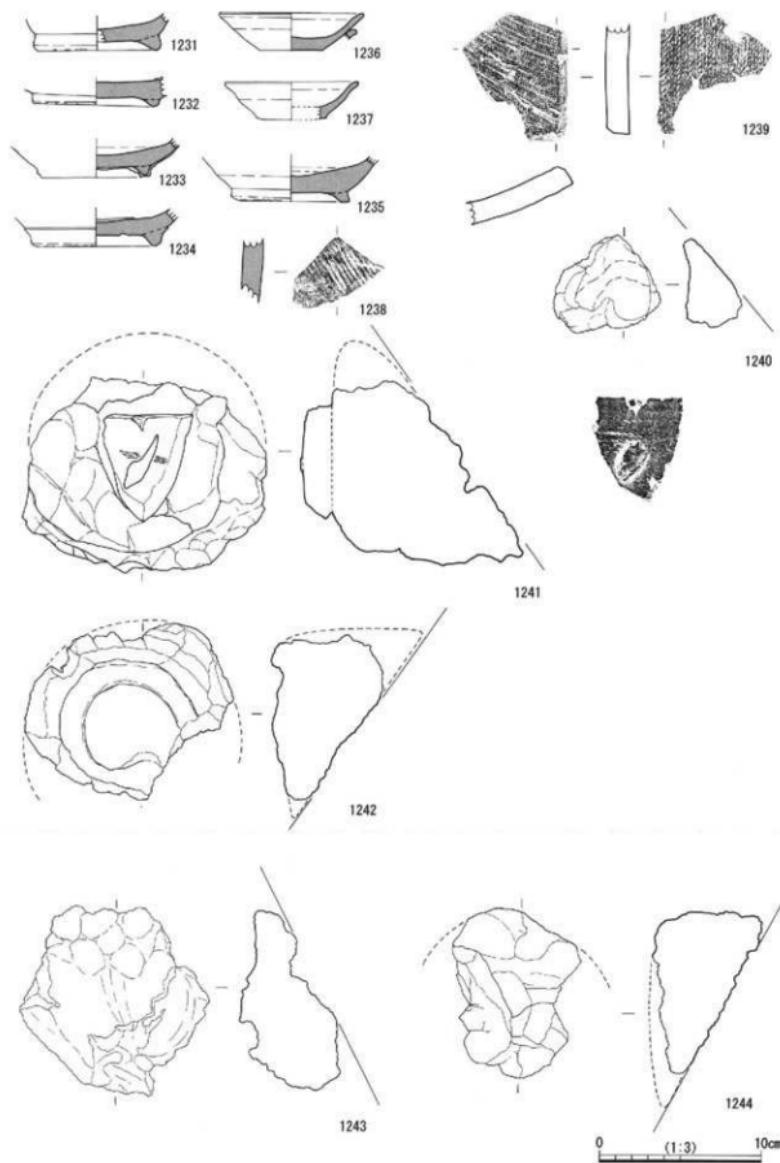
墳の墳丘などから出土した山茶碗を含めて法量を見ておく。

碗は高台径6.0~9.5cmをはかり、7.0~7.5cmをピークに正規分布を示す。高台高は5~10mmが約7割を占め、5mm以下が3割で、10mmを越える個体は1点のみである。口径は16.0~18.0cm、器高5.0~6.0cmをはかる。小碗は高台径約4.5cmをはかる。

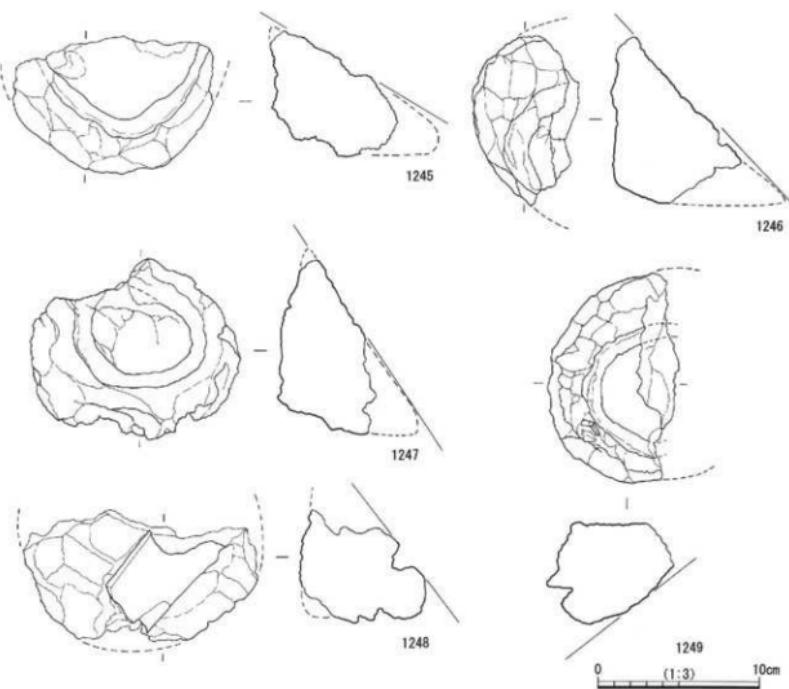
山皿は口径約8.0~8.5cm、底部径4.0cm前後、器高2.5cmをはかる。

#### ④窯道具(第376・377図、図版205・207)

馬爪形焼台10点(1240~1249)を表面採集した。1241の上面には平瓦片が軸着しており、その上にも瓦片が軸着していることから、焼台のうえに不要となった瓦を置き、その上に焼成する瓦を置いていたと考えることができる。馬爪形焼台は最も大きな破片1241が約1550gをはかり、大屋敷1号窯出土の筒形



第376図 大屋敷6号窯表面採集遺物実測図②



第377図 大屋敷6号窯表面採集遺物実測図③

に近い馬爪形焼台と比較して大型である。

したがって、山茶碗段階に入り、焼台は筒形から馬爪形へ変化し、大型化していることが判明する。

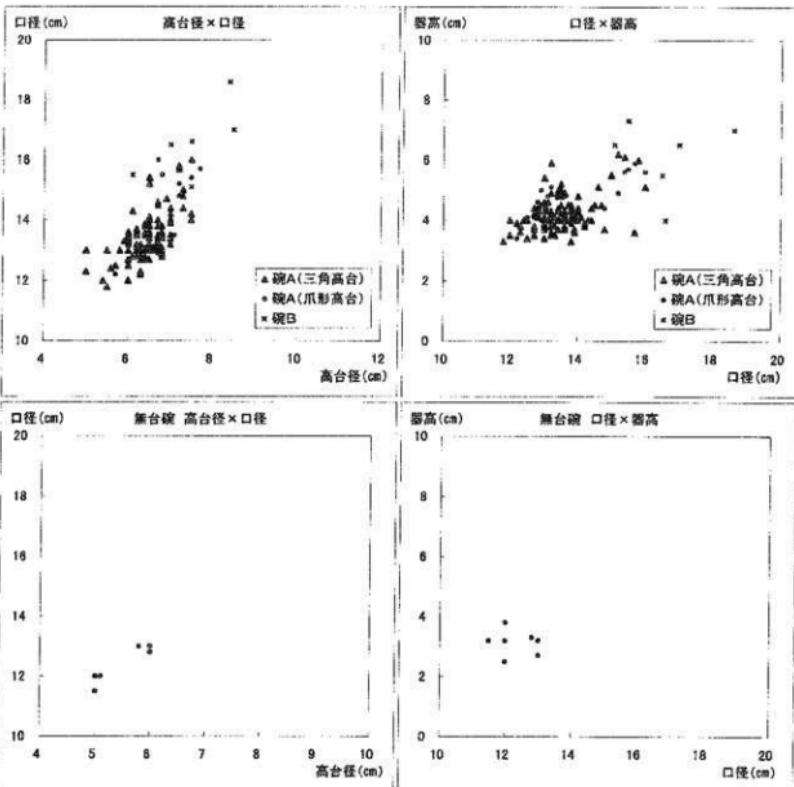
## (2) 大屋敷5号窯(第378~385図、第61表)

大屋敷5号窯は半地下式の窯窓であり、平面形は寸胴形(無花果形)である。現存長5.3m、燃焼部最大幅1.5m、焼成室の傾斜は15~25度である。窓の主軸は北北東を向く。

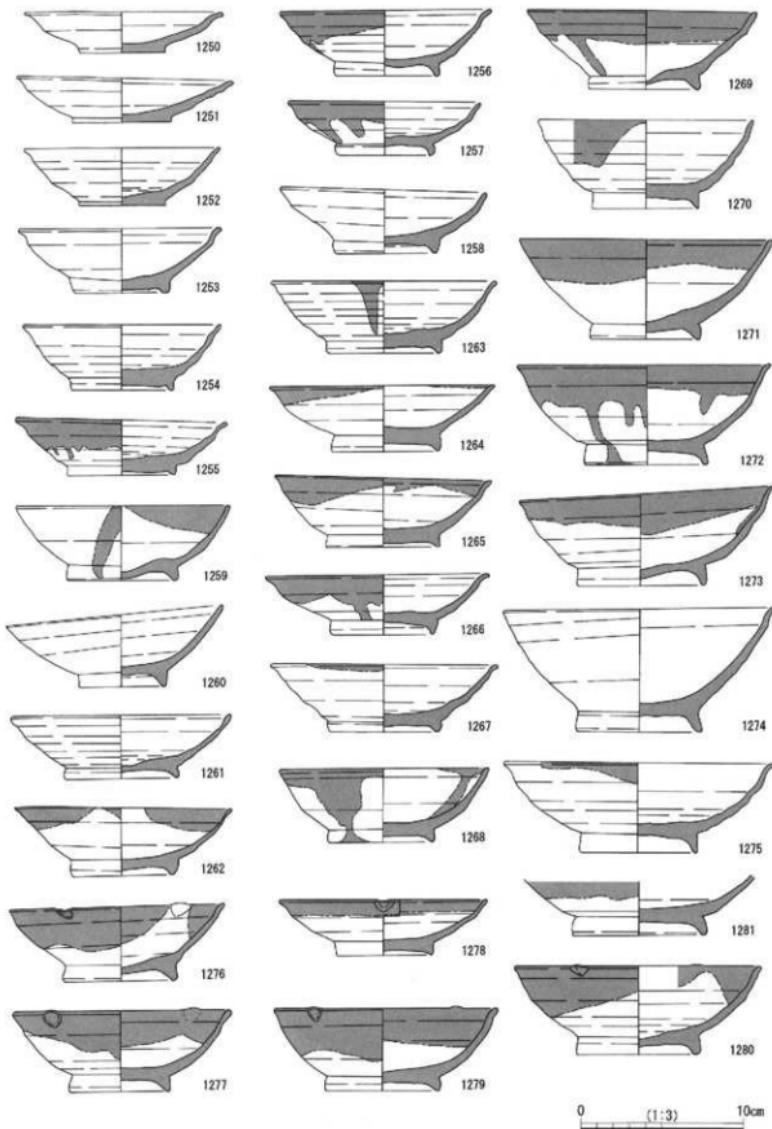
大屋敷5号窯からは灰釉陶器碗(1253~1275、1281~1419)、輪花碗(1276~1280、1426~1436)、皿、托、無台碗(1250~1252、1420~1425)、鉢(1437・1438)、脚付盤か大型托(1439)、長頸壺?(1440)、脚付短頸壺(1443)、瓶(1442)などが出土している(浜北市教委1989)。

碗(1253~1275、1281~1419)は、三角高台で低いもの(碗A)と爪形で高いもの(碗B)がある。前者には脚部~上縁部が底部から直線的に立ち上がるものの、彎曲して緩やかに立ち上がるものがある。碗Bの高台はハ字形あるいは直立する高い爪形である。底部は糸切り未調整のものが多い。施釉方法は漬け掛けが多く、一部に刷毛塗りも確認されている(浜北市教委1989)。

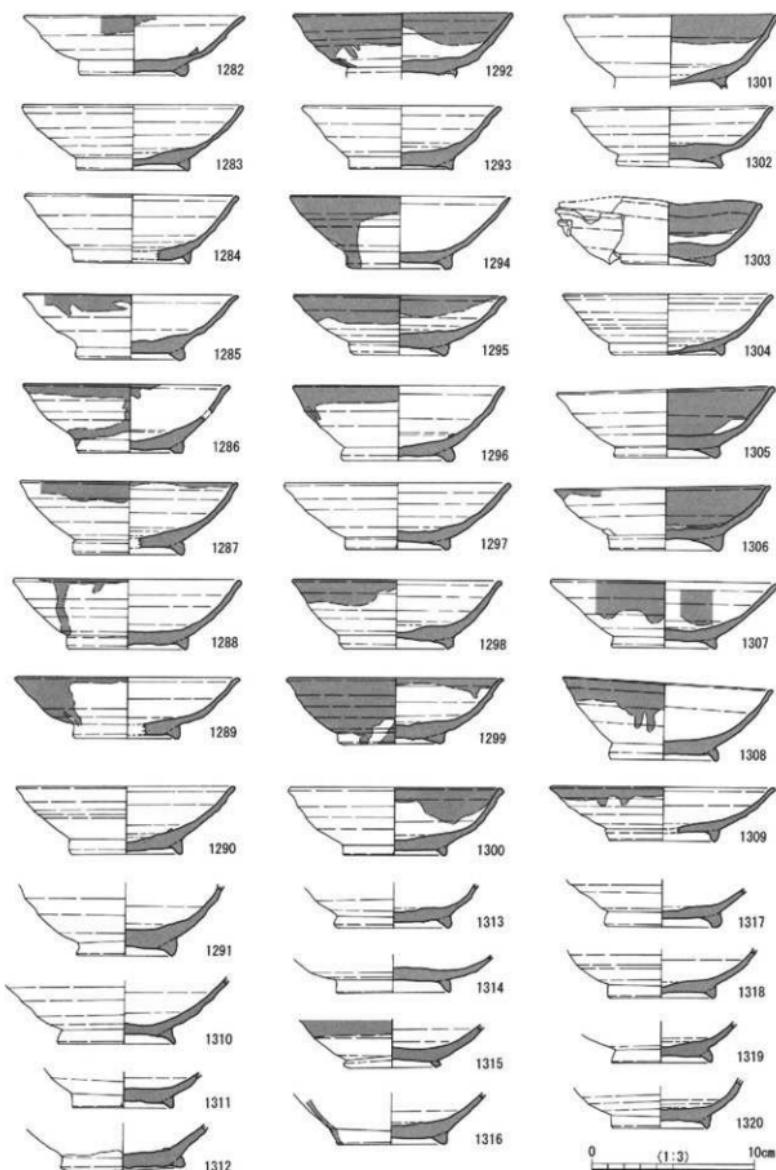
碗Aは高台径6.0~6.5cmが最も多く、6.0~6.5cmを頂点に正規分布を示し、6.0~7.0cmの間に約6割が納まる。口径は13.5~14.0cmが最も多く、これを頂点に正規分布を示す。口径は12.0~16.0cmにはば取まる。



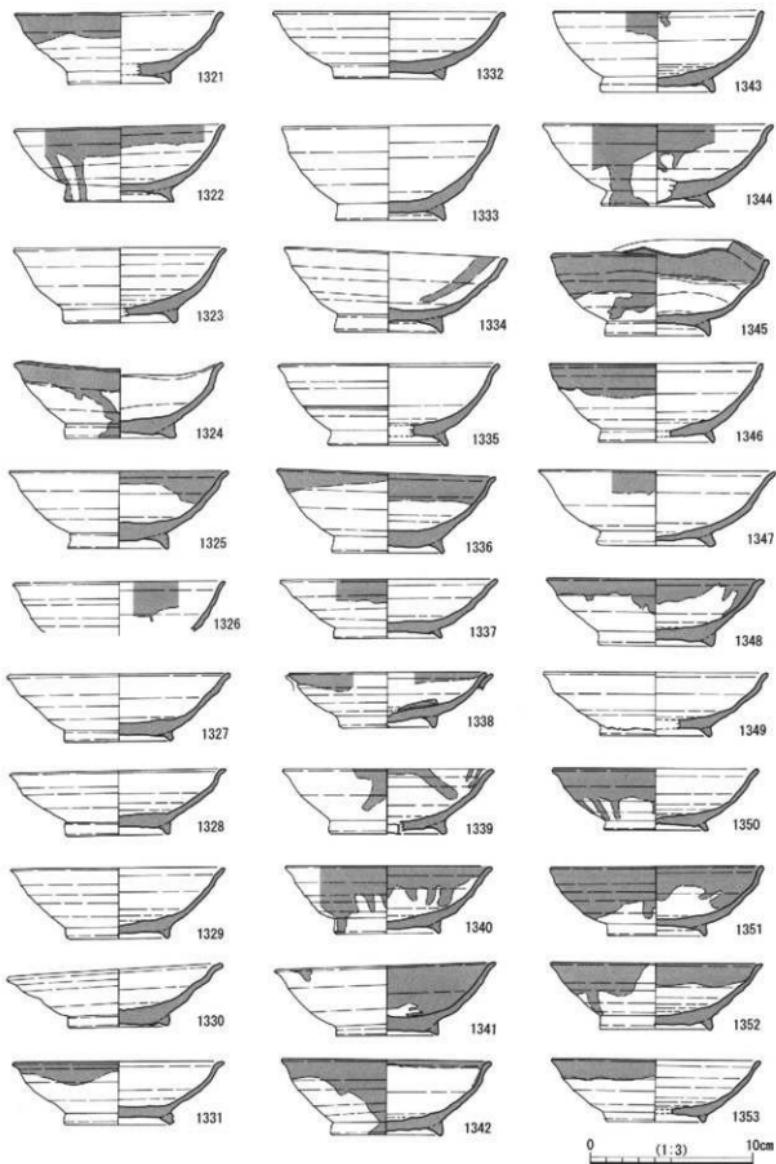
第378図 大屋敷5号窯出土陶法量図



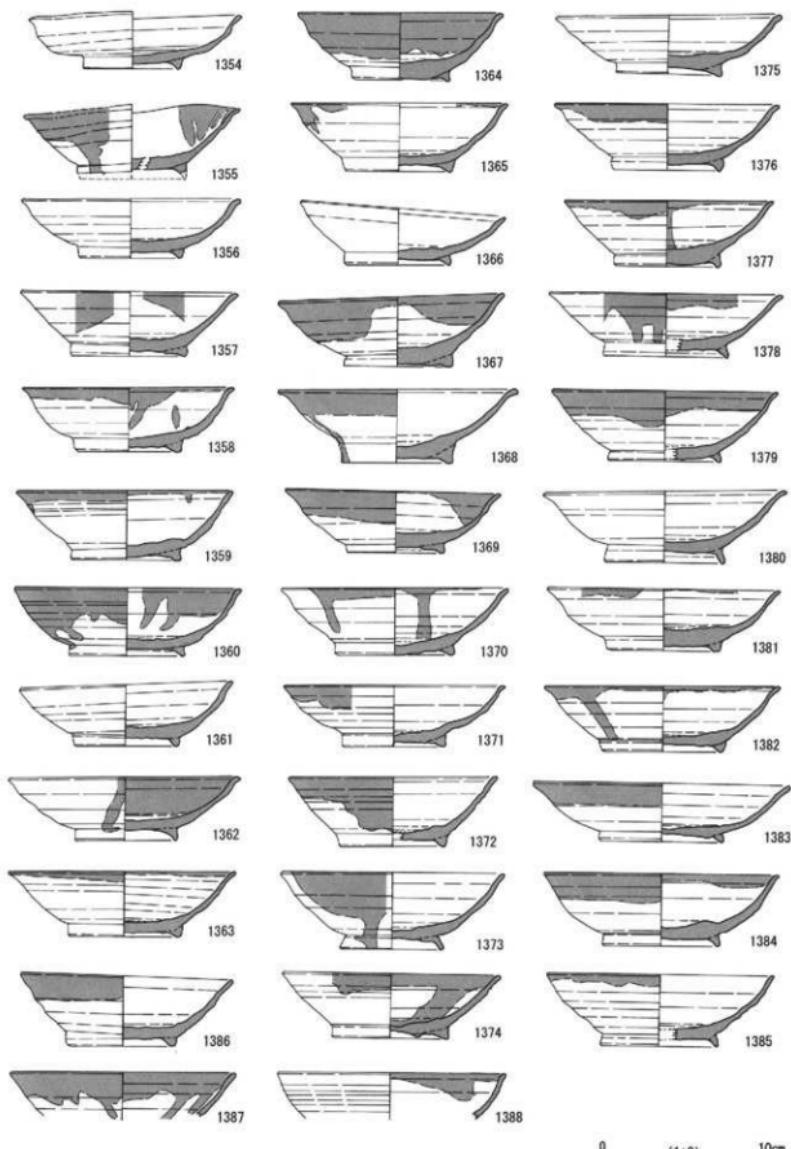
第379図 大屋敷5号窯出土遺物実測図①(浜北市教委1989より)



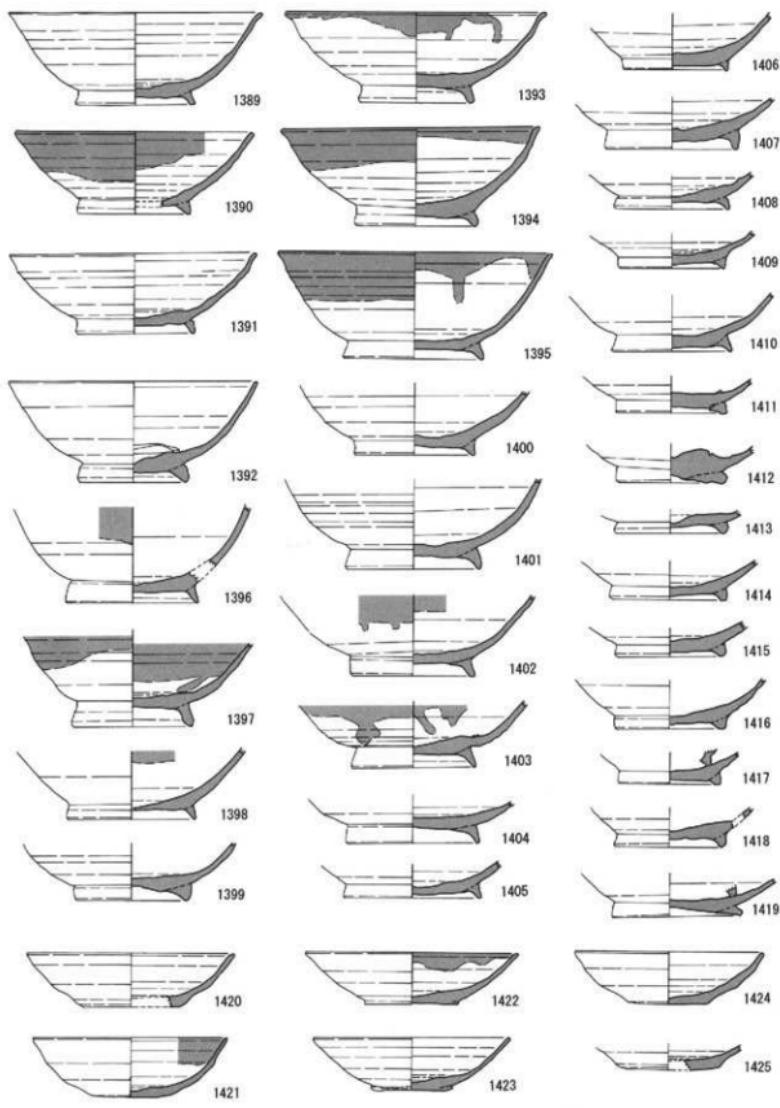
第380図 大屋敷 5号室出土遺物実測図(2)



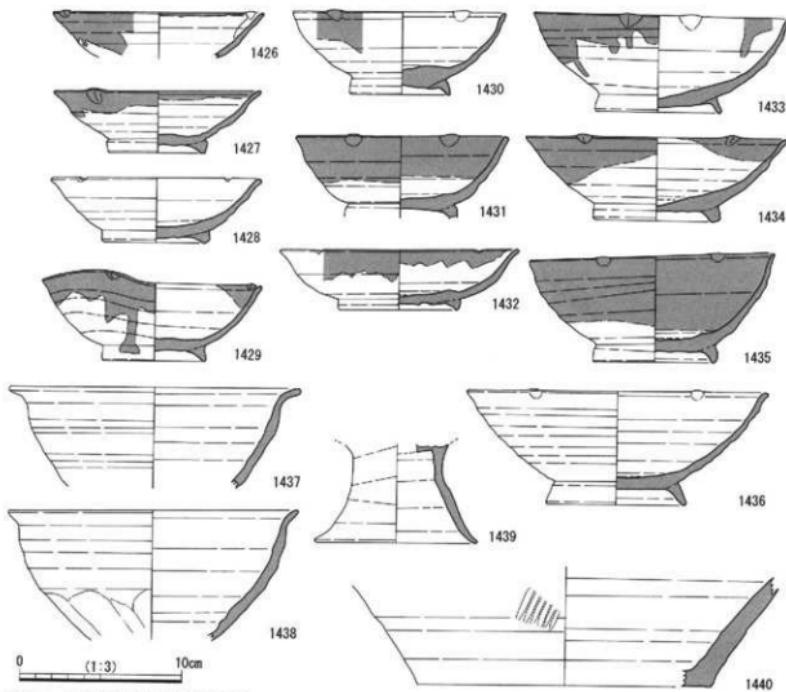
第381図 大屋敷5号窯出土遺物実測図3



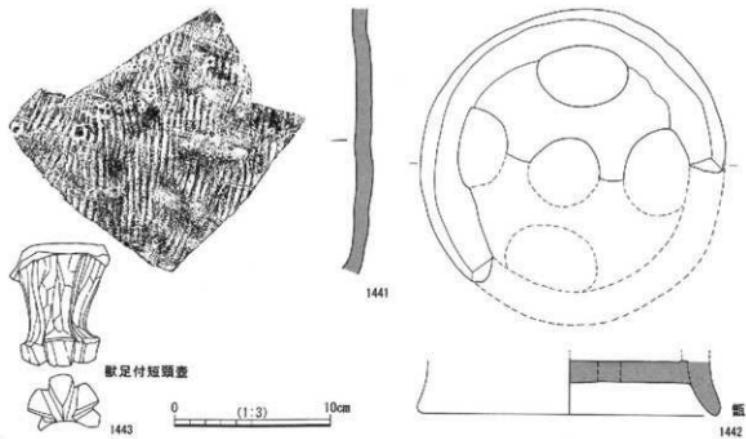
第382図 大屋敷 1号窯出土遺物実測図④



第383図 大屋敷5号窯出土遺物実測図5



第384図 大屋敷1号室の調査



第385図 大屋敷5号室の調査

碗Bは高台径7.5~8.0cm のものが最も多く、これを頂点に正規分布を示し、6.5~8.0cm の範囲に収まる。口径は15.0~16.0cm のものが最も多く、これを頂点に正規分布を示し、14.0~19.0cm の範囲に収まる。器高は4.0~7.0cm である。高台径は、6.5~8.5cm で、7.0~7.5cm を中心に正規分布する。

無台碗は、糸切り未調整で、形態は碗と同様である。口径は11.0~13.0cm、底径は4.5~6.0cm、器高は2.5~3.0cm をはかる、碗Aと比べて小型である。

大屋敷5号窯の碗類は、法量的にみると大屋敷1号窯とはほぼ同様の傾向を示しており、形態的な類似性も高いことから、大屋敷1号窯とはほぼ同時期の操業と考えることができる。

#### (3) 大屋敷1・2号窯(第387図、第61表)

大屋敷1号窯あるいは2号窯の周辺で採集されたとされる灰釉陶器碗(1501、風字二面鏡か?)、小型壺(1502)が出土している(浜北市教委1989)。

#### (4) 大屋敷3・4号窯(第387図、第61表)

大屋敷3号窯あるいは4号窯に伴う灰釉陶器碗が1点(1503)確認されている。この碗は三日月高台であり、底部から外上方に立ち上がり、口縁端部は直線的であり、丸く仕上げられている。底部は糸切り未調整である。口径13.5cm、高台径5.5cm、器高3.7cm をはかる(浜北市教委1989)。

#### (5) 魚玉中学校西側表面採集(・魚玉窯)採集資料(第386・387図、第61表)

魚玉中学校の西側で採集したとされる灰釉陶器が浜北市教育委員会に保管されている(1444~1490)。採集された灰釉陶器には、碗、無台碗、輪花碗、長頸壺、鉢がある。

古くより魚玉中学校北西側では灰釉陶器が採集されていることから、これらの灰釉陶器は大屋敷1号窯に伴うものと推測できる。

碗は三角高台で、高台径6.5~7.0cm が最も多く、それを頂点に正規分布を示す。口径は6.0~6.5cm が最も多く、5.5~8.0cm に収まる。器高は4.0~4.5cm が最も多く、3.0~5.0cm に収まる。高台径は6.0~6.5cm が最も多く、これを頂点に正規分布を示す。高台径は5.5~7.0cm の間にはは収まる。

なお、高台径6.5~8.0cm の碗は碗Bの可能性が高い。

無台碗は、口径4.5~6.0cm、器高2.0~3.5cm、底径4.5~6.0cm の範囲に収まる。

碗、無台碗とともに法量は大屋敷1号窯と同様の分布を示しており、形状が類似することから大屋敷1号窯に伴う遺物である証左となる。

#### (6) 経沢池北側表面採集(第387図、第61表)

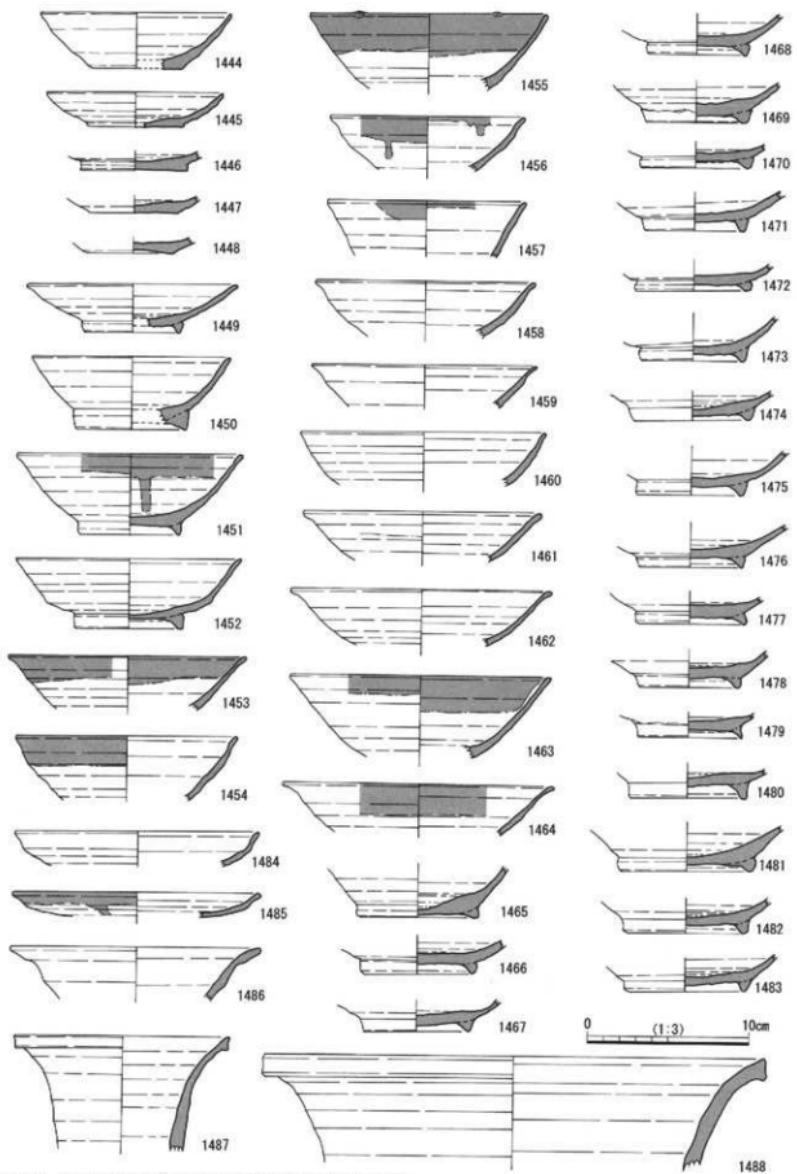
魚玉中学校の南西約500m の位置にある経沢池の北側で採集されたという遺物が保管されている。採集された灰釉陶器には碗、無台碗、壺、大型壺とともに窯道具のツクがある(1491~1499)。

碗(1491~1495)は、高台の低い三日月高台あるいは低い三角高台である。口縁部は底部から外上方に向かって直線的に伸びるもので、口縁部直下は強くナデられ、1492は口縁端部が外側に向かってつまみ出されている。

碗の法量は口径12.0cm(1491)、15.0cm(1492)があり、底部径6.0~7.0cm の範囲に収まる。

無台碗(1496)は、底径約4.5cm をはかる。

経沢池北側採集品は大屋敷2~5号窯の出土遺物と異なることから、この周辺に大屋敷2~5号窯以前の灰釉陶器を焼成した窯が存在する可能性も高い。また、窯道具ツクが出土しており、吉名6号窯と同時期の窯が存在する可能性もある。

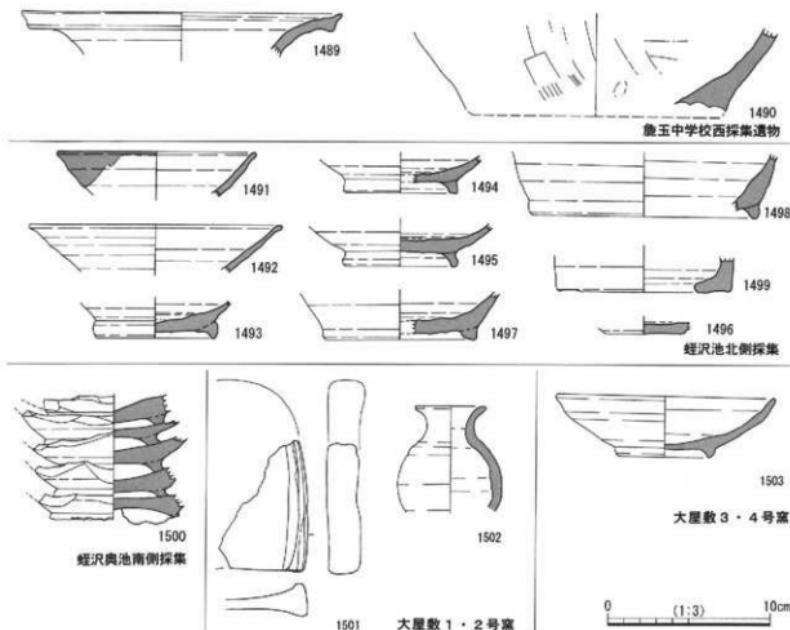


第386図 大屋敷古窯跡群(魚玉中学校西探査はか)出土遺物実測図①

## (7) 鮎沢奥池南側採集(第387図、図版206、第61表)

国道362号バイパス道路工事に伴う鮎沢奥池南側の掘削工事において採集された、碗5枚が釉着した山茶碗(1500)である。山茶碗は碗が5段に軸着したもので、高台径は約6.0~7.0cm、高台高さ約6mmで、高台は潰れた三角形を呈する。

この山茶碗が採集されたことにより鮎沢奥池周辺に未知の山茶碗窯が存在する可能性が高くなった。



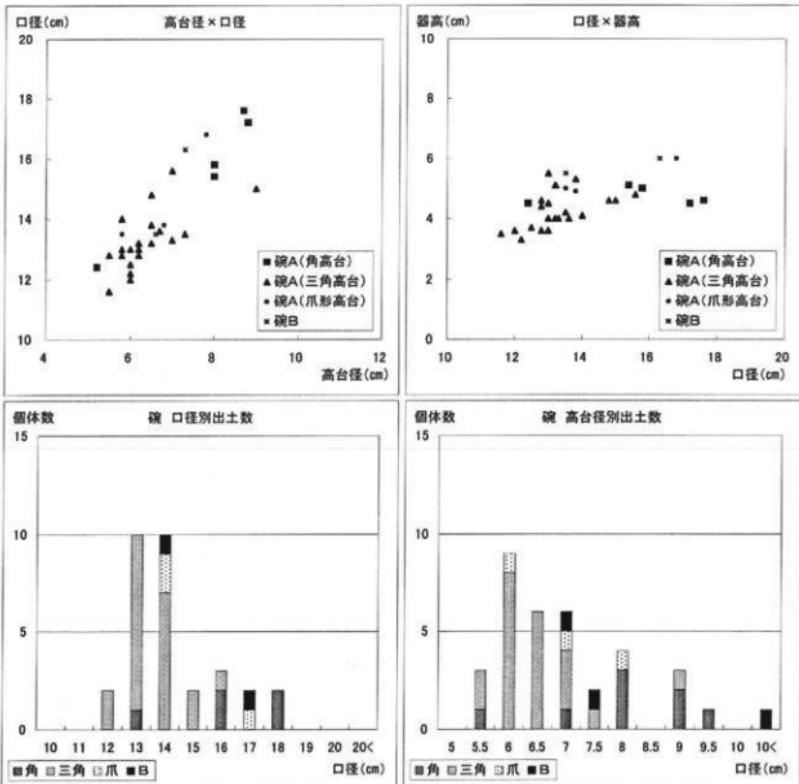
第387図 大屋敷古窯跡群(鷺玉中学校西採集ほか)出土遺物実測図②

## 2 吉名古窯跡群

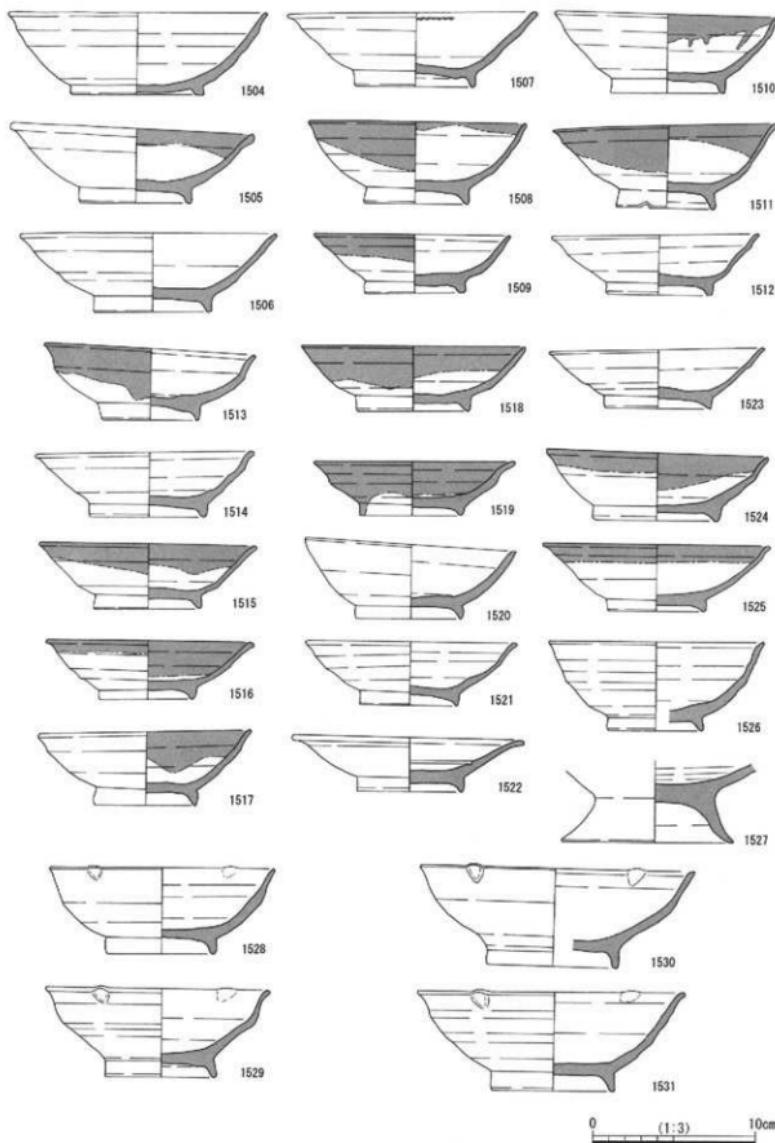
吉名古窯跡群は浜北市宮口吉名にある夜水沢池周辺の丘陵地に築窯されており、9基が確認されている。うち、吉名1・2号窯は1959(昭和34)年に静岡大学教育学部浜松分校歴史学研究部により発掘調査され(山村・平野1963)、吉名5・6号窯は1987・1988(昭和62・63)年浜北市菅明神池運動公園の建設に伴い、浜北市教育委員会により大屋敷5号窯と共に発掘調査された。以下に、各窯の概要と出土した灰釉陶器の概要を示す。

### (1) 吉名5号窯(第388~392図)

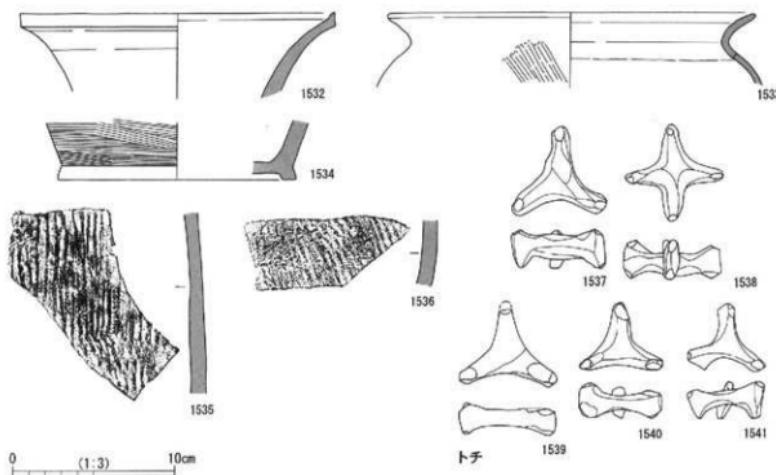
吉名5号窯からは灰釉陶器碗(1504~1521, 1523~1526, 1544~1549, 1552, 1571)、輪花碗(1528~1531)、皿(1522, 1550~1551)、托(1527)、長頸壺(1532)、壺か鉢(1535~1536)、壺(1533)、窯道具の三叉トチ(1537, 1539~1541, 1553~1555)・十字トチ(1538)、平瓦(1543)、丸瓦(1542)が出土した。なお、吉名5号窯の灰原と6号窯の灰原は重複しており、以下に記述する角高台の碗・皿・トチは吉名6号窯に伴う蓋然性が高い。



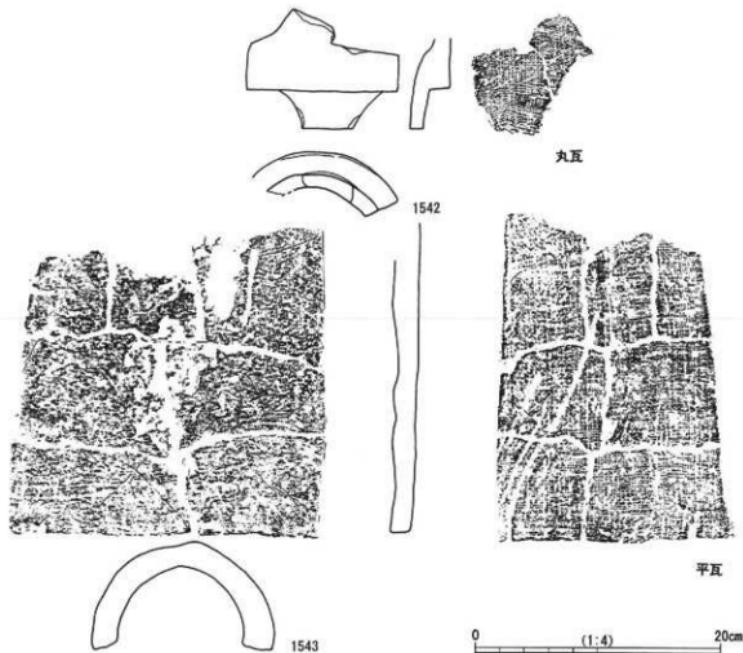
第388図 吉名5号窯出土物分布図



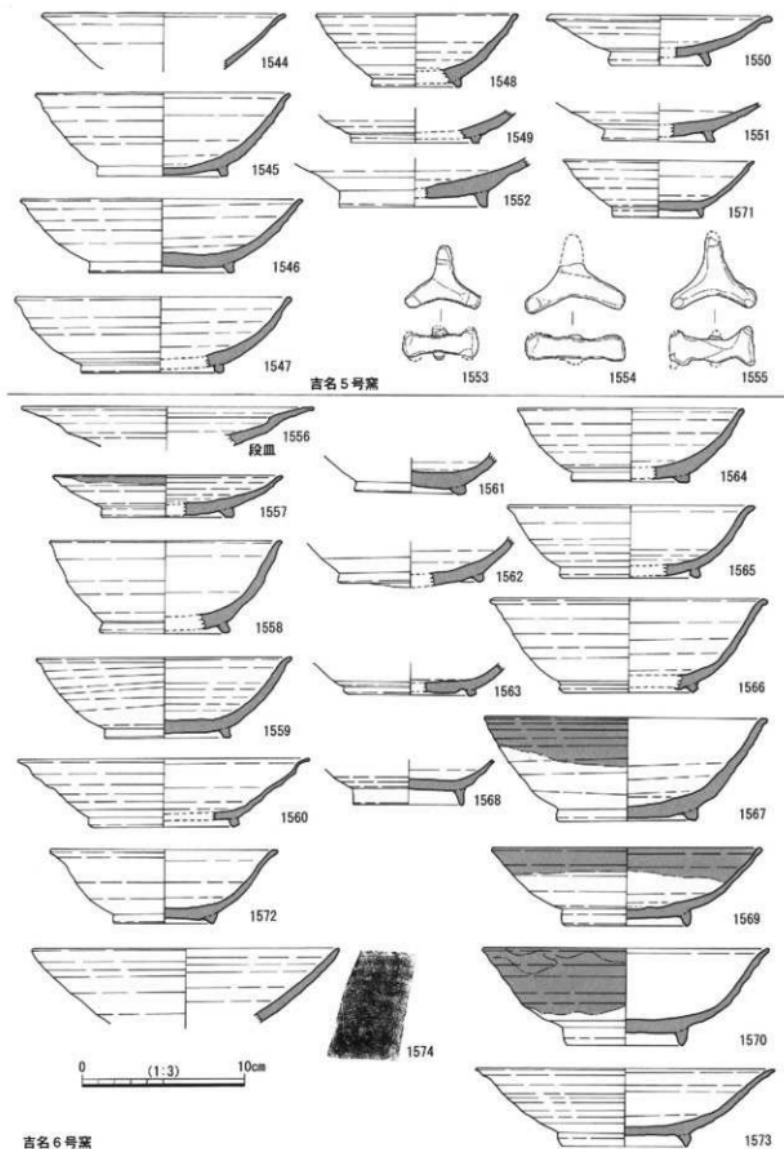
第389図 吉名 5号窯出土遺物実測図①(浜北市教委1989より)



第390図 吉名5号窯出土遺物実測図②(浜北市教委1989より)



第391図 吉名5号窯出土遺物実測図③(浜北市教委1989より)



第392図 吉名5号窯出土遺物実測図④および吉名6号窯出土遺物実測図①

碗の高台は角高台、三角高台、爪形高台、爪形で高い高台(碗B)の4種が確認できる。

吉名5号窯出土碗は、高台径は6.0~6.5cmに大きな山があるが大きくなるにつれて減少するではなく8.0~8.5cmのところにもう一度山が存在する。しかし、高台が4種類存在するため、それぞれでみると、角高台の碗(1504、1545~1548ほか)は、高台径7.0~9.0cm、口徑15.5~17.5cm、器高4.5~5.0cmをはかる。

三角高台の碗(碗A、1507~1521、1523~1526、1571ほか)は高台径6.0~7.5cm、口徑12.0~14.0cmの範囲には収まり、14.0cmを越えるのは2点のみである。器高は3.5~5.0cmをはかる。

爪形で高台が高いもの(碗B)は、輪花碗のみで口徑16.3~16.8cm、器高6.0cm、高台径7.3~7.8cmをはかる。

したがって、角高台のものが大型であり、三角高台になると、口径、器高、高台径が小形化する傾向にある。また、角高台のものは、口縁端部を外側に引き出しが、三角高台のものは、口縁端部は直線的である。

皿は角高台(1551)、三日月高台(1550)、低い三日月高台(あるいは三角高台、1522)が出土しており、三日月高台の1550は、口縁端部を外側に向かって明瞭に引き出しが、低い三日月高台の1522は僅かに引き出すのみである。

1527は托の可能性があり、高台径10.0cm、高台高約3.0cmをはかる。

吉名6号窯製品のうち、角高台のものは隣接する吉名6号窯の製品が混在していると考えられている(浜北市教委1989)。三角高台・爪形高台の碗は大屋敷1・5号窯と同形態であり、法量も同様の傾向を示している。

## (2) 吉名6号窯(第392~397図)

吉名6号窯からは灰釉陶器碗(1558~1570、1572~1574、1577~1585、1588~1602)、皿(1557、1575~1576、1586~1587)、段皿(1556)、小型壺(1625)、長頸壺(1603~1604、1628)、短頸壺(1605~1626)、透かし入り脚付盤(1630)、手付瓶(1627)、要か鉢(1631~1632)のほか窯道具の十字トチ(1609~1635)、三叉トチ(1610~1623、1633~1634)、コップ形ツク(1607~1608)などが出土している。

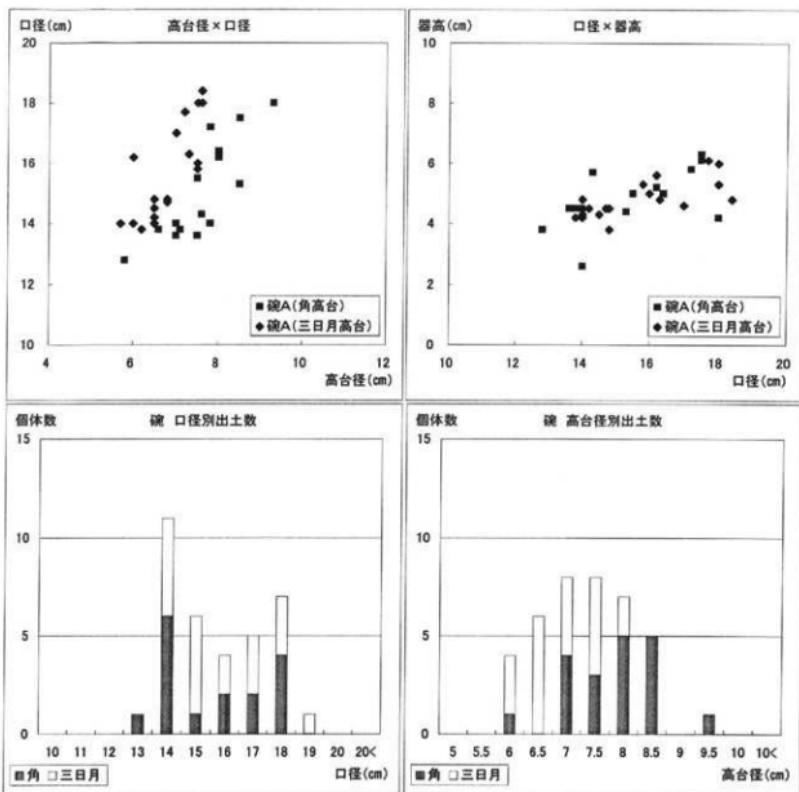
碗は角高台、三日月高台が存在する。高台の形ごとに法量をみると、角高台は高台径7.0~9.5cmの範囲に収まり、口径は13.0~17.5cmの範囲に収まり、14.0cm前後と16.5cm前後を頂点に二つの山を確認することができる。これにより、法量において大小に区分されていたことが判明し、大型は口径16.5~18.0cm、器高5.0~6.0cm、高台径7.0~9.0cmで、小型は口径14.0cm前後、器高4.0cm前後、底部径6.0~7.0cmをはかる。

三日月高台の碗は6.0~8.0cmの範囲に収まり、口徑は14.0~18.0cmの範囲で、14.0~15.0cm前後と17.0~18.0cm前後の二つの山を確認することができ、角高台と同様、大小に作り分けされていたことが判明する。

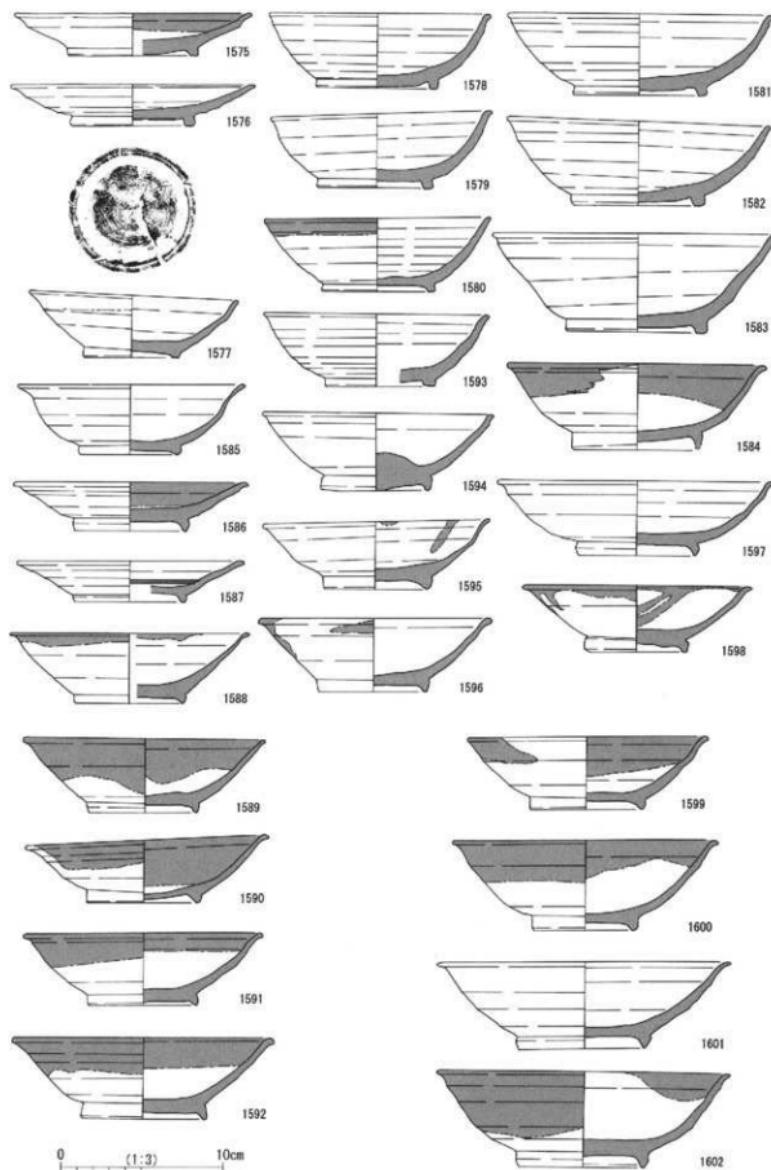
碗の底部調整に関して、角高台はヘラ削りを施すものが多く、三日月高台ではヘラ削りも確認できるが、ナデ調整のものが増加している。施釉方法は角高台、三日月高台とともに刷毛塗りが多い。

皿は角高台のもの(1575~1576)、三日月高台のもの(1586~1587)があり、ともに口縁端部は外側に引き出しているが、1587のみ底部から直線的にのび、丸く納められている。

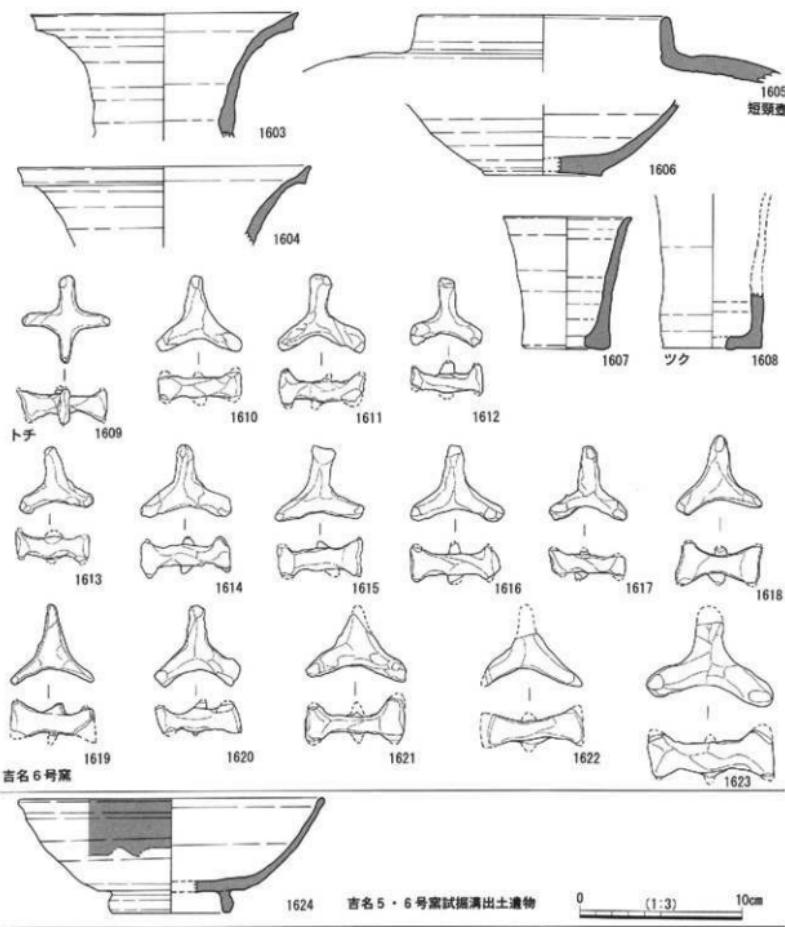
トチは長さ4.3~5.5cmの範囲に大部分が収まり、5.0cm前後が多く、1622が7.2cm、1623が11.5cmと大型である。高さは1.5~2.5cmで、1623のみ4.0cmをはかる。



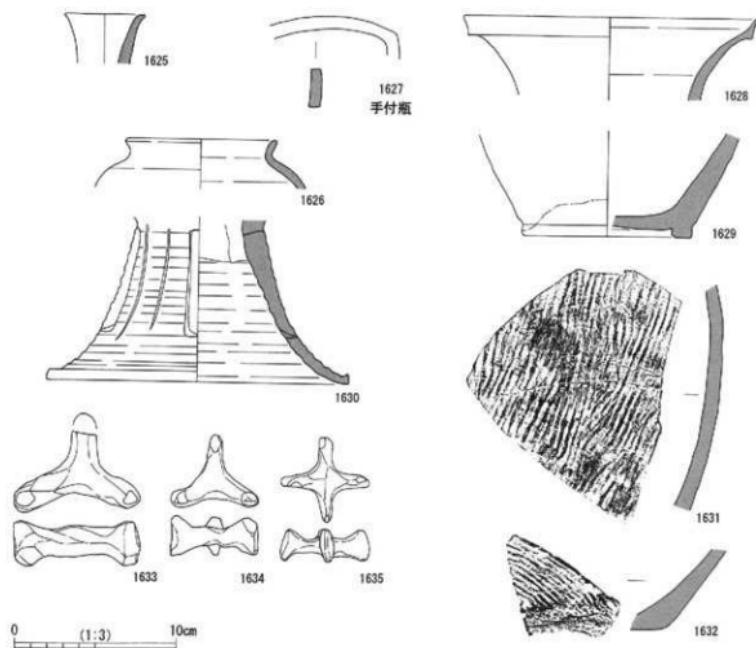
第393図 吉名6号窯出土碗法量図



第394図 吉名6号窯出土遺物実測図2(浜北市教委1989より)



第395図 吉名6号窯出土遺物実測図③



第396図 吉田6号窯出土遺物実測図4(浜北市教委1989より)

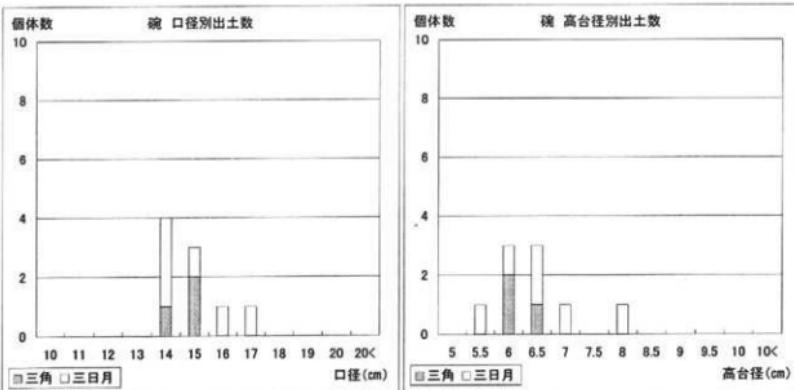
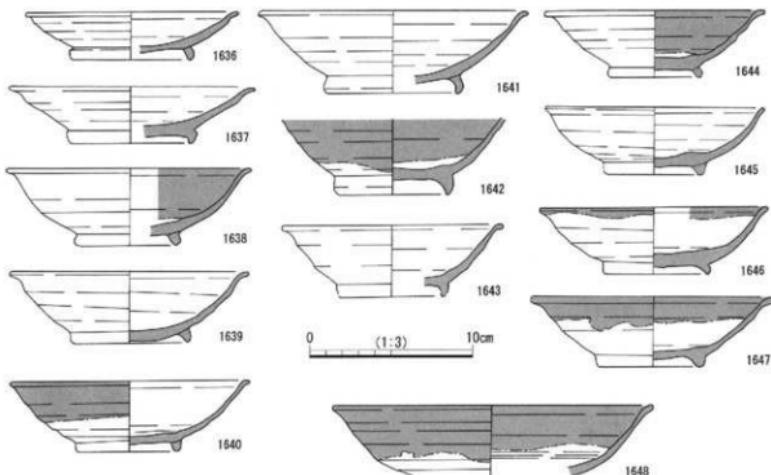
## (3) 吉名1・2号窯(第397図)

吉名1・2号窯出土とされる遺物が『明神池運動公園』に掲載されている(浜北市教委1989)。吉名1・2号窯は、昭和34(1959)年に静岡大学浜松分校歴史学研究部により調査が実施され、簡易な報告がなされている(静岡大学1959)。

報告された遺物(浜北市教委1989)は碗(1638～1648)と皿(1636・1637)であり、高台は三日月高台で、口縁端部は外側に引き出されている。

碗(1638～1647)の口径は、13.0～16.5cm、器高3.0～5.0cm、高台径5.5～8.0cmをはかる。碗(1648)は大型であり、口径19.6cmをはかる。

皿の口径は13.0cmと15.0cmで、器高は3.0cmと3.5cm、高台径7.0cmと7.2cmをはかる。



第397図 吉名1・2号窯出土遺物実測図(浜北市教委1989より)および碗法量図

## (4) 吉名1号窯(第398・399図)

吉名1号窯からは灰釉陶器碗(1649～1654, 1659～1661, 1664～1666, 1669～1672)、耳皿(1673～1674)、皿(1656, 1662, 1667・1668)、無台碗(1657・1658, 1663?)、小型壺(1675・1676)、長頸壺(1678)、蓋(1655・1679)、小型短頸壺(1677)、大型短頸壺(1680)、垂壺、円面壺、二面壺、瓦、不明大型土製品のほか、窯道具としてトチ、サヤが出土している(山村・平野1963, 平野1992)。碗、耳皿、皿、無台碗、小型壺、長頸壺、蓋、小型短頸壺、大型短頸壺を『静岡県史』(平野1992)より転載した。

なお、1号窯からは内面に蓮華(1649など)や蝶(1650)が線刻された碗、蓋が出土している。

碗は、三日月高台、低い三日月高台のものが出土している。

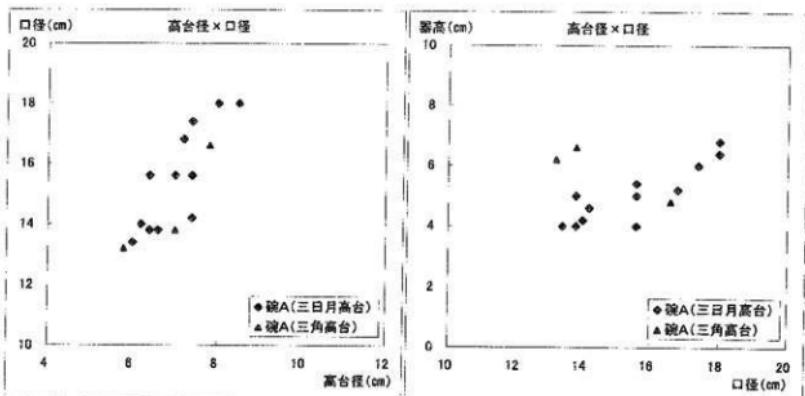
三日月高台は口径15.0cm以上、器高5.5～7.0cm、高台径7.0～9.0cmと、口径14.0cm前後、高台径6.0cm前後の大小が確認できる。口縁端部を外側に向かって水平に引き出すものが多い。三日月高台の法量は吉名6号窯出土の三日月高台碗の法量とはほぼ同様であり、同時期の生産と考えることができる。

一方、低い三日月高台(三角高台)は口径13.0～14.0cm、器高6.0～7.0cm、高台径6.0～7.0cmと、やや大型の口径16.0～17.0cmをはかるものがある。

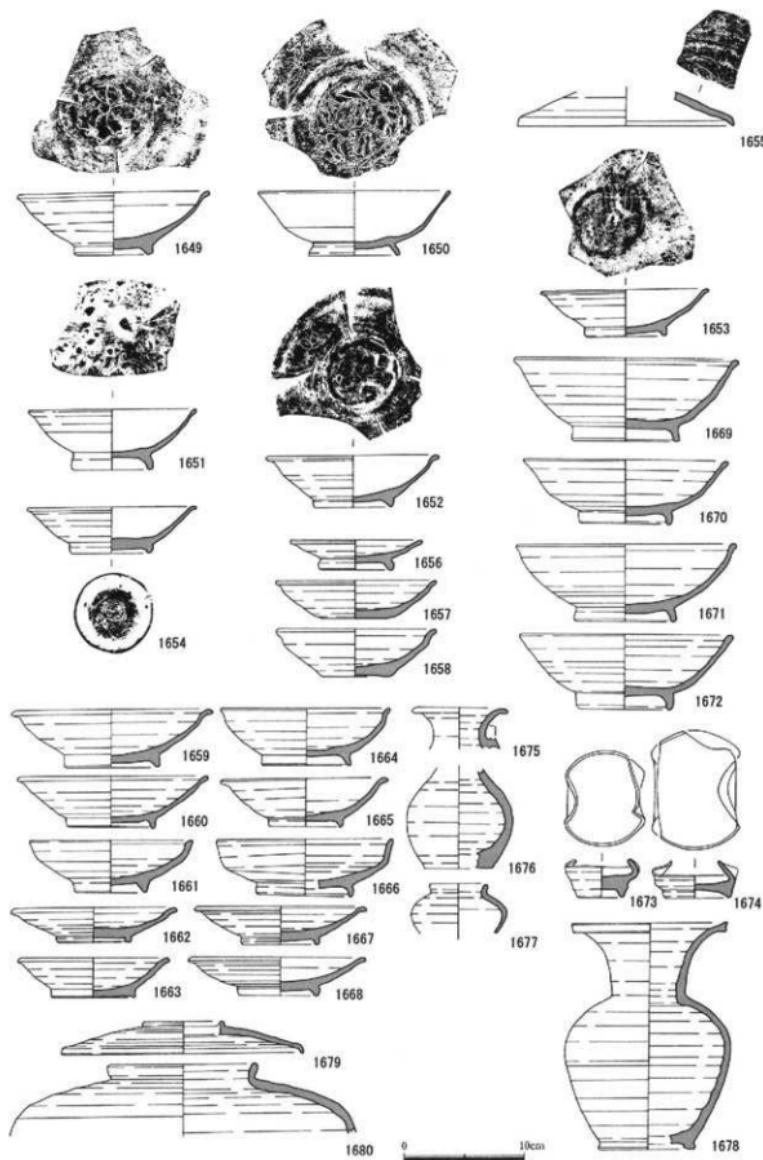
無台碗(1657・1658)は、口径13.0cm、器高3.0～3.8cm、底径5.0～5.4cmをはかり、口縁部直下を強く焼て、折腕状の段にしている。

皿(1656, 1662, 1667・1668)は口径10.6～14.4cm、器高2.3～3.2cm、高台径5.8～6.2cmをはかる。

長頸壺(1678)は角高台を有するもので、口径12.0cm、器高18.6cm、胴部最大径13.5cm、高台径7.6cmをはかる。口径からみると、大屋敷1号窯の小型に近い大きさである。



第398図 吉名1号窯出土碗法量図



第399図 吉名1号窯出土灰釉陶器実測図(静岡県1992より)

### 3 新池古窯跡群

新池古窯跡群は浜北市宮口に所在する新池東側の丘陵地の斜面に存在しており、灰原が新池に水没しているため基數等は不明である。碗・瓦等が出土している(浜北市教委1989)。図示されていないため、様相は不明である。

### 4 讀榮古窯跡群(第400・404図)

讀榮古窯跡群は、浜北市宮口讀榮の三方原台地の東縁に8基が確認されており、碗、皿、長頸壺、壺が採集されている。うち1・5号窯周辺で表面採集された遺物が報告されている(浜北市教委1989)。

讀榮1号窯出土遺物が灰釉陶器碗(1681)、讀榮5号窯出土遺物が灰釉陶器碗(1682・1683)である。前者は三角高台で口径12.3cm、高台径6.5cm、器高4.5cmをはかる。讀榮5号窯出土の1683は三角高台で口径14.5cm、高台径6.0cm、器高4.2cmをはかる。1682は爪形の高い高台で、高台径5.8cmをはかる。

### 5 梶池古窯跡群(第402・404図)

梶池古窯跡群は別名「天神山窯」と呼称されており(静岡大学1958)、3基確認されている。山茶碗、小碗、輪花碗、壺、小壺、壺が採集されている。

梶池古窯跡群から山茶碗4点(1696～1699)、小碗3点(1693～1695)が報告されている。碗と小碗の組み合わせである。

碗(1696・1697)は潰れた三角高台で、高台先端には初級痕が残存する。口径16.0cm、器高5.4cm、高台径8.0cmをはかる。輪花碗(1698・1699)は碗よりもやや大型で、口径17.0～17.5cm、器高5.0cm、高台径8.0cmをはかる。

小碗(1693～1695)は、潰れた三角高台で口径8.8～9.6cm、器高2.7～2.9cm、高台径4.2～4.5cmをはかる。後述する土取古窯跡群出土のものよりやや小型である。

### 6 土取古窯跡群(第401・404図)

土取古窯跡群は別称「森山窯」(静岡大学1958)とされ、浜北市宮口土取の丘陵地の斜面に位置しており、2基が確認されている。小碗、山茶碗、壺が出土している。

山茶碗・輪花碗は三角高台(1689・1690)、潰れた三角高台(1691)があり、後者に初級痕が残る。底部は糸切り未調整である。山茶碗は口径16.0～16.4cm、器高5.0～5.5cm、高台径6.6～7.0cmをはかる。輪花碗は、口径20.7cm、器高7.0と大型であり、高台径7.8cmをはかる。

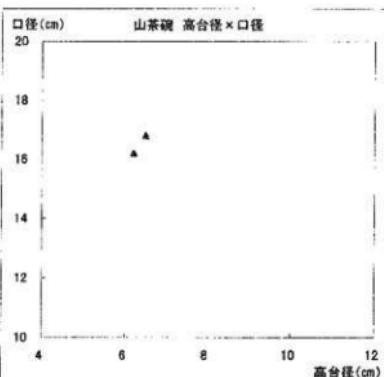
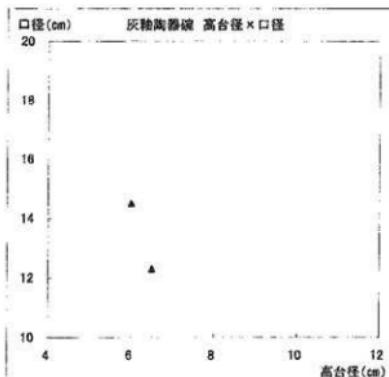
小碗・輪花小碗(1684～1688)は三角高台で、底部は糸切り後ナデ調整されている。口径9.3～11.0cm、器高3.0～4.0cm、高台径4.5～5.5cmをはかる。

壺(1692)は口径13.3cm、胴部最大径22.0cmをはかる。肩部に「山さは」とヘラ書きされている。

### 7 西ノ谷古窯跡(第403・404図)

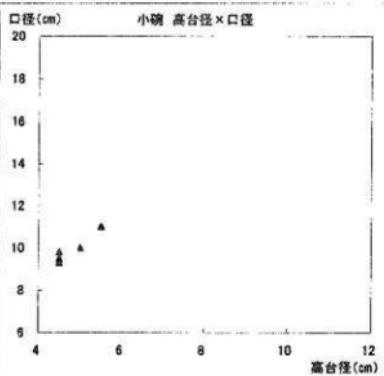
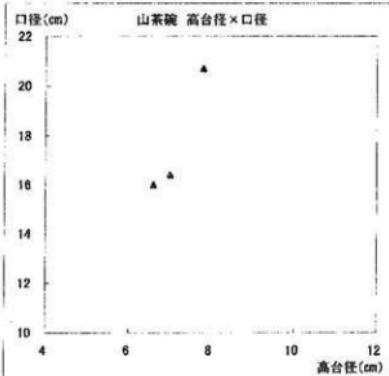
西ノ谷古窯跡は浜北市宮口大屋敷と尾野の境にある北麓丘陵の侵食谷(西ノ谷)の西側斜面に位置しており、基數は明確ではない。山茶碗が採集されており、3点(1700～1702)が報告されている(浜北市教委1989)。

高台端部には初級痕が確認でき、高台は低く潰れた三角形を呈している。口径16.2～16.8cm、器高5.4～5.6cm、高台径6.2～6.5cmをはかる。



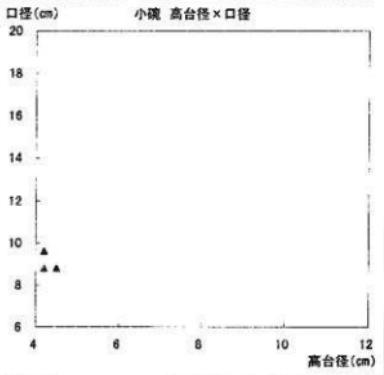
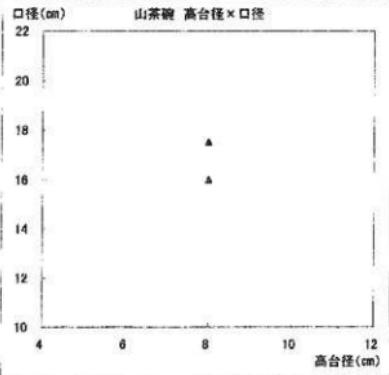
第400図 謼安古窯跡群出土碗法量図

第403図 西ノ谷古窯跡出土碗法量図

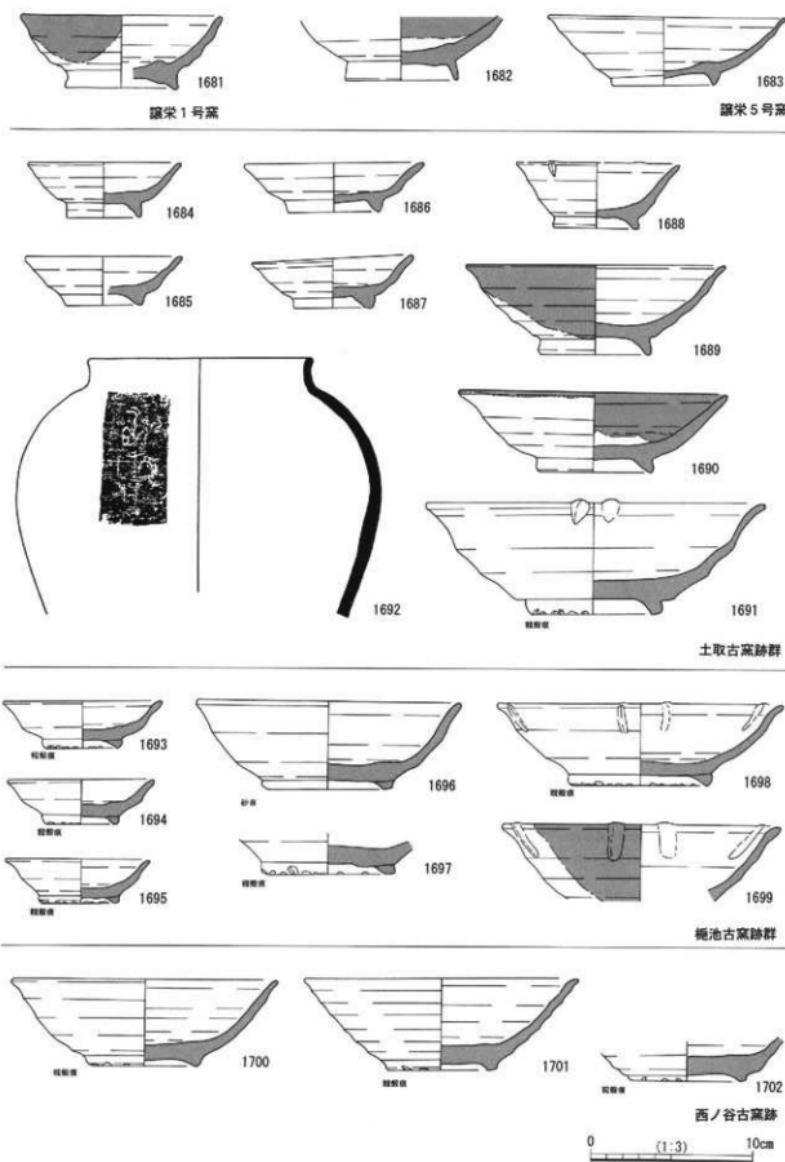


第401図 土取古窯跡群出土碗法量図

第402図 桶池古窯跡群出土碗法量図



第402図 桶池古窯跡群出土碗法量図



第404図 謙栄古窯跡群・土取古窯跡群ほか出土遺物実測図(浜北市教委1989より)

第61表 宮古宮跡群出土灰釉陶器・山茶器観察表

番号	出土場	件数	種類	口径 (cm)	底面 形	底部 性質	高台 高	色調	焼成	紡土	施釉	底部調査	内部底部	備考	報告書 番号
1220	大庭敷6号	375	瓦		丸瓦			灰黄	良好	泥					
1221	大庭敷6号	375	山茶碗		筒			灰黄	良好	泥					
1222	大庭敷6号	375	山茶碗		筒			灰黄	良好	泥					
1223	大庭敷6号	375	山茶碗		筒			灰黄	良好	泥					
1224	大庭敷6号	375	山茶碗		筒			灰黄	良好	泥		不明	静止ナメ	細線	
1225	大庭敷6号	375	山茶碗		筒			灰黄	良好	泥		ナメ	未調査	細線	
1226	大庭敷6号	375	山茶碗		筒			灰黄	良好	泥		ナメ	静止ナメ	細線	
1227	大庭敷6号	375	山茶碗		筒			灰黄	良好	泥		ナメ	未調査	細線	
1228	大庭敷6号	375	山茶碗		筒			灰黄	良好	泥		ナメ	未調査	細線	
1229	大庭敷6号	375	山茶碗?		筒?			灰黄	良好	泥					
1230	大庭敷6号	375	瓦		瓦			灰黄	良好	泥					
1241	大庭敷6号	375	焼台					灰黄	良好	相					
1242	大庭敷6号	375	焼台					灰黄	良好	相					
1243	大庭敷6号	375	焼台					灰黄	良好	相					
1244	大庭敷6号	375	焼台					灰黄	良好	相					
1245	大庭敷6号	375	焼台					灰黄	良好	相					
1246	大庭敷6号	375	焼台					灰黄	良好	相					
1247	大庭敷6号	375	焼台					灰黄	良好	相					
1248	大庭敷6号	375	焼台					灰黄	良好	相					
1249	大庭敷6号	375	焼台					灰黄	良好	相					
1250	人形敷5号	379	灰釉		無口筒		12.6	2.5	5.1						82
1251	人形敷5号	379	灰釉		無口筒		13.0	2.7	6.0						84
1252	人形敷5号	379	灰釉		無口筒		12.0	3.6	5.4						100
1253	人形敷5号	379	灰釉		筒		12.4	4.0	5.6	0.5					94
1254	人形敷5号	379	灰釉		筒		12.0	4.0	6.0	0.4					未調査
1255	人形敷5号	379	灰釉		筒		13.0	3.4	6.5	0.5					未調査
1256	人形敷5号	379	灰釉		筒		13.0	4.0	6.0	0.7					104
1257	人形敷5号	379	灰釉		筒		11.8	3.3	5.5	0.7					98
1258	人形敷5号	379	灰釉		筒		12.5	4.0	6.0	0.8					102
1259	人形敷5号	379	灰釉		筒		13.0	4.5	6.5	0.8					90
1260	人形敷5号	379	灰釉		筒		13.0	4.5	6.0	0.7					86
1261	人形敷5号	379	灰釉		筒		13.0	4.5	6.0	1.0					88
1262	人形敷5号	379	灰釉		筒		15.3	2.8	6.7	0.6					112
1263	人形敷5号	379	灰釉		筒		13.2	4.1	5.0	0.9					110
1264	人形敷5号	379	灰釉		筒		13.8	4.6	6.7	0.8					106
1265	人形敷5号	379	灰釉		筒		13.6	4.1	6.4	0.9					105
1266	人形敷5号	379	灰釉		筒		13.1	4.3	6.8	0.6					103
1267	人形敷5号	379	灰釉		筒		13.8	2.7	6.0	0.9					92
1268	人形敷5号	379	灰釉		筒		13.8	4.0	6.5	0.6					113
1269	人形敷5号	379	灰釉		筒		12.7	4.4	5.3	0.8					111
1270	人形敷5号	379	灰釉		筒		14.0	4.8	6.5	0.9					83
1271	人形敷5号	379	灰釉		筒		13.0	5.4	6.4	0.9					101
1272	人形敷5号	379	灰釉		筒		15.4	6.1	5.5	0.9					97
1273	人形敷5号	379	灰釉		筒		15.6	7.3	6.1	1.2					109
1274	人形敷5号	379	灰釉		筒		15.4	5.6	7.5	0.8					93
1275	人形敷5号	379	灰釉		筒		16.6	4.0	7.5	1.1					96
1276	人形敷5号	379	灰釉		筒		16.5	5.5	7.0	1.2					107
1277	人形敷5号	379	灰釉		輪花筒		13.0	4.6	6.6	0.9					91
1278	人形敷5号	379	灰釉		輪花筒?		13.5	3.0	6.0	0.9					87
1279	人形敷5号	379	灰釉		輪花筒		12.5	3.4	5.7	0.8					85
1280	人形敷5号	379	灰釉		輪花筒		13.5	5.2	6.8	0.8					89
1281	人形敷5号	379	灰釉		輪花筒		15.0	5.5	7.3	1.1					106
1282	人形敷5号	380	灰釉		筒		13.5	3.7	6.5	0.8					ナメ
1283	人形敷5号	380	灰釉		筒		13.6	4.0	6.8	0.7					ナメ
1284	人形敷5号	380	灰釉		筒		13.5	4.1	7.0	0.6					ナメ
1285	人形敷5号	380	灰釉		筒		13.2	4.0	6.2	0.5					ナメ
1286	人形敷5号	380	灰釉		筒		12.7	4.2	6.4	0.5					未調査
1287	人形敷5号	380	灰釉		筒		13.5	4.5	6.7	0.8					未調査
1288	人形敷5号	380	灰釉		筒		14.0	4.3	7.5	0.8					未調査
1289	人形敷5号	380	灰釉		筒		13.9	3.7	6.4	0.8					未調査
1290	人形敷5号	380	灰釉		筒		13.5	4.2	6.7	0.8					未調査
1291	人形敷5号	380	灰釉		筒		13.5	4.2	6.5	0.9					未調査
1292	人形敷5号	380	灰釉		筒		13.4								
1293	人形敷5号	380	灰釉		筒		12.2	3.9	6.3	0.6					未調査
1294	人形敷5号	380	灰釉		筒		13.7	4.5	6.2	0.7					未調査
1295	人形敷5号	380	灰釉		筒		13.0	2.7	5.5	0.6					未調査
1296	人形敷5号	380	灰釉		筒		13.1	4.6	6.5	0.8					未調査
1297	人形敷5号	380	灰釉		筒		13.5	4.0	6.7	0.7					未調査
1298	人形敷5号	380	灰釉		筒		12.8	4.2	6.5	0.5					未調査
1299	人形敷5号	380	灰釉		筒		13.3	4.1	5.5	0.6					未調査
1300	人形敷5号	380	灰釉		筒		13.2	4.2	6.3	0.5					未調査
1301	人形敷5号	380	灰釉		筒		13.5								
1302	人形敷5号	380	灰釉		筒		12.3	3.6	6.3	0.7					未調査
1303	人形敷5号	380	灰釉		筒		12.3	3.8	5.0	0.6					未調査
1304	人形敷5号	380	灰釉		筒		13.0	3.9	6.7	0.7					未調査
1305	人形敷5号	380	灰釉		筒		13.5	4.2	6.0	0.8					未調査
1306	人形敷5号	380	灰釉		筒		13.2	3.8	6.7	1.0					未調査
1307	人形敷5号	380	灰釉		筒		13.5	4.1	6.2	0.7					未調査

番号	出水室	時間	種類	若葉	日経 (mm)	露葉	成葉	高台	葉面	葉裏	葉裏	地上部	底部調査	内面調査	参考	加藤 番号
1308	大根葉 5 分	380	灰緑	無	13.1	4.8	6.4	0.8	露白	不良	無	無	無	無	無	1308
1309	大根葉 5 分	380	灰緑	無	13.0	3.5	6.4	0.7	露白	良好	無	無	無	無	1309	
1310	大根葉 5 分	380	灰緑	無			7.0	0.9	露白	良好	無	無	無	無	1310	
1311	大根葉 5 分	380	灰緑	無			6.2	0.7	露白	不良	無	無	無	無	1311	
1312	大根葉 5 分	380	灰緑	無			7.4	0.6	露白	不良	無	無	無	無	1312	
1313	大根葉 5 分	380	灰緑	無			6.8	0.7	露白	良好	無	無	無	無	1313	
1314	大根葉 5 分	380	灰緑	無			6.8	0.8	露白	良好	無	無	無	無	1314	
1315	大根葉 5 分	380	灰緑	無			6.3	0.8	露白	良好	無	無	無	無	1315	
1316	大根葉 5 分	380	灰緑	無			6.5	0.7	露白	良好	無	無	無	無	1316	
1317	大根葉 5 分	380	灰緑	無			6.8	1.0	露白	不良	無	無	無	無	1317	
1318	大根葉 5 分	380	灰緑	無			6.3	0.7	露白	良好	無	無	無	無	1318	
1319	大根葉 5 分	380	灰緑	無			6.0	0.8	露白	良好	無	無	無	無	1319	
1320	大根葉 5 分	380	灰緑	無			5.7	0.7	露白	良好	無	無	無	無	1320	
1321	大根葉 5 分	381	灰緑	無			12.8	4.4	6.1	0.7	露白	良好	無	無	1321	
1322	大根葉 5 分	381	灰緑	無			12.8	4.6	6.8	0.8	露白	良好	無	無	1322	
1323	大根葉 5 分	381	灰緑	無			13.0	4.6	6.8	0.9	露白	良好	無	無	1323	
1324	大根葉 5 分	381	灰緑	無			12.9	4.6	6.8	0.8	露白	良好	無	無	1324	
1325	大根葉 5 分	381	灰緑	無			12.1	4.5	6.0	0.9	露白	良好	無	無	1325	
1326	大根葉 5 分	381	灰緑	無			12.9				露白	良好	無	無	1326	
1327	大根葉 5 分	381	灰緑	無			13.6	4.2	6.5	0.5	露白	良好	無	無	1327	
1328	大根葉 5 分	381	灰緑	無			13.2	4.0	6.2	0.7	露白	良好	無	無	1328	
1329	大根葉 5 分	381	灰緑	無			13.2	4.3	6.0	0.6	露白	良好	無	無	1329	
1330	大根葉 5 分	381	灰緑	無			13.3	3.5	6.0	0.7	露白	良好	無	無	1330	
1331	大根葉 5 分	381	灰緑	無			13.0	3.8	6.3	0.7	露白	良好	無	無	1331	
1332	大根葉 5 分	381	灰緑	無			14.1	4.1	6.5	0.7	露白	良好	無	無	1332	
1333	大根葉 5 分	381	灰緑	無			13.2	5.8	6.5	1.1	露白	良好	無	無	1333	
1334	大根葉 5 分	381	灰緑	無			13.6	4.9	6.5	0.9	露白	良好	無	無	1334	
1335	大根葉 5 分	381	灰緑	無			13.5	5.0	7.1	0.8	露白	不良	無	無	1335	
1336	大根葉 5 分	381	灰緑	無			12.4	4.9	6.8	0.9	露白	良好	無	無	1336	
1337	大根葉 5 分	381	灰緑	無			13.2	3.6	6.5	0.5	露白	良好	無	無	1337	
1338	大根葉 5 分	381	灰緑	無			12.2	3.4	5.7	0.7	露白	良好	無	無	1338	
1339	大根葉 5 分	381	灰緑	無			12.9	4.0	6.8	0.7	露白	良好	無	無	1339	
1340	大根葉 5 分	381	灰緑	無			12.7	4.1	6.4	0.6	露白	良好	無	無	1340	
1341	大根葉 5 分	381	灰緑	無			13.6	4.2	6.2	0.9	露白	良好	無	無	1341	
1342	大根葉 5 分	381	灰緑	無			12.6	4.1	6.8	0.9	露白	良好	無	無	1342	
1343	大根葉 5 分	381	灰緑	無			12.9	6.0	6.7	0.9	露白	不良	無	無	1343	
1344	大根葉 5 分	381	灰緑	無			13.8	5.1	6.8	0.8	露白	良好	無	無	1344	
1345	大根葉 5 分	381	灰緑	無			13.5	5.0	6.5	1.0	露白	良好	無	無	1345	
1346	大根葉 5 分	381	灰緑	無			13.2	4.9	7.0	0.8	露白	良好	無	無	1346	
1347	大根葉 5 分	381	灰緑	無			14.7	4.6	6.9	0.9	露白	良好	無	無	1347	
1348	大根葉 5 分	382	灰緑	無			12.5	5.0	6.8	0.9	露白	良好	無	無	1348	
1349	大根葉 5 分	382	灰緑	無			13.8	3.9	6.7	0.6	露白	良好	無	無	1349	
1350	大根葉 5 分	381	灰緑	無			12.7	2.8	6.5	0.5	露白	良好	無	無	1350	
1351	大根葉 5 分	381	灰緑	無			13.0	4.2	5.8	0.7	露白	良好	無	無	1351	
1352	大根葉 5 分	381	灰緑	無			12.0	4.1	6.7	0.8	露白	良好	無	無	1352	
1353	大根葉 5 分	381	灰緑	無			12.7	3.6	6.0	0.5	露白	良好	無	無	1353	
1354	大根葉 5 分	382	灰緑	無			13.2	2.6	6.0	0.6	露白	良好	無	無	1354	
1355	大根葉 5 分	382	灰緑	無			12.0	4.3	6.7	0.5	露白	良好	無	無	1355	
1356	大根葉 5 分	382	灰緑	無			13.1	3.7	6.0	0.6	露白	良好	無	無	1356	
1357	大根葉 5 分	382	灰緑	無			13.2	4.0	7.0	0.7	露白	良好	無	無	1357	
1358	大根葉 5 分	382	灰緑	無			13.0	3.9	6.8	0.8	露白	良好	無	無	1358	
1359	大根葉 5 分	382	灰緑	無			13.4	4.4	6.7	0.8	露白	良好	無	無	1359	
1360	大根葉 5 分	382	灰緑	無			14.0	4.2	7.0	0.6	露白	良好	無	無	1360	
1361	大根葉 5 分	382	灰緑	無			13.0	3.8	6.5	0.6	露白	良好	無	無	1361	
1362	大根葉 5 分	382	灰緑	無			14.3	4.0	6.1	0.8	露白	良好	無	無	1362	
1363	大根葉 5 分	382	灰緑	無			14.0	4.0	6.7	0.8	露白	良好	無	無	1363	
1364	大根葉 5 分	382	灰緑	無			12.5	3.1	6.0	0.6	露白	良好	無	無	1364	
1365	大根葉 5 分	382	灰緑	無			13.4	4.3	6.5	0.7	露白	良好	無	無	1365	
1366	大根葉 5 分	382	灰緑	無			12.7	3.5	6.4	0.6	露白	良好	無	無	1366	
1367	大根葉 5 分	382	灰緑	無			13.8	4.3	6.7	0.8	露白	良好	無	無	1367	
1368	大根葉 5 分	382	灰緑	無			14.5	4.5	6.7	1.1	露白	良好	無	無	1368	
1369	大根葉 5 分	382	灰緑	無			13.2	3.8	6.0	0.6	露白	良好	無	無	1369	
1370	大根葉 5 分	382	灰緑	無			13.9	4.1	7.0	0.7	露白	良好	無	無	1370	
1371	大根葉 5 分	382	灰緑	無			13.6	3.8	6.2	0.8	露白	良好	無	無	1371	
1372	大根葉 5 分	382	灰緑	無			12.8	4.3	6.1	0.7	露白	良好	無	無	1372	
1373	大根葉 5 分	382	灰緑	無			13.6	4.8	6.2	0.8	露白	良好	無	無	1373	
1374	大根葉 5 分	382	灰緑	無			13.4	4.0	7.0	0.7	露白	良好	無	無	1374	
1375	大根葉 5 分	382	灰緑	無			13.9	3.6	6.4	0.5	露白	良好	無	無	1375	
1376	大根葉 5 分	382	灰緑	無			13.8	4.1	6.5	0.8	露白	良好	無	無	1376	
1377	大根葉 5 分	382	灰緑	無			12.8	4.1	6.2	0.8	露白	良好	無	無	1377	
1378	大根葉 5 分	382	灰緑	無			14.2	3.9	7.5	0.9	露白	良好	無	無	1378	
1379	大根葉 5 分	382	灰緑	無			13.8	4.4	6.8	0.6	露白	良好	無	無	1379	
1380	大根葉 5 分	382	灰緑	無			14.8	4.4	7.2	0.9	露白	良好	無	無	1380	
1381	大根葉 5 分	382	灰緑	無			14.2	3.8	7.0	0.7	露白	良好	無	無	1381	
1382	大根葉 5 分	382	灰緑	無			14.4	4.0	7.3	0.7	露白	良好	無	無	1382	
1383	大根葉 5 分	382	灰緑	無			13.7	3.6	7.2	0.6	露白	良好	無	無	1383	
1384	大根葉 5 分	382	灰緑	無			14.0	4.4	7.6	0.8	露白	良好	無	無	1384	
1385	大根葉 5 分	382	灰緑	無			14.0	4.4	7.0	0.7	露白	良好	無	無	1385	



番号	山上庭	沖縄	種類	個体	口径	基高	底深	高台	色調	地成	粒土	施舗	底部調査	内面底部	備考	報告番号
1464	集玉中学校西	386	灰輪	輪	16.5				灰白	良好	砂					
1465	集玉中学校西	386	灰輪	輪				7.3	0.6	灰白	良好	砂	水調整			
1466	集玉中学校西	386	灰輪	輪				6.5	0.6	灰白	良好	砂	ナダ			
1467	集玉中学校西	386	灰輪	輪				6.5	0.7	灰白	良好	砂	静止ナダ			
1468	集玉中学校西	386	灰輪	輪				5.8	0.7	灰白	良好	砂	水調整			
1469	集玉中学校西	386	灰輪	輪				6.0	0.7	淡黄褐色	不良	砂	水調整			
1470	集玉中学校西	386	灰輪	輪				6.5	0.7	灰白	良好	砂	水調整			
1471	集玉中学校西	386	灰輪	輪				6.0	0.8	灰白	良好	砂	ナダ			
1472	集玉中学校西	386	灰輪	輪				7.0	0.6	灰白	良好	砂	静止ナダ			
1473	集玉中学校西	386	灰輪	輪				6.0	0.8	灰白	良好	砂	水調整			
1474	集玉中学校西	386	灰輪	輪				7.0	0.7	暗灰黃	良好	砂	水調整			
1475	集玉中学校西	386	灰輪	輪				6.5	0.8	灰白	良好	砂	水調整			
1476	集玉中学校西	386	灰輪	輪				6.1	0.7	灰白	良好	砂	ナダ			
1477	集玉中学校西	386	灰輪	輪				6.5	0.7	灰白	良好	砂	ナダ			
1478	集玉中学校西	386	灰輪	輪				6.0	0.8	灰白	良好	砂	ナダ			
1479	集玉中学校西	386	灰輪	輪				6.3	0.7	灰黃	良好	砂	水調整			
1480	集玉中学校西	386	灰輪	輪				7.0	1.0	灰黃	良好	砂	水調整			
1481	集玉中学校西	386	灰輪	輪				7.8	0.8	灰黃	良好	砂	静止ナダ			
1482	集玉中学校西	386	灰輪	輪				7.0	0.7	灰黃	良好	砂	静止ナダ			
1483	集玉中学校西	386	灰輪	輪				7.0	0.7	灰白	不良	花	水調整			
1484	集玉中学校西	386	灰輪	輪									木調整			
1485	集玉中学校西	386	灰輪	輪				15.0		淡黃褐色	良好	砂				
1486	集玉中学校西	386	灰輪	輪				15.0		灰	良好	砂				
1487	集玉中学校西	386	灰輪	輪				15.3		淡灰黃	良好	砂				
1488	集玉中学校西	386	灰輪	輪				13.2		灰白	良好	砂				
1489	集玉中学校西	386	灰輪	輪				10.4		灰白	良好	砂				
1490	集玉中学校西	386	灰輪	輪				19.5		淡灰黃	良好	砂				
1491	經沢地北	387	灰輪	輪									水調整			
1492	經沢地北	387	灰輪	輪				12.2		灰白	良好	砂				
1493	經沢地北	387	灰輪	輪				15.5		灰白	良好	砂				
1494	經沢地北	387	灰輪	輪				7.2		灰白	良好	砂				
1495	經沢地北	387	灰輪	輪				6.9		灰白	良好	砂				
1496	經沢地北	387	灰輪	輪				6.9		灰白	良好	砂				
1497	經沢地北	387	灰輪	輪				4.8		灰白	良好	砂				
1498	經沢地北	387	灰輪	輪				9.0		灰白	良好	砂				
1499	經沢地北	387	灰輪	輪				14.0		灰白	良好	砂				
1500	經沢地北	387	灰輪	輪				10.5		灰白	良好	砂				
1501	經沢地北	387	灰輪	輪									水調整		3	
1502	大原里1・2号	387	灰輪	小型盤	4.3											1
1503	大原里3・4号	387	灰輪	輪	13.5	3.7	5.5	0.6					水調整		2	
1504	吉名5号	389	灰輪	輪	18.8	6.0	8.0	0.6					ヘラ削り		21	
1505	吉名5号	389	灰輪	輪	14.8	4.6	6.5	0.9					水調整		7	
1506	吉名5号	389	灰輪	輪	15.6	4.6	7.0	0.8					水調整		3	
1507	吉名5号	389	灰輪	輪	16.0	4.6	9.0	0.7					水調整		5	
1508	吉名5号	389	灰輪	輪	13.2	5.1	6.2	0.9					水調整		17	
1509	吉名5号	389	灰輪	輪	12.0	3.6	6.0	0.7					水調整		10	
1510	吉名5号	389	灰輪	輪	13.8	4.9	6.8	0.9					水調整		8	
1511	吉名5号	389	灰輪	輪	13.5	3.0	5.8	1.0					水調整		15	
1512	吉名5号	389	灰輪	輪	12.5	3.7	6.0	0.6					ソダ削		12	
1513	吉名5号	389	灰輪	輪	12.8	4.6	5.8	1.0					ナダ		2	
1514	吉名5号	389	灰輪	輪	12.3	4.0	7.0	0.7					水調整		8	
1515	吉名5号	389	灰輪	輪	13.2	4.0	6.5	0.7					水調整		4	
1516	吉名5号	389	灰輪	輪	12.8	3.6	5.5	0.7					水調整		6	
1517	吉名5号	389	灰輪	輪	13.0	4.5	6.0	0.9					水調整		11	
1518	吉名5号	389	灰輪	輪	13.6	4.0	6.7	0.9					ナダ		25	
1519	吉名5号	389	灰輪	輪	12.2	3.3	6.0	0.4					ナダ		14	
1520	吉名5号	389	灰輪	輪	12.8	4.6	6.2	0.9					水調整		9	
1521	吉名5号	389	灰輪	輪	13.0	4.0	5.8	0.7					水調整		22	
1522	吉名5号	389	灰輪	輪	14.0	3.2	6.2	0.9					水調整		23	
1523	吉名5号	389	灰輪	輪	13.0	2.6	6.2	0.6					水調整		1	
1524	吉名5号	389	灰輪	輪	13.5	4.2	7.3	0.8					ナダ		27	
1525	吉名5号	389	灰輪	輪	14.0	4.1	5.8	0.6					水調整		29	
1526	吉名5号	389	灰輪	輪	13.0	5.5	5.8	0.8					ナダ		34	
1527	吉名5号	389	灰輪	輪	10.9	2.5							水調整		28	
1528	吉名5号	389	灰輪	輪	13.8	5.3	6.5	1.0					ナダ		18	
1529	吉名5号	389	灰輪	輪	13.5	5.5	6.6	1.2					ナダ		16	
1530	吉名5号	389	灰輪	輪	16.8	6.0	7.8	1.0					水調整		26	
1531	吉名5号	389	灰輪	輪	16.3	6.0	7.2	1.1					水調整		13	
1532	吉名5号	390	灰輪	輪	19.3										29	
1533	吉名5号	390	灰輪	葉	22.5										30	
1534	吉名5号	390	灰輪	葉	14.6										32	
1535	吉名5号	390	灰輪	葉											31	
1536	吉名5号	390	灰輪	葉	5.9	2.3									33	
1537	吉名5号	390	蜜通員	トチ	5.7	2.4									37	
1538	吉名5号	390	蜜通員	トチ	5.9	2.4									38	
1539	吉名5号	390	蜜通員	トチ	6.0	2.5									34	
1540	吉名5号	390	蜜通員	トチ	5.0	2.0									35	
1541	吉名5号	390	蜜通員	トチ	4.8	2.2									26	

番号	出土場	件目	種類	器種	口径 (幅)	縦高	底径	高台 高	色調	焼成	胎土	施釉	底部調整	内面遮蔽	面考	和古文 書年
1542	吉名5号	391	瓦	瓦												36
1543	吉名5号	391	瓦	瓦												40
1544	吉名5号	392	灰陶	壺	15.0				灰白	良好	粗					
1545	吉名5号	392	灰陶	壺	15.4	8.1	8.0	0.7	灰白	良好	滑		ナダ?			
1546	吉名5号	392	灰陶	壺	17.2	6.7	5.8	0.7	灰白	良好	滑		火照焼			
1547	吉名5号	392	灰陶	壺	17.6	4.6	8.7	0.6	灰白	良好	滑		ヘラ削り			
1548	吉名5号	392	灰陶	壺	12.4	4.5	2.2	0.5	灰白	良好	滑		ヘラ削り			
1549	吉名5号	392	灰陶	壺					灰白	良好	滑					
1550	吉名5号	392	灰陶	壺	13.5	3.1	8.0	0.8	灰白	不良	滑		ヘラ削り			
1551	吉名5号	392	灰陶	壺					灰白	良好	滑		ヘラ削り			
1552	吉名5号	392	灰陶	壺					灰白	良好	滑					
1553	吉名5号	392	灰陶	壺					灰白	良好	滑					
1554	吉名5号	392	灰陶	壺					灰白	良好	滑					
1555	吉名5号	392	灰陶	壺					灰白	良好	滑					
1556	吉名6号	392	灰陶	壺	17.8				灰白	良好	滑					
1557	吉名6号	392	灰陶	壺	14.0	2.6	7.8	0.6	灰白	良好	滑					
1558	吉名6号	392	灰陶	壺	14.3	5.7	7.6	0.6	灰白	良好	滑					
1559	吉名6号	392	灰陶	壺	15.8	5.0	7.5	0.6	灰	良好	滑		ヘラ削り			
1560	吉名6号	392	灰陶	壺	15.0	4.2	9.3	0.5	灰白	良好	滑		ヘラ削り			
1561	吉名6号	392	灰陶	壺					灰白	良好	滑		ヘラ削り			
1562	吉名6号	392	灰陶	壺					灰白	良好	滑		ヘラ削り			
1563	吉名6号	392	灰陶	壺					灰白	良好	滑					
1564	吉名6号	392	灰陶	壺					灰白	良好	滑					
1565	吉名6号	392	灰陶	壺					灰白	良好	滑					
1566	吉名6号	392	灰陶	壺					灰白	良好	滑					
1567	吉名6号	392	灰陶	壺					灰白	良好	滑					
1568	吉名6号	392	灰陶	壺					灰白	良好	滑					
1569	吉名6号	392	灰陶	壺					灰白	良好	滑					
1570	吉名6号	392	灰陶	壺					灰白	良好	滑					
1571	吉名6号	392	灰陶	壺					灰白	良好	滑					
1572	吉名6号	392	灰陶	壺					灰白	良好	滑					
1573	吉名6号	392	灰陶	壺					灰白	良好	滑					
1574	吉名6号	392	灰陶	壺					灰白	良好	滑					
1575	吉名6号	392	灰陶	壺					灰白	良好	滑					
1576	吉名6号	392	灰陶	壺					灰白	良好	滑					
1577	吉名6号	392	灰陶	壺					灰白	良好	滑					
1578	吉名6号	392	灰陶	壺					灰白	良好	滑					
1579	吉名6号	392	灰陶	壺					灰白	良好	滑					
1580	吉名6号	392	灰陶	壺					灰白	良好	滑					
1581	吉名6号	392	灰陶	壺					灰白	良好	滑					
1582	吉名6号	392	灰陶	壺					灰白	良好	滑					
1583	吉名6号	392	灰陶	壺					灰白	良好	滑					
1584	吉名6号	392	灰陶	壺					灰白	良好	滑					
1585	吉名6号	392	灰陶	壺					灰白	良好	滑					
1586	吉名6号	392	灰陶	壺					灰白	良好	滑					
1587	吉名6号	392	灰陶	壺					灰白	良好	滑					
1588	吉名6号	392	灰陶	壺					灰白	良好	滑					
1589	吉名6号	392	灰陶	壺					灰白	良好	滑					
1590	吉名6号	392	灰陶	壺					灰白	良好	滑					
1591	吉名6号	392	灰陶	壺					灰白	良好	滑					
1592	吉名6号	392	灰陶	壺					灰白	良好	滑					
1593	吉名6号	392	灰陶	壺					灰白	良好	滑					
1594	吉名6号	392	灰陶	壺					灰白	良好	滑					
1595	吉名6号	392	灰陶	壺					灰白	良好	滑					
1596	吉名6号	392	灰陶	壺					灰白	良好	滑					
1597	吉名6号	392	灰陶	壺					灰白	良好	滑					
1598	吉名6号	392	灰陶	壺					灰白	良好	滑					
1599	吉名6号	392	灰陶	壺					灰白	良好	滑					
1600	吉名6号	392	灰陶	壺					灰白	良好	滑					
1601	吉名6号	392	灰陶	壺					灰白	良好	滑					
1602	吉名6号	392	灰陶	壺					灰白	良好	滑					
1603	吉名6号	392	灰陶	壺					灰白	良好	滑					
1604	吉名6号	392	灰陶	壺					灰白	良好	滑					
1605	吉名6号	392	灰陶	壺					灰白	良好	滑					
1606	吉名6号	392	灰陶	壺					灰白	良好	滑					
1607	吉名6号	392	灰陶	壺					灰白	良好	滑					
1608	吉名6号	392	灰陶	壺					灰白	良好	滑					
1609	吉名6号	392	灰陶	壺					灰白	良好	滑					
1610	吉名6号	392	灰陶	壺					灰白	良好	滑					
1611	吉名6号	392	灰陶	壺					灰白	良好	滑					
1612	吉名6号	392	灰陶	壺					灰白	良好	滑					
1613	吉名6号	392	灰陶	壺					灰白	良好	滑					
1614	吉名6号	392	灰陶	壺					灰白	良好	滑					
1615	吉名6号	392	灰陶	壺					灰白	良好	滑					
1616	吉名6号	392	灰陶	壺					灰白	良好	滑					
1617	吉名6号	392	灰陶	壺					灰白	良好	滑					
1618	吉名6号	392	灰陶	壺					灰白	良好	滑					
1619	吉名6号	392	灰陶	壺					灰白	良好	滑					

番号	山土業	利用	種類	高さ (m)	高さ 差	高さ 差	高さ 差	色調	成形	紹士	基盤	底面調整	内面底部	偏重	面積	
1620	吉名6号	395	灰地	トチ	5.1	1.7									10	
1621	吉名6号	395	灰地	トチ	6.0	2.6									71	
1622	吉名6号	395	灰地	トチ	7.2	2.6									70	
1623	吉名6号	395	灰地	トチ	11.6	4.0									72	
1624	吉名5・6号	395	灰地	編	19.5	7.0	7.0	1.1	胡桃色	真紅	■	ヘラ削り			69	
1625	吉名6号	395	灰地	小菅苔	5.0										74	
1626	吉名6号	395	灰地	短葉苔	9.3										75	
1627	吉名6号	395	灰地	下付板											76	
1628	吉名6号	395	灰地	長留苔	18.0										77	
1629	吉名6号	395	灰地	苔					10.3						78	
1630	吉名6号	395	灰地	脚付板					18.5						79	
1631	吉名6号	395	灰地	岩か林											80	
1632	吉名6号	395	灰地	乳か林											81	
1633	吉名6号	395	灰地	トチ	7.8	2.5									82	
1634	吉名6号	395	灰地	トチ	5.4	2.5									83	
1635	吉名6号	395	灰地	トチ	5.4	2.0									84	
1636	吉名1・2号	397	灰地	楓	13.0	2.0	7.0	0.8				ヘラ削り			85	
1637	吉名1・2号	397	灰地	楓	15.0	3.5	7.2	0.8				ヘラ削り			86	
1638	吉名1・2号	397	灰地	楓	15.6	4.6	6.0	0.8				ヘラ削り			87	
1639	吉名1・2号	397	灰地	楓	18.5	4.4	7.0	0.8				ヘラ削り			88	
1640	吉名1・2号	397	灰地	楓	14.7	4.1	6.0	0.6				ヘラ削り			89	
1641	吉名1・2号	397	灰地	楓	16.5	5.0	8.0	1.2				刷毛			90	
1642	吉名1・2号	397	灰地	楓					5.5	1.2		ヘラ削り			91	
1643	吉名1・2号	397	灰地	楓	13.5	4.5						ヘラ削り			92	
1644	吉名1・2号	397	灰地	楓	12.5	4.5	5.5	0.6				ヘラ削り			93	
1645	吉名1・2号	397	灰地	楓	13.5	3.2	5.8	0.6				木製型			94	
1646	吉名1・2号	397	灰地	楓	14.0	4.0	6.2	0.6				木製型			95	
1647	吉名1・2号	397	灰地	楓	15.0	4.3	6.2	0.5				ナダ			96	
1648	吉名1・2号	397	灰地	楓	15.6							刷毛			97	
1649	吉名1号	399	灰地	楓	15.6	5.0	6.4	0.6				刷毛			98	
1650	吉名1号	399	灰地	楓	15.6	3.4	7.4	1.0				刷毛			99	
1651	吉名1号	399	灰地	楓	13.8	5.0	6.4	1.2				刷毛			100	
1652	吉名1号	399	灰地	楓	15.0	4.2	6.2	0.6				刷毛			101	
1653	吉名1号	399	灰地	楓	13.8	4.0	6.6	0.6				刷毛			102	
1654	吉名1号	399	灰地	楓	13.8	4.0	6.4	0.4				刷毛			103	
1655	吉名1号	399	灰地	楓	17.8							刷毛			104	
1656	吉名1号	399	灰地	楓	10.6	2.4	5.8	0.8				刷毛			105	
1657	吉名1号	399	灰地	楓	13.5	3.0	5.0					刷毛			106	
1658	吉名1号	399	灰地	黒台面	13.6	2.8	5.4					刷毛			107	
1659	吉名1号	399	灰地	楓	16.6	5.8	7.8	0.8				刷毛			108	
1660	吉名1号	399	灰地	楓	15.6	4.0	7.0	0.8				刷毛			109	
1661	吉名1号	399	灰地	楓	13.2	6.2	6.8	0.8				刷毛			110	
1662	吉名1号	399	灰地	楓	13.6	3.0	5.8	0.4				刷毛			111	
1663	吉名1号	399	灰地	楓	12.2	3.2	6.8	0.8				刷毛			112	
1664	吉名1号	399	灰地	楓	12.8	4.6	7.0	0.6				刷毛			113	
1665	吉名1号	399	灰地	楓	13.4	5.0	6.0	0.6				刷毛			114	
1666	吉名1号	399	灰地	楓	14.2	5.6	7.4	0.8				刷毛			115	
1667	吉名1号	399	灰地	楓	14.0	3.0	6.0	0.6				刷毛			116	
1668	吉名1号	399	灰地	楓	14.4	3.2	6.2	0.8				刷毛			117	
1669	吉名1号	399	灰地	楓	18.0	6.8	8.5	1.0				刷毛			118	
1670	吉名1号	399	灰地	楓	16.8	5.2	7.2	0.8				刷毛			119	
1671	吉名1号	399	灰地	楓	18.0	6.4	8.0	1.0				刷毛			120	
1672	吉名1号	399	灰地	楓	17.4	6.0	7.4	1.2				刷毛			121	
1673	吉名1号	399	灰地	楓	7.8	3.0	3.6	0.8				刷毛			122	
1674	吉名1号	399	灰地	楓	9.6	3.0	5.2	0.6				刷毛			123	
1675	吉名1号	399	灰地	小菅苔	8.0								刷毛			124
1676	吉名1号	399	灰地	小菅苔					5.6				刷毛			125
1677	吉名1号	399	灰地	刈羽苔	4.8								刷毛			126
1678	吉名1号	399	灰地	刈羽苔	12.6	18.8	8.0	0.6					刷毛			127
1679	吉名1号	399	灰地	苔	19.6								刷毛			128
1680	吉名1号	399	灰地	苔	12.0								刷毛			129
1681	漢波1号	404	灰地	楓	12.3	6.5	6.5	1.0				木製型			130	
1682	漢波5号	404	灰地	楓					5.8	1.2		ナダ			131	
1683	漢波5号	404	灰地	楓	14.5	4.2	6.0	0.8				木製型			132	
1684	上取樹	404	山茶樹	小楓	9.3	3.4	4.5	0.8				ナダ			133	
1685	上取樹	404	山茶樹	小楓	9.5	3.0	4.5	0.5				ナダ			134	
1686	上取樹	404	山茶樹	小楓	11.0	3.6	5.5	0.8				ナダ			135	
1687	上取樹	404	山茶樹	小楓	9.5	3.0	4.5	0.7				ナダ			136	
1688	上取樹	404	山茶樹	小楓	16.0	4.0	5.0	0.6				ナダ			137	
1689	上取樹	404	山茶樹	楓	16.0	5.5	6.6	1.0				木製型			138	
1690	上取樹	404	山茶樹	楓	16.1	5.0	7.0	0.8				木製型			139	
1691	上取樹	404	山茶樹	楓	20.7	7.0	7.8	0.7				木製型			140	
1692	十歌空跡	404	山茶樹	楓	9.0								木製型			141
1693	櫻桃空跡	404	山茶樹	小楓	9.6	2.9	4.2	0.5				ナダ			142	
1694	櫻桃空跡	404	山茶樹	小楓	8.8	2.8	4.2	0.5				ナダ			143	
1695	櫻桃空跡	404	山茶樹	小楓	8.8	2.7	4.5	0.4				ナダ			144	
1696	櫻桃空跡	404	山茶樹	楓	16.0	5.1	8.0	0.4				ナダ			145	
1697	櫻桃空跡	404	山茶樹	楓					8.0	0.5		木製型			146	

番号	出土地	開口	種類	性別	口径 (幅)	肩高	底部 径	高台 高	色調	焼成	灰土	底輪	底部調整	内面底部	備考	報告書 番号
1698	施光寺跡	404	山茶瓶	物語瓶	17.5	5.0	8.0	0.7	-	-	-	-	本開口	-	66	
1699	施光寺跡	404	山茶瓶	物語瓶	-	-	-	-	-	-	-	-	本開口	細密板	34	
1700	西ノ谷古窯	404	山茶瓶	瓶	16.2	5.4	6.2	0.5	-	-	-	-	ナデ	細密板	32	
1701	西ノ谷古窯	404	山茶瓶	瓶	16.8	5.6	6.5	0.3	-	-	-	-	ナデ	細密板	35	
1702	西ノ谷古窯	404	山茶瓶	瓶	-	-	-	-	0.3	-	-	-	ナデ	細密板	37	
1703	大熊古窯跡	410	圓文	瓶片	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	66	
1704	大熊古窯跡	410	圓文	瓶片	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	67	
1705	大熊古窯跡	410	圓文	瓶片	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	68	
1706	大熊古窯跡	410	圓文	瓶片	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	69	
1707	大熊古窯跡	410	圓文	瓶片	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	70	
1708	大熊古窯跡	410	灰生	灰	-	20.0	-	-	-	-	-	-	-	-	71	
1709	大熊古窯跡	410	灰生	灰	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	72	
1710	大熊古窯跡	410	灰生	灰	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	73	
1711	大熊古窯跡	410	灰生	灰	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	74	
1712	人形古窯跡	410	灰生	灰	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	76	
1713	大熊古窯跡	410	灰生	灰	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	76	
1714	大熊古窯跡	410	灰生	灰	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	77	
1715	大熊古窯跡	410	灰生	灰	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	78	
1716	大熊古窯跡	410	灰生	灰	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	80	
1717	大熊古窯跡	410	灰生	灰	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	79	
1718	大熊古窯跡	410	灰生	灰	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	81	
1719	大熊古窯跡	410	灰生	灰	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	82	
1720	大熊古窯跡	410	灰生	灰	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	83	
1721	大熊古窯跡	410	山茶瓶	瓶	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	86	
1722	大熊古窯跡	410	山茶瓶	瓶	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	84	
1723	大熊古窯跡	410	山茶瓶	瓶	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	87	
1724	大熊古窯跡	410	山茶瓶	瓶	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	85	
1725	大熊古窯跡	410	陶器	瓶	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	88	
1726	大熊古窯跡	410	陶器	瓶	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	89	
1727	大熊古窯跡	410	陶器	瓶	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	90	
1728	大熊古窯跡	410	圓美?	蓋	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	91	
1729	大熊古窯跡	410	天日	瓶	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	91	
1730	大熊古窯跡	411	圓文	瓶片	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	92	
1731	大熊古窯跡	411	圓文	瓶片	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	93	
1732	大熊古窯跡	411	圓文	瓶片	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	94	
1733	人形古窯跡	411	圓文	瓶片	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	95	
1734	大熊古窯跡	411	深底鋸	瓶	12.8	-	-	-	-	-	-	-	-	-	96	
1735	大熊古窯跡	411	深底鋸	瓶	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	97	
1736	大熊古窯跡	411	深底鋸	瓶	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	98	
1737	大熊古窯跡	411	深底鋸	瓶	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	99	
1738	大熊古窯跡	411	灰地	瓶	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	100	
1739	大熊古窯跡	411	山茶瓶	瓶	12.0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	101	
1740	大熊古窯跡	411	山茶瓶	瓶	12.6	-	-	-	-	-	-	-	-	-	102	
1741	大熊古窯跡	411	山茶瓶	瓶	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	103	
1742	大熊古窯跡	411	灰地	瓶	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	104	
1743	大熊古窯跡	411	灰地	瓶	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	105	
1744	大熊古窯跡	411	山茶瓶	瓶	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	106	
1745	大熊古窯跡	411	山茶瓶	瓶	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	107	
1746	大熊古窯跡	411	山茶瓶	瓶	9.0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	108	
1747	大熊古窯跡	411	山茶瓶	瓶	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	109	
1748	大熊古窯跡	411	山茶瓶	瓶	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	110	
1749	大熊古窯跡	411	山茶瓶	瓶	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	111	
1750	大熊古窯跡	411	山茶瓶	瓶	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	112	
1751	大熊古窯跡	411	山茶瓶	瓶	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	113	
1752	大熊古窯跡	411	山茶瓶	瓶	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	114	
1753	大熊古窯跡	411	山茶瓶	瓶	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	115	
1754	大熊古窯跡	411	山茶瓶	瓶	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	116	
1755	大熊古窯跡	411	山茶瓶	瓶	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	117	
1756	大熊古窯跡	411	山茶瓶	瓶	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	118	
1757	大熊古窯跡	411	灰地	瓶?	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	119	
1758	大熊古窯跡	411	灰地	瓶?	19.3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	120	
1759	大熊古窯跡	411	天日	瓶	12.0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	121	

## 第7節 大屋敷1号窯の評価

第V章の最後に、宮口古窯跡群における大屋敷1号窯の位置づけを行い、大屋敷1号窯の報告を終えたい。

### 1 大屋敷1号窯の窯構造について

宮口古窯跡群は現在までに東ノ谷窯を含めて28基が確認されており、そのうち大屋敷1・5号窯、吉名1・2・5・6号窯の6基が発掘調査されている。そのうち正式報告が刊行されている3基と大屋敷1号窯の窯構造について比較検討し、大屋敷1号窯の位置づけについて考えてみたい。

#### (1) 平面形態の比較(第405図)

宮口古窯跡群のうち焚口から突出しまで残存するものは吉名1号窯のみであり、無花果形(寸胴形)を呈する。規模は焼成室幅で吉名5号窯1.4m以上、吉名6号窯1.16m以上、大屋敷5号窯1.2m、大屋敷1号窯は1.1mであり、吉名1号窯は概報では約2.0mをはかる(静岡大学1958)。

また、山茶碗が採集された上取古窯跡群中の1基は、焼成室の断面が幅2m近くの大型のものであるとされている(註2、註は125頁)。

宮口窯の研究(松井1989bほか)では、宮口窯の灰釉陶器と山茶碗の編年は、灰釉陶器段階は吉名6号窯→吉名1号窯→吉名5号窯・大屋敷5号窯→大屋敷1号窯の順に操業され、山茶碗段階に移行すると考えられている。この考えに従って窯の規模を比較すると、宮口窯は灰釉陶器生産段階では新しくなるに従い規模が小型化しているといえ、一方山茶碗生産段階に入ると規模が大型化している状況を確認できる。

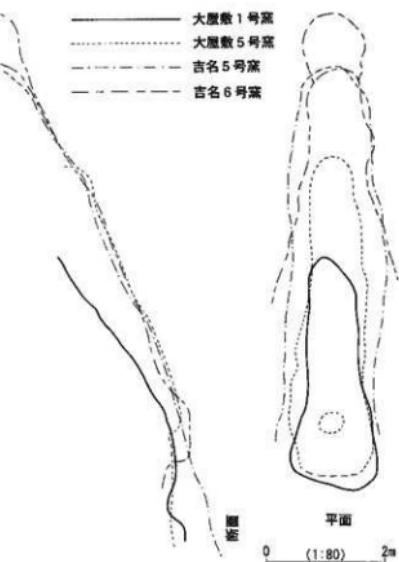
したがって、猿投窯でも灰釉陶器生産段階では時期が新しくなるに従い、窯の規模が小型化するとされており、宮口窯は猿投窯と同様の様相を示していることが判明する。

一方、山茶碗生産段階に入ると、灰釉陶器の段階と比較して一挙に大型化したことが想定でき、灰釉陶器段階と山茶碗段階では生産体制や窯構築技術、焼成技術に何らかの変化があったことが想定できる。

大屋敷1号窯は、大屋敷5号窯よりもやや小型化しており、窯の規模からみると大屋敷5号窯よりも若干新しい様相が窺え、灰釉陶器の変遷観と一致する。

#### (2) 断面形態の比較

吉名5・6号窯、大屋敷5号窯の焼成室の傾斜角度は15~25度である一方、大屋敷1号窯は35度で、約10~20度傾斜角度に差があり、大屋敷1号窯の焼成室は他の3基と比較して急傾斜であることが判明する(第405図)。山茶碗段階の窯が調査されていないことから、山茶碗段階の窯の角度は不明であるが、大屋敷1号窯は急角度であり、新しくなるにつれて急角度になる可能性と、大屋敷1号窯は礫の多い地



第405図 宮口古窯跡群窯構造比較図

山を掘りこんでいるためにこの角度までしか掘らなかった特異な窯である可能性の二者が考えられる。

吉名5号窯や大屋敷5号窯では煙出し部分は燃焼室よりも傾斜角度が急傾斜になるが、この2基より古い吉名6号窯は煙出し部分でも傾斜は緩やかである。したがって、このような状況から判断すると、宮口窯では時期が新しくなるに連れて焼成室の傾斜が急になる可能性が高いと推測しておきたい。

## 2 窯道具について

### (1) 焼台について

大屋敷1号窯(灰釉陶器期)では、窯入れ当初の原位置を保持した灰釉陶器は存在しない。灰原から出土した遺物の中には、馬爪形焼台が含まれている。また、灰原から出土した遺物には碗の底部に粘土が付着したものが十数点出土しており、灰釉陶器を直接粘土で固定している。また、壺や鉢などの破片の割れ口に自然釉が付着したもののが確認でき、一部には粘土が付着している。したがって、大屋敷1号窯では、馬爪形焼台を用いてその上に転用した碗や皿を載せたもの、粘土を丸めて2~5cm程度の大きさにしたものを焼台(安定を保つため)として使用したものがある。

大屋敷6号窯(山茶晩期)では、採集された遺物の中に馬爪形焼台も含まれている。この焼台には瓦が軸着したもの、高台の痕跡が残るものも確認できる。また碗・皿の底部に自然釉がたっぷりと付着しているものが確認でき、馬爪形焼台と商品として流通させない碗・皿類を転用し焼台としたものが併用されている。

**焼台の変遷** 大屋敷1号窯と6号窯の焼台を比較すると、1号窯のものは円柱状である一方で、6号窯のものはいわゆる馬爪(馬糞)形といわれるような幅が広い三角錐のような形状であり、宮口窯での焼台は円柱状のものから馬爪(馬糞)形のものへ変化し、さらに大型化した可能性が高い。

**焼台の出現** 吉名5号窯では、焼成に失敗した碗を床に粘土で固定して、焼台として使用している。吉名6号窯では、コップ形ツクやトチが出土しており、馬爪形焼台は採用されていなかった可能性が高い。

吉名1号窯の状況が不明であるため、吉名5号窯の段階で馬爪形高台が出現したのか、その後の段階である吉名1号窯の段階で出現していたのか判然としない。猿投窯での焼台の出現が黒鉢90号窯式期と考えられていることから(斎藤2000)、宮口窯においてもトチが採用されなくなり重ね焼きが始まると吉名1号窯段階で出現した可能性が高い。

つまり、大屋敷1号窯は前段階までに安定的に使用されていた筒状の馬爪形焼台を継続的に採用している。一方、大屋敷6号窯は大屋敷1号窯と比較すると、やや焼台の形を変化・大型化させ、用いたことが判明する。

### (2) 碗・皿の重ね方について

吉名6号窯は上述したように三叉トチ、十字トチ、コップ形ツクが出土しており、また碗・皿に残る痕跡から、角高台のものはツクやトチを利用して積載されていることが判明する。三角高台のものは焼台を利用しての重ね焼きである。吉名6号窯や吉名1号窯の三日月高台碗も重ね焼きである。大屋敷1・5・6号窯は直接の重ね焼きである。したがって、大屋敷1・6号窯は宮口窯における焼成技術の一連の流れに乗っていると考えができる。

一方で、宮口窯に含めて考えられている都山川流域の浜松市鶴ヶ谷古窯(松井1989a・b)は焼成に輪ドチを用いている(註3)。輪ドチは現段階において宮口窯では確認できない手法であり、鶴ヶ谷古窯の系譜に関しては宮口窯と同一かどうか再考する必要がある。

### 3 燃料材について

大屋敷1号窯灰原から出土した炭化材の分析結果は本章第5節に掲載した。この分析の結果、燃料材として利用された木材は、針葉樹のマツ属、広葉樹のコナラ属(コナラ節・クヌギ節)、クリ、アワブキであることが判明した。大屋敷1号窯が築造された龜山中学校北側の丘陵には、第IV章で報告したように古墳時代終末期の大規模群集墳が造営されており、大屋敷1号窯周辺は古墳築造のためほとんどの樹木が伐採されたと想定することができる。分析の結果においても二次林的要素の強いマツ属が検出されたことは、燃料材とされた樹木が古墳造営終了後奈良時代以降に形成された森林であったことを物語っている。

一方、吉名1・2・5・6号窯および大屋敷5号窯では用いられた燃料材の分析が行われていないため不明な部分が多い。吉名古窯跡群周辺には讓榮I遺跡、新屋遺跡などが確認されるものの、現状では古墳の築造が活発ではなく、今後確認されたとしても大規模とはならず古墳の基数は数基程度と想定できる。その仮定が正しければ、吉名古窯跡群周辺は大屋敷古窯跡群周辺ほど開発が進んでおらず、古墳時代より遡る段階の森林が残存していた可能性が想定できる。したがって、大屋敷1号窯と吉名古窯跡群や讓榮古窯跡群などでは使用された燃料材が異なる可能性があり、当地域の植生と窯操業者集団の樹木の選定など興味深い事が明らかになることが期待される。

また、2002～03年にかけて発掘調査された白鳳期～奈良時代前半の浜北市於呂地区に所在する篠場瓦窯跡群(静岡埋文研2003)において利用された燃料材との比較を行うことも重要であり、平安時代と奈良時代前後での燃料材の選定における類似性や差異が明らかになることが期待される。

さらに付け加えるなら、現在森林公園として指定されている範囲のうち大屋敷地区ならびに西ノ谷池周辺の林は山茶碗窯操業のための伐採(鎌倉時代前半)以後に形成された二次林であるといえよう。

### 4 大屋敷1号窯の時期的位置づけ

#### (1) 宮口古窯跡群における生産器種構成について(第406図)

第406図に、宮口古窯跡群における生産器種を示した。

宮口古窯跡群は、灰釉陶器生産段階では古い時期の窯(吉名1・6号窯)ほど多種(特に碗・皿類の種類)を生産しており、新しくなるにつれて生産器種が減少し、特殊形態の耳皿や手付瓶などが消滅し、碗、

器種 窯名	碗						壺			鉢			瓶			炻器			瓦			その他		
	碗	醤 B	黒 台 碗	小 鏡	輪 花 鏡	托	皿	耳 皿	段 皿	鉢	小 型	大 型	瓶	硯	陶 鍋	短 頸 壺	無 短 頸 壺	歛 足	瓦	ト チ	馬 爪 焼 台			
吉名1																								喉蓋・短頸壺・水注・蓋・サヤ
吉名5																								
吉名6																								手付瓶・ツク
大屋敷1																								
大屋敷3																								
大屋敷4																								
大屋敷5																								短頸壺・提瓶・甕
大屋敷6																								
讓榮1																								
讓榮5																								
土取																								「山さほ」銘短頸壺
桜池																								
西ノ谷																								
東ノ谷																								須恵器

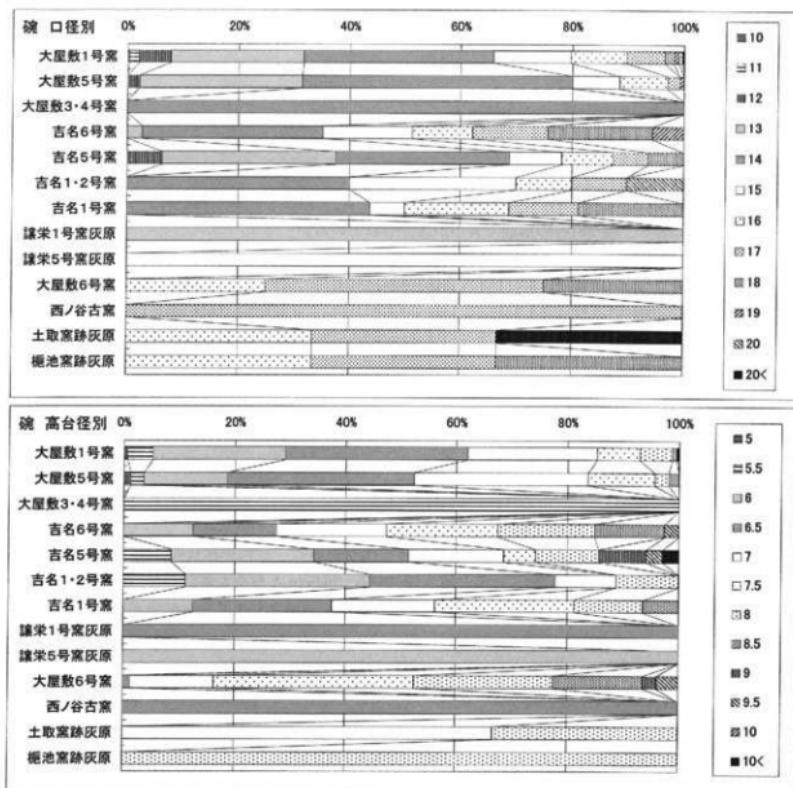
第406図 宮口古窯跡群生産器種構成図

皿、長頸壺、鉢に収斂していく状況を示している。一方、山茶碗生産段階には、山茶碗、小碗、山皿、鉢、壺・甕に限定されるようである。

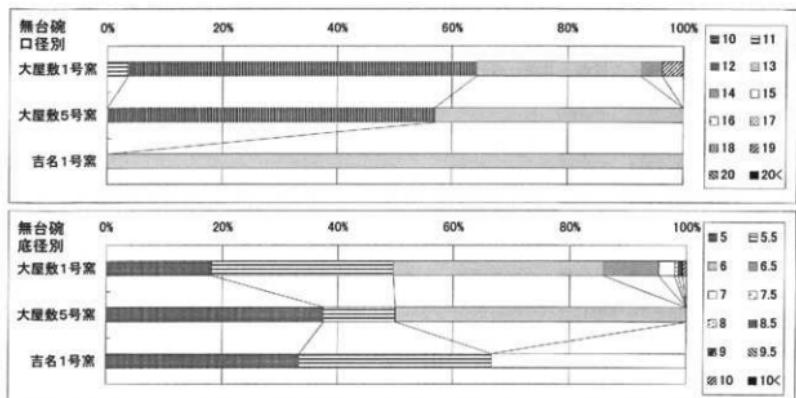
宮口古窯跡群のうち大屋敷1号窯以外の生産器種構成が明らかにならないため詳細な検討はできないが、大屋敷1号窯は本章第2節で報告したように、碗類(碗と無台碗)が95%を占めており、猿投窯や二川窯と比較して碗類の生産が多いという状況(賛1997)を証明している。

#### (2) 編年の位置づけと自然科学的位置づけ(第407・408図)

**編年的位置づけ** 松井一明氏によれば(松井1989a・bほか)、宮口古窯跡群産灰釉陶器は、高台の形、釉薬の塗布方法、底部の調整、器種構成の4つを基準に変遷過程を追うことができる。1段階(I期)は角高台、内側のみ刷毛塗り、底部ヘラ削り調整、2段階(II期)は三日月高台、底部ヘラ削り調整、刷毛塗り主体、3段階(III期)は低い三日月高台か三角高台で、潰け掛け主体、底部は高台部のみヘラ削りを施すものがある段階、4段階(IV期)では三角高台か爪形高台、底部はナデ調整が主体で、碗B(松井氏分



第407図 宮口古窯跡群碗法量割合図



第408図 宮口古窯跡群出土無台碗法量割合図

類(D類)、托(松井氏分類高台皿A)が出現する。

宮口窯の碗類の法量をみておくと、古い時期に位置づけられる吉名6号窯、それに続く吉名1号窯の段階では碗類に大小の区別が確認でき、新しくなるにつれて大型のものが失われ、小型化する(松井編年Ⅲ・Ⅳ期)。一方で、吉名5号窯、大屋敷5号窯の段階(IV-1期)で、別系統の碗B(高台の高い爪形高台)が出現しており、碗(高台)の形態で大小が区分されている。

大屋敷1号窯では、碗・皿の高台形は三角高台あるいは爪形高台で、底部はナデ調整あるいは未調整であり、施釉方法は漬け掛けであることから、松井編年Ⅳ段階に位置づけることが可能である。碗の形態や法量からは大屋敷5号窯製品と区別するのは非常に困難を極める。ただし、底部の調整や焼成器種に差異が確認できる。大屋敷5号窯製品には刷毛塗りが一部確認でき、底部調整にもヘラ削りが用いられるものが確認されている。一方、大屋敷1号窯製品は、刷毛塗りは確認することはできず、ヘラ削りが施されるものも確認できない。また、大屋敷1号窯製品の碗Bには、口縁端部が玉縁状を呈するものが数個体出土しており、猿投窯百代寺窯式に併行するもので、大屋敷5号窯では確認することはできない。したがって、大屋敷5号窯と1号窯は、碗(碗A)の形態で区分することは難しく、細部の調整や焼成器種の差異により、松井編年どおり大屋敷5号窯(松井編年Ⅳ-1期)→大屋敷1号窯(IV-2期)に区分することが可能である(松井1989a・bほか)。

また、大屋敷1号窯は、猿投窯百代寺窯式期の碗と比較すると、百代寺窯式期の碗(小碗)は口径が11.0~12.0cm前後であるが、大屋敷1号窯の碗A類は13.0~14.0cmとやや大型であり、宮口窯では猿投窯と比較すると口径が大きなものが灰釉陶器生産の最終段階まで残存することが判明する。

一方、松井氏により大屋敷1号窯と同時期に位置づけられる(松井1989a・b)譲栄古窯跡群資料は、口径が10cm前後の小碗である。大屋敷1号窯では、口径10.0cm前後の碗は出土しておらず、譲栄古窯跡群との間に1段階差をつけるか(松井2004)、あるいは別系統の流れの中で成立したと/orすることができる。

つづいて、山茶碗I期に位置づけられる土取古窯群出土資料と比較すると、土取窯出土山茶碗は大屋敷1号窯と比較して胎土が荒くなっている、砂が目立つようになる。胎土や調整技法からみると、灰釉陶器段階と山茶碗段階では明瞭に区分することができる。

一方、法量的にみると、土取窯出土小碗は口径が10.0cm前後と大屋敷1号窯と比較して小型化して

いる。また、山茶碗は口径が16.0cm前後であり、大屋敷1号窯の碗Bとほぼ同法量であり、大屋敷1号窯段階の碗Bの法量および形態を引き継いでいる可能性が高い。したがって、灰釉陶器から山茶碗への流れは、小碗は小型化するものの形態的には連続しており、大型の碗も形態的にもスムーズに変遷していると考える。

したがって、大屋敷1号窯は宮口古窯跡群の増産体制に入ったIV-1期(10世紀末~11世紀前半)に引き続くIV-2期(11世紀前半~後半)に窯業され、山茶碗段階へ法量的にスムーズに移行させたと評価することができる。

**自然科学分析との比較** 灰釉陶器の形態、組成における相対年代と比較するために、大屋敷1号窯灰原から3点の炭化材を採取し、放射性炭素14年代測定分析を実施した。この結果、最下層(43層)で採取した試料は、校正したもので西暦900~955年(10世紀前半)を示し、燃焼室から出土した炭化材は西暦980年(10世紀後半)を示した。

現状で猿投窯との対比を中心とした宮口古窯跡群と自然科学分析による年代に50~100年の差異があり、自然科学分析の方が古い値を示している。しかし、上述したように、宮口古窯跡群は猿投窯との対比で行われており、相対年代比定の方がより蓋然性が高いといえる。したがって、松井一明氏により示された相対年代を基にした年代比定により、大屋敷1号窯は11世紀前半~後半に位置づけたい。

## 5 宮口古窯跡群の操業と流通

### (1) 宮口古窯跡群の操業(第409図)

第409図に、松井編年(松井1989b)を基にして宮口古窯跡群のおおよその操業時期を図示した。

宮口古窯跡群は黒笠14号窯式(K14)段階において吉名6号窯で操業が開始され、黒笠90号窯式(K90)段階まで継続する。吉名1号窯はK90段階から折戸53号窯式(O53)段階まで生産される。つづく、東山72号窯式(H72)段階で、大屋敷5号窯、大屋敷3・4号窯、吉名5号窯が操業を開始し、宮口古窯跡群での増産が開始された可能性が高い。つづく、百代寺窯式段階にも、大屋敷1号窯、諿榮1・5号窯が操業されており、この段階においても宮口窯では増産体制を維持していた蓋然性が高い。

各窯の操業時期と営まれた場所を比較すると(10頁第320図参照)、夜水沢池(古名古窯跡群)周辺で開始された生産が、大屋敷~西ノ谷地区(東群)と、諿榮~梶池地区(西群)へと分散するような形で操業が併行して行われており、宮口古窯跡群は増産体制に入った段階で二集団に分かれて操業していた可能性も多い。東群では、吉名6号窯→吉名1号窯から続いて大屋敷5号窯→大屋敷1号窯→大屋敷6号窯、西ノ谷古窯と東に向かって進み、西群では吉名6号窯→吉名1号窯から続いて吉名5号窯→諿榮1・5号窯→土取古窯跡群→梶池古窯跡群へと移動している様子が窺える。

したがって、宮口古窯跡群は、吉名古窯群で黒笠14号(K14)窯期後半に操業が開始され、黒笠90号窯期~折戸53号窯期まで1~2基で操業された後、東山72号窯期以降増産体制に入ったものと考えることができ、それは山茶碗II期まで継続する。増産期には、窯の操業地域が2箇所に分かれることから、操業単位が1集団で交互に移動して操業した可能性(松井1989b)と、同時期の窯が東群と西群で併存していることから2集団あった可能性が想定できる。筆者は、同時期の窯が東群と西群で複数存在する可能性が高いことから、後者の可能性が高いと考えている。

### (2) 製品の流通について

大屋敷1号窯で生産した黄土を刷毛塗りする壺・鉢(破片)が浜松市恒武西宮遺跡や笠井若林遺跡などの恒武遺跡群で出土している(註4)。また、浜松市笠井若林遺跡では、宮口古窯産の灰釉陶器が出土しており、その中に大屋敷1号窯生産品と同様の特徴(黄土刷毛塗り)を有する鉢・壺の破片がある。

	掘池	土取	新池	諫栄	吉名	大屋敷	西ノ谷	東ノ谷	松井編年
須恵器・瓦					吉名6			○	
K14					吉名6				I
K90					吉名1・2				II
053									III
H72					吉名6	3大屋敷 4大屋敷	大屋敷5		IV-1
百代寺				諫栄5 諫栄1		大屋敷1			IV-2
山茶碗I			○						山茶碗I
山茶碗II	○	○				大屋敷5	○	西ノ谷	山茶碗II
山茶碗III									山茶碗III

第409図 宮口古窯跡群窯変遺物

これ以外の遺跡の資料は確認していないため不明であるが、宮口窯の生産・供給体制やその流通範囲を、出土遺物を中心として文献等を含めて明らかにしていく必要がある。

## 6 小結

本報告では大屋敷1号窯の発掘調査の成果から大屋敷1号窯の位置づけに関して、宮口古窯跡群内で検討したものであり、大屋敷1号窯生産品流通範囲や流通経路に関しては明らかにすることができない。また、宮口窯産における各時期の生産品の流通との類似性・差異等も検討できていない。今後、調査を続けていくことが望まれる。

## 註

1 松井一明氏は宮口古窯跡群の編年を構築するに当たり、今回碗Bとした形態を深碗に分類している(松井1989bほか)。一方、賀元洋氏は、宮口古窯跡群で出土する高台の高い碗(碗B)は典型的な深碗形態を見していないとし、深碗に分類すべきではないとしている(賀1997)。筆者は、このような形態の系譜を特定する能力を持ち合わせていないため、通常の碗(碗A)と区別して、高台が高さ1cm以上で、爪形のものを碗Bとした。

2 当研究所評議員 向坂鋼二先生、袋井市教育委員会 松井一明氏のご教示による。

3 浜松市博物館に展示されている鶴ヶ谷窯出土上腕には輪ドチが用いられたものがある。

4 静岡県教育委員会文化課 清口彰啓氏のご教示による。

## 引用・参考文献

### 報告・報告書

- 静岡県 1990 「静岡県史」資料編2 考古2
- 静岡県 1992 「静岡県史」資料編3 考古3
- 静岡県教育委員会編・発行 1989 「静岡県の窯業遺跡」
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所 2003 「瀬戸瓦窯発掘調査現地説明会資料」
- 静岡大学教育学部浜松分校歴史学研究部発行 1958 「宮古古窯群」
- 静岡大学教育学部浜松分校歴史学研究部発行 1959 「発掘通報」1号・2号
- 多治見市教育委員会編・発行 1990 「明和 明和古窯跡群発掘調査報告書」
- 豊橋市教育委員会編・発行 2000 「二川古窯址群(1)」(豊橋市埋蔵文化財調査報告書52)
- 豊橋市教育委員会編・発行 2002 「二川古窯址群(II)」(豊橋市埋蔵文化財調査報告書61)
- 浜北市教育委員会編・発行 1988 「浜北市古名第5号・第6号古窯跡・明神池運動場造成に伴う発掘調査概報-」
- 浜北市教育委員会編・発行 1989 「浜北市明神池運動公園内遺跡」
- 浜北市教育委員会編・発行 2003 「中里遺跡確認調査報告書」
- 浜北市史編さん委員会 1989 「浜北市史」通史編上巻 浜北市
- 平野吾郎 1992 「灰釉陶器」「静岡県史」資料編3 考古3 静岡県
- 松澤和人・河合君近 1994 「瀬戸窯資料調査報告1」古代末期灰釉陶器調査報告(上)「瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要」  
2 瀬戸市埋蔵文化財センター
- 松澤和人・河合君近 1995 「瀬戸窯資料調査報告2」古代末期灰釉陶器調査報告(下)「瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要」  
3 瀬戸市埋蔵文化財センター
- ### 論文
- 尾野善裕 1999 「東濃空灰釉陶器編年小考」『岐阜史学』96 岐阜史学会
- 河合 修 2004 「猿指窓の展開と山茶瓶の発生」『静岡県埋蔵文化財調査研究所設立20周年記念論文集』
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 斎藤孝正 1982 「猿指窓における灰釉陶の展開」『月刊考古学ジャーナル』211 ニューサイエンス社
- 斎藤孝正 1989 「灰釉陶器の研究II -猿指窓第V期窯・皿類の型式編年-」『名古屋大学文学部研究論集』104(史学35)  
名古屋大学
- 斎藤孝正 2000 「日本のかつて」409 越州窯青磁と綠釉・灰釉陶器 生文堂
- 賤 元洋 1997 「古代遠江の食器具」『静岡県考古学研究』29 静岡県考古学会
- 賤 元洋 1998 「二川窯における灰釉陶器生産の出現過程」『三河考古』11 三河考古刊行会
- 賤 元洋 2002 「二川窯出土遺物の分類と編年」『二川古窯址群(II)』 豊橋市教育委員会
- 平野吾郎 1992 「灰釉陶器の編年」『静岡県史』資料編3 考古3 静岡県
- 藤澤良祐 1982 「瀬戸古窯址群I」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』1 瀬戸市歴史民俗資料館
- 松井・明 1985 「浜北市宮古窯群の検討(1)」『静岡県考古学研究』17 静岡県考古学会
- 松井・明 1986a 「宮口窯の生産」「灰釉陶器の時代とその流れ」 静岡県考古学会
- 松井・明 1986b 「宮口古窯群について」「遠江における灰釉陶器窯群の開始と終末について」「灰釉陶器の時代とその流れ」
- 静岡県考古学会
- 松井一明 1989a 「灰釉陶器をつくる人々」『浜北市史』通史上巻 浜北市

- 松井一明 1989b 「宮口古窯跡群と清ヶ谷古窯跡群における須恵器・陶器生産についての一考察」『静岡県の窯業遺跡』 静岡県教育委員会
- 松井一明 2004 「宮口古窯跡群と清ヶ谷古窯跡群における須恵器・陶器生産はどこに流通したか」『浜北市史』資料編 浜北市
- 清口彰啓 2004 「遠江・駿河地域における灰釉陶器・山茶碗窯の構造について」『静岡県埋蔵文化財調査研究所設立20周年記念論文集』 静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 山下峰司 1993 「灰釉陶器・山茶碗」『概説中世の土器・陶磁器』 貞陽社
- 山村 宏・平野和男 1963 「静岡県の古窯跡」『静岡県の古代文化』 静岡県教育委員会

#### 図の出典

第320図 浜北市教委1989に加筆。

第321図 浜北市1:2,500地形図14に加筆。

第379、385、386、389~391、394、396、397、404図 浜北市教委1989より抜粋。

第380~384、386、392、395、411図 浜北市教育委員会より原図提供。静岡県埋蔵文化財調査研究所編集・トレイス。

第399図 静岡県1992より抜粋。

## 第VI章 調査のまとめ

### 1 大屋敷C古墳群について

大屋敷C古墳群は、古墳時代終末期に築造された54基以上で構成される大規模群集墳であることが判明した。調査した古墳51基は約3.0～13.0mの墳丘を有し、すべて横穴式石室を埋葬施設としている。石室の規模は0.5～8.0mのものまで確認することができる。副葬品は須恵器が主体で、土師器、鉄製品、玉類などが納められている。古墳は、古墳規模・石室規模が大きいものが副葬品も豊富であり、古墳規模・石室規模が小さくなるにつれて、副葬品も少なくなることが判明した。

また、大屋敷C古墳群は石室の開口方位から幾つかのまとまりが確認でき、大きく2群4支群20単位群に区分することができ、20集団が古墳の造営に関与していた可能性が高い。また、造営にあたっては、大屋敷C古墳群においてやや優位にある5集団がほぼ同時に築造を開始していることが判明し、それ以後も、集団を束ねるような有力墳は確認できない。大屋敷C古墳群はほぼ同階層の集団が継続的に造営した古墳群である。

さらに、大屋敷C古墳群の成立は、浜北北麓古墳群で7世紀前半頃に築造された向野古墳の出現を契機としており、天竜川流域の古墳群だけでなく、三河地域から浜名湖沿岸、都田川流域の古墳の築造技術、石室の構築技術の影響を受けて成立したことが判明した。

### 2 大屋敷1号窯について

大屋敷1号窯の生産器種は碗、無台碗、皿、托、長頸壺、鉢、甑、風字二面鏡、陶錘であり、生産の割合は碗類が最も多く、碗と無台碗で全体の95%を占めており、猿投窯や二川窯と比較して碗類の割合が多いことが判明した。また、大屋敷1号窯の碗(碗A)は同時期の猿投窯の製品と比べると、2cm程度口径が大型であり、上記の二古窯と異なり、口径が10～12cm程度まで小型化せず、13～14cmの口径が引き継がれていることが判明した。

大屋敷1号窯は、11世紀前半～後半に操業されたことが判明した。碗は、高台が高く爪形の碗Bがあり、また碗Bには玉縁口縁のものが出現していることから、猿投窯百代寺窯式とほぼ併行すると推測する。

大屋敷1号窯の操業においてはマツ、アワブキ、クリ、コナラなど大屋敷C古墳群の造営停止後に繁茂した森林が利用されていたことが判明した。

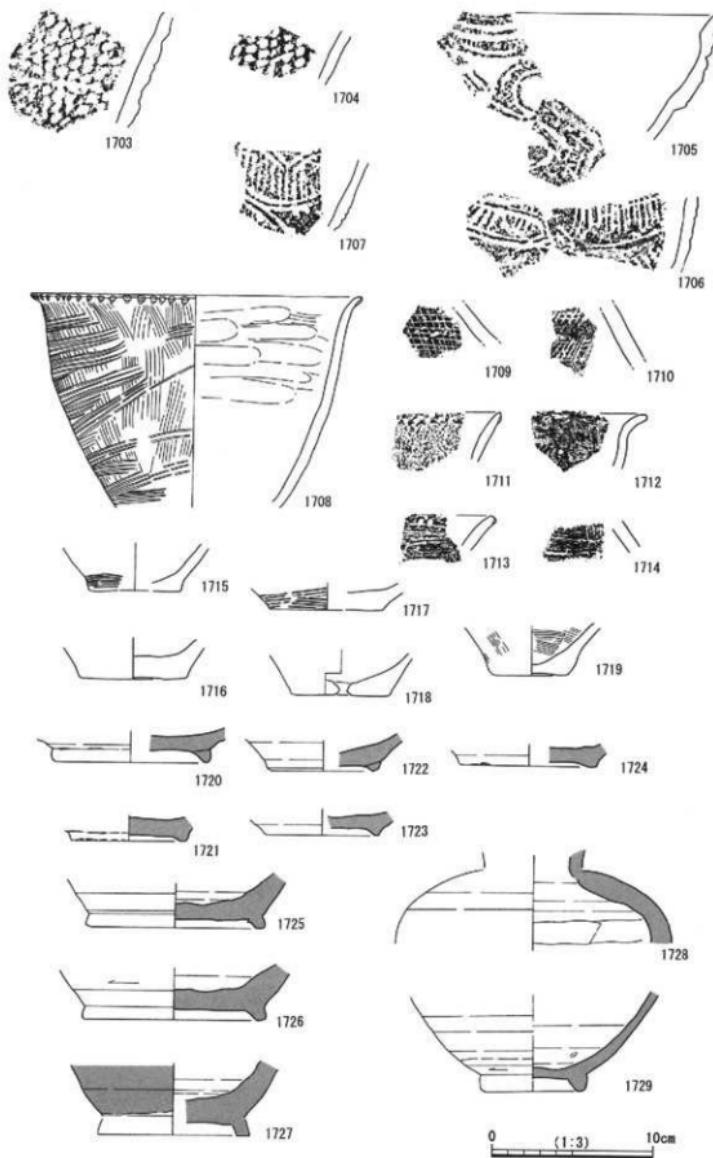
さらに、大屋敷1号窯は宮口古窯跡群が増産体制に突入した段階で築窯された窯で、灰釉陶器を最後に焼成した窯であり、灰釉陶器から山茶碗への転換期の窯と評価することができる。

### 3 大屋敷地区的土地利用

#### (1) 大屋敷遺跡について(第410・411図)

大屋敷遺跡は、大屋敷A・B・C古墳群の範囲とはほぼ一致しており、第VII章で記述したように、本格的な調査は実施されていないものの、表面採集や、興覚寺後古墳・大屋敷A古墳群(A46号墳)の調査に伴い遺物が出土している。

大屋敷遺跡出土遺物には、縄文時代では草創期の粗糲文土器、中期の加曾利系土器、後・晚期の東海系土器があり、弥生時代では中期の白岩式土器が出土している。古墳時代では後期から終末期の須恵器、奈良時代の須恵器、土師器が出土し、平安時代以降では灰釉陶器、山茶碗、常滑焼、天目茶碗などが出土しており(浜北市教委1988)、縄文時代～近世にかけての複合遺跡であることがわかる。



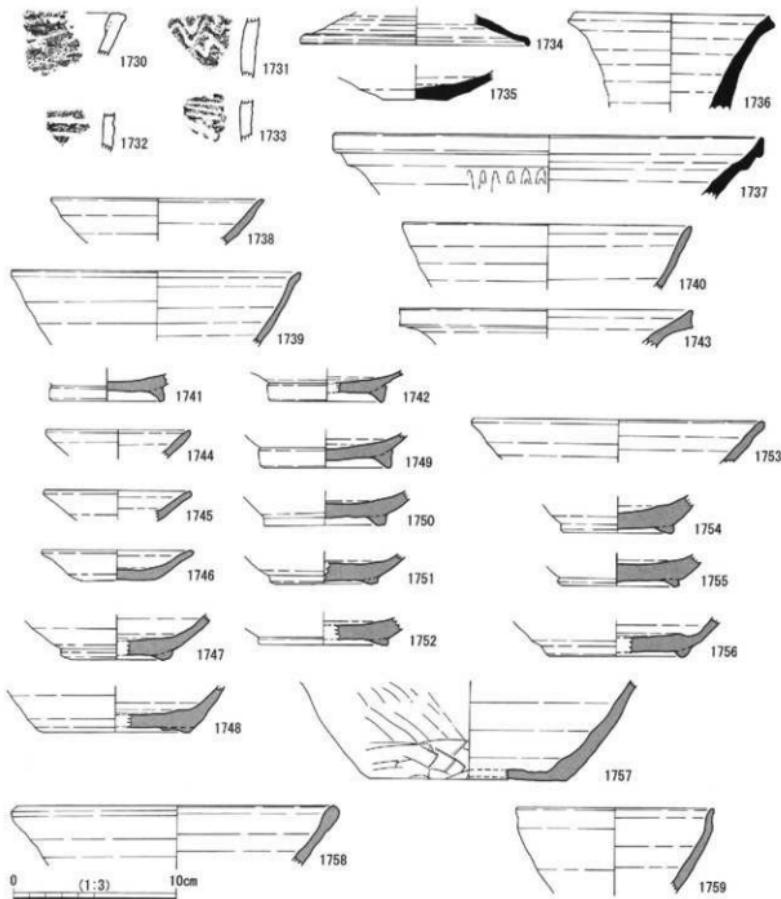
第410図 大屋敷遺跡出土遺物実測図①(浜北市教委1988より)

## (2) 浜北市宮口字大屋敷地区における歴史的変遷

最後に浜北市宮口大屋敷地区の歴史的変遷に関して、大屋敷C古墳群、大屋敷1号窓を中心に簡単にみておきたい。

この地域に、人間の生活が営まれ始めるのは縄文時代早期であり、龜玉中学校南側に広がる平坦地が生活域として利用され、その北側の斜面地(大屋敷C古墳群内)で陥し穴が5基出土していることから丘陵は狩猟・採集域とされていた可能性が高い。これは断続的ながら、弥生時代後期まで継続する。

一方で、古墳時代後期に平坦地に興覚寺後古墳が築造されると、三方原段丘上やその背後の北麓丘陵に20m以下の円墳で構成される群集墳(大屋敷A・B・C古墳群)が築造され、奈良時代前半まで墓域と



第411図 大屋敷遺跡出土遺物実測図②

して利用されている。

興覚寺後古墳の調査などで奈良時代に帰属する須恵器や土師器が出土していることから奈良時代には、生活域として利用されていた可能性が高い。丘陵斜面は、古墳造営終了後は平安時代に窯業生産地となるまで人為が及ばなかった可能性が高い。

平安時代には、平坦地では灰釉陶器が数多く採集されることから、宮口地区で灰釉陶器を生産していた工人集團が生活あるいは工房として利用していた可能性が高く、北麓丘陵の谷部は窯場として利用され、丘陵は燃料の供給場所として伐採が進んでいたことが想定できる。平安時代～鎌倉時代は平坦地が生活・工房域、斜面地が窯・燃料供給場所として機能していた可能性が高い。

鎌倉時代～室町時代は、大屋敷墳群が興覚寺後古墳の南側に営まれており、緩やかな斜面を利用して数段のテラスを造成しており、大屋敷地区は墳墓地として利用されていた可能性が高い(久野1988)。

#### 引用・参考文献

- 久野正博 1988 「浜北市北部丘陵地域における中世墓の様相」『静岡県考古学研究』 静岡県考古学会  
 浜北市 1989 「浜北市史」通史編上巻  
 浜北市 2004 「浜北市史」資料編  
 浜北市教育委員会編・発行 1988 「浜北北麓古墳群」

#### 図の出典

- 第410図 浜北市教育委員会1988より抜粋。  
 第411図 浜北市教育委員会より図面の提供を受け、当研究所で編集・トース。

#### 謝辞

大屋敷C古墳群・大屋敷1号窯の発掘調査、資料整理、報告書作成にあたり、下記の個人・機関に有  
益なご教示、ご指導ならびにご高配賜った。末筆ながら銘記して深謝します(五十音順、敬称略)。

網干善教 安藤 寛 大塚裕史郎 岩原 列 上杉彰紀 上原真人 太田宏明 大野勝美  
 尾野善裕 加藤理文 河合 修 木村弘之 久野正博 後藤建一 斎藤香織 佐野聖子  
 下津谷達男 柴田 稔 白井秀明 白澤 崇 菅原雄一 鈴木一有 鈴木京太郎 鈴木敏則  
 鈴木 靖 竹内直文 谷口安攝 賢 元洋 西井 亨 西澤正晴 土生田純之 平松良雄  
 深野信之 木田祐二 前田庄一 松井一明 松下善和 溝口彰啓 向坂鋼一 室内美香  
 森 泰通 山下總太郎 米田文孝 曹 永鉄  
 静岡県浜松上木事務所 竹内建設株式会社 浜北市教育委員会 浜北市宮口地区自治会  
 浜北市龜玉公民館 浜北市立龜玉小学校 浜北市立龜玉中学校 浜北市営明神池運動公園  
 株式会社フジヤマ